新潟県埋蔵文化財調査報告書　第128集

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ

仲　田　遺　跡

２００３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ

仲（なか）田（だ）遺跡

２００３

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

北陸新幹線は、東京都を起点に上越新幹線高崎駅から分岐して、長野市・上越市・糸魚川市・富山市・小浜市を経て大阪府に至る総延長600kmの新幹線鉄道です。開通により北陸地方と首都圏・関西圏は短時間で結ばれ、日本海沿岸地域の産業・経済・文化の交流発展に多大な効果をもたらすものと期待されています。

本書は、この北陸新幹線建設に先立ち、平成14年度に実施した仲田遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、川辺に営まれた平安時代後期から室町時代にかけての集落の様子が明らかになりました。特に、溝によって整然と区画され、建物が計画的に配置される在り方は注目されます。県内で当該期の集落跡が調査された事例は少なく、今後の中世集落の研究に多くの情報をもたらすものと期待されます。

今回の調査成果が、頸南地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に関して多大な御協力と御援助を賜った板倉町教育委員会、並びに地元の方々、また発掘調査から報告書刊行に至るまで格別のご配慮を賜った日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局、同上越鉄道建設所に対して厚くお礼申し上げます。

平成15年6月

新潟県教育委員会

教育長　板屋越　麟一

例　　言

1　本報告書は、新潟県中頸城郡板倉町大字熊川字仲田87ほかに所在する仲田遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は、北陸新幹線の建設に伴い日本鉄道建設公団（以下、鉄建公団）から新潟県が受託したもので、調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委）の依頼により財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が平成14年度に実施した。なお、印刷・製本は、平成15年度契約とした。

3　出土遺物及び調査に係わる各種資料は、すべて県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は「ナカタ」とし、出土地点や層位などを続けて記した。

4　本書に掲載した遺物番号はすべて通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。

5　引用文献は、著者及び発行（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

6　作成した図版のうち、既成の地図を使用した場合は、それぞれにその出典を記した。

7　航空写真撮影は、国際航業株式会社に委託した。

8　自然科学分析は花粉分析、プラントオパール分析、木製品の樹種同定、井戸出土の種実同定について株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。

9　遺構平面実測及び図化は株式会社桑原測量社に委託し、成果品はデジタルデータ（DXF形式）での納品とした。

10　遺構断面図のトレース及び各種図版作成・編集は、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集をし、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。遺物写真はデジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、デジタル化した遺構写真と合わせて編集を行った。なお、図版作成・編集作業に係り、業者に支給した資料は以下のとおりである。

本 文 ・ 挿 図：テキスト形式・Excel形式のデータ、トレース原図・貼り込み版下
遺構図面図版：平面図データ・断面図原図（修正済）・レイアウト図・文字データ
遺物図面図版：トレース図（個別）・拓影・レイアウト図
写 真 図 版：デジタルデータ（CD）・レイアウト図

11　本書の執筆は、加藤　学（埋文事業団文化財調査員）、高階敏昭（株式会社野上建設興業）、沢田福宏（株式会社野上建設興業）があたり、編集は加藤が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第Ⅳ章１・２・第Ⅶ章１：高階・加藤、第Ⅳ章３　1）～8）：高階・沢田・加藤
第Ⅴ章２　A～C・４：沢田・加藤、その他：加藤

12　発掘調査から本書に至るまで、下記の方々から多くの御教示・御協力を得た。厚くお礼申し上げる。（敬称略五十音順）

相羽重徳　伊藤啓雄　伊藤秀和　卜部厚志　大平理恵　坂井秀弥　笹沢正史　佐藤　慎　高野裕子　高濱信行
高林真人　田辺早苗　立木宏明　鶴巻康志　野村忠司　秦　繁治　藤沢文雄　藤沢雄一　細野高伯　水澤幸一
宮尾　亨　森沢　勉　矢田俊文　山田昌久　横山勝栄　吉川俊久　渡邉ますみ

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査と整理作業 …… 1

A　試掘確認調査 …… 1

B　本発掘調査 …… 2

3　調 査 体 制 …… 2

4　整理・報告の体制 …… 3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 4

1　遺跡の位置と地理的環境 …… 4

2　周辺の遺跡 …… 5

A　古　　代 …… 5

B　中　　世 …… 5

第Ⅲ章　調査の概要 …… 8

1　グリッドの設定 …… 8

2　基 本 層 序 …… 8

第Ⅳ章　遺　　構 …… 10

1　概　　要 …… 10

2　基 本 方 針 …… 10

3　遺 構 各 説 …… 11

1）川　　跡 …… 11
2）溝 …… 12
3）掘立柱建物 …… 13
4）ピ　ッ　ト …… 16
5）杭　　列 …… 17
6）井　　戸 …… 17
7）土　　坑 …… 19
8）方形竪穴状遺構 …… 20
9）竪 穴 住 居 …… 20

第Ⅴ章　遺　　物 …… 21

1　概　　要 …… 21

2　土　　器 …… 21

A　古 墳 時 代 …… 21

B　奈 良 時 代 …… 22

C　平 安 時 代 …… 22

D　中　　世 …… 23

1）11世紀後半 …… 23
2）12　世　紀 …… 24
3）13　世　紀 …… 25
4）15　世　紀 …… 26

3　石　製　品 …… 27
4　鉄　製　品 …… 28
5　木　製　品 …… 28
A　記述の方法 …… 28
B　観察の視点と図化の方法 …… 29
C　時期別の様相 …… 30
D　遺物の種別ごとにみた特徴 …… 30
6　柱　　根 …… 33

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 35
1　仲田遺跡出土木製品の樹種 …… 35
2　仲田遺跡から出土した大型植物化石 …… 41
3　花粉分析 …… 42
4　仲田遺跡のプラント・オパール …… 45

第Ⅶ章　ま　と　め …… 47
1　集落の変遷 …… 47
2　中世の土器・漆器 …… 50
3　川跡SX204における遺物の層位的出土 …… 52
4　木製品にみられる樹種の選択性 …… 53

《要　　約》 …… 54
《引用参考文献》 …… 54
《観　察　表》 …… 56

挿図目次

第1図　試掘確認調査の結果 …… 1
第2図　遺跡の位置と周辺の地形 …… 4
第3図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 7
第4図　グリッド設定図 …… 9
第5図　調査区内エレベーション図 …… 9
第6図　土層柱状図 …… 9
第7図　遺構の平面形態と断面形態の分類 …… 11
第8図　掘立柱建物の構成と変遷 …… 15
第9図　三貫梨遺跡における掘立柱建物 …… 16
第10図　井戸・土坑・溝の計測値と分類別構成比　18
第11図　加工痕の表現方法 …… 29
第12図　切り残し痕の形成 …… 33
第13図　斜面地における伐採と加工痕の構成 …… 33
第14図　平坦地における伐採と加工痕の構成 …… 34
第15図　仲田遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡写真（1） …… 37
第16図　仲田遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡写真（2） …… 39
第17図　出土した大型植物化石 …… 42
第18図　仲田遺跡SX204・SD201の花粉化石分布図 …… 43
第19図　仲田遺跡の花粉分析 …… 44
第20図　SXS204・SD201遺構のプラント・オパール分布図 …… 46
第21図　仲田遺跡のプラント・オパール …… 46
第22図　集落の変遷 …… 48

第23図　仲田遺跡における中世の土器・漆器 …… 51
第24図　川跡（SX204）における遺物の層位的出土状況 …… 52

表　目　次

第 1 表　出土銭一覧 …… 28
第 2 表　大型植物化石一覧 …… 41
第 3 表　産出花粉化石一覧表 …… 43
第 4 表　試料1g当たりのプラント・オパール個数 …… 46

図 版 目 次

［図面図版］

図版１　仲田遺跡全体配置図
図版２　遺構分割図（1）
図版３　遺構個別図（1）分割図１（SB3,SB4,SB5）
図版４　遺構個別図（2）分割図１（SE501～504・SK505・SX750・P553,648,649,655）
図版５　遺構分割図（2）
図版６　遺構個別図（3）分割図２（SB26～28・SE209,210,236）
図版７　遺構個別図（4）分割図２（SE208,219,238,242,243,252・SK237）
図版８　遺構個別図（5）分割図２（SE235,247,264,267,278,283,506）
図版９　遺構個別図（6）分割図２（SE264,507～513・SK276,280,314,380）
図版10　遺構個別図（7）分割図２（SD201～203,1322,1413・SX204,279）
図版11　遺構分割図（3）
図版12　遺構個別図（8）分割図３（SB13,SB14,SB15,SB16）
図版13　遺構個別図（9）分割図３（SE114,115,137,138,141,162,212～215,266・SD201）
図版14　遺構個別図（10）分割図３（SE216,918,919,1035,1036,1039,1043,1107,1108・SK122,139）
図版15　遺構個別図（11）分割図３（SK118,160,174,217,939,1032,1034,1100,1103,1289・SD201・SX204）
図版16　遺構分割図（4）
図版17　遺構個別図（12）分割図４（SE144,194,1023・SK193・SD101,102,106,116,117）
図版18　遺構分割図（5）
図版19　遺構分割図（13）分割図５（SB22,SB23・SA1,SA2・SE16,31・SK15,1720,25,996,1017・SD13,14・SX23）
図版20　遺構分割図（6）
図版21　遺構個別図（14）分割図６（SB1,SB2・SE18,19,22・SK21・SX23）
図版22　遺構分割図（7）
図版23　遺構個別図（15）分割図７（SB7・SB9）
図版24　遺構個別図（16）分割図７（SB8・SB31）
図版25　遺構個別図（17）分割図７（SB11,SB12）
図版26　遺構個別図（18）分割図７（SB10,SB25・SE211,223）
図版27　遺構個別図（19）分割図７（SE222,224,225,234,239,258,283,312,315・SD203）
図版28　遺構個別図（20）分割図７（SE317,381,388,392,393,442・SE269,313,382,384）
図版29　遺構分割図（8）
図版30　遺構個別図（21）分割図８（SB6,SB30）
図版31　遺構個別図（22）分割図８（SB24,SB29・SE205,206）
図版32　遺構個別図（23）分割図８（SE207,220,221,260,265,227・SK218,268）
図版33　遺構分割図（9）
図版34　遺構個別図（24）分割図９（SB17,SB18,SB19,SB20,SB21・SE316・SD107,111）
図版35　遺構個別図（25）分割図９（SE108,1040・SK112,113,961,1031・SD111・SI1038）
図版36　古墳時代の土器・古代の土器（1）

図版37　古代の土器（2）・中世の土器（1）
図版38　中世の土器（2）
図版39　中世の土器（3）
図版40　中世の土器（4）
図版41　中世の土器（5）・石製品
図版42　石製品・金属製品・木製品（1）
図版43　木製品（2）
図版44　木製品（3）
図版45　木製品（4）
図版46　木製品（5）・柱根

［写真図版］

図版47　SD201区画内完掘、石組井戸検出
図版48　掘立柱建物（1）
図版49　遺跡遠景・近景、航空写真、溝（1）、掘立柱建物（2）
図版50　遺跡近景、メインセクション、掘立柱建物（3）
図版51　掘立柱建物（4）、川跡（1）
図版52　川跡（2）、溝（2）
図版53　溝（3）、井戸（1）
図版54　井戸（2）
図版55　井戸（3）
図版56　井戸（4）、土坑（1）
図版57　井戸（5）
図版58　井戸（6）
図版59　井戸（7）
図版60　井戸（8）
図版61　井戸（9）、土坑（2）
図版62　土坑（3）
図版63　土坑（4）、ピット（1）
図版64　ピット（2）
図版65　ピット（3）、竪穴住居、作業風景
図版66　土器（1）
図版67　土器（2）
図版68　土器（3）
図版69　土器（4）
図版70　土器（5）、石製品、鉄製品、木製品（1）
図版71　木製品（2）、柱根（1）
図版72　木製品（3）、柱根（2）

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

北陸新幹線は、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道である。長野市・上越市・富山市・小浜市を経由して東京都と大阪市を結ぶ総延長600kmのうち、高崎・長野間は平成９年10月に開業している。その後、長野市を起点とし、長野県飯山市を経て上越市にいたる長野・上越間の延長60kmは、昭和47年に基本計画が、昭和48年に整備計画が決定され、平成10年３月に長野・上越間の工事実施計画が認可された。これを受けて、鉄建公団北陸新幹線建設局と県教委との間で、建設用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。

平成10年９月、鉄建公団から分布調査の依頼を受けた県教委は、平成10年11月に調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の具体的な規模・内容等は不明であり、今後、試掘確認調査を実施して取扱いを判断する必要があると回答した。平成14年３月、鉄建公団から板倉町内（米増・熊川新田間17,500m^2）の試掘確認調査の依頼を受けた県教委は、埋文事業団に調査を委託した。平成14年６月に調査した結果、五反田遺跡5,680m^2、仲田遺跡5,100m^{2}について本発掘調査が必要であると回答した。

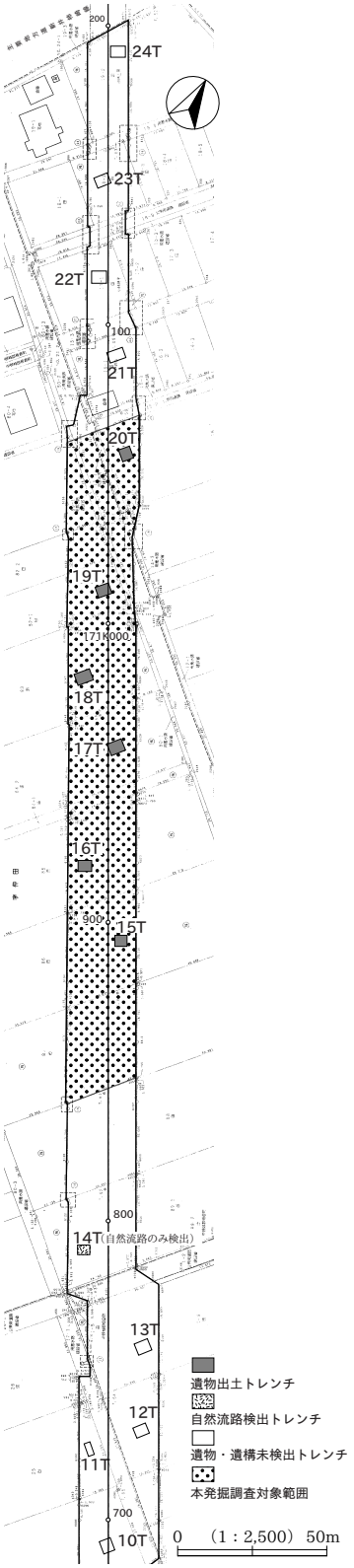
試掘確認調査の結果を受けて、鉄建公団は県教委に本発掘調査を早期に実施するよう要望した。急な要望で調査体制の整備に難航したが、平成14年８月、鉄建公団から県教委が受託し、９月９日から埋文事業団が本発掘調査に着手した。

2　調査と整理作業

A　試掘確認調査

試掘確認調査は、平成14年６月３日～６月11日に実施した。米増～熊川新田区間の17,500m^{2}を調査対象とし、338.45m^2（確認率1.9％）について調査した。調査は、対象地に任意に確認トレンチを設定し、重機（バックホー）及び人力で徐々に掘り下げ、遺構・遺物の有無を精査した。

調査の結果、五反田遺跡に係る１～６トレンチにおいて古代の



第１図　試掘確認調査の結果

遺構・遺物が、仲田遺跡に係る15～20トレンチにおいて古代及び中世の遺構・遺物が検出され、五反田遺跡5,680m^2、仲田遺跡5,100m^{2}について本発掘調査が必要と判断された（第1図）。なお、仲田遺跡に係る15～20トレンチからは、溝・井戸・柱穴等の遺構が多数検出された。

B　本発掘調査

仲田遺跡周辺における北陸新幹線法線は、水田地帯を横断するように位置している。したがって、1枚の水田を新幹線法線が分断することとなり、調査着手を予定した平成14年8月中旬の段階では法線内は、用排水の通路となっていた。このような状況から調査範囲内は著しい湿地の状態にあり、8月下旬から表面排水を開始した。しかし、水田に給水する時期と重なったこともあり状況は改善されず、調査のために設計された暗渠工事を開始できたのは9月2日にまで遅延した。

実質的な発掘調査は、9月9日から開始した。表土除去には重機を利用し、慎重に掘削を進めた。その過程で、遺跡の旧地形は西側ほど高く、東側ほど低くなっていることが明らかになった。また、遺物包含層が過去のほ場整備によって大部分が損壊していることも明らかになり、包含層が残存する北東側の一部を除いて遺構確認面まで重機で慎重に掘削した。

人力による掘削調査は9月12日から開始した。包含層掘削と遺構精査を並行して行ったところ、遺構密度に濃淡のあることが明らかになり、調査区の北端と南東端では遺構が検出されなかった。このような状況から、調査区本体と農道を挟んだ北端の区画（第1図・20T周辺）及び調査区南東端から50mの範囲について確認調査を追加した。

その結果、北端の区画からは磨耗した土師器の砕片1片が出土したものの遺構は検出されなかった。また、調査区本体における遺構の分布状況を勘案すれば、旧河道の延長上にあたると判断された。このような状況から、北端の調査区には遺跡の広がりを認めることはできず、県教委と埋文事業団で協議した結果、調査不要とした。一方、南東端の遺構未検出範囲からは旧小熊川の流路（SX23）が検出され、地表下3mの川底砂礫層中から古代の遺物が多数出土した。これについては調査が必要と判断し、11月上旬に重機と人力で旧流路を掘削して遺物を取り上げた。

多数検出された遺構の調査は、溝→井戸・土坑→掘立柱建物・柱穴という順序で進めた。遺構密度が高いこと、調査に時間を要する井戸が85基検出されたこと、例年になく雨天が続いたことにより調査は難航した。特に、雨天による作業休止は調査の進捗に大きな影響を与えたため、2間×3間の簡易テントを14棟設営して雨天でも作業できるよう環境を整えた。以後、天候に左右されずに作業が進み、11月末で遺構を完掘、12月3日に空撮した。その後、人力掘削が必要と判断された旧流路（SX204、SX750）の調査及び現地測量を12月19日まで実施し、12月20日に調査を終了して鉄建公団に引き渡した。

3　調 査 体 制

試掘確認調査

調査期間　平成14年6月3日～11日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

調　　査　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括	黒井幸一（事務局長）
管　　理	長谷川司郎（総務課長）
庶　　務	高野正司（総務課主任）
調査総括	岡本郁栄（調査課長）
調査指導	高橋　保（調査課国土交通省・鉄道建設公団担当課長代理）
調査担当	尾崎高宏（調査課文化財調査員）
調査職員	田中一穂（調査課嘱託員）

本発掘調査

鉄建公団からの調査要望が年度途中であったことから、埋文事業団では調査体制を整えることが不可能であった。県教委と埋文事業団で協議の結果、調査担当として職員１名を県教委から埋文事業団へ新たに派遣し、発掘業務を受託した業者からも調査員２名の参加を得て対応することとなった。調査体制は、以下に示すとおりである。

調査期間　平成14年9月9日～12月20日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

調　　査　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括	黒井幸一（事務局長）
管　　理	長谷川司郎（総務課長）
庶　　務	高野正司（総務課主任）
調査総括	岡本郁栄（調査課長）
調査指導	高橋　保（調査課国土交通省・鉄道建設公団担当課長代理）
調査担当	加藤　学（調査課文化財調査員）
調 査 員	高階敏昭（株式会社　野上建設興業） 沢田福宏（株式会社　野上建設興業）

4　整理・報告の体制

遺構図面の基礎整理及び出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業は、調査現場で発掘調査と並行して行った。遺構の図版編集・原稿及び遺物の実測・トレース・図版・原稿は、平成14年12月から平成15年3月にかけて亀田町に作業所を設置して実施した。整理体制は、以下に示すとおりである。

整理期間　平成14年12月24日～平成15年3月31日

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

整　　理　財団法人　新潟県埋蔵文化財調査事業団

総　　括	黒井幸一（事務局長）
管　　理	長谷川司郎（総務課長）
庶　　務	高野正司（総務課主任）
整理総括	岡本郁栄（調査課長）
整理指導	高橋　保（調査課国土交通省・鉄道建設公団担当課長代理）
整理担当	加藤　学（調査課文化財調査員）
調 査 員	高階敏昭（株式会社　野上建設興業） 沢田福宏（株式会社　野上建設興業）

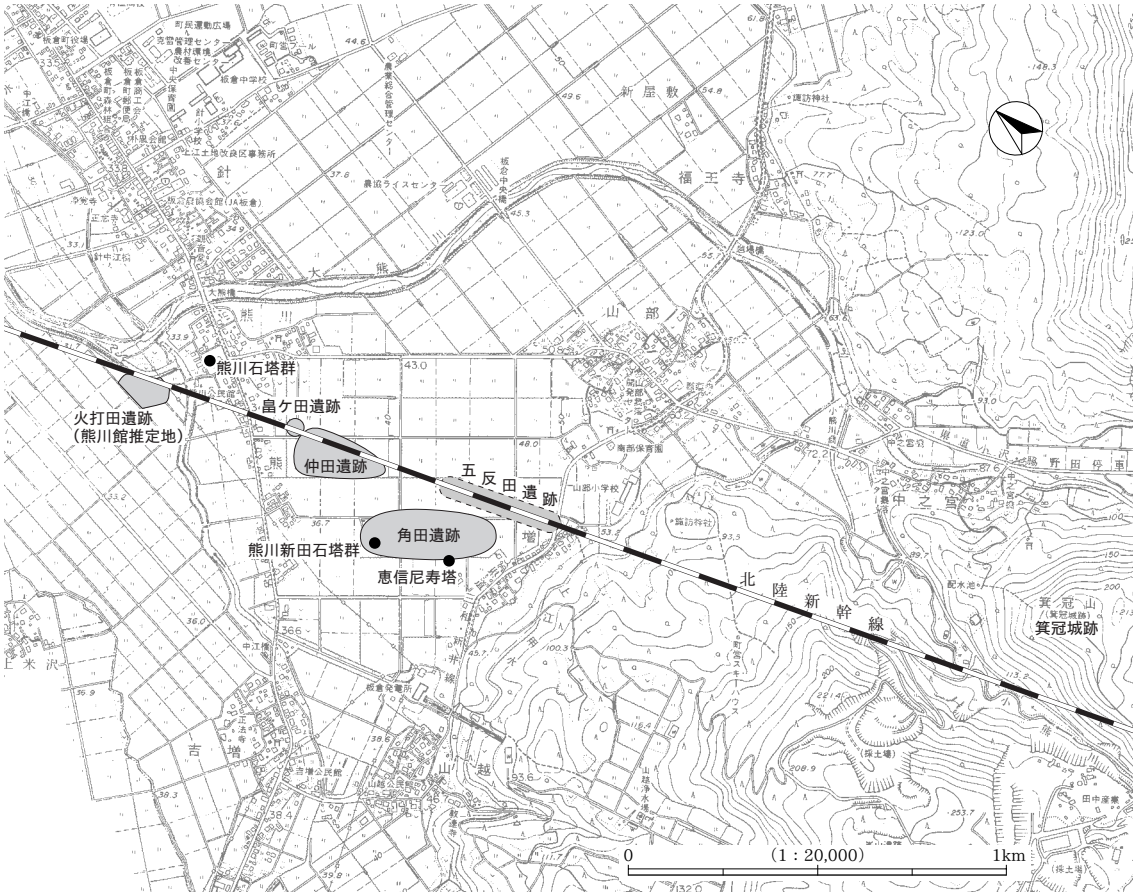
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境

仲田遺跡は、中頸城郡板倉町大字熊川字仲田87番地ほかに所在する。板倉町は、新潟県の南西部に展開する頸城平野の南東縁に位置する。頸城平野は、新井市周辺を頂点とし北側の海岸に向かって開く三角形を呈する平野であり、その中央西側には関川が北流し、南西に妙高山麓、南東に関田山地を控える。このような地勢により、平野は大局的に南から北に傾斜する。

本遺跡は、関田山地から連続する丘陵地裾の緩傾斜地に立地する。この緩傾斜地は、関川の支流である別所川・大熊川により作出された扇状地にあたる。本遺跡が所在する熊川集落は扇状地の末端部分に位置することから、熊川の「くま」は「隈」を指しているとも考えられている［森沢2001］。

周辺地域について、過去の絵図や更正図と照らし合わせると、大熊川の流路は大きく変更されてはいないことがわかる。しかし、遺跡周辺を流れていた小熊川は、ほ場整備により直線的に変更されている。かつての小熊川は、細かな蛇行を繰り返しており、周辺地域はたびたび洪水に見舞われていたという。今回の調査範囲内からも大きく蛇行した旧流路が検出されており、そのことを窺い知ることができる。



第２図　遺跡の位置と周辺の地形

（板倉町役場作成「板倉町全図その１」　１：10,000原図）

2　周辺の遺跡

頸南地域の古代・中世の遺跡分布は、第３図に示すとおりである。遺跡分布図は県教委の遺跡カードをもとに作成したものであり、沖積地の調査が進めば更に多数の遺跡が発見される可能性が高い。

A　古　　代

古代の遺跡は、関川左岸の新井市と右岸の板倉町に集中する。『和名抄』にみえる頸南地域の郷名は栗原郷と板倉郷であり、遺跡の分布状況にも反映されている。このうち、発掘調査が実施された例は数少ないものの、新井市栗原遺跡は頸城郡衙か郡司層の居宅と推定されている［坂井1982・1983］。そして、その周辺が頸城郡衙の中心地域であった可能性が指摘されている。また、上越市今池遺跡周辺は、発掘調査の結果から国衙・郡衙・国分寺の有力な候補地のひとつとされており、関川を挟んで対岸に位置する板倉町内の遺跡を考える上で重要である。

関川左岸の調査が進展する一方、右岸は調査事例が少なく不明な点が多い。しかし、板倉町の扇状地上には多数の遺跡が存在し、むしろ左岸よりも密集する状況にある。また、採集遺物の質・量を見る限り、小規模な遺跡が点在するという状況とは考えられない。近年、町史編さん事業に伴って収集された採集資料からは８・９世紀代の良好な遺跡の存在を窺い知ることができる。特に、旧小熊川沿いに位置する角田遺跡からは「厨」の墨書土器が出土しており、有力な遺跡である可能性が高い。本調査においても旧小熊川の川底から「里」「南」の墨書土器等の良好な資料が出土しており、関連性が想定される。周辺地域の開発史を検討する上で興味深い点といえよう。角田遺跡は、北陸新幹線建設に伴い発掘調査が計画されている五反田遺跡と隣接しており（第２図）、その成果を踏まえて総括する必要がある。

B　中　　世

城館跡を除く中世遺跡の分布状況は、古代の状況と大きく相違しない。

中世遺跡の調査事例は少ないが、新井市において宮ノ本遺跡・馬場遺跡・月岡遺跡・田中前２遺跡などが調査さている。特に、高柳館と隣接する宮ノ本遺跡・馬場遺跡の調査からは、中世村落が一般の住居が単独で存在するのではなく、館と寺院という重要施設を村落の中心施設として位置付け存在していたことが指摘されており注目される。また、遺跡群は12世紀から16世紀にかけて継続するが、14世紀に起こった焼山の噴火という自然災害が大きな画期となっている。そして、これを境に館と寺院の配置が転換されているという［高橋1999］。中世集落の変遷と画期を具体的にたどることができる貴重な事例といえよう。

城館についてはいくつかの詳しい研究［伊藤1966、加藤1973、植木1980、坂井1986］がある。頸城平野には、上杉謙信の居城として著名な春日山城をはじめ数多くの城館跡が存在するが、頸南地域においても春日山城の支城である鮫ヶ尾城（新井市）、鳥坂城（新井市）、箕冠城（板倉町）があり、信越国境を守る重要な拠点となった［花ヶ前1986］。特に、仲田遺跡を考える上で箕冠城の存在は重要である。遺跡が所在する熊川地区は、戦国期に箕冠城の城下町の一部であったものが、近世に集落へ移行したものとされており［小村1989］、関連性を視野に入れておく必要がある。

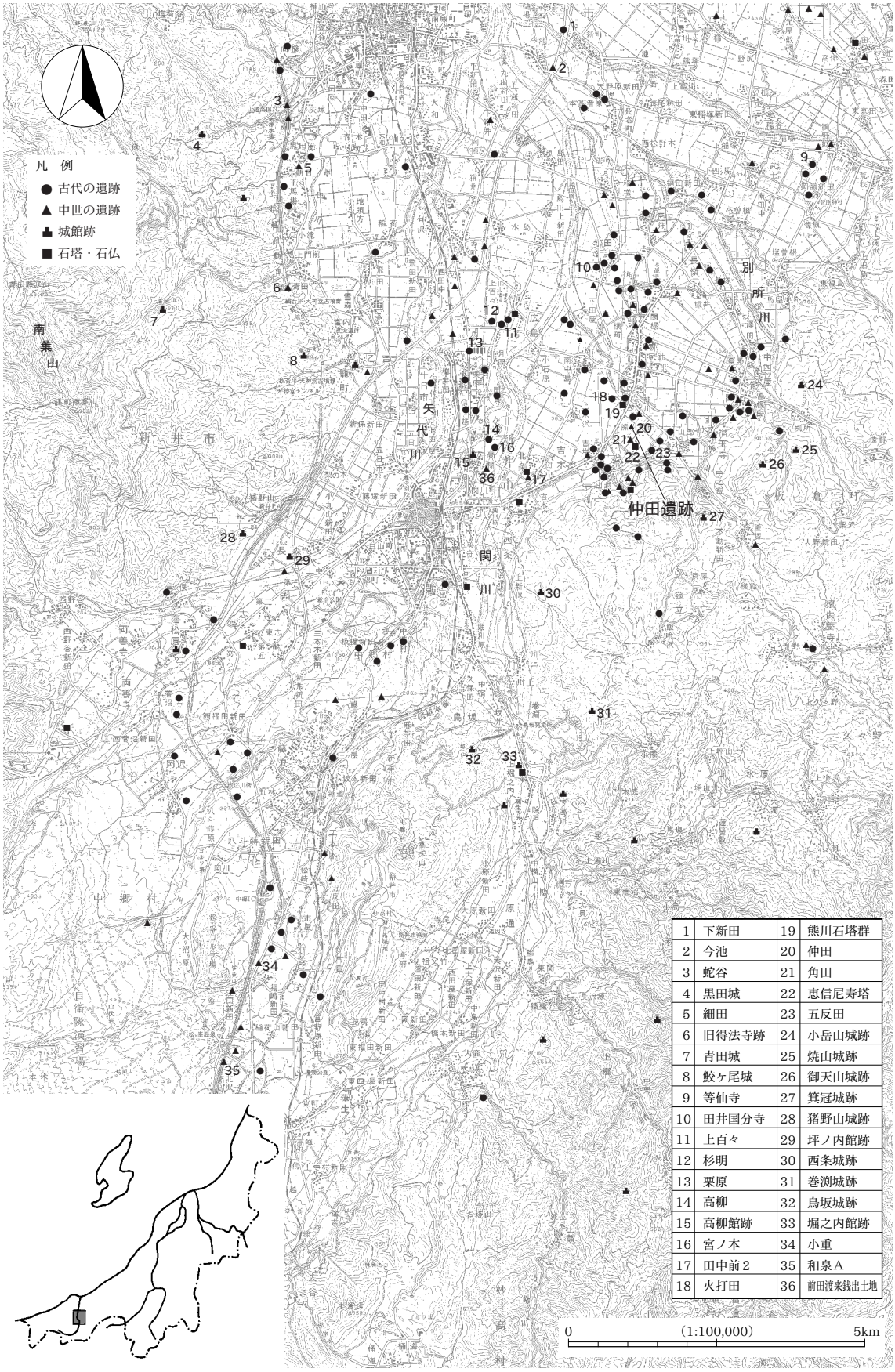
箕冠城は、板倉町山部に位置する標高237mの独立峰に築かれた典型的な山城である。宝暦６（1756）

年の『越後名寄』では「ミカブリ城」、天保２（1831）年の『越後古城誌』では「美加不里城」と記録されている。越後上杉家の重臣である大熊備前守政秀の居城であったが、弘治２年（1556）に城主・大熊朝秀が武田信玄の誘いに応じて謀反を起こした際に謙信に攻め落とされたという伝説がある。これ以降、箕冠城については文献に登場していない［花ヶ前1986］。城山全体には郭・空堀・土塁・鎧井戸・清水などの遺構が良好な状態で残存しており、周囲には御天山城・焼山城・小岳山城などの砦群もある。

箕冠城主の館跡は明らかでないが、熊川館跡（大字熊川・大字大熊川）が箕冠城築城以前の大熊氏の旧跡と考えられている［浅見・平野1986］（第２図）。天和３（1683）年の「熊川村御検地水帳」には「たてノ内」「中田」の地名が登場する。この「たてノ内」が初期の大熊氏の館跡と推定されている。しかし、平成12年には板倉町教育委員会が、平成13年には北陸新幹線建設に伴い埋文事業団が熊川館推定地（火打田遺跡）を確認調査しているが、館の存在を裏付ける資料は得られていない。なお、箕冠城の近隣には、熊川館のほか針館・山越館・山部館・不動新田館・宮島館・国川館などが存在するとされる［伊藤1966］が、宮島館を除けばいずれも具体的な位置・時期・内容が明らかでない。

石塔を中心とする中世の石造物は多数分布する。その多くが中世後期に属するものとされている［加藤1973］。現在の位置が造立された場所とは限らないが、ことさら遠く離れた場所に運ぶことは考え難いことから、石塔の広汎な分布は、中世後期には広く集落が分布していたことを示すものと思われる。
正保２（1645）年の『正保国絵図』には、頸南地域の地名を確認できる。このうち本田村が分布するのは新井市街地より北側あるいは北東側の地域であり、地形区分の上では扇状地・氾濫原の沖積地である。こうした地域は、古代・中世を通じて安定した耕地が広がっていたと推察される。館跡の分布状況も本田村の分布と重複する傾向がうかがわれ、館の存立基盤が一面では農業生産にあることを示すものと考えられる。ただし、現在みるような一面に広がるという景観は、近世の用水の完備などによって、執拗に水田開発がなされた結果と考えられる［坂井1985］。

なお、本遺跡周辺には、浄土真宗の開祖である親鸞聖人の妻・恵信尼によって建立されたとされる供養塔、関山三社権現と並んで信仰の中心となった山岳寺院の山寺薬師等が存在する。本地域には、中世に由来する遺跡のほかに山城・石造物・寺院が多数存在しており、該期の研究において興味深い地域ということができる。また、周辺において中世の集落跡が調査された事例は数少なく、本調査が頸南地域の中世史を解明する上で重要な意味をもつものと考えられる。



1	下新田	19	熊川石塔群
2	今池	20	仲田
3	蛇谷	21	角田
4	黒田城	22	恵信尼寿塔
5	細田	23	五反田
6	旧得法寺跡	24	小岳山城跡
7	青田城	25	焼山城跡
8	鮫ヶ尾城	26	御天山城跡
9	等仙寺	27	箕冠城跡
10	田井国分寺	28	猪野山城跡
11	上百々	29	坪ノ内館跡
12	杉明	30	西条城跡
13	栗原	31	巻渕城跡
14	高柳	32	鳥坂城跡
15	高柳館跡	33	堀之内館跡
16	宮ノ本	34	小重
17	田中前２	35	和泉Ａ
18	火打田	36	前田渡来銭出土地

第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡

国土地理院発行「高田東部」「高田西部」「飯山」「妙高山」　１：50,000原図

第Ⅲ章　調査の概要

1　グリッドの設定

仲田遺跡の本発掘調査対象地は、北陸新幹線法線内の幅23ｍ、長さ230ｍと細長い範囲である。したがって、グリッド設定を地形や方位にあわせると、調査時に誤認する恐れがあった。そこで、細長い法線に平行するように設定することで、グリッドの誤認を防ぎ、作業の効率化を図ることとした。グリッドの主軸は、センター杭STA171K060（長野市の基点から171.06kmの地点、世界測地系Ｘ＝115644.668、Ｙ＝－18573.819）を基点とし、センターライン上に設定した。方位は真北から30.44°西偏している。なお、調査範囲内における主なセンター杭の座標は、171K000でＸ＝115592.736・Ｙ＝－18543.768、170K900でＸ＝115506.182・Ｙ＝－18493.684である。

グリッドは、大小２種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分したものである（第４図）。大グリッドの呼称は、センター杭の方向を算用数字、それと直交する方向をアルファベットとし、両者の組み合わせにより表示した。例えば、基準としたセンター杭171K060の南側の区画は「5B」とした。小グリッドは、１～25の算用数字で表し、北西隅を１、南東隅を25とし、「5B15」のように大グリッド表示の後に付して呼称した。

2　基 本 層 序

調査範囲の総延長は230mにも及ぶが、土層の堆積状況は基本的には変化しない（第６図）。その内容は次に示すとおりであるが、北東側にむかって大きく傾斜しており、低地部分のみに遺物をわずかに含む特有の土層が存在した。一方、遺構が多数存在する陸の部分では、包含層は存在しなかった。過去のほ場整備で遺跡の広範囲に影響が及んだものと考えられ、撹乱部分も存在した。なお、遺跡は古墳時代（7世紀後半）～室町時代（15世紀）にかけて形成されているが、複数の遺物包含層や遺構確認面を認めることはできなかった。

Ⅰａ層：灰色シルト。表土層。

Ⅰｂ層：暗黄灰色シルト。直径5mmほどの炭化物をまばらに含む。

Ⅱａ層：暗黄灰色シルト。Ⅰｂ層を基調とするが、直径1mmほどの黄橙色粒子を多量に含む。

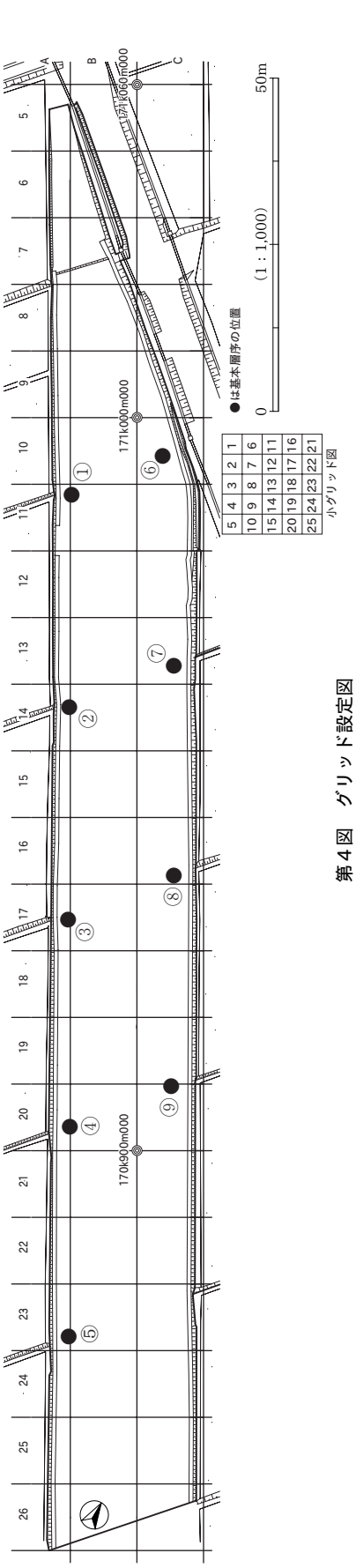
Ⅱｂ層：灰褐色シルト。Ⅱａ層と共通するが鉄分沈着により赤みを帯びる。直径1mmの白色粒子を含む。

Ⅲ層：黄灰色シルト。直径1mmの白色粒子を含みⅡｂ層と共通するが、Ⅱｂ層より暗く粘性が強い。

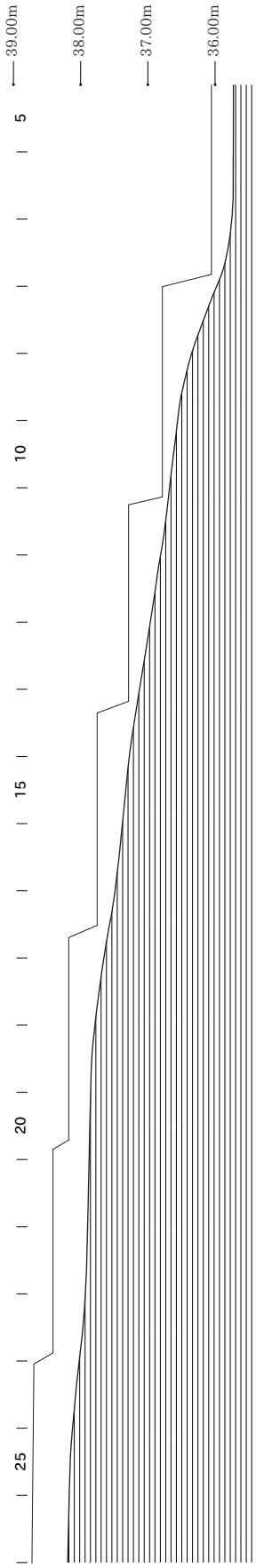
Ⅳ層：褐灰色シルト。遺物をわずかに含む遺物包含層。直径5mm以下の炭化物をごくまばらに含み、Ⅲ層より砂質。低地側のみに認められる。

Ⅴ層：灰色砂質シルト。遺構の地山となるⅥ層を基調としながらも、褐灰色シルトをマーブル状に含む。Ⅳ層とⅥ層の漸移層で、低地側のみに認められる。

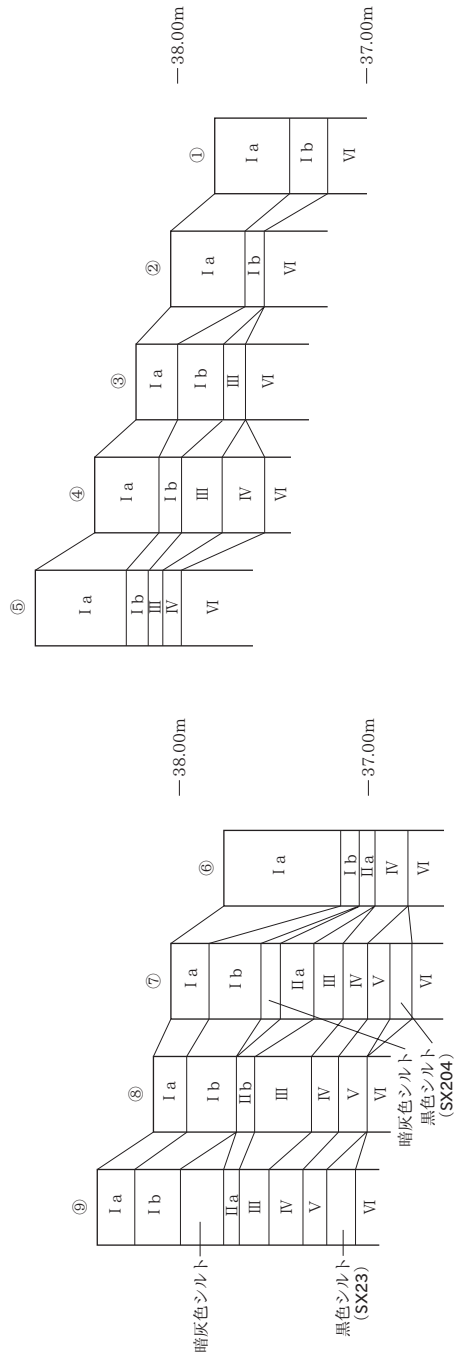
Ⅵ層：明黄褐色砂質シルト。砂質の強い地山層であり、遺構確認面である。粒子は細かく均質。部分的に灰色を呈するところもある。



第４図　グリッド設定図



第５図　調査区内エレベーション図（A列）



第６図　土層柱状図

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

遺構は、南から北へ蛇行しながら流れる川跡（SX23・SX204・SX750）の左岸から検出された。この川跡は、かつて遺跡周辺を蛇行しながら流れていた小熊川の旧流路と考えられ、出土遺物から９～11世紀頃のものと考えられる。旧地形は、この川跡が存在する東側に向かって傾斜しており、遺構はより高く安定した西側に集中する。検出された遺構は、溝17条、掘立柱建物31棟、井戸85基、土坑59基、ピット2,466基、方形竪穴状遺構１基、竪穴住居１軒等である。これらの遺構には、古墳時代後期（7世紀後半）、古代（9・10世紀）、中世（11世紀後半～13世紀・15世紀）のものがあるが、竪穴住居と土坑のごく一部が古代以前のものであるほかは、ほとんどが中世に属する。すなわち、多くの遺構が形成された頃に川が存在したと考えられる。集落の範囲は、川跡によって南・北・東の端を把握することができた一方、調査範囲の西側に延伸することは確実である。調査範囲の西側は、ほ場整備により設置された排水路付近で大きな段差があり、その付近まで集落跡が広がっていたものと考えられる（第2図）。

遺構の分布密度には濃淡が認められたが、その中でも掘立柱建物が集中する２つの範囲（建物Ａ・Ｂ群、図版1）が認識された。建物Ａ群（8～12列）は、最も遺構密度が高い範囲で、掘立柱建物・井戸等が多数検出されている。掘立柱建物は17棟認識されているが、１棟を除けば建物同士が重複する。多いか所では、同程度の建物が４棟重複するものがあり、建替えの結果を反映するものと考えられる。また、建物が重複する範囲はピットが密集する範囲とほぼ一致しており、認識された以上に多くの建物が重複する可能性が高い。井戸は、建物を避けるように分布する傾向にあるが、重複するものも認められる。溝は大小５条検出されており、掘立柱建物や屋敷を区画するもの、井戸の排水路的役割を担うものが存在する。

建物Ｂ群（14・15列）は、建物Ａ群よりも密度は少ないものの、多数の遺構が重複する。掘立柱建物は７棟確認されており、うち５棟が重複する。ピットは建物が存在する範囲に集中し、その周辺は稀薄である。井戸は掘立柱建物と一部で重複するが、大半は建物の北側もしくは東側に位置し、配置に規則性が認められる。溝は大小11条確認され、建物の桁行方向の両側に並列しており、雨落ち溝の可能性もあるが、建物は一方の溝に寄って配置されていることから、区画溝と判断したほうが適当と考えられる。

なお、これら多数検出された中世の遺構については、切り合い関係・出土遺物・覆土の分類から、おおむね３～４時期に区分することが可能であった。本遺跡は、中世集落の変遷を具体的に把握できる稀有な事例といえ、今後の研究に多くの情報をもたらすものと考えられる。

2　基 本 方 針

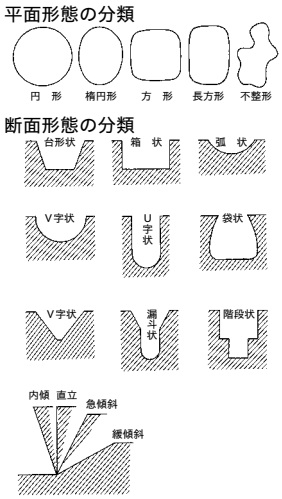
遺構の説明には、本文・観察表・図面図版・写真図版を用いる。

本文は、遺構の種別ごとに提示することとする。ここでは、個別の記載を行わず、観察表で示しきれない情報を盛り込むことを基本とした。したがって、個別遺構の情報については、観察表を参照されたい。

観察表は、遺構種別ごとに提示した。遺構の内容を等質的かつ的確に示すべく工夫した。平面形態及び

断面形態の分類は、『和泉Ａ遺跡』の分類（第７図）［荒川・加藤1999］に従った。遺構の切り合い関係については、不等記号を用いて「新＞旧」のように示した。また、観察表には検索という側面からの情報も付加することとし、各種観察項目のほかに、図面図版番号、報告遺物番号を加えることで対照しやすくした。

図面図版は、１／400の全体図、１／120の分割平面図、１／40のセクション図、１／80のエレベーション図を基本とし、遺構の個別平面図は分割平面図をもって提示することとした。したがって、分割平面図とセクション図を対照する構成となっている。ただし、遺構密集範囲や遺物出土状況に関する平面図を分割平面図で示すことは難しく、１／60の分割平面図及び１／20、１／40の個別平面図をもって示した。なお、セクション図の土層注記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・（財）日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』に沿った色調を記載した。また、注記にあたっては、層位間の相対差を示すことに留意した。



第７図　遺構の平面形態と断面形態の分類

写真図版は、特に重要な遺構、遺存状態の良好な遺構、特徴をよく捉えられるカットを選択して掲載したため、すべての遺構を網羅していない。また、図面図版に反映できなかった情報を補完する観点からも選択した。なお、写真図版については、おおむね遺構種別ごとに遺構番号順に掲載することとした。

遺構名は遺構種別の略号と通し番号を組み合わせて表記した。遺構種別の略号は、溝＝SD、掘立柱建物＝SB、ピット＝P、井戸＝SE、土坑・方形竪穴状遺構＝SK、杭列＝SA、竪穴住居＝SI、性格不明遺構及び川跡＝SXとした。遺構番号は、層位・種別に関係なく通し番号としている。ただし、掘立柱建物及び杭列については、その都度別途に番号を付した。

3　遺構各説

1）川　　跡

調査区の北東側には、小熊川の旧流路と考えられる川跡が検出された。蛇行しながらおおむね南から北に向かって流れており、調査範囲内外を出入りするように検出された。便宜上、SX23・SX204・SX750と分割して呼称したが、川跡は一連のものである可能性がある。出土遺物からは、古代～中世前期の流路と想定され、遺跡の形成時期に存在したものと考えられる。遺構は、この川跡と平行するように分布しており、また川跡に向かって分布が稀薄になる。すなわち、流路を強く意識して形成された集落と考えられる。

SX23　21・22列付近では南西から北東方向に流れ、両岸は急激に落ち込む。20列付近から流れを大きく北に変え、川岸は緩やかに落ち込み中段を持っている。確認面での最大幅は約15m、幅8m、深さは最深部で2m（現地表－3m）ほどである。覆土上位は、暗青灰色及び青黒色シルトで、中層から下層にかけては腐植物の多い砂層と、砂・小礫を多く含む層とが交互に堆積している。遺物は上位（1層）で珠洲焼等12世紀の遺物（59～61）が、河床の砂礫層（8層）からは古墳時代後期及び奈良・平安時代の遺物（12～20）が出土している。河床出土遺物の年代的下限は9世紀であり、その頃に流路が最も発達したものと考えられる。ただし、上層出土遺物も川縁（岸寄り）で50cmほどの深さから出土しており、中

世前期には川は浅くなっているものの埋没しきっていない可能性が高い。

SX204　12・13列の東側に位置する。検出は左岸の川縁のみであり全貌は不明であるが、SX23同様に段を有して急激に落ち込むことが明らかになった。流路は南東から12列付近で大きく屈曲して北東方向へ流路を変える。発掘した深さは1.4mほどであるが、河床面まで検出されておらず実際はさらに深い。覆土は、上位～中位にかけてオリーブ黒色シルトと黒色シルトが互層堆積し、下位には腐植物を含むオリーブ黄色シルトが厚く堆積していた。これらの土層には、イネを主体にヨシ属やウシクサ族、キビ族などの灰や灰化しきれなかった炭片が多量に混入していることがプラント・オパール分析から指摘されている。そして、灰を廃棄した結果SX204が埋没したとされている。遺物は、1層からは12世紀、2～4層からは11世紀後半、5層からは9世紀の土器が出土している。遺物の層位的出土状況を鑑みれば、12世紀には浅い流路が残存した可能性があるが、13世紀以降は川縁がほぼ完全に埋没したものと考えられる。

SX750　川縁のみの検出の為、規模等の詳細は不明である。川縁は東西方向を示し、SX23・SX204と同様に段をもちながら緩やかに落ち込む。覆土上層は、暗青灰色砂質シルトで、下層は砂質土である。遺物は上層から珠洲焼Ⅴ期に比定される擂鉢（62）が出土している。検出された川跡の中では、最も新しい段階まで継続された可能性がある。

2）溝

本遺跡では計17条の溝が検出された。SD106以外はすべて東西方向を示しており、SD201はL字の区画溝である。そして、これらと平行して掘立柱建物が構築される状況にある。したがって、その多くは、建物や屋敷を区画したものと考えられる。溝は、規模と断面形状によって4種類に分類することができる。

1類　断面が弧状をなす、幅40cm、深さ10～20cmほどの小規模な溝である。SD13・107・111・116・117・1021・1022が該当する。掘立柱建物に隣接して配置されるものが多く、主軸方向も共通する。したがって、これらの建物に伴う区画溝あるいは付帯溝と考えられる。SD101にはSB18～21が、SD107にはSB15が、SD117にはSB23が平行して配置される。いずれの建物も東西棟であり、溝に沿うように構築される様子が理解される。また、SD111・1022・116は、特に規模の小さな溝であるが等間隔で並列しており、同時期に位置付けられる可能性がある。このほかの溝の時期については、隣接して主軸が共通する建物と同時期と考えられる。時期決定の詳細については後述する。

2類　断面が弧状をなす、幅120cm、深さ30～40cmほどの規模の大きな溝である。SD14・101・102・106が該当する。1類に比べ規模が大きく掘り形もしっかりしている。SD106を除けば、主軸方向はほぼ東西方向を示しており、溝同士はほぼ平行関係にある。細い溝と平行して分布するのが特徴的であり、SD102にはSD117、SD14にはSD13が付帯するような状況にある。SD13とSD14は合流していたものの、相互に切り合い関係を認めることはできなかった。SD101の西側は細く、階段状に掘り込まれていることが特徴的であった。建物との関係は、SD14とSD102の間にSB22とSB23が、SD101の西側部分の北側にはSB17～SB21が位置する。このうちSB17～SB21は、SD101とSD111もしくはSD107とに挟まれた範囲から検出されており、雨落ち溝として機能した可能性もあろう。しかし、三者は方向が異なることから並存しなかった可能性が考えられる。並存したとすればSD111に可能性を見出せる。しかし、建物はSD101・SD111のどちらかに沿うように建てられていることを勘案すれば、雨落ち溝というよりは区画溝の可能性がより高い。なお、これらの溝は、川跡側に明瞭な立ち上がりを認めることができなかった。溜まった雨水は自然に流れ落ちる構造になっており、排水溝としての機

能も果たしたことが予想される。時期については出土遺物が少なく判断しかねるところがあるが、12世紀の遺物が主体である。

３類　平面形はほぼ直角に曲がるＬ字をなし、断面形はＶ字を基本とする規模の大きな溝である。建物Ａ群を区画するSD201が相当する。溝の内側には掘立柱建物・井戸・土坑が多数存在するが、主軸方向が共通する建物が５棟（SB4・5・24・25・30）存在する。本遺跡で最も規模の大きな溝で幅180～120cm、深さ70cmほどを測る。断面形状は東西方向がＶ字状であるが、南北方向が台形状をなす。

覆土は、東西方向と南北方向とで、土色・土質は若干異なるものの基本的には共通する。そのうち最上層（1層）は地山ブロックを主体とする堆積で人為的に埋め戻された可能性が極めて高い。切り合い関係はSE208・212・213・266・SD202・203・SX204との間に認められるが、これらの遺構すべてを切っている。本遺跡で最も新しい段階の遺構であり、出土遺物も珠洲焼Ｖ期に比定され15世紀に位置付けられる。遺物は大半が１層からの出土であるが、埋め戻し土であることから遺構に伴わない珠洲焼Ｉ期が混在する。下位の３層においては、南東角の底面から被熱した人頭大の礫十数個がまとまって出土した。３層からは、木製品（226）及び鉄製品（161）が１点ずつ出土したのみである。

SD201は、平面形状から方形を意識した区画溝と考えられるが、調査範囲内からは対応する溝が検出されていない。そのかわりに川跡SX750が検出された。SX750はSX23・SX204と一連のものと考えられるが、珠洲焼Ｖ期に比定される資料（62）が覆土上部から出土しており、SD201が機能した段階では完全に埋没していないものと考えられる。SX750の川縁は、SD201の東西方向とほぼ主軸方向も共通しており、自然地形を利用して方形区画を作出した可能性がある。SX750の川縁を区画の他端と想定した場合、規模は南北約50mの方形区画が想定される。また、SD201は西～東・南～北に向かって緩やかに傾斜している。すなわち、区画溝内の雨水等は河川に流れ込む構造であったと考えられる。

４類　井戸と低地を連結する小規模な溝である。SD32・SD202・SD203が該当する。SD32はSE31と、SD202はSE205あるいはSE206と連結している。SD203は直接連結していないが、溝の延長上のSE265と連結していた可能性が考えられる。井戸と溝との切り合い関係は不明であるが、覆土・配置の様子からほぼ並存した可能性が高い。溝は井戸を起点として川跡に向かって緩やかに傾斜し、直線状またはクランク状に流れている。井戸の排水に関連した施設と考えられよう。この井戸と溝が機能した段階では、川跡SX204はほぼ埋没していたと考えられるが、排水先は低地であることから不都合はなかったと考えられる。

3）掘立柱建物

調査区内では31棟の掘立柱建物を確認した。その分布は、調査区のほぼ全域にわたるが、調査範囲の西側にさらに建物群が展開することが推測される。最も密度が高いのは建物Ａ群（8～12列）で17棟、建物Ｂ群（14・15列）で７棟であり全体の77％を占め、前述のとおり少なくとも４～５棟重複するものもある。この分布は、ピットの分布状況とほぼ合致しており、認識された31棟より多数の建物が存在したことが推察される。また、側柱建物はピットが密集する範囲から、総柱建物は稀薄な範囲から検出されている。すなわち、側柱建物は一定の範囲でほぼ重複して分布するのに対し、総柱建物が完全に重複して検出されることはなかった。これは、建替え頻度の相違を反映している可能性が高い。

構造は、側柱建物が24棟（SB1・2・4・7・9・10～21・23・25・27～31）、総柱建物が７棟（SB3・5・6・8・22・24・26）で側柱建物が全体の77％を占める。庇または張り出し部分を持つ可能

性がある建物は、側柱建物で３棟（SB4・７・９）、総柱建物で３棟（SB６･22・24）の計６棟である。桁行は、２間の建物が１棟（SB13）、２間＋１間が４棟（SB4・７・９・22）、３間が12棟（SB1・８・10・11・17～20・26・27・28・31）、３間＋１間が２棟（SB６・24）、４間が５棟（SB2・12・21・25・30）、５間が１棟（SB15）、２間以上が３棟（SB14・23・29）、３間以上が３棟（SB3・５・16）で、３間の建物が全体の40％を占める。梁間は１間の建物が６棟（SB15・16・18～21）、２間が20棟（SB1～８・11・13・14・17・22～24・26・28～31）、３間が５棟（SB９・10・12・25・27）で、２間の建物が全体の65％を占める。本遺跡で主体となる建物の柱間数は桁行３間・梁間２間の建物といえる。

棟方向は、南北棟15棟、東西棟16棟が認められた。建物Ａ群では、南北棟13棟、東西棟５棟が認められ、南北棟が主体をなすことがわかる。建物Ｂ群では、すべて東西棟で、南北棟は確認できなかった。これは、並列する溝による区画と関係をもって設置された可能性がある。総柱建物は７棟の内６棟（SB3・５・６・22・24・26）が南北棟であり、東西棟はSB8の１棟のみであった。

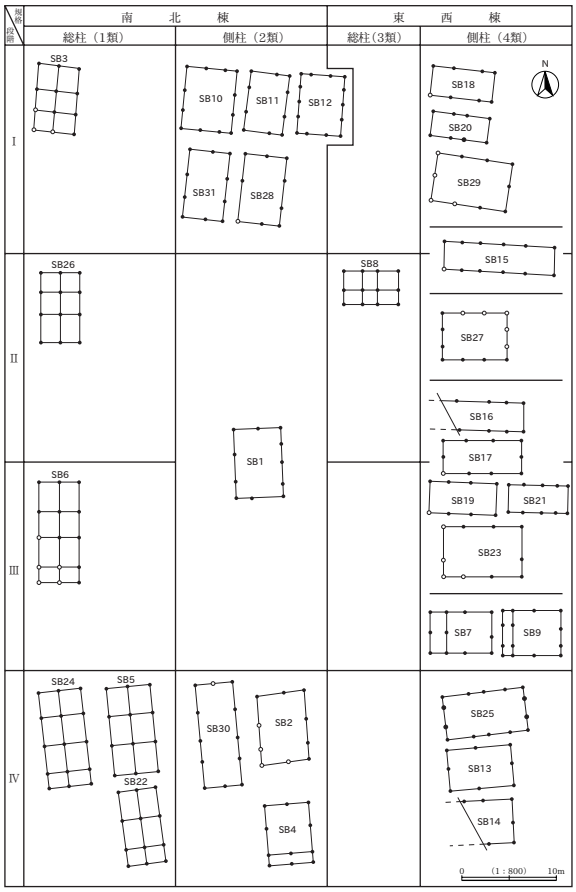
規模は、最大級の建物で48.8m^2、最小のもので16.56m^{2}であり、総柱・側柱建物を問わず総体的に南北棟が大きく、東西棟が小さい傾向にある。建物Ａ群は、大型の建物が比較的目立ち、面積は48.8m^2（SB24）～44.89m^2（SB２）で、本遺跡で最も大型の建物に属する。総柱建物や規模の大きな側柱建物は南北棟に限定され、東西棟はSB25のように面積40.48m^{2}と規模の大きなものも存在するが、概して建物の面積は約30m^{2}前後のものが多い。また、建物Ｂ群は、建物Ａ群よりも小規模な建物であった。東西棟の細長い側柱建物で、SB17を除き梁間は１間に限定されていた。桁行が調査範囲西側に延伸することから、観察表に示した面積より規模の大きな建物である可能性が高い。

柱穴は、平面形状が円形または楕円形のものが最も多く、長楕円形・台形・方形・不整形も僅かながら存在する。直径や深さについては、建物内でも相違がある。覆土最上層は、黒色シルト・暗褐色シルト・地山ブロックを多量に含むシルトの３種類がある。それらの切り合い関係を観察すると、概して黒いほど古く、明るいほど新しい様相を示し、地山ブロックを多量に含むものが最も新しい段階に位置付けられる。堆積状況は、柱痕が認められるもの、その周囲を固めたものが認められた。また、SB6のP299は、底面全体が堅く締まり、鉄分が沈着していた（図版63）。土層の堆積は単層で、柱根・柱痕は認められなかったが、柱が据えられた痕跡と考えられる。なお、SB6の他の柱穴ではこのような状態は見られなかった。

主軸方向については、本報告では南北方向に対する建物軸の傾きを示すこととする。したがって、南北棟は桁行（長軸）を、東西棟は梁間（短軸）を主軸方向とし、南北棟と東西棟の組み合わせを示すこととしたい。このような前提で建物の主軸方向をみると、南北を軸にしてN7°Ｅ～N7°Ｗの14°の範囲に収まるが、大きく３群に分類することができる（第８図）。１群は、N4°Ｅ～Ｎ７°Ｅの３度以内に収まるもので、SB3・10～12・15・18・20・28・29・31の10棟が該当する（第８図・段階Ⅰ）。分布は、建物Ａ群とＢ群にほぼ限定される。２群は、N0°～N2°Ｅの２度以内に収まるものでSB1・６～９・16・17・19・21・23・26・27・31の12棟が該当し（第８図・段階Ⅱ・Ⅲ）、１群と同様の分布状況を示すが、調査区南側の17列で１棟（SB23）、19列で１棟（SB1）が存在し、より広く分布している。３群はN5°Ｗ～Ｎ７°Ｗの２度以内に収まるものでSB2・４・５・13・14・22・24・25・30の９棟が該当する（第８図・段階Ⅳ）。建物Ａ群の５棟（SB4・５・24・25・30）を中心に、建物Ａ・Ｂ群の間に位置する13列で２棟（SB13・14）、調査区南側の17列で１棟（SB22）、19列で１棟（SB2）が存在する。

切り合い関係は、井戸・土坑・溝・ピットとの間に認められ、特に建物Ａ・Ｂ群はその度合いが著しかった。そこで、平面と断面の２面から観察して調査したが、明瞭な切り合い関係を示せるものは、ごく

僅かであった。建物間の切り合い関係を把握できるもの、井戸を介して建物間の切り合い関係を把握できるものは建物Ａ群で認められた。11B7に位置するSB7（P330）とSB25（P289）の切り合いから、SB7が切られておりSB25が新しいことは明らかである（図版26）。次に、11A25に位置するSE205・SE206・SB6（P1416）・SB29（P261）・SB30（P1476・P1542）の切り合い関係は、SE206がSE205・SB29に切られ、SB29はSE205に切られる。さらに、SE205はSB6・SB30に切られる（図版29・31）。この新旧関係を整理すると、古い順からSE206→SB29→SE205→SB6・SB30となる。さらに、これを主軸方位の分類と対照すると、SB29が1群、SB6・7が2群、SB25･30が3群に属する。このことから、主軸方向1群の建物が最も古く位置付けられ、次いで2群、3群の順に推移するものと考えられた（第8図）。すなわち、建物の主軸方向が、反時計回りに移行していることが読み取ることができる。また、このような変遷観と建物の形態構成を照合すると、後出のものに建物の大型化、張り出し部（庇）の顕在化を認めることができる。すなわち、この建物の主軸方向による3分類群は時期差を反映しているものと考えられ、さらに各群で建物の形態構成が異なるものと理解される。



第８図　掘立柱建物の構成と変遷

このように主軸方向にみられる3分類群は、大きく3時期に区分された。さらに2群については、建物Ａ群で切り合い関係が一部で把握されており、また3群に顕著に認められる大型の総柱建物や張り出し部（庇）を有するものを後出的なものと判断し2期に細分した。そして、主軸方向の1群をⅠ期、2群の古段階をⅡ期・新段階をⅢ期、3群をⅣ期と整理した。Ⅰ期に属するものはSB3・10～12・15・18・20・28・29・31の10棟、Ⅱ期はSB８・26・27の3棟、Ⅲ期はSB6・7・9の3棟、Ⅱ期あるいはⅢ期はSB1・16・17・19・21・23の6棟、Ⅳ期は、SB2・4・5・13・14・22・24・25・30の9棟である（第8図）。

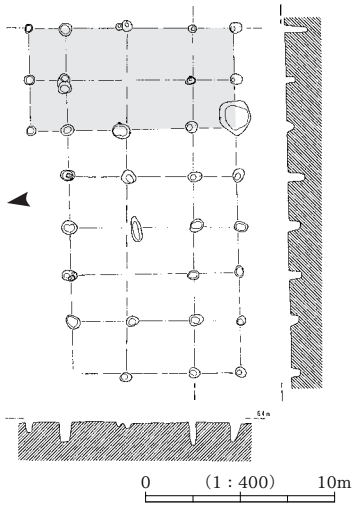
遺物は、柱穴の覆土から僅かに出土しているが、細片が多く時期を特定できるものは少ない。SB21（P1020）からは銭貨が10枚束ねられた状態で出土しており（168～174）、地鎮祭との関連を想起させる。柱根は、SB5（P528）・SB11（P419）・SB13（P1247）・SB27（P658）・SB31（P439）で検出された。

総柱構造の掘立柱建物について

総柱建物の分布を見ると、17列で検出されているSB22を除けば、調査区北よりのＬ字の区画溝（SD201）の内側とその隣接地に限定される。構造は3間×2間が4棟（SB3・5・8・26）、2間×2間に張出し部が付随したものが1棟（SB22）、3間×2間に張出し部が付随したものが2棟（SB6・24）で、3間×2間が主体である。棟方向は、SB8が東西棟であるほかは全て南北棟である。規模は最大で

48.88m²、最小で20.65m²である。最小の東西棟SB8を除けば面積30m²以上の建物から構成されており、本遺跡で検出された建物では平均的規模もしくはそれを上回る。言い換えれば、側柱建物より概して大型といえる。

時期ごとに総柱建物の特徴を見ると、Ⅰ期はSB3、Ⅱ期はSB8・26、Ⅲ期はSB６、Ⅳ期はSB5・22・24が該当する。各期とも数が少ないながらも安定的に加わるものと理解される。分布は、Ⅰ期はL字区画溝内・建物Ａ群の北側に隣接する８列に、Ⅱ・Ⅲ期は建物Ａ群に、Ⅳ期は建物Ａ群に２棟と調査区南側の17列に１棟が認められる。構造は、Ⅰ・Ⅱ期が３間×２間で、Ⅲ期が３間×２間に張出し部をもつもの、Ⅳ期が３間×２間と３間×２間に張出し部をもつ建物から構成されている。規模はⅠ期が30.71m²、Ⅱ期が20.65m²・31.5m²、Ⅲ期が47.3m²、Ⅳ期が33.62m²・44.89m²・48.88m²である。



第９図　三貫梨遺跡における掘立柱建物

以上の状況を整理すると、構造は３間×２間がⅡ期まで継続し、Ⅲ期になると張出し部が付随する建物が登場し、Ⅳ期に継続することがわかる。面積は、Ⅰ・Ⅱ期がほぼ同規模で推移し、Ⅲ期・Ⅳ期に大型化する傾向を認めることができる。このような建物の変遷をたどれたことは重要であり、特に後出的要素を把握できたことは重要である。しかし、15世紀（Ⅳ期）に今回指摘できたような建物が存在することは稀である。類例としては、長岡市三貫梨遺跡第１号建物跡（第９図）［駒形1987］を挙げることができる。三貫梨遺跡の建物は、３間×７間の東西棟が想定されているが、そのうち東端の２間を独立して認識すれば、２間×３間に張り出し部が付随する構造となり、規模の上でも仲田遺跡例に酷似する事例といえる。

4）ピ　ッ　ト

ピットは2,466基検出された。分布は、調査範囲のほぼ全域で認められるが、濃淡が明確に読み取れる。最も密度が濃いのは、建物Ａ群とＢ群であり、建物が密に検出されている範囲と合致する。逆に稀薄なのは、調査区北端で最も標高の低い５～８列、南端で最も標高の高い21～27列、川縁である。

規模は、直径15～67cmで、30cm前後のものが主体をなす。深度は、10cmに満たない非常に浅いものから70cm前後の深いものまで様々あるが、主体は30cm前後である。しかし、深さに関しては、ほ場整備による削平や確認面の掘り下げによる影響を受けており、実際にはこれより総体的に深かったといえる。

堆積状況は、柱痕が認められるもの、その周囲を固めているもの等が認められた。P36・161・245・275・288・319・660・895・960・1037・1044・1174・1195・1199からは柱根が検出された。また、根固め石もしくは根絡み石が検出された事例がある。P623・649・655では拳大ほどの円礫が、P667では珠洲焼がピット底面に敷設されたり、側面に積み重ねられたりしている（図版4・64）。P103では机脚が、ピットの側面に貼りつくような状態で出土しており、これも根絡みに転用された事例と評価できる（図版63）。ただし、これらいずれのピットについても、掘立柱建物としては認識できていない。

出土遺物は、ほとんどが細片で時期決定が難しいものの、P259（147）・P329（83）・P723（146）からは土師器皿、P462（139）からは青磁碗、P1018・P1019は珠洲焼、P1045からは白磁碗（89）、P467（159）からは馬具（轡）、P468（160）からは鎌が出土した。このうち土師器皿はいずれも完形個体で、覆土最上部から正位の状態で出土している（図版63）。祭祀に関する遺物の可能性を指摘できよう。

また、10B25に位置するP387は特徴的な形状をなす。SE388の覆土を切って構築されており、平面形は楕円形で、断面形はU字状である。長径27cm・短径22cm・深さは120cmで、切り合っている井戸とほぼ同じ深さであった。直径に対する深さが大きすぎ、このような穴を掘り込むことは困難と考えられる。また、ピットは井戸の側壁に沿うように形成されており、側壁に立てかけるように柱を立てた後、井戸が埋め戻された可能性を指摘できよう。それにより、柱の安定化を図ったのであろう。

5）杭　　列

SD13・SD14の両脇をほぼ並行する２条の杭列を検出した。当初、２条の杭列を桁行とする掘立柱建物の可能性も考えたが、柱間に対応関係が認められず、また溝との配置を考慮して杭列と判断した。時期については、SD13・SD14と平行関係にあることから、それと同時期と考えられる。

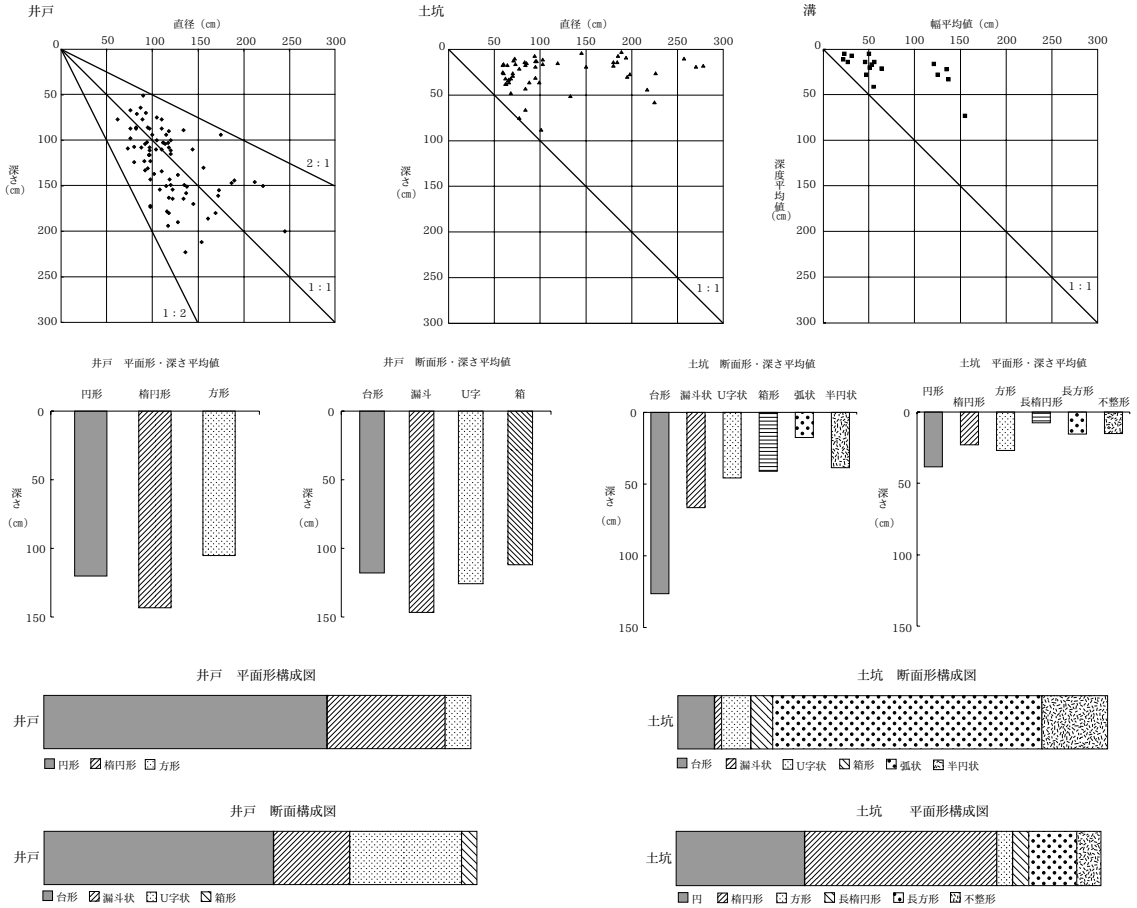
6）井　　戸

井戸状の遺構は、85基検出された。調査区のほぼ全域で検出されているが、特に建物Ａ群とＢ群付近に集中しており、大きく２ヶ所に纏まりをもつ。この纏まりは掘立柱建物や柱穴が集中している範囲とほぼ合致し、建物の北・東側に分布するものが多い。建物に接するかのような分布状況は、中世において普遍的な状況［水澤1993］といえよう。しかし、他の遺構分布とは異なり、川縁の低地からも多数検出されていることは特徴的といえる。構造は、SE219・247の２基が石組みであるほかは、すべて素掘りである。素掘りの底部には僅かな凹みが認められるものがあるが、水溜施設と考えられる。

平面形は、円形と楕円形で全体の９割以上を占め、方形（SE205・236・242・502・511）が僅かながら存在する。断面形は、台形状が最も多く、形態的に連続するＵ字状と漏斗状を含めると９割以上を占め、箱状（SE205・381・506）が僅かに存在する。直径と深さの関係（第10図）は、比率１：１を前後するものが主体で、すべて１：２～２：１の間に収まる。直径は90cm～240cm、深さは51cm～223cmと様々であるが、直径・深さとも1mを前後するものが最も多い。これに対し、深さが140cmを超えるものについては直径100cm～150cm前後に収まり、比率は１：１～２：１に集中する。すなわち、深さに応じて直径が拡張されているわけではない。また、石組構造については掘り方が200cmを超え、直径と深さの比率は１：１ほどである。しかし、石組の内径は100cm前後と開口部径は深さよりも小さく、素掘り構造の傾向と相違しない。

覆土最上層は、大きく黒色シルト・暗褐色シルト・地山ブロックを主体とするものの３種類に分類できるが、黒色シルト・暗褐色シルトが大半を占め、調査区のほぼ全域に分布する。一方、地山ブロックを主体とするものは、区画溝SD201の内側に集中する。井戸から出土した遺物の年代観や切り合い関係の検討から、黒色シルト→暗褐色シルト→地山ブロックを多量に含むものという変遷をたどることができる。出土遺物から年代は、黒色シルトが11・12世紀、暗褐色シルトが13世紀、地山ブロック主体が15世紀に位置付けられる。すなわち、覆土最上層の分類から、おおむねの年代観を把握することができた。

堆積状況は、レンズ状堆積が主体であるが、斜位・水平堆積も比較的多く確認される。斜位堆積は、一



第10図　井戸・土坑・溝の計測値と分類別構成比

方向に偏る傾向が強く、埋土の供給が一方向的であることがわかる。覆土は、地山ブロック、黒色・暗褐色シルト、腐植物が交互に堆積する。下位から中位は主に黒色シルト、中位からは腐植物、中位から上位は地山ブロックの堆積が多くみられた。SE213の腐植物層からは、イネ科草本類が一定方向に重なって検出されており、ヨシやアシが意図的に入れ込まれた可能性が高い（図版56）。これらの状況から判断すれば、多くの井戸が人為的に埋め戻された可能性が高いといえる。なお、SE22・206・208・215・221・507・1107の7基からは、炭化物の堆積層が認められた。

出土遺物は、珠洲焼・土師器・陶磁器・木製品・石製品・鉄製品がある。土器は、上位～中位にかけて多く、最上層の1層に集中する。そして、出土量は中位で減少し、下位からの出土はほとんどない。特に、SE208の1層からは土師器皿（96）の完形品が正位の状態で出土したことが特筆される。鉄製品も1層から土器類と共伴して出土することが多く、SE223の1層からは銭貨（168）が出土している。このような状況を勘案すれば、井戸の埋め戻し時に一定の意図をもって埋設された可能性を指摘できる。一方、木製品は下位に特徴的に認められた黒色シルトから出土している。しかも、多数の製品が一括して出土するケースがある。特に、SE234（216～224）、SE1108（262～268）が顕著であるが、いずれも15世紀に位置付けられ、特定の年代に認められる事象とも評価できる。こういったケースは特例ともいえるが、出土層位が下位に偏ることは確かである。中位の腐植物層からも一定量出土するが、その量は下位の比ではない。石製品は、下位から特徴的な状態で出土したものがある。SE115の底部からは、凹石と球状の敲石が共伴する状況にあった。凹部と敲石の直径は近似した値を示しており、セット関係として把握しうる

資料である。これらの状況に見られるように、層位ごとで出土する遺物の内容が異なる状況にあったといえる。

85基検出された井戸状遺構のうち、特徴的な３基について次に個別記載を行うこととしたい。

SE247　10C7･12に位置する石組井戸である。平面は楕円形、断面は下半部で段をもって小さくなるがおおむね台形状を呈する。掘り形の規模は、長径245cm×短径208cm×深さ200cmを測る。確認段階では、平面不整形のシミ状にプランが検出され、直径20～30cmほどの扁平礫が散在的に露呈していた。付近に存在した撹乱の状況と共通したものの遺構の可能性が想定されたため、平面的に掘り下げた結果、石組井戸であることが判明した。井戸側は平面円形、断面台形状である。石組の内径は、開口部で100cm、底部で50cmを測る。また、底面には直径40cm・深さ15cmほどの凹みが検出されたが、水溜施設と考えられる。礫は小口積みで基本的に互い違いに積み重ねられており、在地石材（安山岩・砂岩）が使用されていた。覆土は、上位が黄褐色の地山ブロック、中位～下位が黒褐色または黒色シルトで、水溜め内には１～3cmの小円礫が多量に含まれていた。この水溜状の凹みは、濾過装置と考えられよう。掘り方は、黄褐色シルトで地山に類似した土が充填されていた。裏込めと礫の積み重ねを交互に行って構築されたものと考えられるが、下半については掘り方が小さく、礫と掘り方とが接する状況にあった。なお、この井戸の底部は、透水層と考えられる細砂層を掘り抜いていた。地下水がここから供給され、水溜で沈殿・濾過されたものと考えられる。出土遺物は、上位の地山ブロック層から珠洲焼片３点が出土したが、これから詳細を判断することはできない。井戸の切り合い関係と覆土の状況から判断すれば15世紀の所産と考えられる。

SE219　11C11･16に位置する石組井戸である。平面円形、断面台形状を呈する。掘り形の規模は、長径212cm×短径192cm×深さ146cmを測る。当初、素掘りの井戸と認識して調査を進めたが、底部付近から石組構造が検出された。検出された石組は底面から３段のみである。礫は小口積みで基本的に互い違いに積み重ねられている。使用されていた礫は、安山岩・砂岩ですべて在地石材である。井戸側の形状は、平面円形、断面台形状を呈する。内径は上面で65cm、底面で50cmを測る。底部に水溜め施設は認められなかった。覆土は、上位が黄褐色土の地山ブロック、中位～下位が青灰色シルトである。掘り形の覆土は黒褐色土と黄褐色土の互層堆積で、井戸側の東側約半分には掘り形が存在しなかった。底部のみに認められた石組の配置も片側に偏っていた。すなわち、石組は掘り形の一方に寄せて構築された可能性が高い。出土遺物は上位の地山ブロックからごくわずかに出土しているが、時期を特定できるものは含まれていない。切り合い関係と多量の地山ブロックで埋め戻されている状況を勘案すれば15世紀の所産と思われる。

SE224　10B24に位置する素掘りの井戸である。平面楕円形、断面台形状を呈する。開口部で長径190cm×短径135cm×深さ144cmを測る。床面には並列して２つの水溜め施設が設置されている。当初、井戸同士が切り合っているものと考えたが断面観察の結果、単体の井戸であることが判明した。覆土は、中位～下位にかけて黄褐色の地山ブロックが厚く堆積し、水溜め施設を含む下位には黒色シルトが堆積していた。時期を特定できる遺物は含まれていなかったが、上位から鉄釘（162）が出土している。

7）土　　坑

土坑と判断した遺構は59基ある。その大半は、出土遺物がなく詳細な時期は不明であるが、中世の遺構と考えられる。分布状況は調査区全体に散在しているが、覆土の状況から古代の土坑と考えられるもの

は調査区南側に多く、中世と考えられるものは堀建柱建物の周辺に多く分布する。古代の遺物を伴うものはSK1017（23）で、中世の遺物を伴うものはSK193（85）・217（103）・122（113～115）・1000（117・116）がある。それぞれの土坑は形態、規模に差が認められるが、特に中世の土坑については、ある程度のまとまりがみられる。第10図は、全土坑の直径と深度および平面形・断面形をグラフ化したものである。これをみると直径50cm～100cm、深さ50cm以下の群と、直径180cm～200cm、深さ30cm以下の２群に大別することができる。また、平面形は円形・楕円形が半数以上を占める点においては井戸と共通するものの、方形の比率がより高いことは特筆される。断面形は、浅い弧状が全体の約62％を占める。また、平面形と深度平均値の相関関係をグラフ化したところ、平面円形が最も深く平均38cm、不整形が最も低く平均15cmである。

8）方形竪穴状遺構

SK21は、調査区北東側から検出された方形竪穴状遺構である。長軸9.2m、短軸3.1m、深さ0.6mで、主軸はN-9°-Wとほぼ南北方向に向いているものの若干西に偏り、掘立柱建物の主軸方向３群に共通する。断面は弧状で、底部はやや平坦となるが、焼土や硬化面等は確認されなかった。覆土は上位が暗青灰色シルト（地山ブロック）、中位～下位が青灰色シルトであり、中世の新しい段階の遺構覆土と共通する。遺物は、中位より白磁碗（87）、上位からは珠洲焼の小破片が出土している。川跡SX23の縁に平行するように隣接しているが、主軸方向や遺構覆土の状況を勘案すれば、並存しない可能性も高い。むしろ、西側に位置するSB2とは長軸方向が一致しており、時期的に共通する可能性を指摘できる。

9）竪穴住居

古墳時代後期（7世紀台後半）の竪穴住居１軒（SI1038）が検出された。しかし、中世の遺構が密集する範囲（建物Ｂ群）から検出されたため、残存状況は良好でない。また、ほ場整備による影響を大きく受けている範囲でもあり、掘り込みは最も深いところでも10cm程度しか検出できなかった。また、覆土は地山と酷似するため、サブトレンチを設定するなどして平面プランの把握に努めたが、明瞭な立ち上がりを確認することはできなかった。遺構の一部は、すでに損壊している可能性があり、結果として平面プランは歪な形状を示している。しかし、おおむね方形プランを示したであろうと考えられ、１辺4.5mほどの規模になるものと推測される。この住居に付随するであろうピットは３基確認されているが、それらに有意な配置は認められない。方形基調と仮定して、対角線上などにサブトレンチを設定したものの、把握できなかった。また、１基のピットからは甑１個体（7）が一括出土している。

この竪穴住居を認識する契機となった竈は、南西隅に検出されている。周辺部の掘り込みは浅く、確認面において焼土が露出するような状況にあった。その南側には被熱した扁平な円礫が検出されており、竈の構造物と考えられる。また、焼礫の南東側には、長胴甕３個体（1～4）と甑１個体（6）がかたまって出土した。このような出土状況は上越市一ノ口遺跡の竪穴住居に共通する。ピット出土の甑（7）、床面直上出土の椀（5）を含めて極めて良好な一括資料であり、土器の編年研究において重要な資料になるものと考えられる。なお、竈と連結する煙道として理解するのに適当な位置から溝状のSK168が検出されている。しかし、中世に特徴的に認められた黒色の覆土であり、竪穴住居に伴う可能性は低いと考えられた。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

仲田遺跡から出土した遺物には、古墳時代後期（7世紀後半）、古代（8・9・10世紀）、中世（11・12・13・15世紀）のものが存在する。遺物量は、平箱で土器が22箱、石製品・鉄製品が1箱、木製品が15箱、柱根が4箱である。古墳時代後期の遺物は、SI1038から一括出土した7世紀後半の土器群が注目される。古代の土器は、主に川跡から出土している。川跡SX23の河床砂礫層中からは、8世紀前半～9世紀の土器がまとまって出土した。8世紀前半の須恵器は、県内でも稀有な事例であり注目される。9世紀の須恵器には、「里」「南」の墨書が認められ、特に「里」は達筆な書体であり識字層の存在をうかがわせるものである。なお、SX23から出土した遺物は磨耗の度合いが小さく、供給源となった遺跡は、さほど隔てない上流域にあると考えられる。中世の資料は、主に遺構から出土した。11世紀後半～13世紀及び15世紀の土器の存在が明らかになったが、中でも珠洲焼Ⅰ期の資料については、県内でも数少ない事例として注目される。また、井戸からは土器と木製品が良好なセット関係で出土しており注目される。川跡SX204においては、9世紀・11世紀後半・12世紀・15世紀の土器が層位的に出土しており、またそれらに火山灰が伴うことが明らかになっている。今後の土器編年研究の重要な指標になるものと考えられる。

2　土　　器（1～150）

土器の多くは、遺構から出土した。共伴関係を明示するため遺構単位で示し、さらにおおむね年代ごとに掲載することとした。また、すべての遺物について、遺構番号等の出土位置を併記することとした。

A　古 墳 時 代

当期の遺構はSI1038とSK1022のみであり、そのほかは中世の遺構等に混在して出土した。出土遺物は、土師器甕・甑・小型壺・椀がある。1～7はSI1038の一括出土遺物である。出土状況は、1～4・6が竈と考えられる周辺からまとまって出土しておりセット関係にあると考えられる。7は住居内ピットから、5は床面直上からの出土で、住居内の良好な一括資料である。

甕（1～4）は、器形から2類に分類できる。1類は、体部が細身かつ直線的で、口縁部は緩やかに外反するタイプ（1・3・4）。2類は、最大径が体部下部にあり下膨れた器形で、口縁部は強く外反するタイプ（2）。1・2類とも調整方法は共通で、口縁部内外面はヨコナデされ、体部内・外面ともにハケ調整が行われる。外面は縦方向のハケメが主体で、底部縁辺部のみ横方向のハケ調整が行われる。内面は横方向のハケ調整が主体で、部分的に斜方向のハケメを残す。ハケメの幅は1・2が3cm前後とやや広く、3・4が2cm前後である。底部が残存しているものは1・4で、4は切り離し後、板目状の圧痕を残す。1～3は体部外面に煤の付着が確認され、口縁部内側は若干の摩滅が確認された。

甑（6・7）は、共に把手を有するものである。体部の調整は、甕と同様に外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が行われる。しかし、甕は縦・横のハケメが顕著なのに対し、甑はやや斜方向を意識したも

の顕著である。把手部分は両者ともヘラケズリが行われ、取り付け部分はハケメを残す。6は体部中央部に把手が付き、口径と器高が1：1である。これに対し、7は体部上位1／3部分に把手が取り付けられ、器高は低く、口径と器高の比は1.2：1と口径が器高を上回っている。7には、体部下部に対角2か所の穿孔があり、簀子を受ける部材を通した孔と考えられる。また、器面の内外面に朱色の付着物が少量確認され赤彩された可能性もあるが、通常のそれとは異質である。使用痕は、6の外面体部下部の径12～14cm前後に特に摩滅が認められ、甕との接点と思われる。1～4の甕の頸部内径が12～13cmであるので、これらの甕に伴ったものと考えられる。

椀（5）は、口縁部はやや内湾気味に立ち上がった後、端部をヨコナデにより外反させている。全体的に厚手に仕上げられ、底部内面はやや凸状である。

これら、SI1038出土資料は極めて良好な一括資料といえる。その形態的特徴やセット関係をみると、おおむね一ノ口東編年［鈴木・春日1994］のⅣ期に比定され、7世紀後半に位置付けられると考えられる。なお、8・9は、中世の遺構からの出土であるが、おおむね当期に比定される土器である。

B　奈良時代

旧小熊川の川跡SX23の河床（8層）から、奈良時代の土器が出土した。これらの遺物は河床の砂礫層（8層）からの出土にもかかわらず、流水による磨滅を受けた痕跡はほとんど無い。その供給源はさほど距離を隔てない上流域にあると考えられる。

高坏（11）は、坏部外面下半はヘラケズリされ、内面はヘラミガキ後、黒色処理される。脚部外面は縦方向のヘラケズリが行われ、裾部分はヨコナデされる。内面はナデ調整されるが、輪積み痕を残す。

土師器の無台杯（15）は、全体的に厚手のつくりである。口縁部内・外面ははヨコナデされ、口縁端部は強いナデにより凹線状をなす。底部から体部下半は、不定方向のヘラケズリが行われる。器形や口縁端部の凹線の状況をみると中世土師器と共通するが、SX23の河床（8層）からは中世の遺物が出土していない。SX23において中世の遺物が出土したのは、間層を挟んだ上位からである。出土状況を勘案すれば、古墳時代後期の須恵器模倣杯と理解したほうが適当と考えられる。

須恵器無台坏（12・13）は、全体的に非常に精巧なつくりである。焼成も良好で器面はにぶい褐色である。体部内外面はロクロナデされ、体部外面下にはロクロナデにより明瞭な稜線を残し、そこから口縁部まで緩やかに外反する。底部はヘラ切後不定方向のヘラケズリが行われ、中央部分に×印の線刻が施される。器形、胎土・焼成等の特徴から信州方面と共通する。

須恵器有台杯（14）は、口径15.5cmの大形品であり、古い段階の様相を認めることができる。

これらSX23の河床から出土した一群の土器は、須恵器の形態・成形方法・セット関係を勘案すれば今池編年［坂井1984］のⅠ期に比定され、8世紀前半に位置付けられる。

C　平安時代

本遺跡における平安時代（9・10世紀）の遺構・遺物は少なく、分布も散在的である。当期の遺物は、川跡からの出土が最も多い。SX204の最下層から9世紀の須恵器（25）が、SX23の河床（8層）からは8世紀後半～9世紀の須恵器が出土している。SX23 出土資料は、奈良時代の遺物同様にほとんど磨滅しておらず、供給源から大きく流下していないものと考えられる。中でも、「里」・「南」と記された墨書土器（17・18）は注目される。特に「里」は正しい筆順で書かれた達筆な書体であり、識字層の存在を想定さ

せる資料である。また、SX23の上流域には角田遺跡があり、「厨」の墨書土器が採集されている。「里」「南」の墨書土器は、角田遺跡周辺から流下した可能性が高く、有力な遺跡の存在が想定される。

SX23　須恵器無台坏（16）は、回転ヘラ切りであり、内面には部分的に煤あるいは墨の付着が認められる。口縁部の立ち上がりは比較的急であり、8世紀後半に遡る資料と考えられる。

須恵器有台坏（17・18）は、体部内外面にロクロナデが認められ、体部外面にはロクロ目を残す。17に関しては体部内面にも明瞭なロクロ目を残し、丁寧なつくりである。体部外面には、逆位で「里」の墨書が認められる。18にも底部外面に「南」の墨書が認められるが、書体は17と異なり、達筆でない。底部調整は17が左回転のヘラ切後ロクロケズリで、18は回転糸切後ロクロケズリである。

坏蓋（19）は、天井部を右回転の切り離し後、つまみ部を貼り付けている。天井部全体に濃緑色の自然釉が認められる。器高は3cmとやや低く、天井部は若干沈み込んでいる。

壺（20）は、遺存率が低く調整は不明瞭であるが、体部外面はロクロ左回転にて調整されている。高台はやや長めで「ハ」の字状に開く。

これらSX23から出土した古代の土器は、おおむね8世紀後半から9世紀前半に位置付けられるものと考えられる。この一群が、河床出土資料において、最も新しい段階の土器となる。

SX1017　体部外面にロクロ回転によるカキ目が認められる甕（23）が出土した。口縁部内外面はロクロナデされ、口唇部は強いロクロナデにより上方につまみ上げられている。その特徴から9世紀のものと考えられる。

SX279　12B22グリッドから、1個体の甕（24）がつぶれた状態で出土した（図版10・65）。体部外面中位から下位は幅の広い縦方向のヘラケズリが行われ、中位から上位にかけてはヨコナデされるものの、輪積み痕を明瞭に残している。口縁部は肥厚する特徴的なもので、「く」の字に外反する。底部は平底で不定方向のヘラケズリが行われる。10世紀に比定できる北信系の長胴甕であろう。

D　中　　世

古代と中世の画期については、11世紀中葉とする説と、12世紀中葉とする説とがあり［前川1989］、両者とも蓋然性の高い根拠が示されている。本遺跡においては、その画期とされる11世紀後半～13世紀の資料が、県内でも有数の質量をもって出土しており、過渡期的な様相を把握するのに好適な状況にある。したがって、その間に境界を設けることは、本遺跡の報告においては適切でないと判断し、11世紀後半以降を中世の遺物として扱うこととした。特に、遺構からの一括資料に良好な共伴関係を認めることができ、遺構単位での掲載を基本とした。最初に遺跡内を区画する川跡や溝から出土資料を示し、次に井戸・土坑等の出土資料を遺構単位で示すこととしたい。なお、土器の編年的検討にあたっては、珠洲焼は吉岡康暢氏の編年［吉岡1994］、輸入陶磁器は横田賢次郎氏・森田勉氏の編年［横田・森田1978］、中世土師器は品田高志氏の編年［品田1991b、1997］を主に参考とした。

1）11世紀後半

遺構から出土した11世紀後半の土器は、SE210出土一括資料（76～79）があるが、このほかには単発的な出土が数例認められるのみである（72～75）。SE210は、川跡SX204の近くに位置する井戸であり、その底部から黒色処理された椀が一括出土した。器形を復元できた76は、内面に暗文が施される優品といえる。この時期の資料として特筆されるのは、川跡SX204の資料（25～58）である。川縁から遺

物が層位的に出土しており、土器の編年研究に重要な情報をもたらすものである。

1層からは、土師器の無台皿（46）と有台皿（47）、珠洲焼Ⅰ期の甕・壺（53～58）、白磁椀（48）が出土している。土師器の皿が12世紀前半に遡るほかは、12世紀後半の資料と考えられる。なお、内面黒色処理の椀（51）と灰釉陶器の皿（52）は、11世紀の資料の混入と考えられる。

2～4層からは、土師器の椀・皿（28～38・40～44）が多数出土している。無台の椀・皿が多く、有台の椀・皿が少数加わる状況にある。無台の椀・皿は、最も下部の4層から浅身のもの（29・30）が認められ、上部からは比較的深身のものが出土する傾向にある。これとは対照的に有台の皿・椀は3層には深身の椀が、2層には浅身の皿（42）が特徴的に加わる。2層出土の有台皿は、1層出土の類似例（47）と比べるとより深身でシャープに作出されており、より古い要素を備えている可能性がある。

また、2・3層からは灰釉陶器が出土している。2層の45は椀、3層の39は小片であるが皿であり、残存率の大きな椀（45）については編年的位置付けが可能である。原明芳氏の編年［原1994］と比較すれば、内端接地の底部は虎渓山1号窯式（10世紀後葉～11世紀前葉）に比定できる。しかし、それに後出する丸石2号窯式（11世紀中葉）との分類がはっきりしていないとも指摘されており、丸石2号窯式まで下る可能性もある。

こうみてくると2～4層出土資料は、大きくは11世紀後半に位置付けられるが、その中でも上位と下位とで相違が認められる。総じて下位により古い様相を、上位により新しい様相を認めることができる。なお、SD201出土の内面黒色の皿（51）については、SX204の2～4層からの混入と考えられる。

5層からは、9世紀に遡る須恵器・土師器が出土している。11世紀後半の資料とは、明らかに異なる一群が層位的に出土したことは注目される。なお、製塩土器1点（27）が認められた。これは新潟市出山遺跡出土資料［新潟市史編さん室1994］と共通する薄手の資料であり、筒状の胴部～底部と朝顔状に広がる形態をなすものと考えられる。ただし、この製塩土器は、他と離れた地点から出土した資料である。同一地点における層位的な出土例ではないが、灰や炭化物を多量に含む特徴的な2～4層相当層より下位から出土していることから、この段階に比定できるものと考えた。

2）12　世　紀

珠洲焼Ⅰ期及びロクロ手法の土師器を12世紀の資料とした。この段階の資料を出土する遺跡は数少なく、特に珠洲焼のⅠ期の資料が集落から出土した事例は数少ない。類例としては、上越市伝至徳寺跡［笹澤・水澤2001］、中条町下町・坊城遺跡［水澤2001］、新潟市山木戸遺跡［新潟市史編さん室1994］を挙げられる程度で、このほかはほとんどが経塚からの出土資料となる。珠洲焼・土師器・輸入陶磁器の編年観をクロスチェックする上で重要な資料といえよう。なお、ここでは12世紀の資料として一括して扱ったが、大きく前半期と後半期の資料とがある。

【遺構一括資料】

SD116からは、珠洲焼Ⅰ期の鉢（66）に青磁碗（67）が出土した。青磁碗の釉色は、やや黄色味の強いいわゆる飴色ガラス質で、同安窯系と考えられる。外面には櫛目、内面上位には一条の沈線が認められ、この沈線を境に上位で若干内側に屈曲する。同安窯系Ⅰ類に相当し、12世紀後半から13世紀に位置付けられる。珠洲焼とおおむね一致する年代に位置付けられよう。なお、これとSD106の劃花文が施される青磁碗底部（63）は酷似する個体である。

SE123からは、珠洲焼の甕・鉢と白磁椀が出土している。甕（93）は、細密・鋭利な叩打による薄手

の精品で、倒卵形の体部、「コ」の字の嘴頭口縁を有する。期の典型例である。また、体部外面中位には刻線が、内面には墨書が認められる。いずれも何らかの記号を意味するものと考えられる。鉢についても、口縁が内傾して立ち上がり、Ⅰ期の特徴が表れている。白磁椀は、細く高く直立した高台を有し、体部と高台の境界付近まで施釉された底部資料である。内面には劃花文が施される。白磁Ⅴ類に相当し12世紀に位置付けられることから、珠洲焼と年代的に整合する。

SE208においては、北陸系の土師器皿（96）と壺Ｒ種の静止糸切りの底部（97）が共伴する。北陸系の皿は下っても12世紀中葉までとされており、珠洲焼の年代より古く位置付けられる。年代観に齟齬があり、また土師器皿が覆土上部から出土していることから、両者が共伴しない可能性もある。しかし、本遺跡の井戸やピットの覆土上位からは、土師器皿の完形品が出土することがままあり、覆土上位からの出土をもって共伴しないということはできない。また、同一の層位から珠洲焼と共に出土していることは明らかである（図版55）。これら調査時の出土状況を総合的に判断すれば、遺棄・廃棄段階における両者の共伴関係を積極的に評価しうることを指摘しておきたい。

【その他】

珠洲焼では壺Ｒ種の95において回転糸切り痕が認められ、Ⅰ期の典型例といえる。甕についても、「コ」の字の口縁部や、細密・鋭利な叩打による薄手なつくりなどに当期の特徴がよく表れている（55・56・98・99）。また、口縁内面に一条の沈線（102）や段（55・56）を有するものも当期の特徴であろう。鉢においても、口縁部がやや内弯するシャープなつくりは特徴的である（100・102）。

土師器は、ロクロ成形で糸切り痕が認められる（80～86）。底径が小さく口径との差が大きいことが特徴的である。これは、古代の土師器製作技法の伝統によって製作されたもので、北陸系とされるものに相当する。中にはいわゆる柱状高台を有するもの（84・85）もあり、中世土師器の年代観と照らせば11世紀後半～12世紀前半に位置付けられるものであろう。

輸入陶磁器は、P1045出土の白磁碗（89）などが、当期の様相をよく反映している。口縁部を玉縁にするもので体部中位付近まで釉が垂下する白磁Ⅳ類に相当するもので、12世紀に位置付けられる。青白磁の皿（64・65・68）も当期に位置付けられよう。64は、薄手でシャープに作られた優品であり、内面に劃花文が施される。65・88は森本朝子氏による青白磁皿の分類Ⅰ-1類［森本1997］に相当する。口縁は、外に水平に折り曲げられ、三角の刻みが入るものである。底部は、僅かに高台を削り出した平底で、外面は露胎である。

3）13　世　紀

珠洲焼Ⅱ・Ⅲ期及び手づくね手法の土師器を13世紀の資料とした。ここでは13世紀の資料として一括して扱ったものの、大きく前半期と後半期の資料が含まれ、おおむね前半段階の資料が多いようである。

【遺構一括資料】

SK122からは、土師器皿（113）と青磁碗（114・115）が出土している。土師器皿は、稜線がシャープに作出された小型品である。青磁碗（115）は、内端接地の底部資料であり、内面には文様が認められる。龍泉窯系のⅠ類に相当する資料で、12～13世紀に位置付けられることから土師器の年代と齟齬がない。

SE194からは、土師器皿（121）と青磁碗（122）が出土している。SE194と切っているSE193から

は柱状高台のロクロ皿（85）が出土しており、遺構の切り合い関係と遺物の年代観が一致する。

SE211からは青磁が２点出土している。黄褐色の皿（147）は、いわゆる米色青磁であり、龍泉窯系のⅢ-1類に相当する。13世紀後半から14世紀に位置付けられるものであろう。

SE221からは、土師器皿（118）、青磁碗（119）、珠洲焼の鉢（120）が出土している。土師器皿は稜線が緩やかに作出されており、口縁端部は内側につまみ上げられている。青磁碗は、外面に連弁を削り出し、さらにその上から櫛目を縦に入れるものである。釉色は、青味を帯びた緑色である。龍泉窯系Ⅰ-6類に相当し、13世紀に位置付けられる。珠洲焼鉢は、内端のつまみ上げがなくなり、外端と同様、丸みを帯びる口縁部であり、Ⅲ期に位置付けられる。いずれも13世紀に位置付けられるが、総じて後出的な要素が認められる。

SE504からは、土師器皿（104～106）、青磁碗（107）、珠洲焼壺の底部（108・109）が出土した。土師器皿は、残存率が小さいが手づくね技法によるもので、稜線は比較的緩やかである。青磁碗（107）は、２本の沈線によって体部内面を５分割し、一部に文様（キノコ状？）が施されている。龍泉窯系のⅠ-4類に相当し、12～13世紀に位置付けられる。土師器と青磁の年代観はおおむね一致するとみて差し支えなかろう。なお、珠洲焼壺の底部109は砂底である。

SK1000からは、土師器皿２点が出土している。大型品と小型品であるが、いずれも手づくね技法によるものである。116の口縁端部は凹線状に整えられており特徴的である。

【その他】

珠洲焼は、時期を決定するための有力な根拠を有する資料が少ないが、Ⅱ期とⅢ期の資料が認められる。壺Ｒ種の130は、体部外面に櫛目波状文が描かれており、Ⅱ期もしくはⅢ期に位置付けられる。梅瓶形の瓶子129は、Ⅱ期に相当する可能性があるが類例が少ない。壺Ｒ種の138は、内面に印花文がスタンプされておりⅢ期に下るものであろう。鉢は、卸目が波状文のもの（137）と直線状もの（135）とがある。前者をⅡ期に位置付けたがⅠ期に遡る可能性がある。後者の口縁部は、内端のつまみ上げが顕著でなく断面が直角に近い形状であり、Ⅱ期に相当するものと考えられる。

土師器皿は、すべて手づくね手法によるものである。その多くは、口縁部をヨコナデし、そのままの体部とは稜線によって区画しており、刈羽・三島型に比定される。比較的大ぶりなもの（110・116・118・121・125）と小ぶりなもの（104～106・113・117・123・126～128）とが存在するが、いずれも口径に比して器高が小さく、浅身の資料が多い。稜線はシャープに作出されるものと、緩やかに作出されるものとがあるが、緩くなっているものほど後出的な資料と考えられる。

輸入陶磁器では、青磁碗（140）と青白磁の梅瓶（141）が注目される。青磁碗の外面には片切彫の鎬蓮弁文が施されており、龍泉窯系青磁Ⅰ-5類に相当し13世紀に位置付けられるものである。青白磁梅瓶は、南宋のもので13世紀に位置付けられる。

４）15　世　紀

15世紀の遺構には、方形に区画される断面「V」字の溝や石組井戸などが存在するが、出土資料は数少ない。15世紀の土器は、珠洲Ⅴ期の資料を基準としている（144・146～150）。

【遺構一括資料】

当期を特徴付ける断面「V」字の区画溝SD201からは、壺と鉢が出土している（68～71）。このうち69・70には、Ⅰ期の特徴が認められることから混入遺物と考えられる。鉢（71）は、平坦に作出された

口縁端部に櫛目波状文で加飾しておりⅤ期に比定できる。壺の口縁部（68）も、端部の断面が三角形に作出されており、鉢と同時期に位置付けることができる。

SE234からは、片口鉢（144）が、完形に近い状態で出土した。広く平坦に作出された口縁端面が内傾しておりⅤ期に比定できる［坂井1987］。これにはSE223から出土した1片が接合しているが、これに伴って出土した145は細密で鋭利な叩打痕を有するもので、Ⅰ期に遡る資料の混入と考えられる。

SE510からも、珠洲Ⅴ期の片口鉢149が出土しているが、これには天目茶碗（148）が共伴する。天目茶碗は、厚い施釉が認められる優品であるが、輸入品と比べると軽量であり、瀬戸・美濃焼と判断した。削り出し輪高台のものであるが、口縁部を欠損しているため詳細は不明である。珠洲焼と同年代であれば古瀬戸後期［藤澤1991］の資料となろう。なお、16世紀以降に下る資料は、仲田遺跡ではこの資料に可能性が残るほかは存在しない。この天目茶碗は、遺跡の下限を示す資料と考えられる。

【その他】

珠洲焼では、叩き目が粗い壺（150）や、調査区北端の川跡SX750から出土した卸目の粗い擂鉢（62）に後出的要素を認めることができる。特に鉢は、焼成が不良で褐灰色を呈し、中世前半の資料と比べると異質である。土師器では、2点に後出的要素を認めることができる。146は、口径と底径の差が小さいロクロづくりで、いわゆる関東系に相当する。147についても、12世紀に位置付けた土師器と比べると立ち上がりが急であり、関東系に共通するものと理解される。いずれも胎土は緻密であり、12・13世紀に位置付けた土師器とは明らかに異なる。なお、土師器2点は、いずれもピット覆土の上部からの出土であり、地鎮との関連性が想定されるものである。なお、当期に伴うであろう輸入陶磁器は認められない。

3　石　製　品（151～158）

石製品には、凹石、敲石、砥石、硯がある。

凹石（151・152）は、粗粒安山岩の円礫を素材としている。平坦面に直径7～8cm、深さ1.4cmほどの大きな凹みが作出される特徴的な形態である。いずれも井戸・土坑の底部からの出土であり、中世に属する製品と考えられる。なお、152はSE115の底部から出土したものであるが、これと球状の敲石（153）が共伴している。凹みと敲石の直径は近い値を示しており、セット関係として理解できるかもしれない。

砥石は、凝灰岩製（154～156）と砂岩製（157）とがある。形状は、角柱状をなすもの（156・157）と、扁平なもの（154）とがある。砂岩製の157は粗粒の石材であり荒砥である可能性があるが、ほかは比較的細粒の石材であり仕上砥と考えられる。

硯（158）は、滑石製である。軟質で平滑な素材であり、硯の石材選択としては異例である。硯としての使用痕跡は明瞭でなく、鑿状工具による粗削りの痕跡が認められる。また、広範囲に煤の付着が認められることも特徴的である。実測図上面・左側面・裏面のほぼ全面と表面のごく一部に煤が付着する。この煤の付着と加工面との切り合い関係をみると、表面の機能面・右側面・下面は煤の付着後に加工されていることがわかる。また、裏面には下方からの剥離痕が認められ、これが煤の付着後に形成されたものと考えられる。すなわち、硯に仕上げる加工以前に被熱した結果、煤が付着したものと考えられる。被熱した時点での形態について考えると、表面のごく一部に煤の付着が認められることから、厚さは大きく変化していないことがわかる。一方、右側面及び下面は、隣接する面と不連続であることことから、破損面であ

った可能性が高い。すなわち、右方及び下方に向かって、形状が延伸していたものと考えられる。こういった破損の状況と、破損していない面の整形の状況（殊に滑らかに整形された角）を勘案すれば、もともとの形態は温石であった可能性が高い。すなわち、右側面と下面の破損を契機に、温石から硯に転用されたものと考えられる。温石の破損後、破損面を整形し、機能面が作出されたものと理解できよう。石材選択の特殊性は、こういった事情によるものと考えられる。また、表面と裏面とを貫通する楕円形の孔が認められる。硯への転用以前に作出されたものであり、この中には同一個体の他の部分から削り出した詰め物が認められる。ここは、硯の陸に相当する部分であり、孔を埋める必要があったのであろう。

4 鉄 製 品（159～174）

本遺跡においては、少数ではあるが井戸、溝、ピットから銭、釘、鑿、鎌、馬具、鉄滓が出土している。遺構の年代観と照らし合わせると、おおむね中世前期の所産と考えられる。今回の調査では、鍛冶的な遺構は確認されなかったが、椀形滓（165）及びフイゴの羽口の小破片が出土している。遺跡内において自家消費的な小鍛冶が行われていたものと考えられる。

銭（166～174）は、12点出土した。168～171は、SB21のP1020から計10枚が連結した状態で出土したものである。銭の孔に藁紐で銭サシ状のものを通して束ねられていたものと考えられる。出土位置を勘案すれば、地鎮に関する遺物と考えられる。166は包含層、167はSE223からの出土である。167は、井戸覆土の上部からの出土であり、埋め戻しの祭祀に関連する可能性がある。

No.	銭 名	書体	裏面	年代	時代
166	熙寧元寳	真書	無文	1068年	北宋
171	開元通寳	真書	無文	621年	唐
167	天禧通寳	真書	無文	1017年	北宋
172	開元通寳	真書	無文	621年	唐
169	天聖元寳	篆書	無文	1023年	北宋
173	天聖元寳	真書	無文	1023年	北宋
170	皇宋通寳	篆書	無文	1083年	北宋
174	嘉泰通寳	真書	三	1201年	南宋

第1表 出土銭一覧

釘（162～164）は、共に断面形態は四角形で、頭部は平坦である。162に関しては腐食が進み不明瞭ではあるが、同類と考えられる。鑿（161）は、表と裏では刃部の角度に差があり、おそらく、平坦面を正面にして使用されたと考えられる。鎌（160）は、腐蝕が著しく、刃部、取り付け部等の詳細は不明であるが、曲がり鎌と考えられる。馬具（159）は、轡部分である。腐蝕が著しく詳細は不明であるが、残存部は立聞壺から鏡板部分と考えられる。鉄滓（165）は、SE223からの出土で椀形滓である。共伴遺物（144・145）から15世紀のものと考えられる。全体に少量の気泡が開き、凹凸は少ない。メタル度はHである。

5 木 製 品（175～277）

A 記述の方法

木製品の大半は、井戸底部から出土した。したがって、SX23の河床砂礫層から出土した175～178が古代（9世紀）に遡る可能性が高いほかは、中世の資料と考えられる。井戸から出土した資料には、単独で出土したものと、多数の異なる形態が一括して出土したものとがあるが、土器と同様に遺構単位で提示することを基本としたい。また、共伴した土器によって年代が決定されている井戸については、年代ごとに資料を示すこととした。それにより、木製品の年代観を検討する材料としたい。特に、漆器については変遷観が示されており、土器の年代観との関係を示す良好な資料と考えられる。

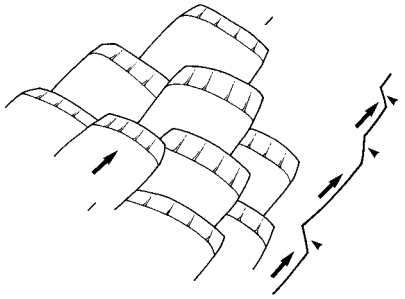
B　観察の視点と図化の方法

木製品実測図の表記方針は、木器集成図録などに示されている。加工痕・使用痕・他の部材があたった圧痕などの記載を重視し、欠損部分についてもできるだけ復元的に書くことが強調されている［奈良国立文化財研究所1993］。しかしながら、この指摘が実践的に図化されることは意外にも少ない。ともすると、二次的に生じた凹凸をなぞることに終始し、腐蝕部分のみが懸命に図化されているものも存在する。そうした実測図は、「人工物」の表現としては不適切であり、石器実測において新規破損面（いわゆるガジリ面）にリングやフィッシャーを記載することに近い視点といえる。少なくとも、石器や土器の観察視点と異なる（ただし、腐蝕面の記載に一定の「意味」がある場合もある。例えば、柱根は根入れ部分のみが残存し、地上に露出している部分が腐蝕している場合がある。この場合、腐蝕範囲を記載することで、根入れ長を把握できる可能性があるので注意したい）。

このような状況を鑑み、本報告では実測図作成にあたっては、加工痕を示すことに重点を置くこととし、腐蝕面等の記載を最小限に留めることとした。個々の加工痕の形状、単位、方向、切り合い関係、組み合わせを意識的に図化することとし、表現方法は石器の実測［松沢1959・1960］に習うこととした。

加工痕の形状は、切り合う加工痕との関係を把握しながら、稜線を正確に記載することを第一に考え、加工痕の形状・単位・切り合い関係を捉えていくこととした。正確な稜線を記載できれば、本来、加工の単位や切り合い関係を明示することができるはずである。

加工方向の把握については、加工痕の末端部に認められる階段状をなす部分に着目したい。斧・鑿・刀子など加工具の侵入が止まった部分から木目に沿って階段状に剥離されることがあり、これを把握することで加工方向を認識することができる。この部分の記載にあたっては、加工具の侵入が止まったライン（石器記載のリングに相当）と、そこから始まる階段状をなす部分（石器記載のフィッシャーに相当）を第11図に示すように図化することで、加工方向を示すこととする。



第11図　加工痕（階段状の剥離）**の表現方法**

また、加工痕が群をなす場合、強調して示すことが必要である。一定方向の加工痕が集合する場合や、形状の近い加工痕が集合する場合は、作業単位を示している可能性が高い。したがって、そういった境界を1段階太い線で示すことで強調した。

このような図化の方針をもって作業を開始したものの、木製品の稜線は腐蝕や使用減り？等によりなだらかなものが多く、「意識的」に観察しなければ把握できない加工痕がほとんどである。こういった状況に加えて、デリケートな遺物であるが故に生じる損傷痕の存在も理解を困難にしている。第一に、発掘調査時の損傷痕がある。発掘道具がわずか触れただけでも加工痕のような損傷することがあり、注意しなければならない。例えば、柱根においては半載時の露出面に損傷痕が生じることが多く、発掘調査の状況を振り返ることである程度誤認を防ぐことができる。第二に、圧迫により形成される加工痕かのような圧痕である。これについては、年輪や木目の連続性を観察すれば区別することが可能である。こういった本来的でない情報がより目立つことも、本来的な情報を読み取ることを困難にしている。圧迫痕や新規欠損面など、二次的に生じた損傷痕を適切に区別することも観察において重要な要素となる。

以上のように、いくつかの問題を提起したが、いずれにしても問題意識をもって木製遺物を観察するこ

とが必要である。わずかな情報を拾い上げようと意識的に観察しなければ、木製遺物を的確に理解することは困難と考えられる。

C 時期別の様相

古代の土器と共伴する木製品は、8世紀前半～9世紀の土器が多数出土したSX23の川底出土資料（175～178）が相当する。砂礫層からの出土であり、上流の遺跡から流下してきたものと考えられる。ここからは、挽物の素材（178）、曲物の底板（177）、有頭状の木製品（175）、臍が作出された建築材（176）が存在する。曲物の底板は、残存部の中央に穿孔されており、破損後に再利用された可能性がある。

11世紀の土器と共伴する木製品は、SX204の3層から出土した棒状の製品（179）のみである。

12世紀の土器と共伴する木製品は数少ない（180～185）。SE123及びSE1035からは漆器が出土している（180・181）が、いずれも土師器写しのベタ高台であり、漆器の編年観からみても12世紀に位置付けられる。このほかに、杭状の木製品（183）、菰槌（185）、櫛（182）などがある。

13世紀の土器と共伴する木製品（186～206、232～235）には、良好な共伴関係が認められる。SE137では曲物（232）・杵（187）が、SE138では白木椀（188）・鉄芯を有する錐（189）・箱の底板（190）が、SE213では曲物（203・205）・毬杖（204）・板材（建築材？206）が、SE221では曲物及び長方形曲物の底板（195・196）・有頭状のもの（浮子？197）・荷札？（198）が認められる。年代観を読み取れる白木椀及び漆器については、ベタ高台のもの（201）と内面が小さく削り出された高台のもの（188）とがある。後者は、13世紀に特徴的な形態といえ、前者にはより古い要素が残されているといえる。おおむね漆器と土器の年代観は相違しないといえよう。

15世紀の土器と共伴する木製品は、SD201、SE223、SE225、SE234から出土している（216～228）。このうち、SE234からは、様々な木製品がセット関係をもって出土した。漆器椀（216）・皿（217）・槌（219）・曲物（220・221）・柱根（224）・杭（223）・端部が平坦加工された製品（222）が認められる。漆器（216）は、総黒色であり内面に円に「上」の字が朱書きされている。13世紀の資料と比べれば、より高い高台が作出されており、新しい要素を見出すことができる。しかし、これに共伴する皿（217）には、高台がつかず従来いわれている新しい要素を認めることはできない。また、この段階の漆器としてはSE510出土の碗（225）もある。これは、高台を有する総赤色漆器である。総赤色漆器の出現は15世紀以降であり［田村1999］、土器の年代観と相違しない。

また共伴する土器はないが、漆器の形状から年代を推測できる一括資料がある。SE18では柄杓（241）・漆器（242）が、SE1040では漆器皿（259）・曲物底板（260）が、SE1108では漆器椀（262）・曲物（263～265）・箸（267）・櫛（268）・縄（266）が認められる。漆器の年代観をみれば、SE18・SE1040のベタ高台の皿（242・259）は12世紀、SE1108の椀（262）は高台の状況から15世紀に位置付けられよう。また、SE1043から単独で出土した漆器椀（211）は、ベタ高台であり12世紀に位置付けられる。

D 遺物の種別ごとにみた特徴

漆　　器

漆器は、11点出土している。上述のとおり12世紀・13世紀・15世紀の資料が存在するが、それぞれが各期の特徴をよく示しており、品田高志氏、田村浩司氏らの編年観［品田1991b、田村1999］とお

おむね一致する。ただし、15世紀に欠落するとされる小皿［春日2001］がSE234に伴っている（217）ことには注意を払わなくてはならない。漆器の素材は、ケヤキ（180・181・188・201・211・241・259）、ブナ属（216・217・225）、トチノキ（262）といった回転成形に適する均質な木材が選択されている。また、時期ごとに樹種の選択が異なる状況が理解された。ケヤキは12・13世紀に、ブナ属・トチノキは15世紀に限定的に選択されている。年代・製作技法・素材の選択が、整合する状況にある。ちなみに、15世紀の資料群に伴った小皿（217）についても樹種はブナ属であり、樹種選択の状況においても後出的要素を認めることができる。また、盤の可能性がある213についても、トチノキが充てられており樹種の選択性において共通する。

曲　　物

曲物は、すべて側板と底板が分離した状態で出土した。出土状況と直径の一致により、セット関係が把握できたのはSE234における220と221との関係のみである。また、曲物はほとんどが破損した状態で出土したことも特徴的である。底板については、破損後に加工が施されるもの、使用痕が形成されるものがあり、転用の可能性を指摘できる。その状況は、いくつかの在り方に整理できる。破損後の形状の中央付近に穿孔されたもの（177・195・236）、破損面に加工を施すもの（243）、刃物傷のような線状痕が認められるもの（195・205・260）がある。このうち線状痕は扁平な他の形態（200・212）にも認められ、「まな板」などの工作台として使用された可能性があろう［藤巻1988］。いずれの痕跡も扁平材の転用を目的とした結果であろう。また、221の底板には渦巻と放射状の刻線が認められた。それが意味することは不明であるが何らかの記号であろう。使用痕との切り合い関係をみると、周縁の使用減りを切るように刻線が認められた。すなわち、使用後に刻まれたものであり、あるいは埋め戻しの祭祀に関連する記号の可能性があろう。

様々な製作痕跡も認められる。SE236の底板には、黒漆が塗布されていた。側板内面には、均等に曲げるために小刀や錐で刻まれるケビキ線があるが、垂直方向のもの（203）と斜位のもの（220）とがある。側板の結合にあたっては、樹皮が利用されているが、その方法にはいくつかの在り方が認められる。底板の固定方法は2種類が認められる。側方から木釘を打ち込むことで固定するもの（177・203・205・236・263）、樺皮や木釘といった他の部材による固定具を一切用いないもの（221・264）である。後者は、断面台形状の底板を嵌め込んだようなものであるが、製作技法の詳細については検討を要する。底板は、221の使用痕を観察する限り開く側が底面側となるようである。

樹種はスギが多いが、3個体にヒノキが使用されていた。ヒノキは温暖帯に分布し、中部以北の日本海側に存在しないことから、これらは搬入品である可能性が極めて高い。また、素材の選択性と底板固定法の間に有意な関係を認めることができる。固定に際し、スギは例外なく木釘が使用されているのに対し、ヒノキを利用した個体（220・264・265）は、底板及び側板に木釘等の固定具を認めることができない。また、ヒノキで固定具をもたない個体は、いずれも15世紀の遺物と共伴している。搬入の時期を限定的に捉えることができる可能性がある。年代・製作技法・素材の選択が、整合する状況にあるといえる。

長方形曲物（196）や箱（190）が、13世紀に位置付けられる井戸からの少数出土している。いずれも木釘等によって接合されるものの底板であり、樹種はスギである。円形の曲物と共通する状況にある。

櫛

櫛は、6点出土しているが形態的に大きく2種類に分類することができる。櫛歯が密な梳櫛（210・228・268・270）と疎な解櫛（182・202）とがあり、大きさにおいても櫛歯が長いもの（210・228・

270）と短いもの（182・202・268）とがある。大局的には、梳歯ほどその長さが長く、解櫛ほど短いといえる。また、270の表裏には「几」字状の文様が刻まれている。

櫛の材質は、樹種同定の結果、すべてイスノキであることが明らかになった。イスノキは重硬な材で、曲げに対する抵抗性があり極めて割れにくく、櫛の用材として優れている。木取りも割れにくいように繊維方向が刃先にくるようにした縦木取りとなっている。イスノキは、西日本の照葉樹林帯に生育する常緑広葉樹で、新潟には自生しない。すなわち、製品もしくは素材として西日本から搬入された可能性が高いといえる。西日本の職人によって製作されて搬入された可能性を指摘できよう。

その他の木製品

鍬（229）は、形態から直柄鍬と考えられる。刃を装着する部分の端部は細身になっており、また実測図表面がより平坦に、裏面がやや凸面になっている。樹種はトチノキである。柄との組み合わせからなる類似形態が２点存在する。212は、足のような扁平な平面形状をなし、先端はわずかに反るように加工されている。また、側方の下端から１／３ほどの位置には、大きな段差が作出されており、他の部材を装着させた可能性がある。上半中央には棒が貫通しているが柄としては貧弱であり、他の部材と組み合わせて使用された道具であろう。231は、一端に寄った位置に孔が貫通しており、柄と組み合わせて利用された道具と考えられる。形状をみると、鍬のように金属製の刃部が装着された可能性を指摘できるが、それにしては柄との接合部が貧弱である。

槌（219）は、柄と機能部が組み合わさった状態で出土した。柄は断面四角形をなす。樹種は、機能部はヌルデ、柄の部分はコナラ節であり、いずれも強度のある素材といえる。

菰槌は、半截した材を素材とし刻みを部分的に加えたもの（185）と、樹皮を残した分割材の周囲に刻みを加えたもの（254）とがある。また、分割材の256についても菰槌の可能性がある。

錐（189）は、柄と鉄芯が組み合わさった状態で出土した。鉄芯は、柄に貫通させた側は断面が円形、錐部は断面が正方形をなす。柄には軟質なヤナギ属の材が用いられており、鉄芯を通しやすい樹種が選択されていたことがわかる。

箸（237・267）は、２点のみ認められた。削りにより、断面が多角形に整えられている。

杓子は、異なる形態の２点が出土している。241は、１本ものの素材から削りにより作出されている。大きくカーブする柄に平面が円形に近い浅い機能部がつく。細かな加工によって整形された後、全面に黒漆が塗布されている。樹種は、軟質なヤナギ属であり、大きく削りだす形態の作出には有効であったと考えられる。207はスギの板材を素材とし、特に先端部は鋭利に作出されており、篦に近い形状である。

下駄（248）は、台と歯を別の部材を組み合わせた差歯の構造をなす。台に臍穴を貫通させた露卯下駄である。樹種は、クスノキ科である。

扇（214・215・238）は、３点出土した。樹種は、スギ（214・215）とヒノキ（238）があり、ヒノキは搬入品と考えられる。また、ヒノキの238は他の２点よりも長く厚手であり特徴的である。

毬杖（204）は、長い柄のついた杖で木製の毬を打つ遊戯であり、本遺跡から出土したのは打杖である。毬杖の出土は、県内では長岡市中道遺跡［駒形ほか1998］に次ぐ２例目となる。樹種はクヌギ節である。

火鑽臼（250）は、何らかの製品からの転用と考えられる。もともとは、199と類似した形態と考えられる。溝を刻み、そこを臼としている。

机脚（271）は、P103から出土している。根がらみとして転用された可能性が高い。

有頭状の形態には、断面が長方形をなすもの（197・209）、楕円形をなすもの（244）、多角形をなすも

の（175・252）があり、多様である。このうちの一部（252等）は、浮子である可能性が高い。

一端を尖らせた形態（186・198・240・255・257・261）は様々であるが、特に255・261は端正なペン先形に作出されており、目的形態であった可能性が考えられる。ほかの資料については、これほど顕著でないものの板材の一端を尖らせる点では共通する。また、186は俵通しのような機能を果たした可能性があろう。240及び258は直径3mmほどの棒が貫通しており、何らかの形態の一部であったと考えられる。なお240の先端は、意図的に二股に作出されている。

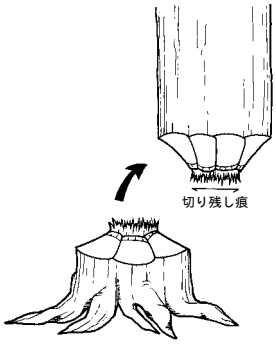
板材は、報告個体以外にも多数出土している。薄手のものから厚手のものまで様々であるが、端部が鋸で切断され、短冊形に成形されているもの（198・227・239・246・247）が特徴的である。また、198・227の上部には穴が認められる。あるいは荷札のような役割を果たしたものかもしれない。

6　柱　　根

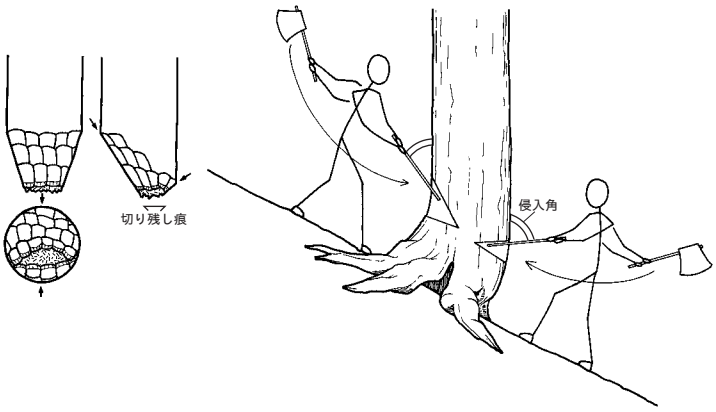
ピットは2466基検出されたものの、そのうち柱根が残存したのは19基のみであった。しかし、その多くは腐蝕の進行が顕著で、一定の範囲に加工面が認められるのは図化した6点のみである。加工の状況を観察すると、それぞれに豊かな個性が認められる。

272（P161）は、接地面が極めて平坦であることが特徴的であり、伐採後に二次加工された結果と考えられる。中心部から外方に向かう加工痕は、伐採後に平坦面を作出した際の加工によるものであろう。また、接地面と側面の境では、張り出しが除去されている。この部分の加工痕は最も新しい段階に形成されており、形状修整の結果と考えられる。樹種はコナラ節である。

273（P960）は、大きく2方向からの加工痕から構成され、中央部には切り残し痕（第12図）が認められる。伐採した木材が二次加工されずに、柱として使用された可能性が高い。2方向から構成される加工痕は、斧の侵入角が異なり、一方は50度、他方は70度ほどである。斧の侵入角の相違は、伐採環境を反映している可能性がある。例えば、斜面地において下方から斧が入れば垂直に近い角度で侵入するであろうし、上方からであれば浅角度で侵入するものと考えられる（第13図）。そうであれば、伐採の順序は「下方からの伐採→上方からの伐採」と推定される。実際、273の切り合い関係については、浅角度のほうが新しい可能性が高く、こういった仮定と矛盾しない。ここでは、第13図のようなモデルを提示し、生育環境と伐採状況との関係を示したが、より多数の資料の分析をもって慎重に検討する必要があろ



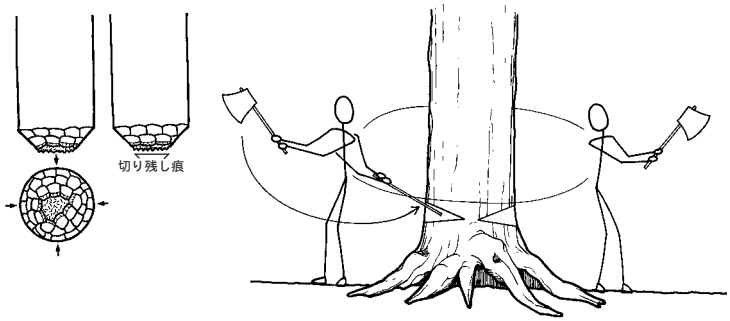
第12図　切り残し痕の形成



第13図　斜面地における伐採と加工痕の構成

う。樹種は、トネリコ属である。

２７３とは対照的に、２７４（P1037）は腐蝕の進行が顕著だが求心的な加工痕から構成され、中央には切り残し痕が認められる。斧の侵入角も、各所で大きな変化は認められない。立ち木の全周から伐採するのに、より適した環境（例えば平坦地）が想定される（第14図）。樹種はキハダである。



第14図　平坦地における伐採と加工痕の構成

275（P319）は、側面の加工が顕著な角材である。一見、尖る上端が接地面にあたり、打ち込み式の柱根である可能性も考えられたが、出土状況の天地から遺物実測図のようになる。底面の腐蝕は顕著で、加工痕を確認できなかった。樹種はコナラ節である。

276（P658）は、腐蝕範囲が広く全体像を把握できないところもあるが、基本的には２方向の加工痕から構成されるものと考えられる。斧の侵入角は、一方が25度、他方が85度ほどである。どちらかといえば、273に近い在り方を示す。樹種はクリである。

277（P895）は、斧の侵入角が極めて浅く、先端が鋭く尖るものである。打ち込み式の杭であろう。樹種はコナラ節である。

柱根については、図化しなかった資料も含めて全点を樹種同定した。その結果、充てられた樹種の構成は、クリ７点（37％）、コナラ節７点（37％）、ヤマグワ２点（11％）、キハダ２点（11％）、トネリコ属１点（５％）であった。特に、クリとコナラ節が多用されていることが特徴的である。これらは小高木または高木になる樹種であり大径が得やすく、材質も重硬で強靭であるものが多い。こういった樹種の選択は、県内の古代～中世の柱根に共通する傾向といえる。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　仲田遺跡出土木製品の樹種

三村　昌史・植田弥生（パレオ・ラボ）

分析方法

出土木製品から横断面・放射断面・接線断面の３断面について剃刀を用いて薄く切り取り、ガムクロラール（アラビアゴム・抱水クロラール・グリセリン・蒸留水を混合したもの）で封入してプレパラートを作成した。検鏡は光学顕微鏡にて40－400倍で行い、現生標本との対照により同定を行った。また、炭化により上記の方法で切片作成ができなかったNo.46（242）・66（217）の木製品については、木製品から小片を採取し、実体顕微鏡での観察及びSEMでの観察による同定を植田が担当した。

分析結果

樹種同定の結果、計125点の出土木製品中には木本が19分類群認められ、そのほかNo.1（266）は草本（イネ科以外）からなっていたが詳細な同定は困難であった（木製品観察表参照）。

スギ　*Criptomeria japonica*（L.f.）D.Don　（スギ科）　第15図1a～1c

仮道管と放射組織、及び樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、樹脂細胞はこの移行部分にかけて散在し、しばしば接線方向に配列する。また晩材部は量多く明瞭。分野壁孔はスギ型で大きく、１分野にふつう２個。スギは高木になる常緑針葉樹である。現在ではいたるところに植栽されているが天然分布は降水量の多い地域に限られて点在し、特に東日本の日本海側に多く、湿地周辺や尾根沿い、谷沿いなどに生育する。材質は軽軟で保存性は中庸、割裂性・加工性に優れる。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtuse*（Sieb. et Zucc.）Endl.　（ヒノキ科）　第15図2a～2c

仮道管と放射組織、及び樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、樹脂細胞はこの移行部分にかけて散在し、しばしば接線方向に配列する。また晩材部は量少ない。分野壁孔は大型のトウヒ型からヒノキ型でやや大きく、１分野にふつう２個。ヒノキは主に暖温帯に分布し山地の尾根沿いなどに生育する、高木になる常緑針葉樹である。現在の分布では中部以北の日本海側にはみられない。材質はやや軽軟であるが強度に優れ、割裂・加工が容易で保存性が著しく高いという特徴がある。

オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim. *var. sachalinensis*（Miyabe et Kudo）Kitamura　第15図3a～3c

大型（直径約250－300μm）のやや放射方向に伸びた丸い導管が、ほぼ単独時に放射方向に数個複合して年輪界に向けて緩やかに径を減じながらまばらに分布する半環孔材。木部柔細胞は短接線～接線状で顕著。導管の穿孔は単一で、内腔にはチローシスが認められる。放射組織は同性で、１－３列。オニグルミは、温帯～暖温帯にかけて分布する高木になる落葉広葉樹で、河畔などの適湿な立地にみられる。材質は硬さ・重さ中庸で、加工は容易である。

ヤナギ属　Salix　（ヤナギ科）　第15図4a～4c

小さな（直径約40－80μm）放射方向に伸びた丸い薄壁の導管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材。導

管の直径は年輪の始めと終わりで小さくなる傾向にある。導管の穿孔は単一。放射組織は単列異性で、導管と放射組織との壁孔は蜂の巣形のふるい状。ヤナギ属には山地に生育する種や、河畔・湿地周辺に生育する種などが含まれ、また低木から高木になる種まで様々であるが、多くが向陽地の土壌の薄い湿潤で水はけの良い立地を好む。材質は軽軟で、加工は容易、耐久性は低い。

クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　（ブナ科）　第15図5a～5c

年輪の始めに大型（直径約200－350μm）で丸い道管が単独で1－2列に並び、そこから順次径を減じ、晩材部では小型（直径約20－50μm）でやや角張った道管が火炎状に配列する環孔材。晩材部には木部柔組織がみられ、いびつな接線状に配列する。道管の穿孔は単一で、道管内部にはチローシスが著しい。放射組織は単列同性。道管と放射柔細胞との壁孔は対列状、または柵状。クリは主に温帯下部・暖温帯に広く分布する落葉広葉樹で、向陽地に多くみられる。材質は強硬で割裂性・保存性・弾性に優れ、特に水湿に強い。

コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus*　（ブナ科）　第15図6a～6c

直径約200－250μmの丸く厚壁の導管が年輪の始めに1－2列並び、そこからやや急激に径を減じて直径約15－30μmのやや角張った薄壁の導管が火炎状に分布する環孔材。木部柔細胞は短接線状。導管の穿孔は単一、放射組織は単列同性のものに広放射組織が混じる。コナラ節の母植物としては温帯下部～暖温帯に分布するコナラ *Quercus serrata* Thunb. ex Murray、温帯に分布するミズナラ *Quercus crispula* Blumeが主に考えられ、そのほか暖温帯の沿海地に多いカシワ *Quercus dentata* Thunb. ex Murray、暖温帯に点在して分布するナラガシワ *Quercus aliena* Blumeの可能性も考えられる。いずれも高木になる落葉広葉樹であり、材質は重硬で弾性を持ち、保存性は中庸、割裂・加工は難易である。

クヌギ節　*Quercus* sect. *Aegilops*　（ブナ科）　第15図7a～7c

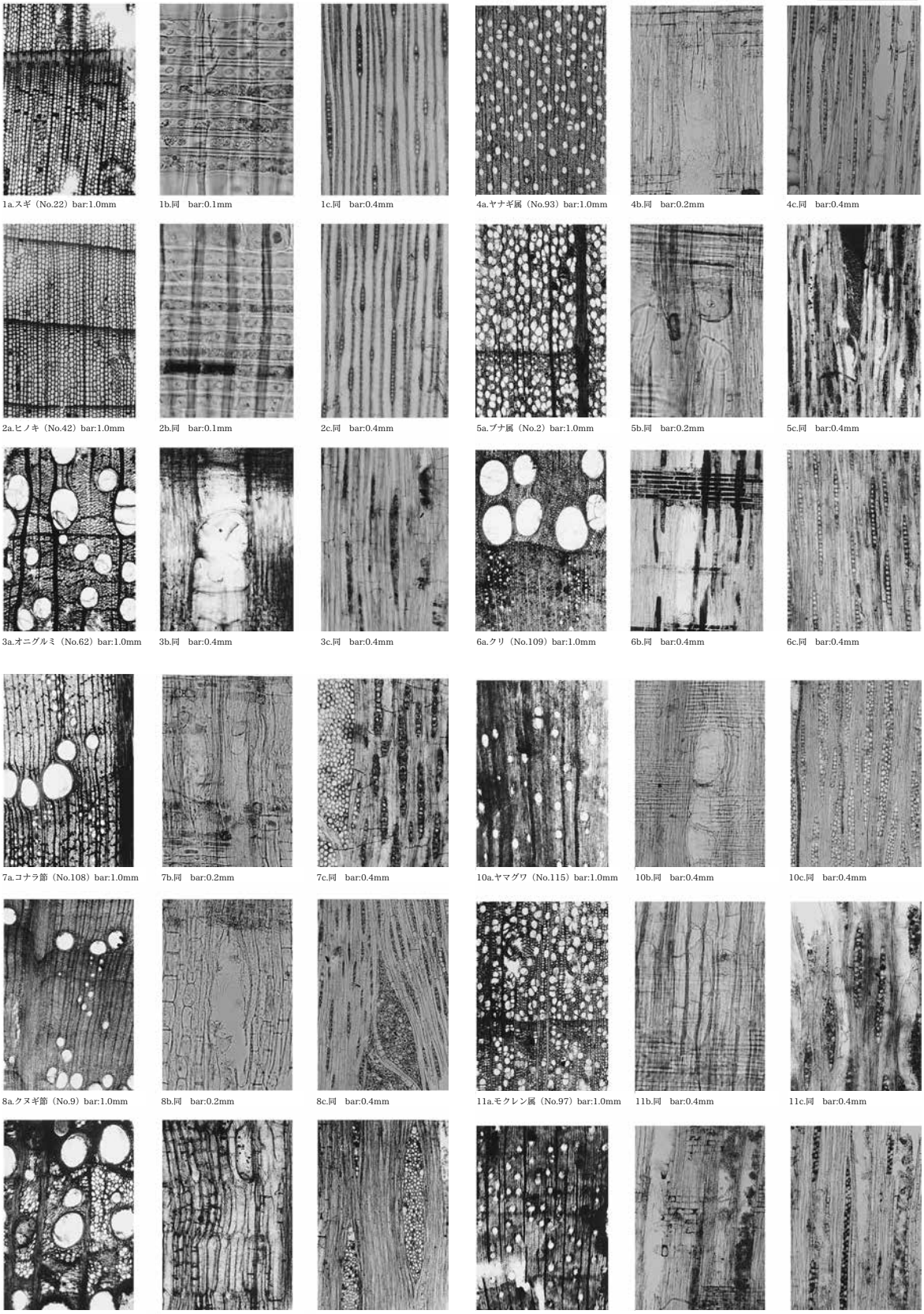
年輪の始めに大型（直径約200－300μm）の丸い道管が単独で1－2列に並び、晩材では小型（直径約20－50μm）で厚壁の道管が配列する環孔材。木部柔組織はいびつな接線状で1－2列。道管の穿孔は単一で、道管内部にはチローシスが著しい。放射組織は単列同性であるが、幅が約250μm、高さが5mmを超える大型の複合～広放射組織が混在する。クヌギ節にはクヌギ *Quercus acutissima* Carruthers、アベマキ *Quercus variabilis* Blumeが含まれる。いずれも暖温帯の向陽地に多くみられる、高木になる落葉広葉樹である。いずれも材質は重硬で弾性を持ち、保存性は中庸、割裂・加工は難易である。

ブナ属　*Fagus*　（ブナ科）　第15図8a～8c

小型（直径約60－70μm）のやや丸い導管が、ほぼ単独時に数個複合して密に配列する散孔材。導管の直径は年輪界に向けてやや急に減少する。導管の穿孔は単一または階段状。放射組織は単列及び数列のものに広放射組織が混在する。ブナ属にはいずれも温帯上部に分布するブナ *Fagus crenata* Blume、イヌブナ *Fagus japonica* Maxim.双方があるが材構造からは区別がつかない。材質は堅強かつ靭性があり、保存性は悪い。

ケヤキ　*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino　（ニレ科）　第15図9a～9c

年輪の始めに大型（直径約200－300μm）の丸い道管が単独で1－2列に並び、晩材部では小型（直径約30－60μm）の薄壁で角張った道管が多数集合して、接線方向あるいは斜めに帯をなす環孔材。早材から晩材にかけて、道管の直径は急激に変化する。木部柔組織は早材部では大道管の周囲を、晩材部では小道管の塊の周囲をそれぞれ取り囲む。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。



1a.スギ（No.22）bar:1.0mm　1b.同　bar:0.1mm　1c.同　bar:0.4mm　4a.ヤナギ属（No.93）bar:1.0mm　4b.同　bar:0.2mm　4c.同　bar:0.4mm

2a.ヒノキ（No.42）bar:1.0mm　2b.同　bar:0.1mm　2c.同　bar:0.4mm　5a.ブナ属（No.2）bar:1.0mm　5b.同　bar:0.2mm　5c.同　bar:0.4mm

3a.オニグルミ（No.62）bar:1.0mm　3b.同　bar:0.4mm　3c.同　bar:0.4mm　6a.クリ（No.109）bar:1.0mm　6b.同　bar:0.4mm　6c.同　bar:0.4mm

7a.コナラ節（No.108）bar:1.0mm　7b.同　bar:0.2mm　7c.同　bar:0.4mm　10a.ヤマグワ（No.115）bar:1.0mm　10b.同　bar:0.4mm　10c.同　bar:0.4mm

8a.クヌギ節（No.9）bar:1.0mm　8b.同　bar:0.2mm　8c.同　bar:0.4mm　11a.モクレン属（No.97）bar:1.0mm　11b.同　bar:0.4mm　11c.同　bar:0.4mm

9a.ケヤキ（No.37）bar:1.0mm　9b.同　bar:0.4mm　9c.同　bar:0.4mm　12a.シロダモ（No.6）bar:1.0mm　12b.同　bar:0.4mm　12c.同　bar:0.4mm

a：横断面　b：放射断面　c：接線断面

第15図　仲田遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡写真（1）

放射組織は上下端のみ直立細胞からなる異性で、しばしば上下端や多列部の縁に結晶を含む。道管と放射組織との壁孔は交互状。ケヤキは高木になる落葉広葉樹で、谷沿いや河畔の肥沃な土壌にみられ、温帯を中心に広く分布する。材質はやや重硬だが、加工は容易、割裂性は中庸で保存性に優れる。

ヤマグワ　*Morus australis* Poir.　（クワ科）　第15図10a～10c

年輪のはじめに大型（直径約150－200μm）で丸い導管が単独あるいは1－2個複合して1－2列並び、そこから徐々に径を減じて年輪界付近ではごく小型（直径約10－20μm）の角張った導管が数個～多数集合して斜上状～接線状に配列する環孔材。導管の内腔にはチローシスが認められる。導管の穿孔は単一で、木部柔細胞は周囲状。放射組織は異性で1－4列ほど、しばしば上下端の直立細胞は数個縦に連なる。導管と放射組織との壁孔はレンズ状。ヤマグワは低木～小高木の落葉広葉樹であり、適湿な向陽地に多く見られる。材質はやや重硬で靭性・従曲性・割裂性に富み、加工はやや困難、保存性は高い部類に入る。

モクレン属　*Magnolia*　（モクレン科）　第15図11a～11c

小型（直径約40－60μm）の放射方向に伸びた丸い導管が、放射方向に数個複合してやや密に分布する散孔材。導管の密度は晩材部にしばしば偏って分布し、晩材部では導管の直径はやや急に減少する。導管の穿孔は単一。導管相互壁孔は対列状～階段状。放射組織は同性に近い異性で、1－4列。モクレン属にはホオノキ *Magnolia obovata* Thunb.やキタコブシ *Magnoliab praecocissima* Koidz. var. borealis（Sargent）Koidz.などが含まれる。いずれも温帯に分布する落葉広葉樹で、山林内にみられる。材質はやや軽軟、緻密・均質な材で加工容易。

シロダモ　*Neolitsea sericea*（Bl.）Koidz.　（クスノキ科）　第15図12a～12c

小型（直径約40－50μm）で厚壁の丸みのある導管がほぼ単独時に主に放射方向に1－2個複合してややまばらに分布する散孔材。年輪界の始めと終わりでは導管の直径及び密度が小さいが、ある程度の年輪幅を持つ部分では晩材部に導管の分布密度が偏る傾向にある。導管の内腔には着色物質が認められる。木部柔細胞は周囲状となりやや目立つ。導管の穿孔はほとんど単穿孔で時に10本以内の階段穿孔となる。放射組織は異性で1－2列、直立細胞はやや大型となる。導管と放射組織との壁孔はふるい状～階段状。油細胞はほとんど認められない。シロダモは暖温帯とくに沿海地山中に普通な高木になる常緑広葉樹であるが、低木状のものも多くみられる。重さ・硬さともに中庸程度の材である。また、シロダモ以外と考えられるクスノキ科の材は詳細な同定が困難であったためクスノキ科に留めている（No.7）。

イスノキ　*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.　（マンサク科）　第16図13a～13c

小型（直径約30－40μm）でやや丸い導管が単独または1－2個複合してやや密に分布する散孔材。木繊維の壁は厚く、木部柔細胞は数列の接線状～帯状となり目立つ。導管の穿孔は間隔の広い階段状でほとんど10本以下。放射組織は異性で構成細胞の大きさが揃っており、多くはスリムな2－3列。軸方向の多室結晶細胞が顕著である。導管と放射組織との壁孔は大きなふるい状～レンズ状。イスノキは高木になる常緑広葉樹で、暖温帯中部～下部の山中にみられる。材質は日本産の樹木の中で極めて重硬な部類に属し、曲げに対する抵抗に優れ、極めて割れにくく、割裂・加工は難易である。

キハダ　*Phellodendron amurense* Rupr.　（ミカン科）　第16図14a～14c

大型（直径約200－220μm）で丸い導管が、年輪の始めにほぼ単独で2－3列ならび、その後は急速に径を減じて中型（直径約80－100μm）で丸い導管が放射方向に1－2個複合してまばらに分布し、晩材部ではごく小型（直径約10－20μm）で薄壁の角張った導管が多数集合して、斜め～接線状に帯を成す環孔材。導管の穿孔は単一で、内腔には着色物質が認められる。また導管内壁にはらせん肥厚がみられる。

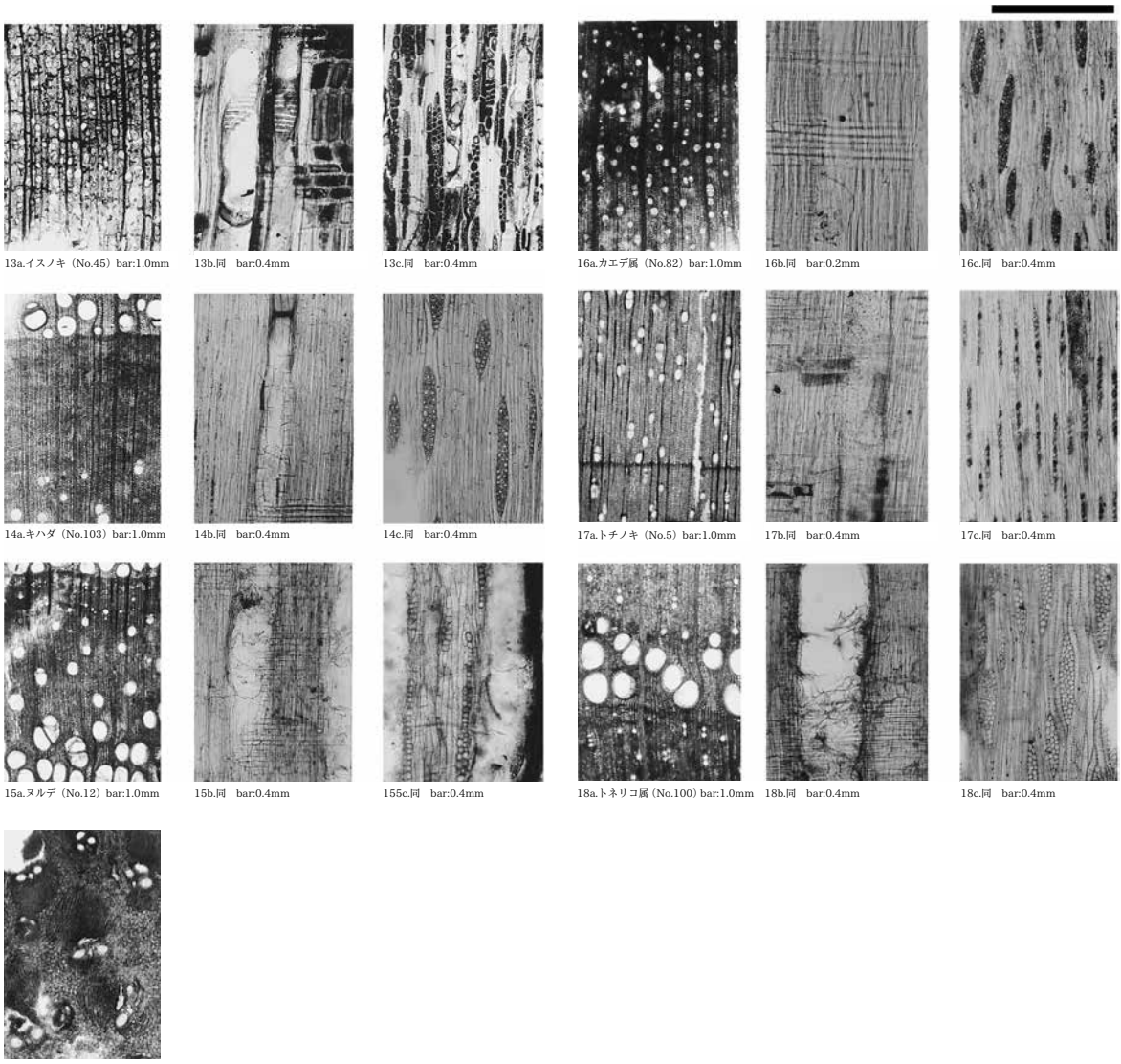
放射組織は同性で３－４列、多くの場合背は低く紡錘形を成す。キハダは高木になる落葉広葉樹で温帯に広く分布し山地林内に生育する。材質はやや軽軟で加工は容易、割裂性も良好、水湿に耐性がある。

ヌルデ　*Rhus javanica* L. var. *roxburghii*（DC.）Rehder et Wils.　（ウルシ科）　第16図15a～15c

年輪の始めに中型（直径約100－150μm）のやや丸い厚壁の導管が単独あるいは１－２個複合して２－３列並び、晩材では小型（直径約20－50μm）の単独あるいは数個集合して分布する環孔材。木部柔細胞は晩材部でななめ～接線方向に連なった帯状となる。導管の穿孔は単一で、内腔にはチローシスが認められる。放射組織は異性で１－３列、いびつである。ヌルデは小高木になる落葉広葉樹で、山野の林縁などや明るく開けた立地にみられる。材質は重さ・硬さ・強さ概して中庸、保存性はやや低い。

カエデ属　*Acer*　（カエデ科）　第16図16a～16c

小型（直径約40－60μm）で丸い導管が、単独あるいは放射方向に２－３個複合して、ほぼ均一に分布する散孔材。導管の直径は年輪の始めと終わりで小さく、その中ほどで大きくなる傾向にある。導管の穿孔は単一で、内腔にはしばしばゴム状の物質が詰まっており、またらせん肥厚も認められる。木繊維の壁



第16図　仲田遺跡出土木製品切片の光学顕微鏡写真（2） a：横断面　b：放射断面　c：接線断面

厚の相違は、横断面で紋様となって確認される。放射組織は同性で、１－６列ほど。木繊維の壁厚の相違は、横断面で紋様となって確認される。カエデ属には多くの種が含まれているが、一部の種を除けば多くが渓畔・河畔・丘陵などで主に亜高木層を形成する。材質は概して強硬で緻密、粘りも有しており、割れにくく加工はやや困難。

トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　（トチノキ科）　第16図17a～17c

小型（直径約50－70μm）で丸い導管が、単独もしくは放射方向に数個複合してやや密に分布する散孔材。年輪の始めと終わりでは導管の直径及び密度が小さい傾向にある。導管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は単列同性、層階状に配列する。導管と放射組織との壁孔は蜂の巣状。トチノキは高木になる落葉広葉樹で、温帯の河畔や渓畔にみられる。材質は軽軟で加工・割裂は容易だが、保存性は低い。

トネリコ属　*Fraxinus*　（モクセイ科）　第16図18a～18c

年輪の始めに中型（直径約120－150μm）の丸い導管が、単独あるいは１－２個複合して２列ほど配列し、そこから急激に径を減じて晩材部ではごく小型（直径約10－30μm）で厚壁の丸い導管がしばしば放射方向に数個複合してまばらに分布する環孔材。導管の穿孔は単一で、内腔にはチローシスが認められる。放射組織は同性で１－４列。トネリコ属にはやや乾燥した立地に生育するマルバアオダモ *Fraxinus sieboldiana* Blumeや、適湿な立地に生育するヤチダモ *Fraxinus mandshurica* Rupr. var. *japonica* Maxim.などが含まれる。材質は重硬で粘り強い。

タケ亜科　Subfam.Bambusoideae　（イネ科）　第16図19a

一対の導管を挟んで原生木部間隙と篩部が位置する維管束があり、周囲を扇形に取り囲んだ維管束鞘の厚壁組織が取り囲んでおり、こうした維管束が柔組織の中に散在するのが認められる。

考　　察

比較的点数の多い製品別にその樹種構成をみると、まず椀にはブナ属・ケヤキ・トチノキといった回転成形に適する均質な材が見いだされている。これらの樹種は日本における椀の用材として典型的なもので、県内の中世の遺跡においても類例がある。木取りはすべて製品の幅を大きく取れるという利点のある横木取りである。それ以外にも、挽物・刳物の類では皿にブナ属・ケヤキ、盤とみられる製品にはトチノキが用いられており、典型的である。

櫛にはすべてイスノキが用いられており、こちらも典型的である。イスノキは日本産の木材の中でも最も重硬な部類の材で、また曲げに対する抵抗性があり極めて割れにくく、櫛の用材として優れている。木取りも割れにくいよう繊維方向が刃先にくるようにした縦木取りとなっている。県内では上越市八反田遺跡などで櫛にイスノキが見出されている。

曲物側板にはスギとヒノキといった通直で軽軟な針葉樹材が用いられている。割裂性が良く薄板を挽くのに適し、また従曲性がある材特性から選択されたと考えられ、木取りも薄板の製作に適する柾目取りとなっている。曲物底板にも同様にスギ・ヒノキが見出されているが、木取りは板目のものと柾目のものがあるが、板目のものについては強度に配慮した製作がなされた可能性がある。

その他の製品では、コモヅチにクリ・ブナ属といった比較的重い材質のものが、浮子（有頭状木製品）には軽い材質のスギが用いられている。また毬打にはクヌギ節、槌にはコナラ節・ヌルデといった強度を有する材が用いられている。いずれもこれらの木製品の使用法を考慮すれば納得のいく樹種選択が成され

ていると指摘できよう。錐には軽軟なヤナギ属の材が用いられており、鉄芯を通しやすいことから選択されたものと推察される。箸・箆・扇などにはスギが広く用いられており、曲物と同様に板材から製作される製品に多い。これは、すでに述べた通りスギが通直で割裂性に優れる材特性を有することのほか、周辺に身近な樹種であったことも背景として想定される。

柱根にはクリ・コナラ節が多く、その他トネリコ属・キハダ・ヤマグワといった樹種も見出されている。これらは小高木または高木になる樹種であり大径が得やすく、また材質も重硬で強靱であるものが多い。県内における奈良・平安時代や中世の遺跡での柱根の樹種同定は比較的行われており、その結果多くの遺跡でクリが多用されており、またトネリコ属やヤマグワが多用されている例もある。したがって同様にやはり重硬な部類の材質でかつ大径の得やすい樹種が選択されているといえ、本遺跡の結果もこれらの遺跡の結果と共通性を有するものである。

また、現在の植物分布からみて注目すべき点は、関東以西に分布しないイスノキが櫛に見出されたことと、およそ中部以北の日本海側には分布しないヒノキが曲物に見出されたことが挙げられる。このような類例は県内の遺跡でも確認されており、上越市八反田遺跡では櫛にイスノキが、中条町蔵ノ坪遺跡では合子に新潟県内にはほとんど分布しないツゲがそれぞれみいだされている。ヒノキに関しては柿崎町新保遺跡において折敷や箸に 、和島村奈良崎遺跡において箸や杓子などに、和島村大武遺跡において曲物・指物・下駄などにそれぞれ用いられている例がある。これらの樹種は職人が誕生したとされる時代以前には報告例がないことを考慮すれば、これらの樹種が見出された背景には木材の流通あるいは製品そのものが流通していたことが想定される。他に地域的な要因や遺跡の性格に関わっている可能性もあり、今後検討を要するものであろう。

今回得られた結果は製品別の樹種の使い分けが非常に明瞭で、製品の使用法や製作過程において要求される材質によりその樹種が決定されていることが推察される。スギは用途が広く、生活関連の木製品に多用されており、身近な材であったことが類推される一方、扇・櫛・曲物の一部には現地生とは考え難い樹種が検出されており、木材あるいは製品自体が搬入されていたことが示唆される。

2　仲田遺跡から出土した大型植物化石

新山雅広（パレオ・ラボ）

試　　料

大型植物化石の検討は、既に取り上げ済みでタッパーないし袋に保存された合計15試料について行った。なお、SE216、SE234については、同じ遺構名の付いた試料が複数あったため、便宜的にa、b、cの枝番号を付けた。

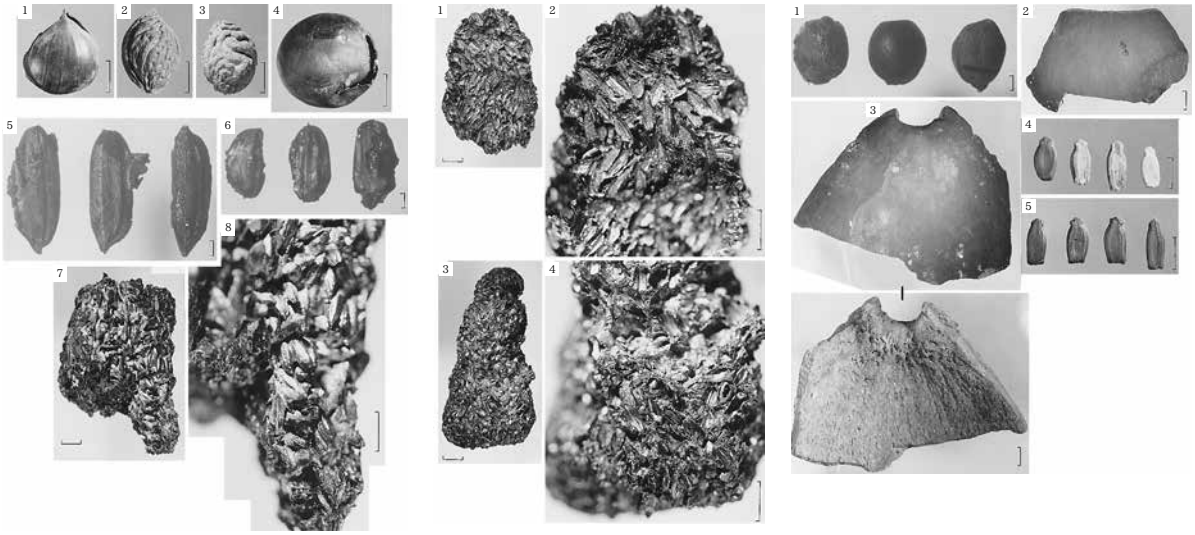
考　　察

出土した大型植物化石の一覧を第２表に示した。出土した分類群は、木本がクリ、モモ、トチノキ、草本がイネ、アサ、ヒョウタン仲間である。これらのうち、

遺構名	クリ	モモ	トチノキ	イネ	アサ	ヒョウタン仲間	
	果実	核	種子	炭化頴果塊	炭化種子	果実	種子
SE134				大塊　2			
SE138			1				
SE216-a					354（9）		
SE216-b						（27）	
SE216-c	1						
SE223						（46）	
SE234-a				小塊　14			
SE234-b				大塊　2			
SE234-c				大塊　4			
SE236		1					
SE265						（65）	
SE266							298（8）
SE918						（14）	
SD201							61（7）
SK21		1					

※数字は個数、（）内は破片の数を示す

第２表　大型植物化石一覧表



1.クリ、果実、SE216　2.モモ、核、SE236　3.モモ、核、SK21　4.トチノキ、種子、SE138　5.イネ、炭化頴果、SE134　6.イネ、炭化胚乳、SE234　7.イネ、炭化頴果塊、SE134　8.イネ、炭化頴果塊（7.下方拡大）、SE134
※スケールは1～4・7・8が1cm、5・6が1mm

1.イネ、炭化頴果塊、SE234　2.イネ、炭化頴果塊（1.上方拡大）、SE234　3.イネ、炭化頴果塊、SE234　4.イネ、炭化頴果塊（3.下方拡大）、SE234
※スケールは1cm

1.アサ、炭化種子、SE216　2.ヒョウタン仲間、果実（果皮片）、SE223　3.ヒョウタン仲間、果実（果皮片）、SE265　4.ヒョウタン仲間、種子、SD201　5.ヒョウタン仲間、種子、SE266
※スケールは1が1mm、2～5が1cm

第17図　出土した大型植物化石

モモ、イネ、アサ、ヒョウタン仲間は、栽培植物であり、クリ、トチノキは食用となる有用植物である。イネは、SE134、SE234で出土したが、いずれも炭化頴果（籾）が塊状に集合したものであり、あまり発泡はしておらず、良好な保存状態であった。胚乳の集合ではなく、頴果の集合であることから、調理に関連したものではなく、貯蔵などされていたものが炭化したのではないだろうか。ヒョウタン仲間は、果実（果皮片）がSE216、SE223、SE265、SE918で、種子がSE266、SD201で出土した。水に関連する祭祀的な意味合いで沈められたことや、井戸として機能しなくなって埋め戻しの際に投棄されたことなどが予想される。

3　花粉分析

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

試　　料

川跡SX204（第24図左上）より採取された9試料（試料番号1～9）と、それを切るSD201底部の1試料（試料番号10）である。

分析方法

試料（湿重約3～4g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。また、花粉化石の単体標

本を適宜作成し、各々にPLC.SS番号を付し形態観察用及び保存用とした。

分析結果

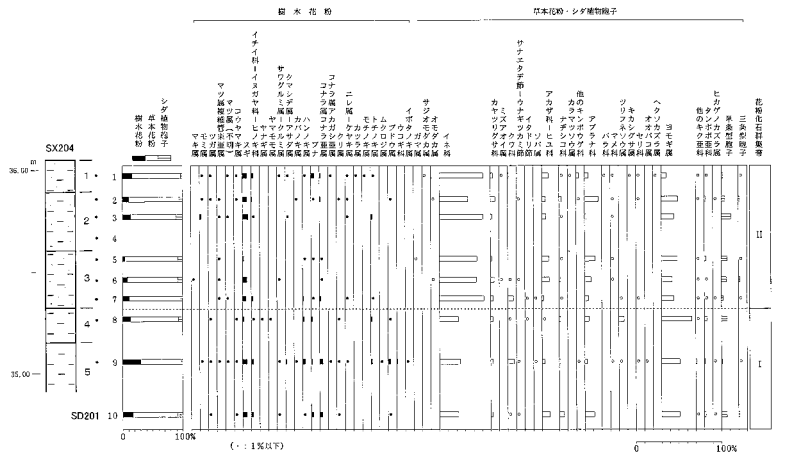
検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉26、草本花粉25、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計54である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を第3表に、それらの分布を第18図に示したが、全体に花粉化石の産出量は少なく、特に少なかった試料4については分布図としては示せなかった。なお、分布図は全花粉・胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、表及び図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示している。

上記したように花粉化石の産出量は少なく、作成したプレパラート全面について検鏡したが目標とした500個体に達したのは試料1のみであった。観察の結果、試料によりイネ科花粉やヨモギ属に明らかな相違が認められたことから、花粉化石群集帯Ⅰ・Ⅱを設定し、その特徴について記

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
樹木											
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	1	1	2	-	-	-	-	-	2	-
ツガ属	*Tsuga*	2	3	-	1	-	-	-	1	3	2
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	1	1	1	1	1	1	-	1	-
マツ属（不明）	*Pinus*（Unknown）	1	-	1	-	-	-	1	-	1	-
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	3	1	-	-	-	-	-	1	1	1
スギ	*Cryptomeria japonica* D. Don	32	18	8	-	2	6	10	2	17	11
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.-C.	18	4	1	-	-	-	5	1	9	6
ヤナギ属	*Salix*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	2	-	-	-	-	1	-	-	2	1
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus-Ostrya*	2	-	1	-	-	-	-	-	4	-
カバノキ属	*Betula*	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-
ハンノキ属	*Alnus*	2	-	-	-	1	-	3	2	11	1
ブナ	*Fagus crenata* Blume	23	1	-	-	1	-	2	2	6	6
コナラ属コナラ亜属	Quercus subgen. *Lepidobalanus*	9	4	-	-	1	1	5	-	13	7
コナラ属アカガシ亜属	Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	1	-	-	-	-	-	-	-	3	-
クリ属	*Castanea*	-	2	-	1	-	-	-	1	2	2
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus-Zelkova*	5	2	1	-	-	-	1	-	1	-
カツラ属	*Cercidiphyllum*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	*Ilex*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属	*Aesculus*	2	-	2	-	-	-	1	2	6	-
ムクロジ属	*Sapindus*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ブドウ属	*Vitis*	-	1	-	1	-	-	-	1	10	2
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-
草本											
ガマ属	*Typha*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
サジオモダカ属	*Alisma*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	13	1	-	-	-	1	-	-	-	-
イネ科	*Gramineae*	339	123	64	18	66	52	137	26	82	51
カヤツリグサ科	*Cyperaceae*	17	20	2	-	2	5	8	3	10	5
ミズアオイ属	*Monochoria*	4	-	-	-	-	1	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	7	-	-	-	-	1	17	1	25	1
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	8	1	-	-	-	1	-	-	1	1
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	51	15	6	4	12	11	5	1	11	21
ナデシコ科	Caryophyllaceae	4	11	1	1	1	2	2	2	5	13
カラマツソウ属	*Thalictrum*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	19	2	-	-	-	-	-	-	1	-
アブラナ科	Cruciferae	28	59	2	5	18	9	12	6	8	26
バラ科	Rosaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
マメ科	Leguminosae	1	1	1	-	1	1	-	-	1	-
ツリフネソウ属	*Impatiens*	-	-	-	-	-	-	1	7	1	-
キカシグサ属	*Rotala*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	2	1	-	-	-	-	1	-	2	-
オオバコ属	*Plantago*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ヘクソカズラ属	*Paederia*	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	37	70	18	17	28	15	37	41	73	49
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	1	-	-	1	1	1	1	4	2
タンポポ亜科	Liguliflorae	3	6	-	4	3	1	2	4	4	4
シダ植物											
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	1	-	-	-	-	1	-	1	2
単条型胞子	Monolete spore	14	16	14	24	10	7	5	8	4	15
三条型胞子	Trilete spore	3	5	-	1	1	2	2	-	3	3
樹木花粉	Arboreal pollen	105	39	17	4	6	10	29	15	102	39
草本花粉	Nonarboreal pollen	539	311	94	49	133	101	225	93	231	173
シダ植物胞子	Spores	17	22	14	25	11	9	8	8	8	20
花粉・胞子総数	Total Pollen ＆ Spores	661	372	125	78	150	120	262	116	341	232
不明花粉	Unknown Pollen	34	16	11	4	5	2	12	13	30	17

T.-C.はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

第３表　産出花粉化石一覧表



※出現率は全花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した

第18図　仲田遺跡SX204・SD201遺構の花粉化石分布図

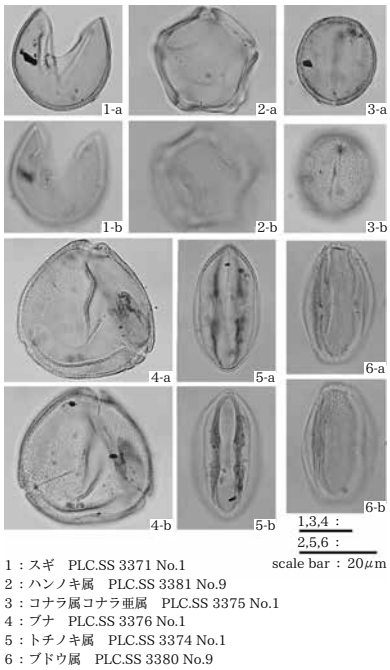
す。

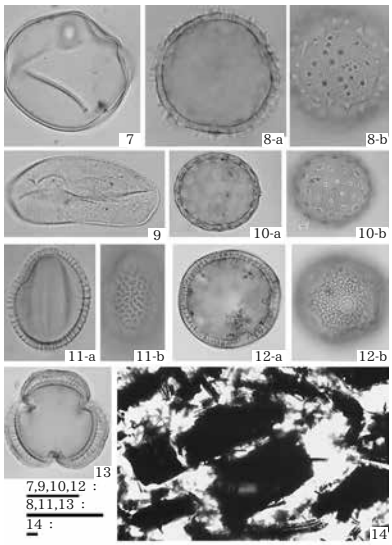
花粉帯Ⅰ（試料８～10）はイネ科とヨモギ属の高率出現で特徴づけられ、そのうちヨモギ属は試料８において35％に達している。その他試料10においてアカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科が試料８・９よりやや高い出現率を示している。また試料９より傷んでいるもののソバ属が２個体観察されている。樹木類では出現率が５％を越える分類群は無く、スギとブナの２分類群のみが全試料１％以上を示している。その他イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属などが若干検出されている。

花粉帯Ⅱ（試料１～７）は50％前後の出現率を示すイネ科の高率出現で特徴づけられる。ヨモギ属は15％前後とやや率を下げており、アカザ科－ヒユ科やアブラナ科はⅠ帯に比べやや目立って検出されている。また本帯では水生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属（いずれも抽水植物）がわずかではあるが観察されている。その他試料７よりやはり傷んだ状態のソバ属が１個体検出されている。少ない木本類のなかでは５％前後を示すスギが最も多く、その他ヒノキ類、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属などが若干検出されている。

なお、作成したプレパラート中には非常に多量な炭片や少量の未炭化の植物遺体が混入しており、花粉化石１個体に対する計数を試みたが、膨大な数になり計数しきれなかった。また炭片量比については試料１が約90％、２・３・５・７が95％、４・６がほぼ100％、８が約50％、10が約30％であった。

また図表には示していないが試料２・３・７・９・10より寄生虫卵（回虫卵と鞭虫卵）が若干ではあるが観察されている。そのうち試料３においてはやや目立って認められ、試料３においてはイネ科，ヨモギ属に次いでいると思われる。





第19図　仲田遺跡の花粉分析

遺跡周辺の古植生

イネ科花粉が多くの割合を占め、プラント・オパール分析において大量のイネの機動細胞珪酸体が観察されている。また水生植物が花粉帯Ⅱより得られ、そのうちサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属は水田内に雑草（水田雑草）として普通にみられる分類群である。こうしたことから仲田遺跡周辺においては水田の存在が推測され、その土壌が一部混入しているものと思われる。

栽培植物について上記イネの他に若干ではあるがソバ属が検出されている。またアブラナ科も試料２では約16％と虫媒花としてはやや高い出現率を示しており、遺跡周辺でこれらが栽培されていた可能性があるように思われる。すなわちソバやアブラナ科などが栽培される畑の存在も推測されよう。その他では

ヨモギ属が多く検出されており、上記水田や畑、住居などの周辺にヨモギ属を主体にアカザ科－ヒユ科、タンポポ亜科などの雑草類が多く生育していた。

樹木類についてみると、スギが少ないなか比較的安定して検出されていることから、遺跡周辺丘陵部の斜面部を中心にスギ林が形成されていたとみられる。この斜面部には同じ針葉樹のヒノキ類も生育していたとみられ、落葉広葉樹のコナラ亜属やトチノキ属も一部に分布していたであろう。またこれら樹木に絡まるようにブドウ属も生育していた。なお低率ながらブナも多くの試料から検出されている。新潟県のブナ林は標高100～200ｍからおよそ1,400～1,700ｍの範囲に分布している。本遺跡は標高40m弱のところに立地していることから、遺跡周辺丘陵部においても生育していた可能性はあるものの大きな林分としてはさらに周囲のやや標高の高い山地部に広げていたのであろう。

寄生虫卵について

先にも記したが半数の試料から回虫卵や鞭虫卵といった寄生虫卵が検出された。この寄生虫卵について、試料1cc中に1,000個認められることにより糞便の混入、すなわちトイレの可能性が考えられる。今回の試料ではそうした個数にははるかに及ばないと思われる。今回検出された回虫卵や鞭虫卵は野菜をとおして摂取されるもので、上記した栽培が推測されるアブラナ科の野菜？とともに遺構内に混入したことも考えられる。また施肥として畑などに糞便が利用され、水田土壌のように遺構内に混入した可能性もあるように思われる。このように遺構の性格とともに寄生虫卵についてはさらに検討が必要であろう。

4　仲田遺跡のプラント・オパール

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

試　　料

川跡SX204（第24図左上）より採取された９試料（試料番号１～９）と、それを切るSD201底部の１試料（試料番号10）である。

分析方法

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40μｍ）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10μｍ以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定及び計数は機動細胞珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（第４表）、それらの分布を第20図に示した。以下に示す各分類群の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、全試料よりイネのプラント・オパール（機動細胞珪酸体）が非常に多く検出されており、上

試料番号	イネ（個/g）	イネ穎部破片（個/g）	ネザサ節型（個/g）	クマザサ属型（個/g）	他のタケ亜科（個/g）	ヨシ属（個/g）	シバ属（個/g）	キビ族（個/g）	ウシクサ族（個/g）	不明（個/g）
1	140,700	287,200	1,500	14,700	1,500	5,900	0	8,800	16,100	13,200
2	105,700	174,600	0	6,100	1,500	6,100	1,500	1,500	30,600	15,300
3	205,600	406,000	1,700	8,600	1,700	39,400	0	15,400	32,500	27,400
4	146,700	1,073,400	0	10,700	0	16,100	0	8,900	16,100	21,500
5	209,800	296,700	0	16,300	0	5,400	0	3,600	14,500	3,600
6	353,100	1,471,400	0	17,200	0	22,100	0	2,500	14,700	17,200
7	93,300	136,000	0	4,700	1,600	15,800	0	11,100	11,100	11,100
8	34,300	93,100	2,400	29,400	2,400	66,100	0	12,200	100,400	29,400
9	10,700	10,700	0	32,100	0	0	0	1,300	2,700	2,700
10	45,700	57,100	0	20,000	1,400	15,700	0	15,700	20,000	18,600

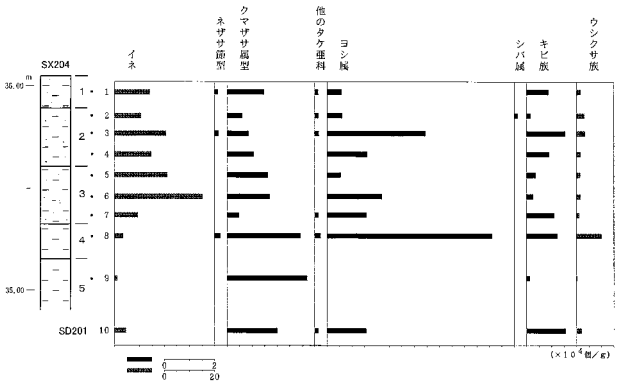
第４表　試料1g当たりのプラント・オパール個数

位６試料で100,000個を越え、試料７でも90,000個に達している。また図表には示していないがイネの穎に形成される珪酸体の破片が全試料でさらに多く観察されている。さらにイネと思われる単細胞珪酸体が連なった状態で多く認められる（ともに第21図参照）。

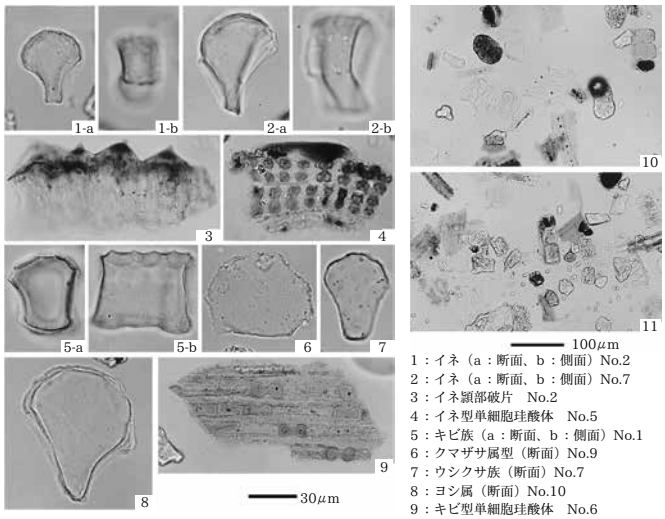
イネ以外ではウシクサ族が多く、試料８では100,000個を越えている。ヨシ属は多くの試料で10,000個以上と珪酸体の形成量の少ないヨシ属にしては非常に多く、試料８では70,000個近くに達している。やはり生産量の少ないキビ族も10,000個前後と比較的多く得られている。クマザサ属型も多くの試料で10,000個を越え、SX204では上位に向かい減少する傾向がみられる。その他ネザサ節型やシバ属が若干観察されている。

考　　察

上記したように、全試料よりイネの機動細胞珪酸体が非常に多く検出され、連なった状態のものも多く認められる。これはイネだけではなく、ヨシ属やウシクサ族にも認められ、キビ族も比較的多く得られている。またイネの穎に形成される珪酸体の破片がさらに多く観察されている。こうした観察結果に加えプラント・オパール分析の際に絶対乾燥重量を測定した乾燥試料６において、灰と判断される白色や黒色の針状遺体が観察された。少なくともイネ科植物は完全に灰化されると灰白色化するもので、土層観察で認められている灰白色シルトブロックや黒色のシルトブロックはこうしたものではないかと思われる。以上のことからSX204の埋積土はイネを主体にヨシ属やウシクサ族、キビ族などの灰や灰化しきれなかった炭片が多量に混入していると推測され、SX204は灰などを廃棄したところではないかと思われる。



第20図　SX204・SD201遺構のプラント・オパール分布図



1：イネ（a：断面、b：側面）No.2
2：イネ（a：断面、b：側面）No.7
3：イネ穎部破片　No.2
4：イネ型単細胞珪酸体　No.5
5：キビ族（a：断面、b：側面）No.1
6：クマザサ属型（断面）No.9
7：ウシクサ族（断面）No.7
8：ヨシ属（断面）No.10
9：キビ型単細胞珪酸体　No.6
10：プレパラートの状況　No.4
11：プレパラートの状況　No.6

第21図　仲田遺跡のプラント・オパール

第Ⅶ章　ま　と　め

1　集落の変遷

今回の発掘調査の結果、仲田遺跡が川縁に営まれた中世集落（11世紀後半～13世紀・15世紀）であることが明らかになった。特に、中世前期の集落は、県内でも調査事例が稀有な時期であり注目される。さらに第Ⅳ章で記述したとおり、掘立柱建物及び溝の主軸方向・切り合い関係・出土遺物・覆土の分類等の検討から、中世集落をⅠ期～Ⅳ期に区分することができた。時期ごとの遺構分布をみると、基本的には掘立柱建物と井戸が重複しない傾向が認められ、時期区分にある程度の蓋然性を見出せた。ここでは、各期の概要と変遷観をまとめたい。

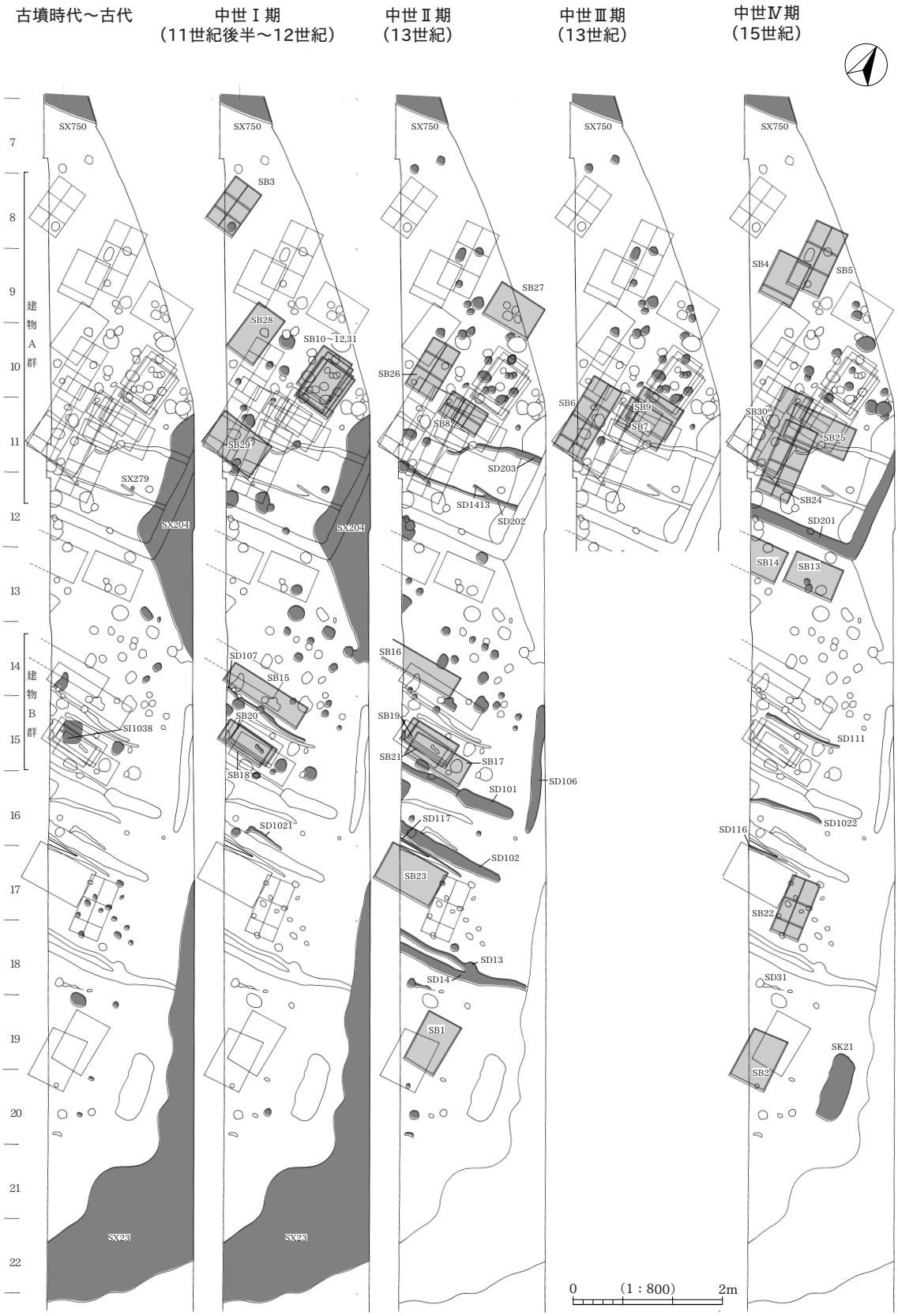
中世Ⅰ期（11世紀後半～12世紀）

掘立柱建物の主軸方向は真北から4°～7°西偏する段階で、溝は建物と平行または直交するように構築される。遺構覆土最上層は黒色または黒褐色シルトである。この段階の遺構からは、11世紀後半～12世紀の遺物が出土しているが12世紀が主体である。Ⅰ期では、川跡は完全に埋没しておらず、浅くなっているものの機能していたと考えられる。該当する遺構は、掘立柱建物10棟・井戸25基・土坑14基・溝2条がある。

遺構の分布は、川跡の西側ほぼ全域で認められるが、特に建物Ａ・Ｂ群とその周辺に集中する。建物Ａ群で7棟、建物Ｂ群で3棟である。建物Ａ群で特筆すべき点は、SB28・SB29・SB31の位置関係である。SB29（側柱）は桁行2間以上・梁間2間の建物である。桁行方向の柱穴間隔は2.8mであり、他の建物の形態を考慮すれば1間延伸する可能性が高い。1間（2.8m）分を西側に延長すると西側梁間の柱筋と、北側約7mに位置するSB28（側柱）の東側桁行の柱筋とがほぼ合致する。SB28とSB31（側柱）は北・南側梁間の柱筋がほぼ合致する。この3棟の建物間隔を見るとSB29とSB28・31の間隔は約7.0m、SB28とSB29の間隔は約6.9mであり、3棟はほぼ同じ距離間を保っていた。以上のことを勘案すると、3か所に分布する建物（SB10～12・28・29・31）の配置には規則性を窺うことができる。

また、SB10～12・31は4棟の建物が重複しているが、構造や規模により2種類に分類できる。SB11・31（側柱）は、若干規模が異なるものの3間×2間で、梁間の中間柱が東の桁行側に偏るという共通性がある（第22図）。構造上共通するSB11・31の重複は、前後関係は不明であるものの、連続する建替えを反映している可能性がある。SB10・12（側柱）も、構造が類似しており同様の指摘ができる。このことから、建物の構造に相違が認められるものの、一定の範囲で同程度の建物が、4回以上建替えられていることを指摘できる。建物Ｂ群は、梁間に対して桁行が長く、梁間は1間に統一されている特徴をもち、建物Ａ群とは明らかに構造を異にする。SB18・20は、構造が共通する建物が重複して分布する。

井戸は、建物Ｂ群及びその周辺と建物Ａ群の2か所に纏まっており、特にＢ群は建物の北側に集中する。Ａ群では「コ」の字に配置された建物によって作出された空間とSB29の東・南側に位置する。20列に位置するSE18の周辺にはこの段階に属する遺構が全く検出されていない。井戸が単独で存在していたと考えれば、この段階の集落の範囲は南側に関して言えば16列付近を境に集落の端と判断できる。し


古墳時代～古代
中世Ⅰ期
（11世紀後半～12世紀）
中世Ⅱ期
（13世紀）
中世Ⅲ期
（13世紀）
中世Ⅳ期
（15世紀）
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
建物A群
建物B群
SX750
SX279
SX204
SX28
SI1038
SB3
SB28
SB10～12,31
SB29
SB27
SB26
SB8
SD203
SD1413
SD202
SB6
SB9
SB7
SB4
SB5
SB30
SB25
SB24
SD201
SB14
SB13
SD107
SB15
SB20
SB18
SD1021
SB16
SB19
SB21
SB17
SD101
SD106
SD117
SD102
SB23
SD13
SD14
SB1
SD111
SD1022
SD116
SB22
SD31
SK21
SB2
0
(1：800)
2m

第22図　集落の変遷

かし、建物に伴うものという判断にのっとれば、南西・西方向に建物が展開されている可能性が考えられ、集落は調査区西側に延びている可能性がある。土坑の分布は、ほぼ井戸と同じである。特に、直径が大きく深さが浅い大型のものは、建物と隣接しているもの（SK112・193・237・276・999）と、建物からある一定の距離をおき単独で存在（SK118・217）するものがある。

中世Ⅱ・Ⅲ期（13世紀）

掘立柱建物の主軸がほぼ真北を示す段階で、溝は建物と平行または直交するように構築される。遺構覆土最上層は暗褐色シルトである。この段階の遺構からは、13世紀の遺物が出土している。川跡はほぼ埋没したものの、北東側は低地であったと考えられる。大きく１時期として捉えることができるものの、建物Ａ群における切り合い関係から時期を細分することが可能であった。また、Ⅳ期に共通する構造の建物を後出的なものと判断され、それが切り合い関係と合致したことからⅡ期とⅢ期に細分した。

中世Ⅱ期に該当する遺構は、掘立柱建物跡９棟・杭列２条・井戸40基・土坑21基・溝10条である。分布は、川跡の西側ほぼ全域で認められるが、建物Ａ・Ｂ群に集中する。掘立柱建物は、建物Ａ群で３棟、建物Ｂ群で４棟、17列で１棟、19列で１棟検出されている。Ｉ期で建物が検出されなかった調査区南側からも建物が検出され、利用空間が拡大されたものと考えられる。

建物Ａ群で特筆すべき点は、SB８・SB26・SB27の配置関係である。SB26（総柱）の桁行東側の柱筋とSB27（側柱）の梁間西側の柱筋がほぼ一致し、またSB26とSB8（総柱）は柱筋が通らないが1.8mの距離を置いて並列する。３棟の建物は、Ｉ期と同様に東側が開口する「コ」の字状に配置されている。Ｉ期では総柱建物１棟に対して側柱建物が３棟（建替えを含めると６棟）であったものが、Ⅱ期では総柱建物が２棟・側柱建物が１棟という構成となり、異なる様相が認められる。建物Ｂ群で検出された４棟は、Ｉ期の構造を継続しており、梁間に対して桁行が間延びした建物に限定されている。

溝は、SB17・19・21の南側桁行と平行するように規模の大きな溝（SD101）が認められる。建物の位置関係からSB17に付随する溝と考えられる。また、SB23の北側桁行の脇にも並行する２条の溝（SD117･102）が検出されている。SD13・14は、建物との関係が不明であるが、規模・形態・主軸方向がSD101・102と共通することから当期に位置付けた。なお、SD101とSD102の間にも建物の存在が想定されるが、ピットの分布は散在的であり、掘立柱建物を認識することはできなかった。

井戸は、Ｉ期と同様、建物Ａ群・建物Ｂ群とその周辺の２か所に纏まっている。建物Ａ群では、「コ」の字に配置された建物によって形成される空間とその周辺に集中する。Ｂ群では、建物の北側に集中しており、Ｉ期と同様の傾向が認められる。土坑は、井戸の分布とほぼ同じ様相を呈する。中でも、直径が大きく深さが浅い大型のものは、建物Ｂ群の建物に隣接するように位置することが特徴的である。

中世Ⅲ期に該当する遺構は、掘立柱建物３棟のほか、井戸・土坑も存在するがⅡ期と区別することができなかった。建物Ａ群で特筆すべき点は、SB6・７・９の位置関係である。SB6（総柱）の北妻側の柱筋とSB７（側柱）の北側桁行の柱筋はほぼ合致する。両者は1.5mの間隔を保ちながら「L」字状に位置し、配置に計画性が想定される。SB７と重複するSB９（側柱）は、梁間の間数が異なるほかは規模・棟方向・桁行間数・西側の張出し部といった構造が共通する。前後関係は不明であるが建替えの結果と考えられる。

中世Ⅳ期（15世紀）

掘立柱建物及び溝の主軸方向が真北から５°～７°東偏する段階で、遺構覆土は地山ブロックを主体とする特徴的なものである。この段階の遺構からは、15世紀の遺物が出土している。また、Ⅲ期とⅣ期の中間に位置付けられる14世紀の遺物は出土していない。14世紀には焼山噴火に伴う自然災害の影響を受けた可能性が高く、集落の断絶はそのことと関係するかもしれない。該当する遺構は、掘立柱建物９棟・井戸17基・土坑１基・溝４条・方形竪穴状遺構１基である。遺構はほぼ全域に分布するが、特に建物Ａ群に集中する。掘立柱建物はSD201の区画内で５棟、区画外の13列で２棟、17・19列で各１棟検出されている。なお、Ⅰ～Ⅲ期にかけて継続的する建物Ｂ群には、該当する建物を認めることはできなかった。

Ⅳ期においてまず特筆すべきことは、断面「V」字・平面「L」字の区画溝（SD201）の存在である。Ⅰ期～Ⅲ期の溝とは規模・構造が異なり、「溝」というよりは「堀」とすべきかもしれない。この区画内からは、同時期と判断される掘立柱建物が検出されている。溝が建物群を区画する事例が顕著になる時期［坂井1997］に相当するが、そのことを実態的に把握できる。建物の構成は、側柱建物が３棟・総柱建物が２棟で、SB25を除けば全て東西棟である。建物の分布は南西側（11・12列）に位置するSB24・25・30と、９列に位置するSB4・５に二分され、この建物間に井戸13基が集中する。また、Ⅰ～Ⅲ期までは素掘りの井戸のみであったが、Ⅳ期では石組井戸２基（SB219・247）が認められた。特に、SE219はSE211・267を切っており、石組井戸に後出的な要素を見出せる。土坑は、本期のものは認められなかった。

また、屋敷の南東角付近には区画溝と建物（SB24・25・30）によって仕切られた空白域が認められる。重複するこの３棟は並存したわけではなく、各建物により作出される空白域はそれぞれ異なる。しかし、一定の範囲を継続的に空白域としている状況は注目されよう。また、溝底部からの遺物・焼礫の出土は、この周辺（南東隅）に限定されており、相互の関連が想定される。

SD201による区画の外では、遺構が散在的に認められる。掘立柱建物は、側柱建物が３棟・総柱建物が１棟である。棟方向は東西棟・南北棟とも各２棟である。13列に位置するSB13・14は、区画溝と2mほどの距離を保って平行して構築されている。特にSB13は、SD201の南北方向と東妻側の軸が合致することから、SB13･14と区画溝との関連性を指摘できる。井戸は13列から２基検出された。SB13と切り合い関係にあるが新旧関係は不明である。溝は、15～17列で３条（SD111・116・1022）が検出された。溝は、幅が狭く浅いものであり、一定の間隔を保って並列する。溝間にはピットが認められ建物が存在した可能性を残すが、その分布は散在的であり、その可能性は低い。方形竪穴状遺構（SK21）は、SX23の川縁（20列）に位置するが、この段階では川跡がほぼ埋没したものと考えられ、直接的な関係を想定することは難しい。また、西側7mに位置するSB2とほぼ並行していることから関連性を指摘できよう。

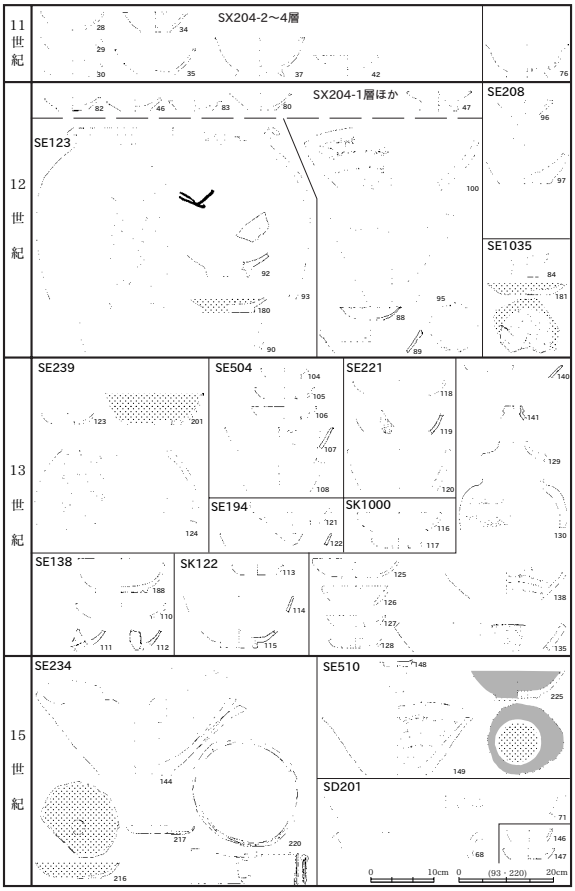
2　中世の土器・漆器

中世の土器・漆器は、主に井戸から出土した。中世土師器・珠洲焼・輸入陶磁器・漆器の共伴関係が明らかになり、編年研究に重要な情報をもたらすものと思われる。特に、珠洲焼Ⅰ期の資料が、そのような

状況で出土することは稀でであり注目される。本遺跡の遺構出土資料を、大きく11世紀・12世紀・13世紀・15世紀の資料に分類し整理した（第23図）。

11世紀の資料は、川跡SX204の2～4層出土資料に代表される。無台・有台の碗・皿が認められるが、11世紀後半を中心とするものであろう。詳細は次項で記述する。

12世紀の土器は、北陸系の土師器皿と珠洲焼Ⅰ期の資料である。ロクロ成形・回転糸切り手法による北陸系の土師器皿は、11世紀後半～12世紀前半に位置付けられるので、珠洲焼が登場する12世紀後半の資料とは一線を画すことができよう。特に、SX204の1層から出土した無台皿（46）と有台皿（47）は伝至徳寺跡SK479［笹澤・水澤2001］と共通することから12世紀前半に位置付けられる。しかし、SE208においては北陸系の土師器皿と珠洲焼が共存する状況にあった。土師器皿は覆土上部から出土であり、両者が共伴しない可能性もあるが、先述のとおり調査時の所見からすれば混入の可能性は低いと考えている。共伴関係にあるとすれば、北陸系の土師器皿が12世紀後半まで主体的でないとしても残存した可能性を指摘できる。また、この段階の土器には、土師器写しのベタ高台の漆器が共伴している。SE123では珠洲焼Ⅰ期に、SE1035では柱状高台の土師器皿に伴っている。柱状高台は、裾部が広がらない形態である。類例は、山木戸遺跡SE9出土例があり、珠洲焼Ⅰ期の鉢とともに出土している［新潟市史編さん室1994］。すなわち、両者とも珠洲焼Ⅰ期段階の資料といえ、12世紀後半に位置付けられよう。



第23図　仲田遺跡における中世の土器・漆器

13世紀の資料は、手づくねの土師器皿と珠洲焼Ⅱ・Ⅲ期の資料である。土師器皿は比較的薄手でシャープなものが多く、13世紀後葉の資料とは異質である。伝至徳寺編年と比較すれば、13世紀初頭から前葉の資料に共通性が見出されよう。また、手づくねの土師器皿は、劃花文が施された青磁を伴うケースが多いことも特徴的である。一部が珠洲焼Ⅲ期に下る可能性があるほかは、13世紀前葉を中心とする資料が多数を占めるものと考えられる。この段階の土器に伴う漆器は、ベタ高台のものとわずかに高台が作出されたものとがあり、後者には12世紀に後出する要素が見出されよう。

15世紀の土器は、珠洲焼Ⅴ期の資料である。この段階では、断面「V」字の溝や石組井戸が検出されており、遺構の充実度と比べれば遺物の数量は少ない。しかし、広く平坦に作出された口縁端面が内傾する鉢が一定量認められ、これに古瀬戸後期の天目茶碗［藤澤1991］が伴う状況にあった。両者の年代観には齟齬はない。この段階の漆器や曲物には特徴的な様相が認められる。漆器碗は、高台を有するものに限定され総赤漆のもの（225）が認められ、本遺跡における13世紀の資料とは異質である。また、15世紀に欠落するとされる小皿［春日2001］が伴うことが明らかになった点も注目される。曲物は、ヒノキ

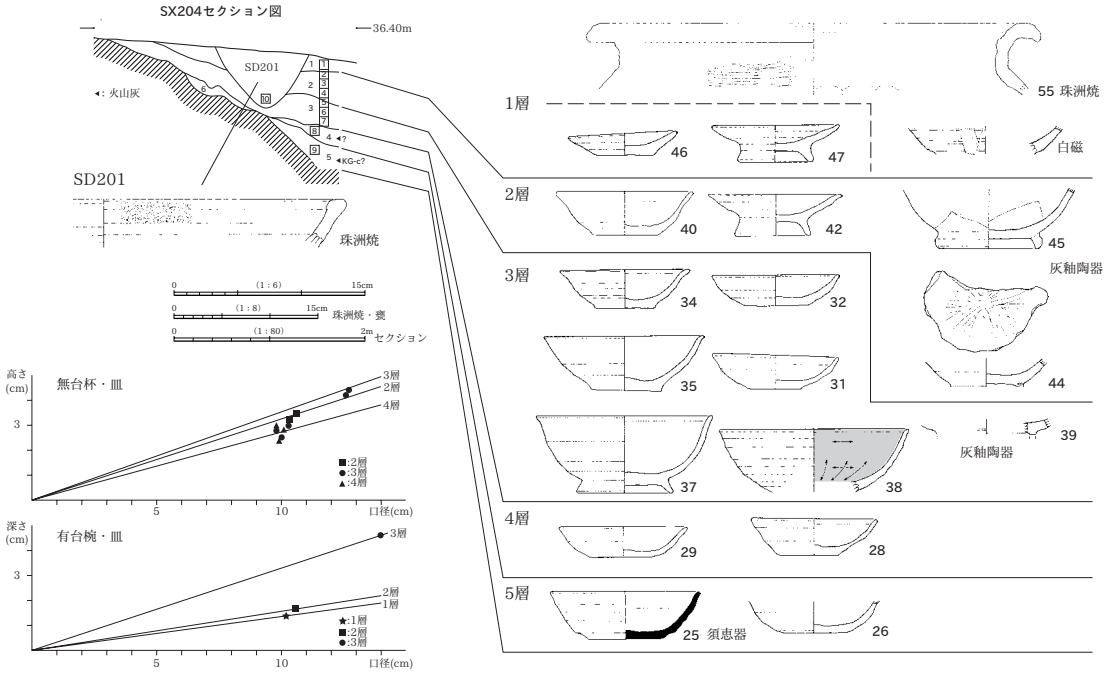
製の木釘を用いないもの（220）が、この時期に限定的に認められることも特筆される。

3　川跡SX204における遺物の層位的出土

川跡SX204においては、遺物が層位的に出土した（第24図）。1層からは、北陸系の土師器皿及び珠洲焼Ⅰ期に代表される12世紀の資料が、2～4層からは11世紀後半に位置付けられる有台・無台の土師器皿が、5層からは9世紀の須恵器杯・土師器杯が出土した。さらに1層を切るように形成されたSD201からは15世紀（珠洲焼Ⅴ期）の資料が出土した。

これらの層位的出土状況は、従来の編年観と一致する状況にあり、そのことを実態的に示す好例といえる。さらに2～4層においては、近接する時期の資料が層位的に出土しており、上位と下位とで相対的な形態差が認められた。出土位置は傾斜する川縁であり、出土状況が逆転することも予想されようが、大局的な前後関係を把握することはできる。無台皿は、最も下位の4層では浅身のもの（29・30）、上位では比較的深身のものが認められる。形態上の共通性を考えれば、浅身の無台皿が12世紀以降の形態と連続するといえようが、実際には浅身のものほど下位から出土する傾向にあった。浅い無台皿は伝至徳寺編年で11世紀前葉に位置付けられるSK477の資料［笹澤・水澤2001］にも認められ、11世紀後半より遡る可能性も指摘できる。これとは対照的に有台の皿・椀は、3層には深身の椀（37）、2層には浅身の皿（42）が特徴的に加わる。有台皿は、後出のものほど浅身であり、さらに1層出土例（47）と形態的連続性が認められる。これら形態的推移については、一ノ口遺跡東地区のSD1′における層位的出土例［鈴木・春日1994］と併せて検討することで有効性が増すことであろう。しかし、形態別構成比の変遷観をみると必ずしも一致する状況ばかりではない。

ただし、平面分布において、遺存率の高い土器類がまとまっていることには注意しなくてはならない。川跡が大きくカーブし、傾斜が急な範囲にあたる11C19・20付近のわずか2m×3mほどの範囲に集中



第24図　川跡（SX204）における遺物の層位的出土状況

する。このような状況を勘案すれば、饗宴（儀礼）に伴う土師器一括廃棄遺構である可能性があろう。しかし、SX204川縁の堆積土は、プラント・オパール分析の結果から灰を廃棄した土層である可能性が指摘されている。深さが1.5ｍ以上ある川縁を一時期に埋め戻すことは想定しにくく、徐々に埋め戻された可能性が高い。そうであれば、大きな層位の逆転は考えにくい状況にあると考えられよう。

また、４層及び５層からは火山灰が検出されている。新潟大学積雪地域災害研究センターの高濱信行氏・卜部厚志氏によれば両者は異なる火山灰とのことである。特に、５層からは多量に検出されており、焼山が約1,000年前に噴火した際、頸南地域に降下した高野池火山灰グループのKG-ｃ［早津1994］である可能性が高い。火山ガラスの化学組成を明らかにしていないため、現段階では具体的な供給源や年代は明らかでないが、遺物の層位的出土状況と併せれば今後、重要な指標になるものと考えられる。

４　木製品にみられる樹種の選択性

木製品は、形態ごとに適切な樹種選択がなされていることが明らかになったが、樹種ごとに異なる特性を把握して選択されている様子が理解された。特に、櫛にはイスノキ、漆器にはケヤキ・ブナ属・トチノキ、曲物にはスギ・ヒノキが特徴的に充てられており、このうちイスノキ・ヒノキは搬入品と考えられた。また、漆器・曲物は、樹種の選択・製作技術が年代ごとで相違しており注目される。

漆器は、土器との共伴関係や漆器自体の形態差から12・13・15世紀の資料が存在することが明らかになっており、その編年研究に重要な情報をもたらすものと考えられる。漆器の樹種は、出土した11点すべてを分析した結果、ケヤキ・ブナ属・トチノキが充てられていた。いずれも回転成形に適する均質な木材であり、合理的な樹種選択であったと理解される。ただし、本遺跡においては、年代ごとに樹種の選択が異なることが注目される。12・13世紀の漆器はすべてケヤキ、15世紀の漆器にはブナ属やトチノキが充てられていた。能登では、中世前期をとおしてケヤキ材が半分近く使用されている反面、後期ではブナ材が多くなりケヤキは後退し、トチ、サクラ、マツ、カエデなど多様な樹種の使用が認められる［松田1987］とされるが、共通する状況が理解される。そのことを一遺跡において実態的に示せたことは重要であろう。

曲物は、樹種と底板の固定方法との間に有意な関係を認めることができた。底板の固定方法には、側方から木釘を打ち込むことで固定するもの（177・203・205・236・263）と、木釘等の部材による固定具を一切用いず断面台形状の特徴的な底板を用いるもの（221・264）とがある。本遺跡においては、前者にはスギ、後者にはヒノキが充てられていた。特に、ヒノキは搬入品である可能性が高い。また、ヒノキを用いた曲物はすべて15世紀の遺物と共に出土しており、搬入の時期を限定的に捉えることができる可能性がある。年代・製作技法・素材の選択が、整合することは偶然の結果とは考えるべきではない。

要　　約

1　仲田遺跡は、頸城平野の南東端、別所川・大熊川によって作出された扇状地の末端に立地する。

2　調査は、北陸新幹線の建設に伴い、平成14年に調査を実施した。調査面積は5,100m^{2}である。

3　調査の結果、古墳時代・古代・中世の遺構・遺物が、旧小熊川の流路に沿うように検出された。

4　検出された遺構は、溝17条、掘立柱建物31棟、井戸85基、土坑59基、方形竪穴状遺構1基等である。一部が古代以前のものであるほかは、ほとんどが中世（11世紀後半～15世紀）の遺構である。掘立柱建物は、南北方向の溝と平行するように配置されていた。

5　中世集落は、掘立柱建物の主軸方向、遺構の切り合い関係、出土遺物、遺構覆土の状況から、少なくとも3～4時期にわたって形成されていることが明らかになった。特に、掘立柱建物は主軸の相違等により4期に区分された。そして、後出のものに総柱建物の大型化、張り出し部（庇）の顕在化が認められた。これらの成果は、今後の中世集落の研究に多大な情報をもたらすものと期待される。

6　多数検出された井戸の多くは素掘りであるが、15世紀に位置付けられる石組井戸2基が検出された。

7　中世の土器は、遺構内の共伴関係、川縁SX204における11世紀後半～15世紀の土器の層位的出土が注目される。特に、11世紀後半～12世紀の資料は、県内でも類例が少なく、土器の編年研究に多くの情報をもたらすものと期待される。

8　木製品は、井戸底部から多数出土した。形態ごとに異なる特性をもつ樹種が選択的に利用されていた。特に、漆器・曲物・櫛は、明らかな搬入品であり、樹種と形態の強い関連性が窺えた。また、漆器・曲物については、年代ごとに樹種の選択・製作技術が相違しており注目される。

9　古墳時代の遺物は、竪穴住居床面から7世紀後半の良好な一括資料（甕・甑・碗）が得られている。

引用参考文献

浅見惠・平野団三　1986　「中頸城郡」『日本歴史地名大系第十五巻　新潟県の地名』平凡社

荒川隆史・加藤　学　1999　『和泉A遺跡』新潟県教育委員会　新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤正一　1966　「頸南の城館跡」『頸南』新潟県文化財年報第六　新潟県教育委員会

井上鋭夫　1966　「中世の頸南」『頸南』新潟県文化財年報第六　新潟県教育委員会

植木　宏　1980　「新潟県城郭解説」『日本城郭大系』7　新人物往来社

小野正敏編　2001　『日本の中世遺跡』東京大学出版会

小村　弐ほか　1989　『角川日本地名大辞典　15新潟県』角川書店

加藤晋平　1973　「中世の石塔と城館址」『新井市史』上巻　新井市役所

春日真実　1999　「第4章　古代　2土器の編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

春日真実　2001　「柏崎市鶴巻田遺跡出土漆器の編年的位置」『新潟考古学談話会会報』23　新潟考古学談話会

小池邦明　1999　「第5章　中世・近世　2-1中世前期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会

駒形敏朗　1987　『三貫梨遺跡－第2次発掘調査－』長岡市教育委員会

駒形敏朗ほか　1998　『中道遺跡』長岡市教育委員会

坂井秀弥　1982　『栗原遺跡4次・5次発掘調査報告書』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1983　『栗原遺跡6次発掘調査報告書』新潟県教育委員会

坂井秀弥ほか　1984　『今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1985　「頸城平野古代・中世開発史の一考察－頸城村を中心にして－」『新潟史学』18　新潟史学会
坂井秀弥ほか 1986　『新井市坪ノ内館跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥ほか 1987　『番場遺跡』新潟県教育委員会
坂井秀弥　1997　「中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房
笹澤正史・水澤幸一　2001　「伝至徳寺跡の遺物様相～中世前半を中心として～」『上越市史研究』6　上越市
品田高志　1991a　「越後における古代・中世の漆器－漆器食膳具を中心にして－」『新潟考古学談話会会報』7　新潟考古学談話会
品田高志　1991b　「越後の中世土師器－編年的研究の現状と課題－」『新潟考古学談話会会報』8　新潟考古学談話会
品田高志　1993　「越後における古代と中世の画期－土器類と漆器の食膳具からみた若干の検討－」『新潟考古学談話会会報』11　新潟考古学談話会
品田高志　1997　「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』桂書房
鈴木俊成・春日真実　1994　『一ノ口遺跡東地区』新潟県教育委員会　新潟県埋蔵文化財調査事業団
田村浩司　1999　「第５章　中世・近世　3-3 漆器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
高橋　勉　1999　「第５章　中世・近世　2-1 頸城平野南部の集落」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編
鶴巻康志　1999　「第５章　中世・近世　2-2 中世後期」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
永井久美男　1994　『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会
奈良国立文化財研究所　1984　『木器集成図録　近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊
奈良国立文化財研究所　1993　『木器集成図録　近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第36冊
新潟市史編さん室　1994　『新潟市史　資料編１　原始・古代・中世』新潟市
花ヶ前盛明　1986　『中世越後の歴史－武将と古城をさぐる－』新人物往来社
早津賢二　1994　「新潟焼山火山の活動と年代－歴史時代のマグマ噴火を中心として－」『地学雑誌』103－２
原　明芳　1994　「信濃の施釉陶器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器』古代の土器研究会
藤澤良祐　1991　「瀬戸古窯址群「－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』X
藤巻正信　1988　『西田・鶴巻田遺跡群』新潟県教育委員会
横田賢次郎・森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入中国陶磁器－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館
前川　要　1989　「中世土器・陶磁器の研究史と問題点」『中近世土器の基礎研究』　日本中世土器研究会
松沢亜生　1959・1960　「石器研究におけるテクノロジーの一方向」『考古学手帖』7・12
松田隆嗣　1987　「西川島遺跡群より出土した木製品の樹種について」『西川島』石川県穴水町教育委員会
水澤幸一　1993　「越後における中世村落の様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究
水澤幸一　2001　『下町・坊城遺跡Ⅴ』中条町教育委員会
森沢　勉　2001　「針地区　熊川」『板倉町史　別巻　集落誌』板倉町
森本朝子　1997　「Ⅱ-3-5 出土遺物の分類」『博多60』福岡市埋蔵文化財調査報告書第543集　福岡市教育委員会

掘立柱建物

SB1

図版番号	20・21	グリッド	19A 19B 20A 20B	桁行（m）	3間（7.80）	梁間（m）	2間（5.15）	床面積	40.17㎡	時期	Ⅱ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N1°E	
85	円	U字状	26	24	37.6	37.44	0.16	無	85-86		1.9	切り合い関係			
86	円	U字状	22	19	37.61	37.31	0.3	無	86-87		1.92	SB2と重複			
87	円	U字状	26	24	37.7	37.66	0.04	無	87-88		2.05				
88	楕円	U字状	32	22	37.75	37.49	0.26	無	88-89		1.91				
89	楕円	階段状	34	24	37.79	37.63	0.16	無	84-85		2.65				
84	円	U字状	30	25	37.71	37.51	0.2	無	90-89		3.01	出土遺物			
90	円	U字状	18	18	37.86	37.63	0.23	無	83-93		2.55	無し			
83	円	U字状	27	25	37.74	37.49	0.25	無	93-92		2.87				
93	円	U字状	17	17	37.83	37.48	0.35	無	92-91		1.68				
92	円	U字状	25	22	37.84	37.53	0.31	無	91-90		1.55				
91	円	U字状	25	23	37.82	37.64	0.18	無	83-84		2.53				

SB2

図版番号	20・21	グリッド	19A 19B 20B	桁行（m）	4間（7.50）	梁間（m）	2間（5.30）	床面積	39.75㎡	時期	Ⅳ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N4°W	
96	円	U字状	34	32	37.7	37.33	0.37	無	96-97		1.52	切り合い関係			
97	楕円	U字状	25	15	37.78	37.7	0.08	無	97-98		1.65	SB1と重複			
98	楕円	階段状	39	31	37.82	37.73	0.09	無	98-99		2.6				
99	円	U字状	28	26	37.84	37.57	0.27	無	99-100		1.72	出土遺物			
100	円	U字状	28	26	37.86	37.53	0.33	無	95-96		2.31	無し			
95	円	階段状	35	30	37.79	37.56	0.23	無	94-95		3.01				
94	円	U字状	18	18	37.83	37.65	0.18	無							

SB3

図版番号	2・3	グリッド	8A 8B	桁行（m）	3間(6.90)以上	梁間（m）	2間(4.45)以上	床面積	30.71㎡	時期	Ⅰ期	構造	総柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N6°W	
516	円	U字状	25	24	36.41	36.31	0.1	無	516-517		2.55	切り合い関係			
517	円	U字状	22	21	36.5	36.06	0.44	無	517-518		2.35	無し			
518	楕円	U字状	28	23	36.5	36	0.5	無	518-519		2.08				
519	円	U字状	26	25	36.47	36.15	0.32	無	515-520		2.58	出土遺物			
515	円	U字状	19	17	36.3	36.14	0.16	無	520-517		2.35	無し			
520	楕円	U字状	23	19	36.48	36.08	0.4	無	514-515		2.2				
514	円	U字状	23	20	36.25	36.12	0.13	無	515-516		2.22				

SB4

図版番号	2・3	グリッド	9A 9B	桁行（m）	2間＋1間(6.30)	梁間（m）	2間（4.70）	床面積	29.61㎡	時期	Ⅳ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N5°E	
541	円	U字状	48	45	36.51	36.31	0.2	無	541-540		2.65	柱穴間隔		距離（m）	
540	円	U字状	47	42	36.46	35.98	0.48	無	540-539		2.72	535-544		2.46	
539	円	U字状	40	35	36.44	36.16	0.28	無	539-538		1.08	切り合い関係			
538	円	階段状	33	33	36.42	36.15	0.27	無	542-541		2.35	SB5と重複			
542	楕円	U字状	29	24	36.55	36.41	0.14	無	544-539		2.4				
544	円	U字状	28	27	36.49	36.15	0.34	無	537-538		2.4				
537	円	台形状	30	28	36.48	36.36	0.12	無	533-534		2.36	出土遺物			
533	円	U字状	40	38	36.55	36.25	0.3	無	534-535		2.85	無し			
534	円	U字状	41	36	36.47	35.94	0.53	無	535-536		1.1				
535	円	U字状	31	29	36.47	36.15	0.32	無	536-537		2.45				
536	楕円	U字状	34	29	36.48	35.98	0.5	無	533-542		2.3				

SB5

図版番号	2・3	グリッド	8B 8C 9B 9C	桁行（m）	3間(4.75)以上	梁間（cm）	2間（9.45）	床面積	44.89㎡	時期	Ⅳ期	構造	総柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N5°W	
528	円	U字状	33	32	36.5	36.12	0.38	無	528-527		2.95	柱穴間隔		距離（m）	
527	円	階段状	36	30	36.48	36.15	0.33	無	527-526		3.2	522-530		2.45	
526	円	階段状	25	24	36.45	36.31	0.14	無	529-530		3.07	530-528		2.4	
529	円	U字状	33	33	36.53	35.99	0.54	無	530-531		3.2	523-531		2.45	
530	円	U字状	43	40	36.55	36.19	0.36	無	531-525		3.12	531-527		2.35	
531	円	U字状	30	27	36.5	36.24	0.26	無	525-526		2.38	切り合い関係			
525	円	U字状	28	27	36.42	36.09	0.33	無	521-522		3.18	SB4と重複			
521	円	箱状	25	25	36.55	36.26	0.29	無	522-523		3.01				
522	楕円	箱状	34	26	36.57	36.3	0.27	無	523-524		3.3	出土遺物			
523	円	台形状	37	35	36.53	36.22	0.31	無	524-525		2.35	163（P528）			
524	円	U字状	25	23	36.47	36.37	0.1	無	521-529		2.3				

SB6

図版番号	29・30	グリッド	10A 10B 11A 11B	桁行（m）	3間＋1間 (10.75)	梁間（m）	2間（4.40）	床面積	47.3㎡	時期	Ⅲ期	構造	総柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根（痕）	柱穴間隔		距離（m）	方位		N1°E	
298	方形	階段状	33以上	33	36.75	36.28	0.47	有	298-399		3.1	柱穴間隔		距離（m）	
299	円	台形状	48	42	36.79	36.37	0.42	無	299-302		2.82	300-299		2.15	
302	円	台形状	38	36	36.83	36.44	0.39	無	302-488		3.03	303-302		2.15	
488	円	階段状	44	42	36.88	36.12	0.76	無	488-1416		1.8	切り合い関係			
1416	楕円	U字状	38	32	36.89	36.52	0.37	無	285-300		3.08	SB26・SB29・SB30・SE221・P1358と重複			
285	楕円	U字状	38	25	36.56	36.22	0.34	無	300-303		2.81	SE205・P1335・P1345＜			
300	円	台形状	42	38	36.73	36.42	0.31	有	284-301		3.14				
303	楕円	階段状	42	28	36.82	36.35	0.47	有	284-285		2.25				
284	隅丸三角形	U字状	52	42	36.57	36.26	0.31	無	285-295		2.15	出土遺物			
301	円	台形状	40	40	36.6	36.41	0.19	無	301-300		2.25	無し			

SB7

図版番号	22・23	グリッド	11B　11C	桁行（m）	2間＋1間(6.60)	梁間（m）	2間（4.40）	床面積	29㎡	時期	Ⅲ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高(m)	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N2°E	
322	円	U字状	44	38	36.77	36.36	0.41	有	322-323		1.82	柱穴間隔		距離（m）	
323	楕円	階段状	48	42	36.77	36.34	0.43	無	323-324		1.92	492-493		2.56	
324	円	U字状	38	37	36.76	36.11	0.65	無	324-493		2.86	切り合い関係			
493	円	階段状	35	33	36.6	36.16	0.44	無	330-333		1.7	SB8・SB9・SB24・SB25・SB30・P329・P332・P1350 P1448・P1556と重複 P289(SB25)・P357・P1450・P1451・P1453＜			
331	楕円	階段状	36	32	36.8	36.5	0.3	無	333-328		2.01				
1454	円	U字状	35	35	36.74	36.48	0.26	無	328-491		2.9				
492	楕円	U字状	52	40	36.69	36.36	0.33	無	330-331		2.25				
330	楕円	U字状	62	35	36.8	36.2	0.6	無	331-322		2.15				
333	楕円	U字状	42	26	36.78	36.55	0.23	無	333-1454		2.15	出土遺物			
328	円	U字状	26	24	36.8	36.46	0.34	無	1454-323		2.25	無し			
491	円	U字状	32	32	36.75	36.4	0.35	無	491-492		1.84				

SB8

図版番号	22・24	グリッド	10B　11B	桁行（m）	3間（5.90）	梁間（m）	2間（3.50）	床面積	20.65㎡	時期	Ⅱ期	構造	総柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高(m)	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N2°E	
361	方形	U字状	28	17以上	36.77	36.52	0.25	無	361-337		1.58	柱穴間隔		距離（m）	
337	円	U字状	45	41	36.78	36.25	0.53	無	337-338		2.2	374-1555		1.57	
338	円	階段状	30	30	36.72	36.11	0.61	有	344-1554		2.21	1555-337		1.93	
344	楕円	U字状	30	―	36.8	36.52	0.28	無	1554-1555		1.55	340-339		1.6	
1554	円	階段状	34	30	36.75	36.54	0.21	無	1555-339		2.14	339-338		1.9	
1555	楕円	台形状	58	42	36.78	36.36	0.42	無	343-1351		2.23	切り合い関係			
339	円	漏斗状	38	38	36.77	36.38	0.39	無	1351-374		1.52	SB7・SB9・SB24・SB25・SB30・P379・P1334・P1363 P1436・P1452と重複 P366・P496・P1464＞P373・P1435＜			
343	円	階段状	34	32	36.81	36.48	0.33	無	374-340		2.15				
1351	円	U字状	21	21	36.79	36.52	0.27	無	343-344		1.45				
374	楕円	階段状	52	42	36.77	36.35	0.42	無	1351-1554		1.52	出土遺物			
340	楕円	階段状	45	35	36.8	36.4	0.4	有	1554-361		1.98	無し			

SB9

図版番号	22・23	グリッド	10B 11B 11C	桁行（m）	2間＋1間(6.30)	梁間（m）	3間（4.90）	床面積	30.87㎡	時期	Ⅲ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高(m)	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N2°E	
345	円	台形状	31	28	36.71	36.38	0.33	無	345-346		1.1	柱穴間隔		距離（m）	
346	円	台形状	28	26	36.76	36.5	0.26	無	346-348		2.2	351-486		1.87	
348	楕円	階段状	46	36	36.74	36.12	0.62	無	348-486		3.01	切り合い関係			
486	円	U字状	34	30	36.57	36.18	0.39	無	358-357		1.19	SB7・SB8・SB10・SB11・SB25・SB30・SB31・P1357 P1365・P1382・P1452と重複 P360・P365・P1355・P1356・P1456・P1457・P1561＜ P1375・P1453・P1454・P1459・P1460・P1461＞			
336	円	U字状	32	30	36.76	36.36	0.4	無	357-355		2.25				
363	楕円	U字状	44	38	36.77	36.21	0.56	無	355-353		2.86				
351	楕円	U字状	22	20以上	36.51	36.36	0.15	無	358-359		1.1				
359	楕円	U字状	46	37	36.77	36.25	0.52	有	359-336		2.08				
362	楕円	U字状	42	32	36.77	36.1	0.67	無	336-345		1.72				
352	円	U字状	32	32	36.68	36.06	0.62	無	357-362		1.07				
358	円	U字状	22	22	36.82	36.47	0.35	無	362-363		2.13				
357	楕円	階段状	45以上	33	36.79	36.44	0.35	有	363-346		1.7	出土遺物			
355	円	U字状	31	28	36.75	36.3	0.45	無	353-352		1.37	無し			
353	円	U字状	42	40	36.71	36.32	0.39	無	352-351		1.66				

SB10

図版番号	22・26	グリッド	10B　10C 11B　11C	桁行（m）	3間（6.50）	梁間（m）	3間（5.50）	床面積	35.75㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高(m)	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N6°E	
405	円	U字状	30	27	36.54	36.05	0.49	無	405-404		2.48	切り合い関係			
404	円	半円状	47	40	36.56	36.3	0.26	無	404-1371		2.11	SB9・SB11・SB12・SB31・P409・P410・P432（SB12）P499・P1395と重複 P1462＜			
1371	楕円	台形状	―	20	36.54	36.3	0.24	無	1371-402		1.91				
402	円	階段状	46	38	36.61	36.2	0.41	有	1385-411		2.42				
406	楕円	半円状	15以上	26	36.57	36.45	0.12	無	411-497		2.1				
401	円	U字状	39	―	36.67	36.24	0.43	有	497-398		1.98				
1383	円	U字状	36	32	36.64	36.4	0.24	無	1385-1383		2.07	出土遺物			
399	円	U字状	32	30	36.78	36.5	0.28	無	1383-406		2.29	無し			
409	円	台形状	36	23	36.47	36.12	0.35	無	406-405		1.14				
411	円	U字状	34	34	36.55	36.16	0.39	有	398-399		1.94				
497	円	階段状	46	39	36.74	36.42	0.32	無	399-401		2.44				
398	方形	U字状	34	30	36.76	36.3	0.46	有	401-402		1.12				

SB11

図版番号	22・25	グリッド	10B　10C 11B　11C	桁行（m）	3間（6.40）	梁間（m）	2間（4.10）	床面積	26.24㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高(m)	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N6°E	
422	円	台形状	37	35	36.5	36.08	0.42	無	422-421		1.99	切り合い関係			
421	円	U字状	32	30	36.6	36.24	0.36	無	421-1389		2.32	SB9・SB10・SB12・SB31・SE222・SE388・P414 P415・P420・P426・P444・P1396・P1463と重複 P1393・P1458＜			
1389	楕円	U字状	―	22	36.54	36.24	0.3	無	1389-419		2.09				
419	円	U字状	39	―	36.67	36.09	0.58	柱根	498-425		1.92				
423	方形	階段状	38	35	36.59	36.3	0.29	有	425-447		2.59				
418	楕円	U字状	36	―	36.73	36.26	0.47	無	447-417		1.89				
498	方形	台形状	36	35	36.47	36.18	0.29	無	498-423		2.77				
425	円	階段状	32	28	36.58	36.26	0.32	無	423-422		1.33	出土遺跡			
447	円	漏斗状	43	―	36.71	36.3	0.41	無	417-418		2.47	柱根（P419）			
417	円	U字状	28	27	36.4	36.1	0.3	無	418-419		1.63				

SB12

図版番号	22・25	グリッド	10B 10C 11C	桁行（m）	4間（6.30）	梁間（m）	3間（4.90）	床面積	30.87㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N6°E	
494	円	台形状	37	―	36.54	36.3	0.24	無	494-432		1.42	切り合い関係			
432	楕円	箱状	32	―	36.57	36.3	0.27	無	432-431		1.55	SB10・SB11・SB31・SE224・SE225・SE234・SE258 SE312・P406（SB10）・P434・P435・P439・P1363 P1394・P1407と重複 P440・P1399・P1409＜			
431	楕円	階段状	―	35	36.63	36.2	0.43	有	431-430		1.7				
430	円	箱状	49	―	36.66	36.28	0.38	無	430-429		1.63				
429	楕円	台形状	40	35	36.6	36.3	0.3	無	286-246		1.52				
495	円	U字状	33	19以上	36.42	36.17	0.25	無	246-437		1.56				
428	円	U字状	28	23	36.78	36.54	0.24	無	437-1419		1.61				
436	方形	U字状	27	22	36.47	36.12	0.35	無	1419-438		1.61				
427	円	U字状	25	―	36.72	36.51	0.21	無	286-436		1.13	出土遺物			
286	円	台形状	36	36	36.4	35.81	0.59	有	436-495		1.99	無し			
246	円	台形状	36	27以上	36.45	36.13	0.32	無	495-494		1.68				
437	楕円	台形状	15以上	15	36.46	36.3	0.16	無	438-427		1.35				
1419	円	U字状	31	29	36.3	36.1	0.2	無	427-428		1.73				
438	楕円	箱状	―	27	36.7	36.3	0.4	無	428-429		1.82				

SB13

図版番号	11・12	グリッド	13A 13C	桁行（m）	2間（7.25）	梁間（m）	2間（4.65）	床面積	33.71㎡	時期	Ⅴ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N5°E	
1153	円	階段状	34	32	37	36.49	0.51	無	1153-1190		3.2	切り合い関係			
1190	円	U字状	27	26	36.97	36.55	0.42	無	1190-1247		3.46	SE1108と重複			
1247	円	階段状	28	26	36.91	36.68	0.23	柱根	1156-1153		2.13				
1156	楕円	U字状	24	19	37.02	36.77	0.25	無	1221-1247		2.2	出土遺物			
1221	楕円	U字状	36	24	36.99	36.65	0.34	無	1144-1290		3.65	柱根（P1247）			
1144	楕円	階段状	35	29	37.03	36.52	0.51	無	1290-1229		3.65				
1290	円	U字状	46	42	36.88	36.34	0.54	無	1229-1221		2.5				
1229	円	U字状	29	25	36.98	36.59	0.39	無	1144-1156		2.1				

SB14

図版番号	11・12	グリッド	12A 12B 13A 13B	桁行（m）	2間(5.60)以上	梁間（m）	2間（4.65）	床面積	―	時期	Ⅴ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N7°W	
1112	円	U字状	40	39	36.8	36.36	0.44	無	1112-1117		2.05	切り合い関係			
1117	楕円	U字状	39	30	36.94	36.61	0.33	無	1117-1151		3.15	SK1103と重複			
1151	円	U字状	25	25	36.97	36.6	0.37	無	1145-1151		2.52				
1145	円	階段状	34	30	37.04	36.54	0.5	無	1134-1140		2.68	出土遺物			
1134	円	階段状	43	39	37.01	36.32	0.69	無	1140-1145		2.1	無し			
1140	円	階段状	40	39	37	36.75	0.25	無							

SB15

図版番号	11・12	グリッド	14A 14B 15B	桁行（m）	5間（11.85）	梁間（m）	1間（3.10）	床面積	36.74㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N2°E	
1070	円	台形状	38	35	37.21	36.89	0.32	無	1070-1030		2.02	切り合い関係			
1030	楕円	階段状	65	24	37.26	36.97	0.29	無	1030-1029		1.97	SB16・SE108と重複 SD107・SK139・SK1022＜			
1029	円	漏斗状	30	28	37.29	36.91	0.38	無	1029-1028		2.62				
1028	不整形		76	47	37.29	36.7	0.59	無	1028-1027		2.18				
1027	円	台形状	32	26	37.27	36.91	0.36	無	1027-156		3.06				
156	円	台形状	16	16	37.01	36.78	0.23	無	SK1033-1024		2.05	出土遺物			
SK1033	円	箱状	66	60	37.21	36.91	0.3	無	1024-1025		2.45	無し			
1024	円	階段状	41	36	37.35	36.73	0.62	無	1025-1026		2.35				
1025	楕円	階段状	67	45	37.39	36.88	0.51	無	1026-157		3.2				
1026	長楕円	台形状	65	30	37.38	36.96	0.42	無	157-156		3.1				
157	円	台形状	28	28	37.35	36.89	0.46	無							

SB16

図版番号	11・12	グリッド	14A 14B 15B	桁行（m）	3間(8.80)以上	梁間（m）	1間（3.10）	床面積	27.28㎡	時期	Ⅱ～Ⅲ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N0°	
1078	楕円	台形状	36	25	37.22	37.01	0.21	無	1078-1079		3.62	切り合い関係			
1079	長楕円	U字状	58	40	37.18	36.83	0.35	無	1079-1080		1.82	SB15・SK1032・SK1100と重複			
1080	円	階段状	29	27	37.25	37.05	0.2	無	1080-1081		1.82				
1081	円	台形状	26	25	37.21	36.91	0.3	無	933-1074		3.36				
933	楕円	台形状	26	24	37.24	36.95	0.29	無	1074-1075		1.78	出土遺物			
1074	円	台形状	36	32	37.28	36.85	0.43	無	1075-153		1.82	無し			
1075	円	台形状	33	28	37.34	37.16	0.18	無	153-1081		3.1				
153	楕円	台形状	35	26	37.3	36.77	0.53	無							

SB17

図版番号	33・34	グリッド	15A 15B 16B	桁行（m）	3間（8.55）	梁間（m）	2間（3.55）	床面積	30.35㎡	時期	Ⅱ～Ⅲ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N0°	
1056	楕円	台形状	48	37	37.42	37.3	0.12	無	1056-1055		2.6	切り合い関係			
1055	方形	半円状	28	26	37.39	37.25	0.14	無	1055-1052		2.91	SB18S・B19・SB20・SB21・SK192と重複			
1052	楕円	U字状	30	25	37.43	36.99	0.44	無	1052-902		3.04				
902	円	U字状	26	26	37.35	37.08	0.27	無	190-1059		3.1				
167	円	U字状	20	20	37.4	37.12	0.28	無	1059-1050		2.5	出土遺物			
901	楕円	U字状	28	22	37.41	37	0.41	無	167-1056		1.76	無し			
190	円	U字状	22	22	37.39	37.18	0.21	無	1050-901		1.85				
1059	円	弧状	32	28	37.46	37.42	0.04	無	901-902		1.7				
1050	円	U字状	30	30	37.43	37.15	0.28	無							

SB18

図版番号	33・34	グリッド	15A　15B	桁行（m）	3間（6.90）	梁間（m）	1間（3.15）	床面積	21.74㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N4°E	
1095	台形	U字状	35	28	37.36	37.08	0.28	無	1095-967		2.32	切り合い関係			
967	円	U字状	32	30	37.4	36.93	0.47	無	967-1096		3.04	SB17・SB19・SB20・SB21と重複			
1096	円	U字状	32	30	37.39	36.52	0.87	無	1096-1097		1.54				
1097	円	階段状	32	30	37.42	37.12	0.3	無	1060-1062		2.98	出土遺物			
1060	円	U字状	18	17	37.39	37.1	0.29	無	1062-187		1.62	無し			
1062	円	箱状	34	32	37.46	37.3	0.16	無	187-1097		3.15				
187	円	台形状	26	22	37.43	37.25	0.18	無							

SB19

図版番号	33・34	グリッド	15A　15B	桁行（m）	3間（7.30）	梁間（m）	1間（3.50）	床面積	25.55㎡	時期	Ⅱ～Ⅲ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N1°E	
798	円	箱状	28	25	37.39	36.99	0.4	無	798-998		2.1	切り合い関係			
998	楕円	台形状	42	38	37.39	36.75	0.64	無	998-972		2.5	SB17・SB18・SB20・SB21と重複			
972	円	U字状	40	35	37.38	36.92	0.46	無	972-963		2.7				
963	円	U字状	28	28	37.41	37.05	0.36	無	1099-1090		2.45	出土遺物			
1099	円	U字状	23	23	37.43	37.12	0.31	無	1090-184		2.6	無し			
1090	円	台形状	35	34	37.44	36.82	0.62	無	184-963		3.5				
184	円	台形状	24	21	37.43	37.29	0.14	無							

SB20

図面番号	33・34	グリッド	15A　15B	桁行（m）	3間（6.25）	梁間（m）	1間（2.65）	床面積	16.56㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N5°E	
1088	円	階段状	47	46	37.39	36.87	0.52	無	1088-1087		2.25	切り合い関係			
1087	円	U字状	18	18	37.38	37.25	0.13	無	1087-1086		1.48	SB17・SB18・SB19・SB21と重複			
1086	不整形	台形状	36	19	37.39	37.31	0.08	無	1086-181		2.52				
181	円	台形状	22	22	37.41	37.23	0.18	無	1094-1092		2.2	SK158＜			
1094	円	階段状	47	43	37.41	37.06	0.35	無	1092-185		4.05	出土遺物			
1092	長楕円	階段状	40	22	37.43	37	0.46	無	185-181		2.65	無し			
185	不整形	階段状	55	51	37.48	36.95	0.53	無							

SB21

図版番号	33・34	グリッド	15A　15B	桁行（m）	4間（6.50）	梁間（m）	1間（2.90）	床面積	18.85㎡	時期	Ⅱ～Ⅲ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N1°E	
797	楕円	U字状	30	24	37.39	37.04	0.35	無	797-794		1.72	切り合い関係			
794	円	台形状	28	26	37.41	37.07	0.34	無	794-972		2.1	SB17・SB18・SB19・SB20と重複			
972	円	U字状	40	35	37.38	36.92	0.46	無	972-790		1.48				
790	円	台形状	23	23	37.38	37.19	0.19	無	790-963		1.2				
963	円	U字状	28	28	37.41	37.05	0.36	無	1081-1082		1.73				
1081	楕円	U字状	30	24	37.39	36.97	0.42	無	1082-1083		2.08	出土遺物			
1082	円	U字状	22	20	37.41	37.27	0.14	無	1083-183		1.52	168～174（P1020）			
1083	円	台形状	20	18	37.42	37.27	0.15	無	183-1020		1.17				
183	円	台形状	24	22	37.39	37.14	0.25	無	1020-963		2.9				
1020	長楕円	階段状	67	40	37.41	36.94	0.47	無							

SB22

図版番号	18・19	グリッド	17B　18B	桁行（m）	2間＋1間(4.15)	梁間（m）	2間（8.10）	床面積	33.62㎡	時期	Ⅳ期	構造	総柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N7°W	
1291	円	U字状	33	29	37.35	36.94	0.41	無	1291-36		3.15	柱穴間隔		距離（m）	
36	楕円	U字状	44	30	37.54	36.97	0.57	有	36-45		3.1	1016-1291		2.13	
45	円	U字状	28	27	37.54	37.03	0.51	無	45-48		1.85	993-1292		1.86	
48	円	U字状	25	22	37.59	37.07	0.52	無	1016-1292		3.3	1292-36		2.01	
1016	円	階段状	37	33	37.5	37.08	0.42	無	1292-50		2.82	54-50		1.9	
1292	円	U字状	30	28	37.55	36.98	0.57	無	50-45		2.05	切り合い関係			
50	円	U字状	26	24	37.62	37.04	0.58	無	1293-993		3.1	SB23・SK26・SK1107と重複			
1293	円	U字状	26	25	37.56	37.11	0.45	無	993-54		3.2				
993	楕円	箱状	37	30	37.58	36.93	0.65	無	54-56		1.88	出土遺物			
54	円	U字状	30	26	37.67	37.15	0.52	無	56-48		4.15	無し			
56	円	U字状	30	26	37.7	37.07	0.63	無	1293-1016		1.7				

SB23

図版番号	18・19	グリッド	17A　17B	桁行（m）	2間(7.40)以上	梁間（m）	2間（5.50）	床面積	―	時期	Ⅱ～Ⅲ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N0°	
128	楕円	U字状	25	20	37.4	37.28	0.12	無	128-950		2.15	切り合い関係			
950	円	U字状	22	20	37.6	37.36	0.24	無	950-1295		3.18	SB22と重複			
1295	円	U字状	22	19	37.55	37.27	0.28	無	994-1295		2.62				
994	楕円	階段状	30	23	37.58	37.45	0.13	無	977-1294		3.25	出土遺物			
977	楕円	U字状	27	22	37.63	37.07	0.56	無	1294-994		2.85	無し			
1294	円	U字状	25	22	37.61	37.28	0.33	無							

SB24

図版番号	29・31	グリッド	11A　11B 12A　12B	桁行（m）	3間＋1間 (10.40)	梁間（m）	2間（4.70）	床面積	48.88㎡	時期	Ⅳ期	構造	総柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N6°W	
376	円	U字状	37	—	36.76	36.3	0.43	無	376-1310		2.8	柱穴間隔		距離（m）	
1310	楕円	半円状	44	30	36.81	36.56	0.25	無	1310-1309		3.01	1313-1310			2.5
1309	円	半円状	35	34	36.8	36.53	0.27	無	1309-1308		2.9	1303-1314			2.2
1308	楕円	U字状	33	26	36.8	36.46	0.34	無	1308-281		1.7	1314-1309			2.5
281	円	半円状	18	18	36.61	36.51	0.1	無	1311-1313		2.72	1305-1316			2.2
1311	円	U字状	31	—	36.78	36.33	0.45	無	1313-1314		3.04	1316-1308			2.5
1313	楕円	U字状	40	28	36.83	36.54	0.29	無	1314-1316		2.88	切り合い関係			
1314	楕円	台形状	42	22	36.83	36.6	0.17	無	1316-1307		1.66	SB7・SB8・SB25・SB29・SB30・P265・1312・P1315 P1327と重複 SD203・SK276＜P1304＞			
1316	円	U字状	30	30	36.91	36.37	0.54	無	1301-1302		2.77				
1307	楕円	U字状	52	40	36.9	36.42	0.48	無	1302-1303		3.09				
1301	円	U字状	29	29	36.8	36.34	0.34	無	1303-1305		2.83				
1302	円	台形状	35	—	36.81	36.41	0.4	無	1305-1306		1.62				
1303	円	半円状	42	35	36.87	36.65	0.22	無	1301-1311		2.22	出土遺物			
1305	円	U字状	38	38	36.94	36.25	0.69	無	1311-376		2.48	無し			
1306	円	U字状	24	24	36.94	36.41	0.53	無	1302-1313		2.2				

SB25

図版番号	22・26	グリッド	11B　11C	桁行（m）	4間（8.80）	梁間（m）	3間（4.60）	床面積	40.48㎡	時期	Ⅳ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N6°W	
295	楕円	U字状	23	—	36.77	36.36	0.41	無	295-386		2.91	切り合い関係			
386	楕円	U字状	50	38	36.77	36.35	0.42	無	386-1437		2.01	SB7・SB8・SB9・SB24・P288・P1405・P1436・P1446と重複 SD203・P330(SB7)・P1404・P1447＜			
1437	楕円	台形状	35	—	36.75	36.5	0.25	無	1437-1439		1.86				
1439	円	U字状	33	33	36.72	36.29	0.43	無	1439-1440		2.03				
1440	円	半円状	15	15	36.54	36.42	0.12	無	304-306		2.93				
293	円	台形状	25	25	36.78	36.49	0.29	無	306-297		1.55				
1445	円	U字状	28	26	36.57	36.22	0.35	無	297-310		2.14				
289	円	U字状	22	22	36.79	36.36	0.43	無	310-311		2.18	出土遺物			
1442	楕円	U字状	32	28	36.59	36.34	0.25	無	304-289		1.53	無し			
304	円	U字状	40	37	36.75	36.15	0.6	無	289-293		2.26				
306	楕円	階段状	56	38	36.84	36.38	0.46	無	293-295		0.81				
297	楕円	階段状	64	39	36.78	36.45	0.33	無	311-1442		1.44				
310	楕円	階段状	60	43	36.78	36.27	0.51	無	1442-1445		2.25				
311	円	半円状	30	28	36.47	36.36	0.11	無	1445-1440		0.81				

SB26

図版番号	5・6	グリッド	10A 10B 11B	桁行（m）	3間（7.60）	梁間（m）	2間（4.20）	床面積	31.5㎡	時期	Ⅱ期	構造	総柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N1°E	
1579	円	半円状	25	22	36.5	36.34	0.16	無	1579-1576		2.17	柱穴間隔		距離（m）	
1576	楕円	U字状	35	30	36.54	35.95	0.59	無	1576-482		2.48	1569-1576			2.09
482	円	U字状	33	33	36.54	36.04	0.5	無	482-1574		2.95	1563-1570			2.1
1574	円	U字状	22	21	36.79	36.42	0.37	無	1568-1569		2.13	1570-482			2.1
1568	円	U字状	37	37	36.51	36.19	0.32	無	1569-1570		2.37	1572-1574			2.12
1569	楕円	U字状	53	44	36.54	36.12	0.42	無	1570-1572		3.01	切り合い関係			
1570	円	半円状	26	26	36.57	36.36	0.21	無	1567-1565		2.11	SB6・SB28・SB30・P1591と重複 P1571・P1577・P1578＜			
1572	円	U字状	33	32	36.56	36.16	0.4	無	1565-1563		2.09				
1567	円	U字状	24	24	36.54	36.3	0.24	無	1567-1568		2.12				
1565	円	U字状	39	37	36.59	36.18	0.41	無	1568-1579		2.08	出土遺物			
1563	円	U字状	27	25	36.57	36.26	0.31	無	1565-1569		2.11	無し			

SB27

図版番号	5・6	グリッド	9B 9C 10C	桁行（m）	3間（7.00）	梁間（m）	3間（5.00）	床面積	35㎡	時期	Ⅱ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N1°E	
658	円	階段状	46	40	36.46	35.8	0.66	柱根	1580-1582		2.22	切り合い関係			
1592	円	U字状	29	23	36.39	36.14	0.25	無	1582-477		2.2	P1584と重複 P1587・P1588＜			
1590	円	U字状	42	40	36.46	35.98	0.48	無	477-1586		2.58				
1580	方形	半円状	50	48	36.44	36.19	0.25	無	1580-1590		1.4	出土遺物			
1582	楕円	半円状	30	24	36.43	36.3	0.13	無	1590-1592		1.8	276（P658）			
477	楕円	台形状	18	—	36.44	36.22	0.22	無	1592-658		1.8				
1586	円	U字状	20	20	36.44	36.1	0.34	無							

SB28

図版番号	5・6	グリッド	9B 10A 10B	桁行（m）	3間（7.30）	梁間（m）	2間（4.50）	床面積	33.3㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N6°E	
1603	円	台形状	34	30	36.46	36.24	0.22	無	1603-1602		2.4	切り合い関係			
1602	円	U字状	38	38	36.49	36.21	0.28	無	1602-474		2.85	SB4・SB26と重複 P474＜P727・P728＞			
474	円	台形状	44	37	36.58	36.25	0.33	無	474-1599		2.05				
1599	円	階段状	40	35	36.57	36.29	0.28	無	1605-729		2.98				
1653	楕円	台形状	29	24	36.43	36.27	0.16	無	1605-1653		2.3	出土遺物			
1607	方形	台形状	46	36	36.58	36.29	0.29	無	1653-1603		2.2	無し			
1605	円	半円状	38	35	36.47	36.27	0.2	無	1607-1599		2.01				
729	円	台形状	42	42	36.53	36.32	0.21	無							

SB29

図版番号	29・31	グリッド	11A 11B 12B	桁行（m）	2間(7.60)以上	梁間（m）	2間（5.40）	床面積	41.04㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	東西棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N7°E	
1614	円	台形状	29	29	36.81	36.46	0.35	無	1614-1612		2.8	切り合い関係			
1612	円	台形状	32	28	36.8	36.34	0.46	無	1612-448		2.8	SB6・SB24・SB30・1325と重複 SE206・P1615＜SD202・SE205・P1610＞			
448	楕円	階段状	44	29	36.83	36.43	0.4	無	261-1479		2.8				
1611	楕円	U字状	26	18以上	36.81	36.63	0.18	無	1479-1324		2.4				
1609	楕円	U字状	24	13	37.01	36.78	0.23	無	1324-448		2.94				
261	円	階段状	40	22	36.91	36.43	0.48	無				出土遺物			
1479	円	半円状	30	26	36.91	36.72	0.19	無				無し			

SB30

図版番号	29・30	グリッド	10B 11A 11B 12B	桁行（m）	4間（11.10）	梁間（m）	1間（4.30）	床面積	47.73㎡	時期	Ⅳ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N5°W	
459	楕円	半円状	40	28	36.77	36.54	0.23	無	459-1619		3.11	切り合い関係			
1619	円	U字状	18	18	36.79	36.46	0.33	無	1619-305		2.85	SB6・SB7・SB8・SB9・SB24・SB25・SB26・SB29 P1325・P1346と重複 SE205・SE206・P1543・P1623＜ P1628＞			
305	楕円	台形状	21	17	36.76	36.63	0.13	無	305-1618		2.15				
1618	楕円	U字状	28	18	36.82	36.66	0.16	無	1618-1617		2.99				
1617	楕円	U字状	28	22	36.89	36.69	0.2	無	1337-1338		3.15				
1476	楕円	台形状	25	25	36.88	36.59	0.29	無	1338-1627		2.92				
1337	方形	半円状	40	34	36.56	36.36	0.2	無	1627-1630		2.15				
1338	円	U字状	24	20	36.69	36.56	0.13	無	1630-1542		2.88	出土遺物			
1627	楕円	U字状	21	18以上	36.82	36.47	0.35	無	1337-459		4.3	無し			
1630	楕円	U字状	38	28	36.83	36.71	0.12	無	1542-1476		2.08				
1542	円	U字状	38	38	36.94	36.59	0.35	無	1476-1617		2.12				

SB31

図版番号	22・24	グリッド	10B 10C 11B 11C	桁行（m）	3間（7.30）	梁間（m）	2間（4.30）	床面積	31.39㎡	時期	Ⅰ期	構造	側柱	棟方向	南北棟
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	方位		N6°E	
1638	楕円	U字状	45	36	36.52	36	0.52	無	1638-439		2.85	切り合い関係			
439	楕円	U字状	―	30	36.6	35.99	0.07	柱根	439-1552		2.15	SB9・SB10・SB11・SB12・SE317・P401・P418・P499 P1639・P1640・P1646・P1648・P1649と重複 P1399＜			
1552	楕円	U字状	―	22	36.57	36.45	0.12	無	1552-1395		2.2				
1395	円	U字状	39	―	36.68	36.21	0.47	無	1642-1645		2.85				
1641	円	階段状	42	37	36.55	36.3	0.25	無	1645-412		2.2				
1463	円	U字状	37	―	36.73	36.52	0.21	無	412-1647		2.25				
1642	方形	階段状	33	32	36.48	36.32	0.16	無	1642-1641		2.7				
1645	楕円	U字状	43	41	36.6	35.82	0.78	無	1641-1638		1.6	出土遺物			
412	楕円	U字状	35	―	36.69	36.06	0.63	無	1647-1463		2.88	柱根（P439）			
1647	円	U字状	35	32	36.79	36.24	0.55	無	1395-1463		1.4				

杭列SA1

図版番号	18・19	グリッド	18A-21 18B-2・7				全長（m）	3.35	方位	N0°		出土遺物	切り合い関係
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	無し	無し
62	円	U字状	25	19	37.72	37.56	0.16	無	62-61		1.62		
61	円	U字状	26	26	37.69	37.37	0.32	無	61-60		1.73		
60	円	U字状	19	19	37.66	37.14	0.52	無					

SA2

図版番号	18・19	グリッド	18A-23 18B-3・4				全長（m）	3.85	方位	N0°		出土遺物	切り合い関係
柱穴番号	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	確認高（m）	底面高（m）	深さ（m）	柱根(痕)	柱穴間隔		距離（m）	無し	無し
68	円	U字状	22	22	37.72	37.53	0.19	無	68-70		1.95		
70	円	U字状	24	22	37.73	37.31	0.42	無	70-73		1.9		
73	円	箱状	20	19	37.72	37.37	0.35	無					

井戸（SE）

遺構名	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ(cm)	底面高(m)	形態	覆土	時期	出土遺物	切り合い関係
16	18	19	53	18B-12	円	台形状	110	104	134	36.27	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	269	―
18	20	21		20B-8・13	円	台形状	95	90	131	36.33	素掘り	水平	Ⅰ	241・242	―
19	20	21	53	20A-23・24, 20B-3・4	円	台形状	135	120	149	36.38	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	86・100・101	―
22	20	21	53	20A-22	円	台形状	62	60	77	37.1	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	95	―
31	18	19		18A-25	円	漏斗状	120	100	149	36.23	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	―	SD32と重複
108	33	35	54	15B-6・7	円	台形状	92	90	104	36.34	素掘り	レンズ状	Ⅰ	―	SD107・P1025＞
114	11	13	54	14B-13	円	U字状	108	104	154	35.63	素掘り	―	Ⅱ～Ⅲ	186・125・232～235	―
115	11	13	54	14B-18・23	円	台形状	118	113	108	36.04	素掘り	ブロック状	Ⅰ	98・99・152・153・183・184	―
123	11			14C-2・3	円	U字状	118	105	163	35.42	素掘り	―	Ⅰ	90～93・180	―
136	16			16B-6	楕円	U字状	97	75	108	36.35	素掘り	水平	Ⅰ	207～210	SD101＞
137	11	13		14B-24	楕円	漏斗状	156	128	130	35.86	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	187・135	P161・P540＞
138	11	13	54	15C-1	円	漏斗状	97	89	116	36.05	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	188～192・110～112	―
141	11	13		15C-2	円	台形状	93	88	70	36.46	素掘り	レンズ状	Ⅰ	102・270	P1003＞
144	16	17		16A-25	円	台形状	128	108	138	36.13	素掘り	レンズ状	Ⅰ	―	SD102＞
162	11	13		15C-1・6	円	台形状	91	85	123	35.91	素掘り	水平	Ⅰ	236～239	―
194	16	17	54	16B-21	楕円	漏斗状	87	72	64	36.76	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	121・122	SK193＜
196	33			15B-13	円	台形状	80	76	107	36.29	素掘り	―	Ⅱ～Ⅲ	193・126	―
205	29	31	54	11A-25	方形	箱状	146推定	132	105	35.89	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	240	SE206・P261・P1538～P1544・P1416＜
206	29	31	54・55	11A-25, 12A-21	楕円	漏斗状	155推定	130	150	35.42	素掘り	レンズ状	Ⅰ	229・230	P261・P270・P271・P1476・P1537・P1538・SE205＞ SD202と重複
207	29	32	54	11A-25	円	台形状	105	94	100	35.9	素掘り	レンズ状	Ⅰ	72	―
208	5	7	55	12A-22・23	楕円	台形状	221	185推定	150	35.4	素掘り	レンズ状	Ⅰ	96・97・185	SD201＞
209	5	6	55	12B-13	円	台形状	104	92	110	35.65	素掘り	レンズ状	Ⅰ	212～215	SK276＜P1475と重複
210	5	6	55	12C-2	円	台形状	98	84	123	35.47	素掘り	レンズ状	Ⅰ	76～79	―
211	22	26	55	11C-6・11	楕円	U字状	186	162	147	35.18	素掘り	水平	Ⅳ	142・143・253	SE219・P1547＞ P1548と重複
212	11	13	55	12A-23・24	楕円	U字状	105推定	65	96	35.64	素掘り	斜め	Ⅱ～Ⅲ	251	SD201・SE213＞
213	11・13	13	55・56	12A-24	楕円	台形状	145	123	170	34.9	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	134・136・204～206	SE212＜ SD201＞ SK1103・P1114と重複
214	11	13	56	13A-23	円	U字状	76	76	87	36.18	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	―	―
215	11	13	56	13B-3・4	円	台形状	96	91	116	35.84	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	231	P1465と重複
216	11	14	56	13B-21	円	漏斗状	161	138	186	35.09	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	130・194	P1473と重複
219	5・7	7	56	11C-11・16	円	台形状	212	192	146	35.02	石組	水平	Ⅳ	―	SE211・SE267＞ P1549・P1550と重複

井戸（SE）

遺構名	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ(cm)	底面高(m)	形態	覆土	時期	出土遺物	切り合い関係
220	29	32	57・58	11B-2	楕円	台形状	169	136	180	35.04	素掘り	斜め	Ⅰ	75	P1488～P1490と重複 SE260＞
221	29	32	57	10B-15	楕円	漏斗状	137	116	158	35.12	素掘り	ブロック状	Ⅱ～Ⅲ	118～120・154・195～200	P298と重複
222	22	27	57	10B-25, 11B-21	円	漏斗状	136	136	223	34.57	素掘り	上：レンズ状 下：水平	Ⅳ	156・248	P1511＞ P347・P391・P1541・1510・P417・P463・P1513・P1512と重複
223	22	26	57	10C-5	円	U字状	119	108	143	35.32	素掘り	水平	Ⅳ	144・145・164～167・227・228	P1519・P1520・P1517・P1518＜
224	22	27	57	10B-24	楕円	台形状	190	140	144	35.28	素掘り	斜め	Ⅱ～Ⅲ	162	P1417～P1418＞ P231～P233・P1419・P1403・P412・P1516・P259・P175と重複
225	22	27	57	10C-10	円	台形状	115	110	94	35.72	素掘り	斜め	Ⅱ～Ⅲ	243・244	P273・P272・P226・P443＞P430と重複
234	22・27	27	57・58	10B-22・23	楕円	台形状	128	107	190	34.59	素掘り	ブロック状	Ⅳ	144・216～224	P245・P246と重複 SE258＜
235	5	8	58	10B-14・19	楕円	台形状	134	118	89	35.61	素掘り	―	Ⅳ	―	SE283＜ P287＞
236	5	6	58	10B-8・13	方形	U字状	95	82	86	35.69	素掘り	斜め	Ⅰ	249	―
238	5	7		10B-11・16	円	台形状	116	112	178	34.68	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	128・202	P244＞ SK237＜
239	22	27	58	10C-8	楕円	台形状	120	106	115	35.5	素掘り	斜め	Ⅱ～Ⅲ	123・124・201	P240・P1410＞
242	5	7	58	10B-6	方形	台形状	114	108	104	35.46	素掘り	レンズ状	Ⅳ	―	―
243	5	7	58・59	10C-6・7	円	台形状	120	110推定	100	35.47	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	141	P257・SE247＞ P1534と重複
247	5・8	8	47・59	10C-7・12	楕円	台形状	245	208	200	34.36	石組	レンズ状	Ⅳ	―	SE243・P253～P257・P1535＜
252	5	7		10B-16	楕円	台形状	134	100	164	34.81	素掘り	ブロック状	Ⅱ～Ⅲ	140	P1531と重複
258	22	27	59	10C-3	円	U字状	110	103	87	35.59	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	127	SE234＞ P1532・P437と重複
260	29	32		11B-2	―	U字状	88	―	108	35.77	素掘り	―	Ⅰ	―	P1491＜ SE220＞
264	5	8	59	10C-20	円	台形状	110	105推定	77	35.63	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	―	SK380＜
265	29	32		11B-3・4	円	U字状	118	108	180	35	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	250	P1302・P1487と重複
266	11	13	59	12B-19	円	台形状	90	72	51	35.99	素掘り	レンズ状	Ⅰ	―	SD201＞
267	5	8		11C-12・17	円	U字状	102	112推定	137	34.89	素掘り	―	Ⅳ	―	SE219＞
277	29	32		10A-24	円	台形状	76	70	67	35.93	素掘り	―	Ⅰ	―	―
278	5	8		10A-23	円	U字状	117	104	194	34.62	素掘り	―	Ⅳ	―	P1529と重複
283	22	27	62	10B-14・19	楕円	U字状	82	72	87	35.65	素掘り	斜め	Ⅳ	―	SE235＞
312	22	27	59	11B-1	楕円	漏斗状	154	110	212	34.5	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	―	SE317・P1420＞ P1521～P1523・P1406・P1551・P1429と重複
315	22	27	59	11B-18・19	楕円	漏斗状	115	95	150	34.3	素掘り	レンズ状	Ⅰ	―	SD201・P316＞ P1495＜ P1494と重複
317	22	28	59	10C-10	―	台形状	―	73	76	35.84	素掘り	―	Ⅱ～Ⅲ	―	SE312・P1420＜ P1552・P1553と重複
381	22	28		10C-9	楕円	箱状	98	81	143	35.29	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	―	SK382＞
388	22	28		10B-25	円	U字状	80	70	124	35.48	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	―	P387・P389 SE442＜ P390・P447と重複
392	22	28		10C-4・9	円	台形状	82	80	86	35.86	素掘り	斜め	Ⅳ	―	P1524～P1526・P413＞
393	22	28	59	10C-15・20	円	台形状	98	98	172	34.78	素掘り	レンズ状？	Ⅳ	―	P394～P396・P1415＞
442	22	28	59	10C-5	楕円	台形状	98	110推定	173	34.97	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	133	SE388・P389＞
501	2	4	60	7A-25	円	台形状	118	112	90	35.33	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	―	―
502	2	4	60	7B-9・10	方形	台形状	105	103	75	35.33	素掘り	斜め	Ⅱ～Ⅲ	―	―
503	2	4		8A-24	円	U字状	120	112	111	35.35	素掘り	水平	Ⅰ	88	―
504	2	4		9B-21	円	U字状	122	114	164	34.91	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	104～109	―
506	5	8		9B-13・18	円	箱状	97	90	87	35.59	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	22	P540＜
507	5	9	60	9B-19	円	台形状	94	92	102	35.42	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	73	―
508	5	9	60	9B-19・24	円	漏斗状	175	155	94	35.47	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	―	―
509	5	9		9B-20	円	台形状	97	78	111	35.28	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	―	―
510	5	9	60	9C-9	円	台形状	100	92	94	35.5	素掘り	レンズ状	Ⅴ	148・149・225	―
511	5	9	60	9C-10	方形	漏斗状	122	121	154	34.88	素掘り	レンズ状	Ⅴ	150	―
512	5	9		9C-9・10	円	台形状	112	98	103	35.4	素掘り	斜め	Ⅱ～Ⅲ	―	P695・P696・P697＜
513	5	9	60	9C-10	円	台形状	110	96	110	35.34	素掘り	斜め	Ⅱ～Ⅲ	―	―
911	11			14C-12・13	円	台形状	144	135	110	35.78	素掘り	―	Ⅰ	81	―
918	11	14		14C-5	円	U字状	92	79	133	35.83	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	257・258	―
919	11	14	60	14C-1・6	円	漏斗状	173	152	155	35.44	素掘り	ブロック状	Ⅰ	245～247	―
1107	11	14	61	13B-13・18	円	U字状	76	76	98	36.02	素掘り	レンズ状	Ⅳ	―	SE1108＜
1108	11	14	61	13B-13・18	円	台形状	112	97	102	35.98	素掘り	水平	Ⅳ	262～268	SE1107＞ P1290と重複
1023	16	17		16A-24	円	U字状	73	64	109	36.45	素掘り	斜め	Ⅱ～Ⅲ	254	P124＜
1035	11	14		14B-16	楕円	漏斗状	117	91	103	36.02	素掘り	水平	Ⅰ	181・182・84	―
1036	11	14		14B-6・11	円	漏斗状	138	116	151	35.62	素掘り	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	255・256	―
1039	11	14	61	14B-17	円	台形状	83	74	71	36.38	素掘り	水平	Ⅱ～Ⅲ	―	―
1040	33	35		15A-21	楕円	U字状	172	130推定	161	35.69	素掘り	水平	Ⅰ	155・259～261	SD107＞
1043	11	14	61	14B-22	円	U字状	89	83	77	36.27	素掘り	ブロック状	Ⅰ	211	―

土坑（SK）

遺構名	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ(cm)	底面高(m)	覆土	時期	出土遺物	切り合い関係
15	18	19		19B-16	楕円	孤状	83	67	14	37.44	斜め	古墳･古代	―	―
17	18	19	61	19B-1･6	楕円	孤状	225	161	58	37.14	レンズ状	古墳･古代	―	―
20	18	19	61	18B-16･17	長方形	孤状	103	62	16	37.3	レンズ状	古墳･古代	―	―
21	20	21	61	19B･19C･20B･20C	長楕円	孤状	916	345	57	36.95	レンズ状	Ⅳ	9･87	―
24	20			20B-3･4･8･9	楕円	孤状	73	46	16	37.59	単層	古墳･古代	―	―
25	18	19		17B-19･24	楕円	台形状	62	40	38	37.08	水平	古墳･古代	―	―
26	18			17B-15･20	楕円	台形状	88	65	36	37.19	レンズ状	古墳･古代	―	P36＞
27	18			17B-15	楕円	U字状	62	50	32	37.25	レンズ状	古墳･古代	―	―
28	18			17B-20	楕円	台形状	70	53	26	37.24	斜め	古墳･古代	―	―
29	18			17B-5･10	円	U字状	59	56	25	37.4	単層	古墳･古代	―	―
30	18			18B-6･7	楕円	孤状	94	66	7	37.6	単層	古墳･古代	―	―
112	33	35	61	15B-15･20	円	孤状	180	160	14	37.26	レンズ状	Ⅰ	―	―
113	33	35	61	16B-11	円	箱状	68	67	48	36.96	水平	Ⅰ	―	―
118	11	15	61	13B-20･25	円	孤状	217	204	44	36.56	レンズ状	Ⅰ	151･94	―
122	11	14		15C-7･12	円	漏斗状	84	81	66	36.46	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	113～115	―
133	16			16A-21･22	―	孤状	230以上	150以上	16	37.36	―	Ⅱ～Ⅲ	―	P134･P135＞
139	11	14		15B-21	方形	孤状	198	191	27	37	単層	Ⅱ～Ⅲ	―	P156＜
140	11			14C-4	楕円	孤状	103	69	11	36.97	―	古墳･古代	―	P143＞
149	16			15C-8	円	U字状	66	62	36	36.71	―	Ⅰ	―	―
152	16			15B-5	長方形	孤状	194	104	9	37.39	―	Ⅱ～Ⅲ	―	P190＞
154	18			17B-9	楕円	孤状	95	66	31	37.28	―	古墳･古代	―	―
158	33			15A-23	―	半円状	133	48以上	51	36.89	―	Ⅱ～Ⅲ	―	P1094＞
160	11	15	62	15B-16	円	半円状	77	74	75	36.5	水平	Ⅰ	158	P150＜
166	18			17B-14	楕円	半円状	70	50	29	37.27	―	古墳･古代	―	―
168	33			15B-9	長楕円	孤状	145	49	4	37.32	―	Ⅰ	―	―
169	16			16B-25	円	孤状	60	54	16	37.2	―	Ⅱ～Ⅲ	―	―
174	11	15	62	14C-8･9	楕円	孤状	119	100	15	36.87	単層	古墳･古代	―	P941･P175＞
192	33			15B-24	楕円	孤状	85	60	15	37.19	単層	Ⅱ	―	―
193	16	17	54	16B-21	円	孤状	180	170	18	37.15	水平	12C	85	SE194＞
217	11	15	62	13B-18･23	円	孤状	150	133	19	36.79	レンズ状	Ⅰ	103	P1467＞ P1468～P1472重複
218	29	32	62	11A-23	楕円	孤状	194推定	132	16	36.62	単層	Ⅱ～Ⅲ	131	P484･P450･P1480～ P1483＜P1485･ P1486＞
237	5	7	62	10B-17	方形	台形状	226	186	26	36.15	レンズ状	Ⅰ	74	P241･P248～P250＞ P1530＞
268	29	32		11B-1	楕円	孤状	95	68	13	36.55	単層	Ⅰ	―	―
269	22	28		11B-11	楕円	半円状	66	55	33	36.44	単層	Ⅰ	―	P296と重複
276	5	9	62	12B-7･8	長方形	孤状	278	192	18	36.61	単層	Ⅰ	―	P281･P275･P1308 (SB24)･P1421～ P1434･SK280･ SE209＞
280	5	9		12B-7･8	円	孤状	59	52	17	36.55	単層	Ⅰ	―	SK276･P1429＜
313	22	28		10B-20	楕円	孤状	95	56	19	36.57	単層	Ⅱ～Ⅲ	―	P1509＜
314				11C-7	円	半円状	65	59	34	36.09	水平	Ⅱ～Ⅲ	―	―
380	5	9	62	11C-16	楕円	半円状	60	46	26	36.19	斜め	Ⅱ～Ⅲ	―	SE264＞
382	22	28		10C-9	楕円	半円状	95推定	61	30	36.38	単層	Ⅱ～Ⅲ	―	P383･SK384＞ SE381･P1528＜
384	22	28		10C-9	楕円	孤状	84	56	17	36.45	斜め	Ⅱ～Ⅲ	―	P383＜
505	2	4		9B-11･16	長方形	孤状	195	103	30	36.27	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	―	P610＞P746と重複
890	18			18B-21	楕円	孤状	71	58	12	37.31	単層	古墳･古代	―	P892＞
893	20			20B-6･11	楕円	孤状	77	45	21	37.54	レンズ状	古墳･古代	―	―
899	18			18B-22	楕円	孤状	64	55	17	37.26	単層	古墳･古代	―	―
939	11	15	60	14B-22	円	U字状	101	92	88	36.19	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	―	―
961	33	35		15B-19	楕円	台形状	185	155	7	37.31	斜め	古墳･古代	―	―
996	18	19	62	17B-8	円	箱状	63	60	38	37.58	レンズ状	Ⅱ～Ⅲ	―	―
999	33			15A21･22	方形？	孤状	124以上	122	12	37.26	―	Ⅰ	―	―
1000	33			15A-22	円？	半円状	84	41	43	36.9	―	Ⅱ～Ⅲ	116･117	―
1017	18	19		17B-18	不整形	孤状	96	68	13	37.24	レンズ状	古墳･古代	23	P1291（SB22）＞
1031	33	35		14B-5	円	半円状	68	60	32	37.08	斜め	Ⅱ～Ⅲ	―	SD107＜
1032	11	15		14B-7･12	長方形	孤状	184	136	14	37.03	単層	Ⅱ～Ⅲ	―	P1079＞
1034	11	15	62	15B-6	円	箱状	99	96	36	36.99	水平	Ⅰ	―	SK1100＜
1041	11			13A-24	―	孤状	257	133以上	10	36.9	―	Ⅱ～Ⅲ	―	―
1042	11			14A-24･25	不整形	孤状	270	142	19	37.18	―	古墳･古代	―	SD107･SK1033･ P1063･P1073＞
1100	11	15		15B-6･11	不整形	孤状	185以上	145	12	37.27	単層	Ⅱ～Ⅲ	―	SK1034･P153＞
1103	11	15		12A-24･25	―	孤状	170以上	181	12	36.77	単層	Ⅱ～Ⅲ	―	P1113･SE213＞ P1112･P1114･P1115 と重複
1288				13C-10	長楕円	孤状	72	36	10	36.87	水平	古墳･古代	―	―
1289	11	15	62	13C-5･10	長方形	孤状	189	118	3	36.98	水平	古墳･古代	―	P1268＞

溝（SD）

遺構名	平面図	断面図	写真	グリッド	長さ（m）	幅（cm）	深（cm）	断面形	覆土	方位	傾斜	時期	出土遺物	切り合い関係
13	18	19	52	18A･18B	11.42	59～51	41	半円状	レンズ状	N90°E～N78°E	西→東	Ⅱ～Ⅲ	―	SD14＜
14	18	19	52	18A･18B･18C	18	143～52	28	U字状	レンズ状	N85°E～N75°E	西→東	Ⅱ～Ⅲ	―	SD13＞
32	18			18A･18B	3.17	52～16	5	孤状	単層	N75°E	西→東	Ⅱ～Ⅲ	―	SE31と重複
101	16	17	52	15A･15B･16A･16B･16C	16.4	70～201	22	孤状	レンズ状	N86°E N86°E	平坦	Ⅰ	―	P104･P105･P106＞ SE136＜
102	16	17	52	16A･16B･17B･17C	14.95	184～91	33	孤状	レンズ状	N87°E	平坦	Ⅱ～Ⅲ	―	SE144＜　P130･P131＞
106	16	17	52	15C･16C	17.15	131～111	16	孤状	レンズ状	N25°W	南→北	Ⅱ～Ⅲ	63	P126＞
107	33	34・35		14A･14B･15A･15B	12.88	71～34	17	孤状	水平	N86°E N76°W N86°W	平坦	Ⅰ	―	SK1031･SK1033＞ SK1042･SE108＜
111	33	34・35	52	15B･15C	10.92	60～26	20	半円状	レンズ状	N89°E N75°E	平坦	Ⅰ	8（古墳）･65	P997＞
116	16	17		16A･17A･17B	5.3	73～38	14	孤状	単層	N84°E	平坦	Ⅰ	66･67	SB23（P128）と重複 P127･P119･P120･P121＞
117	16	17	52	16A･16B･17A･17B	9.83	32～22	14	孤状	単層	N86°W	平坦	Ⅱ～Ⅲ	―	P129＞
201	5・11	10・15	47・53	11C･12A･12B･12C･13B･13C	東西 14.8 南北 13.7	172～150 178～120	73	V字状	レンズ状	東西 N84°E 南北 N 6°W	西→東 南→北	Ⅳ	68～71･161･226･49	SE208･SE212･SE213と重複 SE266･P1474･SD202･SD203＜
202	5	10	53	11B･12A･12B･12C	14.5	65～26	14	孤状	レンズ状	N79°E	西→東	Ⅱ	―	SD1322と接合 P1477･P1478･SD201＞P1478･SX279＜
203	5	10	53	11B･11C	13.3	106～21	21	台形状	―	N82°E～N68°E～N32°E～N82°E	西→東	Ⅱ	―	SD201･P1310･P297･P1442＞ P447･P1492･P1493･P1496～P1508･P327と重複
1021	16			16B･17B	5.8	42～20	7	孤状	―	N85°W	平坦	Ⅰ	―	―
1022	16			16A･16C	10.1	70～24	28	孤状	―	N60°E N79°E	平坦	Ⅰ	―	P1018＞
1322	5			12B	1.3	22	11	半円状	単層	N75°W	西→東	Ⅱ～Ⅲ	―	SD202と接合 P1479＜
1413	5	10		12B	2.7	30～16	5	孤状	単層	N89°W	西→東	Ⅱ～Ⅲ	―	SD202と接合 SX279＜

ピット（P）

遺構名	平面図	断面図	写真	グリッド	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ(cm)	底面高(m)	柱根（痕）	時期	出土遺物	切り合い関係
36				17B-20	楕円	U字状	43	30	57	36.97	柱根	―	―	SK26＜
103			63	16B-1	楕円	U字状	34	27	39	37.03	無	―	271	P104･P105＜
161				14B-24	円	U字状	25	24	50	36.66	柱根	―	272	SE137と重複
245				10C-2	―	U字状	26	10以上	84	35.62	柱根	―	―	SE234と重複
259			63	10B-24	方形	U字状	40	28	55	36	無	Ⅳ	147	SE224と重複
275			63	12B-8	円	U字状	30	29	34	36.43	柱根	―	―	SK276＜
288			63	11B-17	楕円	U字状	59	34	28	36.21	柱根	―	―	P386･P1446と重複 P1546＜
319				11C-2	円	U字状	36	30	50	36.13	柱根	―	275	P321･P318と重複 P1350＜
329				11B-13	楕円	階段状	43	34	51	36.27	無	Ⅰ	83	P330と重複 P1449と重複
387	22	28		10B-25	楕円	U字状	14	12	121	35.51	無		―	SE388＜
419				11C-2	円	U字状	40	36推定	56	36.07	柱根	Ⅰ	―	P414･P415と重複
439				10C-10	楕円	U字状	38推定	28	61	35.99	柱根	Ⅰ	―	P431と重複 P1399＜
462				10B-20	円	U字状	26	24	30	36.45	無	Ⅱ～Ⅲ	139	―
467				10C-4	楕円	U字状	32以上	27	48	36.26	無	―	159	P468と重複
468				10C-4	楕円	U字状	44	30	49	36.25	無	―	160	P467と重複
553	2	4		8B-18･19	円	台形状	30	28	84	35.72	無	―	―	―
648	2	4		9B-22	円	U字状	16推定	14	36	36.30	無	―	―	P649と重複
649	2	4	64	9B-21･22	円	階段状	26	22	56	36.04	有	―	―	P648と重複
655	2	4	64	9C-2	円	U字状	19	18	56	35.93	無	―	―	―
660			64	9C-3	円	階段状	33	31	39	36	柱根	―	―	―
723				9A-24	楕円	U字状	32	26	24	36.23	無	Ⅳ	146	―
895				19B-12	楕円	U字状	12	8	20	37.38	柱根	―	277	―
960				15C-2	円	U字状	35	29	54	36.62	柱根	―	273	―
1018				16B-2	楕円	階段状	42	24	83	36.71	無	Ⅱ	137	―
1019				16B-9	楕円	U字状	32	28	60	36.94	無	Ⅱ～Ⅲ	132	―
1037				14B-11･12	楕円	U字状	32	26	20	36.94	柱根	―	274	―
1044				14C-5	楕円	階段状	45	30	61	36.56	柱根	―	―	―
1045				14B-23	円	U字状	26	19	18	36.92	無	Ⅰ	89	―
1174				13B-12	円	階段状	29	26	53	37.02	柱根	―	―	―
1187				13B-16	円	U字状	18	16	30	36.70	無	―	57	―
1195				13B-17	円	階段状	29	25	59	36.4	柱根	―	―	―
1199			65	13B-19	楕円	階段状	32	22	38	36.6	柱根	―	―	―
1247				13C-2	円	階段状	29	27	50	36.41	柱根	Ⅳ	―	―

土器観察表（胎土：石＝石英、白＝白色粒子、雲＝雲母、チャ＝チャート）

報告番号	種別	器形	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	口径（㎜）	器高（㎜）	底径（㎜）	色調（外面）	色調（内面）	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
1	土師器	長胴甕	15B	4	SI	1038	床	156	247	70	橙	浅黄橙	礫・白・石・雲	口縁：ヨコナデ、体部外面：タテハケ（下→上）、体部内面：ヨコハケ（右→左）	体部外面：スス	
2	土師器	長胴甕	15B	4	SI	1038	床	176			にぶい橙	にぶい橙	白・石・チャ・礫	外面：口縁ヨコナデ・胴部タテハケ(下→上)、内面：胴部ヨコハケ（右→左）	外面：スス	
3	土師器	長胴甕	15B	4	SI	1038	床	160			にぶい橙	にぶい橙	石・チャ	口縁：ヨコナデ、体部外面：タテハケ（下→上）、体部内面：ヨコハケ	体部外面：スス	ハケメ粗い
4	土師器	長胴甕	15B	4	SI	1038	床			86	橙	褐灰～黒	礫・白	底部内外面:ヨコハケ、体部外面：タテハケ	被熱	
5	土師器	椀	15B	2	SI	1038	床	105	49	57	褐灰	にぶい橙	白・石・雲・角閃石	口縁：ヨコナデ		
6	土師器	甑	15B	4	SI	1038	床	240	233	113	にぶい橙	にぶい橙	石・白・礫・角閃石	外面：口縁ヨコナデ・胴部タテハケ・把手ケズリ、内面口縁ナデ・胴部ナナメハケ		
7	土師器	甑	15B	3	SI	1038	Pit底部	229	185	104	にぶい橙	にぶい橙	白・石・チャ・礫・海綿骨針	外面：口縁ヨコナデ・胴部タテハケ、内面：ヨコハケ→ナデ、体部最下部に側面から穿孔		内外面に朱色の付着物有(赤彩？)
8	土師器	長胴甕	15B	23	SD	111	1	(200)			にぶい橙	にぶい橙	礫・長・石・角閃石	口縁：ヨコナデ、胴部外面：タテハケ、胴部内面：ヨコハケ		
9	土師器	壺	20B・20C		SK	21	中部			57	にぶい橙	にぶい橙	石・白・チャ・礫	内面：ヨコハケ		
10	土師器	無台杯	13C	3			Ⅳ	133	50	45	褐灰	灰黄褐	長・白・チャ(粗い)	外面：ヨコナデ、内面：ヨコナデ→ミガキ		
11	土師器	高杯	22B		SX	23	8				灰黄褐	杯部：黒、脚部：灰黄	白・石・チャ	外面：ヘラ削り、杯部内面：ミガキ・黒色処理、脚部内面：ナデ		
12	須恵器	無台杯	22C		SX	23	8	136	42	74	灰	灰	長・礫	ロクロナデ、回転ヘラ切り→ヘラ削り		
13	須恵器	無台杯	22B		SX	23	8	145	46	112	にぶい褐	褐灰	長・石・礫	ロクロナデ、回転ヘラ切り→ヘラ削り		ヘラ記号「×」
14	須恵器	有台杯	22B		SX	23	8	155	40	100	灰	褐灰	白・石・礫	ロクロナデ、回転糸切り→ナデ→高台貼付		
15	土師器	無台杯	22C		SX	23	8	120	40	60	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・長・チャ	ロクロ→ヨコナデ、底部：ヘラ削り		
16	須恵器	無台杯	22B		SX	23	8	124	35	80	灰黄褐	灰黄褐	白・チャ	ロクロナデ、回転ヘラ切り		
17	須恵器	有台杯	22B		SX	23	8	98	54	58	灰	灰	白・石	ロクロナデ、回転ヘラきり→高台貼付		墨書「里」
18	須恵器	有台杯	22B		SX	23	8			96	灰	灰	白・チャ	ロクロナデ、回転糸切り→高台貼付		墨書「南」
19	須恵器	杯蓋	22B		SX	23	8	(178)	31		オリーブ灰	灰	白	ロクロナデ、つまみ部貼付、外面：自然釉		
20	須恵器	壺	22B		SX	23	8			144	灰	灰白	白・石	ロクロナデ、高台貼付		
21	須恵器	甕	11C	17	SX	204	1	(630)			灰	灰	白	内外面：ロクロナデ、外面：波状文		
22	須恵器	甕	9B	13・18	SE	506	上部	(410)			灰	灰	白・石	ロクロナデ		焼成：還元硬質
23	土師器	長胴甕	17B	18	SK	1017	1	108			浅黄橙	浅黄橙	チャ・石・白	口縁内外面：ロクロナデ、体部外面：カキ目		
24	土師器	甕	12B	22	SX	279	1	242	322	38	橙	浅黄橙	白・石・雲・チャ	口頸部内外面：ヨコナデ、体部外面：ヘラケズリ（下→上）	外面：スス	
25	須恵器	無台杯	11C	19	SX	204	5	118	38	60	灰白	灰白	石・雲	ロクロナデ、回転糸切り		
26	土師器	無台杯	11C	19	SX	204	5			49	にぶい橙	にぶい褐	白・石（きめ細かい）	ロクロナデ、回転糸切り	内外面：タール状付着物	
27	製塩土器				SX	204	6			60	明赤褐	明赤褐	白・石	手づくね		
28	土師器	無台杯	11C	20	SX	204	4	97	29	47	にぶい橙	にぶい橙	白・長・雲・海綿骨針	ロクロナデ、回転糸切り		
29	土師器	無台杯	11C	20	SX	204	4	99	24	47	にぶい橙	にぶい橙	白・雲（きめ細かい）	ロクロナデ、回転糸切り	内外面上半：スス	
30	土師器	無台杯	11C	20	SX	204	2・4	101	28	48	にぶい橙	にぶい橙	白・石・雲（きめ細かい）	ロクロナデ、回転糸切り		
31	土師器	無台杯	11C	19・20	SX	204	3	98	28	40	にぶい橙	にぶい橙	白・石・雲（きめ細かい）	ロクロナデ、回転糸切り		
32	土師器	無台杯	11C	19	SX	204	3	100	25	53	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白・雲	ロクロナデ、回転糸切り		
33	土師器	無台杯	11C	20	SX	204	3	97			にぶい橙	にぶい橙	長・石・雲（きめ細かい）	ロクロナデ		
34	土師器	無台杯	11C	19	SX	204	3	(103)	30	48	褐灰	灰黄褐	白・石・雲	ロクロナデ、回転糸切り	内外面：スス	
35	土師器	無台杯	12C	18	SX	204	3	127	44	56	褐灰	褐灰	白・雲・チャ	ロクロナデ、回転糸切り		
36	土師器	無台杯	11C	20	SX	204	3	126	42	63	にぶい橙	にぶい橙	白・赤色粒子・チャ	ロクロナデ、回転糸切り		

報告番号	種別	器形	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	色調（外面）	色調（内面）	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
37	土師器	有台椀	11C	19	SX	204	2・3	140	61	77	明褐灰	にぶい黄橙	白・石・雲・チャ	ロクロナデ、高台貼付		
38	土師器	椀	11C	19	SX	204	2・3	150			にぶい橙	黒	白・石・チャ	ロクロナデ、内面：ヨコミガキ→タテミガキ→黒色処理		
39	灰釉陶器	皿	12C	18	SX	204	3				灰白	オリーブ灰	白（精良）	ロクロナデ、内外面施釉、畳付より内側は露胎		
40	土師器	無台杯	11C	19	SX	204	2	106	35	51	にぶい褐	にぶい褐	白・長・石	ロクロナデ、回転糸切り		
41	土師器	無台杯	11C	15	SX	204	2	103	32	45	黄灰	灰黄褐	雲・海綿骨針・石	ロクロナデ、回転糸切り	内面：スス	
42	土師器	有台皿	11C	17	SX	204	2	105	33	59	にぶい橙	灰褐	石・白・雲	ロクロナデ、回転糸切り→高台貼付	内面：スス	
43	土師器	有台杯	11C	18	SX	204	2			77	褐灰	灰黄褐	白・石	ロクロナデ、回転糸切り→高台貼付	内面：スス、口縁部：打欠	
44	土師器	有台杯	11C	19	SX	204	2				褐灰	にぶい赤褐	白・石・雲	ロクロナデ、回転ヘラ切り→高台貼付、内面：暗文	内面：スス、被熱	暗文：放射状
45	灰釉陶器	有台椀	11C	17	SX	204	2			74	灰白	灰白	石	ロクロナデ、高台貼付	内外面：タール状付着物	破損後にタール付着
46	土師器	皿	11C	14	SX	204	1	79	19	46	にぶい橙	にぶい橙	白・雲・チャ	ロクロナデ、回転糸切り	内面：スス	スス微量
47	土師器	有台皿	11C	19	SX	204	1	102	29	60	灰褐	褐灰	白・石・雲	ロクロナデ、回転糸切り→高台貼付	内面・口縁端部：スス	
48	白磁	碗	13C	14	SX	204	1				灰	灰白		内外面施釉、体部下半露胎		
49	土師器	杯	12C	12	SD	201	1			71	にぶい黄橙	黒	石・白	ロクロナデ、回転糸切り、内面：ミガキ→黒色処理		
50	灰釉陶器	有台皿	12C	12	SX	204	1			(71)	灰白	灰白	白（きめ細かい）	ロクロナデ、高台貼付、施釉		
51	灰釉陶器	梅瓶			SX	204	不明							ロクロナデ、外面施釉		
52	灰釉陶器	不明	12C	11	SX	204	2～3			100	灰白	灰白	白（微量、きめ細かい）	ロクロナデ、回転ヘラ切り→高台貼付、内面・外面：施釉	胴底部界：打欠	
53	珠洲焼	壺R種	13C	16	SX	204	1			115	灰	灰	白・石	ロクロナデ、回転糸切り		焼成：還元硬質
54	珠洲焼	鉢	12C	11	SX	204	1			134	灰	灰	海綿骨針・礫・白	ロクロナデ、内面卸目1単位9条	内面・底面：擦れ痕	焼成：還元硬質
55	珠洲焼	甕	13C	12	SX	204	1	480			灰	灰	白・石	ロクロナデ、外面：平行タタキ、内面：無文タタキ		焼成：還元硬質
56	珠洲焼	甕	13C	12～22	SX	204	1	400			灰	灰	石	ロクロナデ、外面：平行タタキ、内面：無文タタキ		焼成：還元硬質
57	珠洲焼	甕	12C 13B	20 16	SX P	204 1187	1			196	灰	灰	石・白	ロクロナデ、外面：平行タタキ、砂底	破損後スス付着	焼成：還元硬質、被熱
58	珠洲焼	甕	12C	11	SX	204	1			140	灰	灰	白・長	外面：平行タタキ、内面：無文当て具	内面平滑	焼成：還元硬質
59	青磁	碗			SX	23	1	158			オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉		劃花文
60	土師器	無台杯	18C	16	SX	23	1			70	にぶい橙	にぶい橙	白・石・長	ロクロナデ、回転糸切り		柱状高台
61	珠洲焼	鉢	18C	16	SX	23	1				灰	灰	白・石	ロクロナデ、内面卸目1単位7条（蛇行）		焼成：還元硬質
62	珠洲焼	鉢			SX	750	1				褐灰	にぶい橙	白・石	ロクロナデ、内面卸目1単位7条（粗い）	漆接ぎ痕跡	焼成：酸化軟質
63	青磁	碗	15C	17	SD	106	底部			48	オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉、高台畳付～内面：露胎、高台内端接地、外面施釉は一部畳付にまわり、削り取る		劃花文
64	青白磁	皿	16B	17	SD	101	1	(200)			白	白		ロクロナデ、口縁端反り、内外面施釉		劃花文
65	青白磁	皿	15B	23	SD	111	1	(100)			白	白		ロクロナデ、口縁端反り、波状口縁、内外面施釉		
66	珠洲焼	鉢	17B	1	SD	116	1	297			灰	灰	白・石	ロクロナデ		焼成：還元硬質
67	青磁	碗	17B	1	SD	116	1	146			オリーブ灰	オリーブ灰		ロクロナデ、内外面施釉		
68	珠洲焼	壺			SD	201	1	222			灰	灰白	白・長	ロクロナデ	口縁端部：打欠？	焼成：還元硬質
69	珠洲焼	鉢			SD	201	1	286			灰	灰	白・石	ロクロナデ		焼成：還元硬質
70	珠洲焼	鉢	12B	15	SD	201	1				灰	灰	白・石	ロクロナデ、片口作出		焼成：還元硬質
71	珠洲焼	鉢	12B	25	SD	201	1	(370)			灰	黒	白・石	ロクロナデ、口縁端部：波状文		焼成：還元硬質
72	土師器	有台皿	11A	25	SE	207	1			57	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白・石・礫	ロクロナデ、高台貼付	口縁部：打欠	
73	灰釉陶器	皿	9B	19	SE	507	1・2			60	灰白	灰白	精良	ロクロナデ、高台内端接地、体部内外面：施釉		

報告番号	種別	器形	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	色調（外面）	色調（内面）	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
74	土師器	杯	10B	17	SK	237	2	122			灰黄褐	灰黄褐	白・石・雲	ロクロナデ		
75	土師器	杯	11B	2	SE	220	3	140			灰白	灰白	白・石	ロクロナデ		
76	土師器	有台椀	12C	2	SE	210	9	(131)	(50)	64	にぶい黄橙	黒	石・雲・白・海綿骨針	ロクロナデ、回転糸切り→高台貼付、内面：黒色処理・暗文		暗文：「十」字状
77	土師器	有台椀か小甕	12C	2	SE	210	底部			65	黒	黒	白・石（きめ細かい）	ロクロナデ→ヨコミガキ→黒色処理内外面）、高台貼付		55と同一か、11世紀
78	土師器	無台杯	12C	2	SE	210	8			54	灰黄褐	褐灰	白・海綿骨針・雲	ロクロナデ、回転糸切り		
79	土師器	小甕	12C	2	SE	210	底部	213			褐灰	黒	白・石（きめ細かい）	ヨコナデ→ヨコミガキ、内面：黒色処理		54と同一か、11世紀
80	土師器	皿	11C				暗渠	95	26	44	にぶい橙	にぶい橙	白・石（きめ細かい）	ロクロナデ、回転糸切り	内外面：タール状付着物	付着物多量
81	土師器	皿	14C	12・13	SE	911	中部	78	19	49	灰黄	灰黄	白・雲・チャ	ロクロナデ、回転糸切り		
82	土師器	皿	11B	4			Ⅳ	84	19	47	橙	橙	白・長・雲	ロクロナデ、回転糸切り		
83	土師器	皿	11B	13	P	329	1	81	15	53	橙	橙	石・雲・チャ	ロクロナデ、回転糸切り	内面：スス	スス微量
84	土師器	皿	14B	16	SE	1035	5			54	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白・石・チャ	ロクロナデ、回転糸切り	口縁部：打欠	
85	土師器	皿	16B	21	SK	193	3			(40)	橙	にぶい橙	白・赤色粒子	ロクロナデ、回転糸切り、柱状高台		
86	土師器	無台杯	20A	23・24	SE	19	底部			76	灰黄	灰黄	石・白	ロクロナデ、回転糸切り	口縁部：打欠	
87	白磁	碗	20B・20C		SK	21	2				灰白	灰白				
88	青白磁	皿	8A	24	SE	503	1	96	20	42	明青灰	明青灰		ロクロナデ、口縁端反り、回転糸切り、波状口縁、内外面施釉（底部外面除く）		
89	白磁	碗	14B	23	P	1045		154			灰白	灰白		内外面施釉、口縁：玉縁状	被熱？	
90	珠洲焼	鉢	14C	2・3	SE	123	1	(280)			灰	灰	石・白	ロクロナデ	内外面：スス	焼成：還元硬質
91	珠洲焼	鉢	14C	2・3	SE	123	下部	(228)			灰	灰	白・礫	ロクロナデ		焼成：還元硬質
92	白磁	椀	14C	2・3	SE	123	中部			60	灰白	灰白		内外面施釉、高台露胎		劃花文
93	珠洲焼	甕	14C	2・3	SE	123	下部	426			灰	灰	白・石	口縁部内外面：ヨコナデ、体部外面：平行タタキ、体部内面：無文当て具	外面～口縁部内面：スス	内面に墨書による記号
94	青磁	椀	13B	20・25	SK	118	1	168			オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉、口縁：端反り		劃花文
95	珠洲焼	壺R種	20A	22	SE	22	3・4			78	灰	灰	白・石	ロクロナデ、回転糸切り→木目状圧痕、体部外面波状文	内面：スス	焼成：還元硬質
96	土師器	皿	12A	22・23	SE	208	1	82	29	40	にぶい橙	にぶい橙	長・石・チャ・雲	ロクロナデ、回転糸切り、柱状高台を意識	内面：スス	
97	珠洲焼	壺	12A	22・23	SE	208	8			78	灰	灰	白・石	ロクロナデ、静止糸切り→木目状圧痕		焼成：還元硬質
98	珠洲焼	甕か壺	14B	18・23	SE	115	7				灰	灰	石・白	外面:平行タタキ(密)、内面：無文タタキ		焼成：還元硬質
99	珠洲焼	甕	14B	18・23	SE	115	7	416			灰	灰	石・白	ロクロナデ		焼成：還元硬質
100	珠洲焼	鉢	20A	23・24	SE	19	底部	262			灰	灰	白・石・礫	ロクロナデ		焼成：還元硬質
101	土師器	有台杯	20A	23・24	SE	19	底部			78	にぶい黄橙	にぶい黄橙	白・石（きめ細かい）	ロクロナデ、回転糸切り→高台貼付		
102	珠洲焼	鉢	15C	2	SE	141	1	307			灰	灰	白・石	ロクロナデ		焼成：還元硬質
103	珠洲焼	甕	13B	18・23	SK	217	1	308			灰	灰	石	ロクロナデ、内面：段を作出		焼成：還元硬質
104	土師器	皿	9B	21	SE	504	2	72			褐灰	褐灰	石・白	手づくね		
105	土師器	皿	9B	21	SE	504	3	90	16	70	褐灰	褐灰	石・白	手づくね	内外面：スス	
106	土師器	皿	9B	21	SE	504	2	(100)	19	(74)	灰黄	灰黄	石・白	手づくね		
107	青磁	碗	9B	21	SE	504	3	168			オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉、口縁端反り		劃花文
108	珠洲焼	壺	9B	21	SE	504	3			96	灰	灰白	白・石	ロクロナデ、静止糸切り→木目状圧痕		焼成：還元硬質
109	珠洲焼	壺	9B	21	SE	504	2			114	灰白	灰	長・白・雲	ロクロナデ、砂底		焼成：酸化硬質
110	土師器	皿	15C	1	SE	138	1	(140)			浅黄橙	浅黄橙	石・チャ	手づくね		
111	青磁	碗	15C	1	SE	138	4				オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉		劃花文
112	青磁	碗	15C	1	SE	138	1				オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉		劃花文
113	土師器	皿	15C	7・12	SK	122	1	80	15	41	淡黄	淡黄	白・雲（きめ細かい）	手づくね		

観察表

報告番号	種別	器形	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	口径（mm）	器高（mm）	底径（mm）	色調（外面）	色調（内面）	胎土	製作痕跡	消費痕跡	備考
114	青磁	碗	15C	7・12	SK	122	2	(173)			オリーブ灰	オリーブ灰		ロクロナデ、内外面施釉		
115	青磁	碗	15C	7・12	SK	122	2			46	オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉、畳付より内面露胎		
116	土師器	皿	15A	22	SK	1000	下部	13			黄灰	黒	白・石	手づくね（底部はケズリ？）	内面:タール状付着物、外面：スス	
117	土師器	皿	15A	22	SK	1000	中部	84	14	50	褐灰	黄灰	雲・白・石	手づくね		
118	土師器	皿	10B	15	SE	221	1	(139)			にぶい黄橙	にぶい黄橙	石・白・角閃石・赤色粒子	手づくね		
119	青磁	碗	10B	15	SE	221	12				明緑灰	明緑灰				蓮弁文
120	珠洲焼	鉢	10B	15	SE	221	1	(160)			灰	灰	白・礫	ロクロナデ		焼成：還元硬質
121	土師器	皿	16B	21	SE	194	3	132	36	85	灰黄褐	にぶい黄橙	白・石・雲	手づくね		
122	青磁	碗	16B	21	SE	194	1	174			オリーブ灰	オリーブ灰		ロクロナデ、内外面施釉		
123	土師器	皿	10C	8	SE	239	1	81	16	36	灰白	灰白	石・チャ	手づくね		
124	珠洲焼	壺T種	10C	8	SE	239	1				灰	灰	白・石	外面：平行タタキ、内面：無文タタキ		焼成：還元硬質
125	土師器	皿	14B	13	SE	114	下部	134	30	76	灰白	灰白	白・石	手づくね	内面：スス	
126	土師器	皿	15B	13	SE	196	下部	100	28	63	にぶい橙	にぶい黄橙	白・石・チャ	手づくね		
127	土師器	皿	10B	23	SE	258	1	(90)	18	(68)	灰白	灰白	石・白	手づくね		
128	土師器	皿	10B	11・16	SE	238	4	80	16	42	灰黄褐	黒褐	白・石	手づくね、底部ケズリ		
129	珠洲焼	壺R種	12B	21			Ⅳ	47			明褐灰	明褐灰	白・石	ロクロナデ		焼成：酸化硬質
130	珠洲焼	壺R種	13B	21	SE	216	11				灰	灰	白・石	ロクロナデ、外面：波状文		焼成：還元硬質
131	珠洲焼	壺T種	11A	23	SK	218	1				灰	灰	石・白	体部外面：平行タタキ、体部内面：無文当て具		焼成：還元硬質
132	珠洲焼	壺	16B	9	P	1019				110	灰	灰	海綿骨針・白・長		内面平滑、底面炭化物	焼成：還元硬質
133	珠洲焼	鉢	10C	5	SE	442	底部			100	灰白	灰	白・長・石	ロクロナデ、静止糸切り	被熱	焼成：酸化硬質
134	珠洲焼	壺	12A	24	SE	213	1			93	灰	褐灰	白・石	ロクロナデ、静止糸切り		焼成：還元硬質
135	珠洲焼	鉢	14B	24	SE	137	4	(258)			灰	灰黄	白・石	ロクロナデ、内面卸目1単位9条		焼成：還元硬質
136	珠洲焼	鉢	12A	24	SE	213	1	(258)			灰白	灰白	石・白	ロクロナデ		焼成：還元軟質
137	珠洲焼	鉢	16B	2	P	1018				125	灰	灰	長・石	ロクロナデ、静止糸切り、卸目波状文		焼成：還元硬質
138	珠洲焼	壺R種	11C				暗渠				灰	灰	白・礫	ロクロナデ、印花文刻印		焼成：還元硬質
139	青磁	碗	10B	20	P	462	1	(162)			オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉		劃花文
140	青磁	碗	10B	16	SE	252	3	150			オリーブ黄	オリーブ黄		内外面施釉		片切彫の鎬蓮弁文
141	青白磁	梅瓶	10C	6・7	SE	243	1	20			明緑灰	明緑灰		口縁部内外面施釉		
142	青磁	碗	11C	6・11	SE	211	3				オリーブ灰	オリーブ灰		内外面施釉		劃花文
143	青磁	皿？	11C	6・11	SE	211	4			92	黄褐	黄褐		ロクロナデ、高台畳付、内外面施釉畳付の内側も施釉、畳付は施釉後に削り取り		米色青磁
144	珠洲焼	鉢	10B	22・23	SE	234	6	318	152	110	灰	灰	白・石	ロクロナデ、静止糸切り→木目状圧痕、内面卸目1単位18条	内面平滑、底部内外面：スス	焼成：還元硬質
			10C	5	SE	223	底部									
145	珠洲焼	甕か壺	10C	5	SE	223	3			152	褐灰	褐灰	白・石	外面：ロクロナデ→平行タタキ、内面：ロクロナデ→無文タタキ、底面：砂底	被熱	焼成：還元硬質
146	土師器	皿	9A	24	P	723		69	19	56	灰白	灰白	チャ・石	ロクロナデ、回転糸切り		
147	土師器	皿	10B	24	P	259	上部	77	16	56	明褐灰	明褐灰	石（きめ細かい）	ロクロナデ、回転糸切り	内面・口縁端部：スス	
148	瀬戸美濃	天目茶碗	9C	9	SE	510	1			36	灰白	黒		底部：回転糸切り→ケズリ・ナデ、内面施釉	体底部界：打欠	
149	珠洲焼	鉢	9C	9	SE	510	5	234	91	97	灰白	灰白	海綿骨針・礫	ロクロナデ、静止糸切り、内面卸目1単位10条	内面平滑	焼成：還元軟質
150	珠洲焼	壺T種	9C	10	SE	511	不明				灰	灰	白・石	外面：平行タタキ（粗い）、内面：無文タタキ→ヨコナデ		焼成：還元硬質（酸化気味）、薄手

石製品・鉄製品観察表

報告番号	種別	分類	石材	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	備考
151	石製品	凹石状石製品	安山岩	13B	20・25	SK	118	2	165	126	92	1798.6	
152	石製品	凹石状石製品	安山岩	14B	18・23	SE	115	7	149	115	62	1191.8	
153	石製品	敲石状石製品	安山岩	14B	18・23	SE	115	7	76	75	69	545.8	被熱
154	石製品	砥石	凝灰岩	10B	15	SE	221	上	101	58	20	144.3	被熱、伊予産？
155	石製品	砥石	凝灰岩	15A	21	SE	1040	6	47	26	15	20.5	被熱
156	石製品	砥石	凝灰岩	10B	25	SE	222	2	70	35	30	98.8	
157	石製品	砥石	砂岩	12C	18	SX	204	3	96	45	35	176.2	被熱
158	石製品	硯	滑石	15B	16	SK	160	2	57	37	22	92.6	被熱、温石からの転用
159	鉄製品	馬具		10C	4	P	467	上	82	―	―	103.2	轡部分
160	鉄製品	鎌		10C	4	P	468	上	77	38	8	41.6	
161	鉄製品	鑿？		12B	15	SD	201	3	30	18	10	7.7	
162	鉄製品	釘		10B	24	SE	224	1	49	7	5	5.7	
163	鉄製品	釘		9B	21	P	528		56	9	6	5.7	
164	鉄製品	釘		10C	5	SE	223	1	40	7	5	8.3	
165	鉄滓	椀形滓		10C	5	SE	223	1・2	63	38	28	98.9	メタル度Ｌ
166	銭貨	熙寧元寶		10C	5	SE	223	1	24		1	1.8	真書・裏面無文
167	銭貨	天禧通寶		20C	15			Ⅳ	25		1	1.9	真書
168	銭貨	不明		15B	15	P	1020	1	25		5	12.8	４枚付着
169	銭貨	天聖元寶		15B	15	P	1020	1	25		1	3.3	篆書・裏面無文
170	銭貨	皇宋通寶		15B	15	P	1020	1	25		1.8	3.2	篆書
171	銭貨	開元通寶		15B	15	P	1020	1	22		1.1	2.6	真書・裏面無文
172	銭貨	開元通寶		15B	15	P	1020	1	24		1.2	2.1	真書・裏面無文
173	銭貨	天聖元寶		15B	15	P	1020	1	25		1	3.6	篆書・裏面無文
174	銭貨	嘉泰通寶		15B	15	P	1020	1	22		1	2.4	真書・裏面三

木製品観察表

報告番号	分析番号	種別	器種	樹種	木取り	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	長さ･口径（mm）	幅･底径（mm）	厚さ･器高（mm）	製作痕跡等	備考
175	69	木製品	有頭状	スギ	芯外し	22C		SX	23	8	150	16	14	ケズリにより断面多角形に成形→一端に頭部作出	
176	62	建築材？		オニグルミ	柾目	22C		SX	23	8	233	115	58	臍作出	
177	60	木製品	曲物･底板	スギ	柾目	22C		SX	23	8	166	46	9	曲物破損→中央に穿孔	
178	61	木製品	挽物･素材	スギ	柾目	22C		SX	23	8	135	140	27		腐蝕顕著
179	70	木製品	棒状	スギ	芯外し			SX	204	3	211	16	15	ケズリにより断面多角形に成形	
180	67	漆器	椀	ケヤキ	横木取り	14C	2･3	SE	123	下部		78		内面黒漆塗布	
181	36	漆器	椀	ケヤキ	横木取り	14B	16	SE	1035	底部		78		ロクロ挽き（留具痕）→底面ケズリ→内外面：黒漆塗布	底面「×」字刻
182	14	木製品	櫛	イスノキ	縦木取り	14B	16	SE	1035	7	28	53	6	解櫛	
183	93	木製品	杭	ヤナギ属	芯持樹皮付き	14B	18･23	SE	115	7	120	40	40	斧の侵入角：浅角度	
184	94	木製品	分断材	カエデ属	芯持樹皮付き	14B	18･23	SE	115	7	218	88	74	斧の侵入角：急角度、求心的加工痕構成	
185	16	木製品	コモヅチ	クリ	板目樹皮付き	12A	22･23	SE	208	6	55	151	31	伐採後に縦位分割→器体中央に刻み作出	
186	75	木製品	針状	スギ		14B	13	SE	114	中部	60	12	6	ケズリにより先端を尖らせ、表面平坦部に溝を刻む	全面炭化
187	97	木製品	杵	モクレン属	芯持	14B	24	SE	137	4	139	398	104	端部加工痕不明瞭、側面枝打ち痕	
188	3	木製品	椀	ケヤキ	横木取り	15C	1	SE	138	7	136	74	53	ロクロ挽き→底面ケズリ･「×」字刻、ロクロ挽き留具痕	
189	26	鉄製品＋木製品	錐	ヤナギ属	芯通	15C	1	SE	138	底部	133	15	15	木質部ケズリで断面多角形	錐部断面：正方形、基部断面：円形
190	81	木製品	箱･底板	スギ		15C	1	SE	138	4	104	98	5	表裏ケズリ、縁辺に釘孔	部分的に炭化
191	83	木製品	半割材	クリ	半裁？	15C	1	SE	138	4	104	67	30	縦断面台形状	
192	4	木製品	杭状	クリ	芯持	15C	1	SE	138	7	113	12	12	１方向からの加工面構成	
193	51	木製品	杓子？	スギ	柾目	15B	13	SE	196	下部	113	39	4	端部：丸みを作出	
194	71	木製品	箸？	スギ	削り出し	13B	21	SE	216	中部	178	7	3	ケズリにより断面扁平に成形	
195	63	木製品	曲物･底板	スギ	柾目	10B	15	SE	221	13	123	96	8	曲物破損→中央に穿孔･破損面付近ケズリ	表面：線状痕
196	78	木製品	方形曲物･底板	スギ	斜め板	10B	15	SE	221	13	133	54	4	表裏ケズリ、表裏と側面に釘孔	
197	22	木製品	有頭状（浮子？）	スギ	板目	10B	15	SE	221	13	199	22	10	両端に切り残し痕あり	
198	76	木製品	ペン先状（荷札？）	ヒノキ	柾目	10B	15	SE	221	12	117	20	3	ケズリにより先端を尖らせる、他端には２ヶ所の穿孔	
199	119	木製品	角柱状	スギ	芯外し	10B	15	SE	221	13	127	15	12	ケズリにより断面角柱状に成形	
200	73	木製品	有孔板材	ヒノキ	柾目	10B	15	SE	221	13	67	30	5	板材作出後に粗く穿孔	
201	68	漆器	椀	ケヤキ	横木取り	10C	8	SE	239	5	152	84	48	内面黒漆塗布	
202	28	木製品	櫛	イスノキ	縦木取り	10B	11･16	SE	238	4	24	57	6	解櫛	黒色腐蝕層
203	52	木製品	曲物･側板	スギ	柾目	12A	24	SE	213	8	212	28	11	内面ケビキ線、木釘による接合	炭化･破損
	52-1		曲物･側板木釘	スギ	削り出し	12A	24								

報告番号	分析番号	種別	器種	樹種	木取り	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	長さ・口径（㎜）	幅・底径（㎜）	厚さ・器高（㎜）	製作痕跡等	備考
204	9	木製品	毬杖（打杖）	クヌギ節	芯持、分枝部	12A	24	SE	213	8	229	96	24	機能部は幹、柄は分枝部	柄の直径20㎜
205	48	木製品	曲物・底板	スギ	板目	12A	24	SE	213	8	289	112	13	破損面に釘孔	表面：線状痕
206	105	建築材	板材	スギ	板目	12A	24	SE	213	5	654	117	19		両端部炭化
207	88	木製品	杓子	ヒノキ	柾目	16B	6	SE	136	5	151	38	5	表裏ケズリ、先端部薄手	
208	90	木製品	板材	スギ	柾目	16B	6	SE	136	5	250	66	8	上端・側縁切断	
209	89	木製品	有頭状（浮子？）	スギ	板目	16B	6	SE	136	5	98	19	7	ケズリにより頭部作出	頭部破損
210	87	木製品	櫛	イスノキ	縦木取り	16B	6	SE	136	5	91	44	11	梳櫛	
211	35	漆器	椀	ケヤキ	横木取り	14B	22	SE	1043	6		77		外面黒漆塗布、破損後の再加工	内面わずかに炭化
212	92	木製品	不明	トチノキ	板目	12B	13	SE	209	8	300	181	17	表裏面削りにより扁平状作出	表裏面：線状痕
213	74	木製品	盤？	トチノキ	板目	12B	13	SE	209	6	112	46	12	ケズリ	
214	20	木製品	扇	スギ	板目	12B	13	SE	209	6	112	14	4	ケズリ、基部穿孔	
215	21	木製品	扇	スギ	板目	12B	13	SE	209	6	134	15	2	ケズリ、基部穿孔	
216	8	漆器	椀	ブナ属	横木取り	10B	22・23	SE	234	6		68		ロクロ挽き→内外面：黒漆塗布	内面：赤漆で「上」
217	66	木製品	皿	ブナ属		10B	22・23	SE	234	6	107	77	13	ロクロ挽き	全面炭化、漆器か
218		炭化穎塊		イネ		10B	22・23	SE	234	6	80	88	36	表面に圧迫痕と平坦面	
219	11	木製品	槌	ヌルデ	芯持	10B	22・23	SE	234	底部	139	73	72	柄の結合部は断面角柱状	
	12		槌・柄	コナラ節	芯外し						77	15	20		
220	24	木製品	曲物・側板	ヒノキ	柾目	10B	22・23	SE	234	底部	227		75	内面ケビキ線、木釘を用いず接合	
	25		曲物・側板留具	樹皮											
221	23	木製品	曲物・底板	スギ	柾目	10B	22・23	SE	234	底部	187	211	12	断面「ハ」字状、記号	表面端部に使用痕
222	50	木製品	端部加工材	カエデ属	芯持	10B	22・23	SE	234	7	290	41	42	細く仕上げた端部に平坦面	上端炭化
223	82	木製品	杭	カエデ属	芯持	10B	22・23	SE	234	7	172	48	31	枝打ち痕あり	
224	104	建築材	柱根？	クリ	芯持	10B	22・23	SE	234	7	1092	138	120	求心的加工痕構成	
225	2	漆器	椀	ブナ属	横木取り	9C	9	SE	510	下部		62		ロクロ挽き→底面削り→内面・外面体部：赤漆、底部外面：黒漆	
226	72	木製品	角柱状	スギ	芯外し	12B	14	SD	201	3	292	19	10	中心部に穿孔	
227	65	木製品	有孔板材（荷札？）	スギ		10C	5	SE	223	2	94	45	6	端部切断、穿孔	
228	45	木製品	櫛	イスノキ	縦木取り	10C	5	SE	223	底部	34	38	6	梳櫛	
229	5	木製品	鍬	トチノキ	板目	11A	25	SE	206	6	193	167	30	表面平坦面、裏面凸面	直柄鍬
230	6	木製品	杭状	シロダモ	芯持樹皮付き	11A	25	SE	206	6	93	30	25	2方向の加工面構成、切り残し痕	上部炭化
231	47	木製品	不明（農耕具？）	ケヤキ	柾目	13B	3・4	SE	215	5	207	85	15	ケズリにより扁平体作出、柄を結合するための穿孔	
232	95	木製品	曲物・即板留具	スギ	柾目	14B	13	SE	114	下部	53	328	7	側板樹皮による結合	
	96	木製品	曲物・側板	樹皮											
233		木製品	箸？			14B	13	SE	114	下部	252	8	4	ケズリ	
234	120	木製品	杭状	コナラ節	芯持	14B	13	SE	114	下部	138	19	18		上端炭化
235	77	木製品	ペン先状	タケ亜科		14B	13	SE	114	下部	186	13	6	求心的加工痕構成	
236	84	木製品	曲物・底板	スギ	斜め	15C	1・6	SE	162	4	154	27	9	側面に木釘・釘孔、破損後穿孔	破損後転用
237	19	木製品	箸	スギ	削り出し	15C	1・6	SE	162	5	177	8	5	ケズリにより断面多角形に成形	
238	85	木製品	扇	ヒノキ	柾目	15C	1・6	SE	162	4	270	16	4	表裏ケズリ、接合部に木釘残存	
239	86	木製品	板材	スギ	柾目	15C	1・6	SE	162	4	226	69	16	結合材残置、厚手	
240	10	木製品	針状	スギ	芯外し	11A	25	SE	205	6	130	9	8	先端部二股、基部に直径3㎜の棒貫通	
241	44	木製品	杓子	ヤナギ属	斜め板	20B	8・13	SE	18	1	332	56	30	全面削り出し、黒漆塗布	
242	46	漆器	椀	ケヤキ	横木	20B	8・13	SE	18	底部		86		ロクロ挽き	全面炭化
243	55	木製品	曲物・底板	スギ	板目	10C	10	SE	225	7	89	45	8	破損後再加工	
244	54	木製品	浮子	スギ	板目	10C	10	SE	225	7	117	15	13	ケズリ、頭部作出	
245	53	木製品	箸	スギ	削り出し	14C	1・6	SE	919	7	225	8	5	ケズリにより断面多角形に成形	
246	33	木製品	板材	スギ	板目	14C	1・6	SE	919	7	182	43	7	表面に凹面作出	
247	34	木製品	板材	スギ	板目	14C	1・6	SE	919	7	131	45	13	表面ケズリ、上端切断	
248	7	木製品	下駄	クスノキ科	柾目	11B	21	SE	222	7	87	88	17	差歯構造、露卯下駄	
249	64	木製品	曲物・底板	スギ	板目	10B	8・13	SE	236	3	175	77	9	内面黒漆塗布	
250	57	木製品	火鑽臼	スギ	柾目	11B	3・4	SE	265	3	159	15	13	溝を作出して臼とする、転用か	
251	91	木製品	杭状	コナラ節	芯持樹皮付き	12A	23・24	SE	212	3	342	33	33	加工方向偏重、切り残し痕	
252	58	木製品	有頭状（浮子）	スギ	芯外し			SX	750	19	131	27	27	ケズリにより断面多角形に成形→両端に頭部作出	
253	59	木製品	分割材	カエデ属	半裁	11C	6・11	SE	211	4	162	120	74	半截後、分断	
254	15	木製品	コモヅチ	ブナ属	芯持樹皮付き	16A	24	SE	1023	4	43	139	38	両端部：3方向の加工面構成・切り残し痕	
255	31	木製品	ペン先状	クリ	柾目	14B	6・11	SE	1036	7	164	32	10	ケズリにより端部を鋭利に作出	

報告番号	分析番号	種別	器種	樹種	木取り	大グリッド	小グリッド	遺構種別	遺構番号	層位	長さ・口径（mm）	幅・底径（mm）	厚さ・器高（mm）	製作痕跡等	備考
256	32	木製品	加工材	クリ	板目	14B	6・11	SE	1036	7	103	36	17	一端は表面→裏面、他端は裏面→表面の加工構成	
257	30	木製品	ペン先状	スギ	斜め柾	14C	5	SE	918	6	187	12	11	先端部ケズリにより鋭利に作出、体部に穿孔→棒差込	
	30-1	木製品	ペン先状木釘	スギ	板目										
258	29	木製品	穿孔板材	スギ	板目	14C	5	SE	918	6	177	15	3	表面縦位分割痕、上端切断	
259	37	漆器	皿	ケヤキ	横木取り	15A	21	SE	1040	3	106	79	16	内外面黒漆塗布	底部中央部炭化
260	38	木製品	曲物・底板	スギ	柾目	15A	21	SE	1040	3	231	82	10	断面台形状、木釘残存、	表面に線状キズ
260	39	木製品	曲物・底板木釘	スギ	削り出し	15A	21	SE	1040	3					
261	56	木製品	ペン先状	スギ	柾目	15A	21	SE	1040	6	138	23	3	ケズリにより端部を鋭利に作出	
262	13	漆器	椀	トチノキ	横木取り	13B	13・18	SE	1108	5		72		ロクロ挽き（留具痕）→底面ケズリ→内外面：黒漆塗布	
263	40	木製品	曲物・底板	スギ	柾目	13B	13・18	SE	1108	5	127	99	10	木釘による結合	
	40-1	木製品	曲物・底板	スギ	削り出し										
264	41	木製品	曲物・底板	ヒノキ	柾目	13B	13・18	SE	1108	5	87	86	4	木釘を用いず似結合	
265	42	木製品	曲物・側板	ヒノキ	柾目	13B	13・18	SE	1108	5	109	50	2	木釘を用いずに結合	
	43		曲物・側板留具	樹皮											
266	1	縄	縄	単子葉類		13B	13・18	SE	1108	5	148	16	15	撚り「L」	
267	18	木製品	箸	スギ	削り出し	13B	13・18	SE	1108	5	109	5	4	ケズリにより断面多角形に成形	
268	27・125	木製品	櫛	イスノキ	縦木取り	13B	13・18	SE	1108	5	22	22	6	梳櫛？	
269	79	木製品	曲物・側板	スギ	柾目	18B	12	SE	16	7	28	137	5	木釘による結合	
	80		曲物・側板留具	樹皮											
	80-1		曲物・側板木釘	スギ	削り出し										
270	17	木製品	櫛	イスノキ	縦木取り	15C	2	SE	141	底部	42	100	11	梳櫛	
271	49	木製品	机脚	スギ	板目	16B	1	P	103	1・2	324	56	32	全面削り出し、臍孔作出	
272	101	建築材	柱根	コナラ節	芯持	14B	24	P	161		203	118	97		
273	100	建築材	柱根	トネリコ属	芯持	15C	2	P	960	底部	195	98	92		
274	103	建築材	柱根	キハダ	芯持	14B	11・12	P	1037		280	91	80		
275	99	建築材	柱根	コナラ節	芯外し	11C	2	P	319		254	117	113		
276	98	建築材	柱根	クリ	芯持	18C	3	P	658		394	165	132		
277	102	建築材	柱根	コナラ節	芯持樹皮付き	19B	12	P	895		251	72	65		
	106	建築材	柱根	コナラ節	芯持	12A	23・24	SE	212						実測外
	107	建築材	柱根	コナラ節	芯持？	13B	19	P	1199						実測外
	108	建築材	柱根	コナラ節	芯外し？	11B	17	P	288						実測外
	109	建築材	柱根	クリ	芯持	13B	12	P	1173						実測外
	110	建築材	柱根	クリ	芯持	9C	3	P	660						実測外
	111	建築材	柱根	クリ	芯持？	11C	2	P	419						実測外
	112	建築材	柱根	クリ	芯持	10C	10	P	439						実測外
	113	建築材	柱根	ヤマグワ	芯持	13B	17	P	1195						実測外
	114	建築材	柱根	クリ	芯持	13C	2	P	1247						実測外
	115	建築材	柱根	ヤマグワ	芯持？	10C	2	P	245						実測外
	116	建築材	柱根	キハダ	芯持	17B	20	P	36						実測外
	117	建築材	柱根	クリ	芯持	14C	5	P	1044						実測外
	118	建築材	柱根	コナラ節	芯持	12B	8	P	275						実測外

図　　版

凡　例

1　遺構個別図においては、次のように分類してスクリーントーン・記号を貼付した。

地山ブロック　　S：石

腐植物層　　W：木

黒色シルト

炭化物層

柱根、柱痕

2　遺構個別図（セクション図・エレベーション図）において、掘立柱建物を構成するピットに●▲■の記号を付した。

3　遺構分割図において、掘立柱建物を構成するピットにトーンを添付した。

4　古代の土器は、須恵器を断面塗りつぶし、土器白抜きとした。

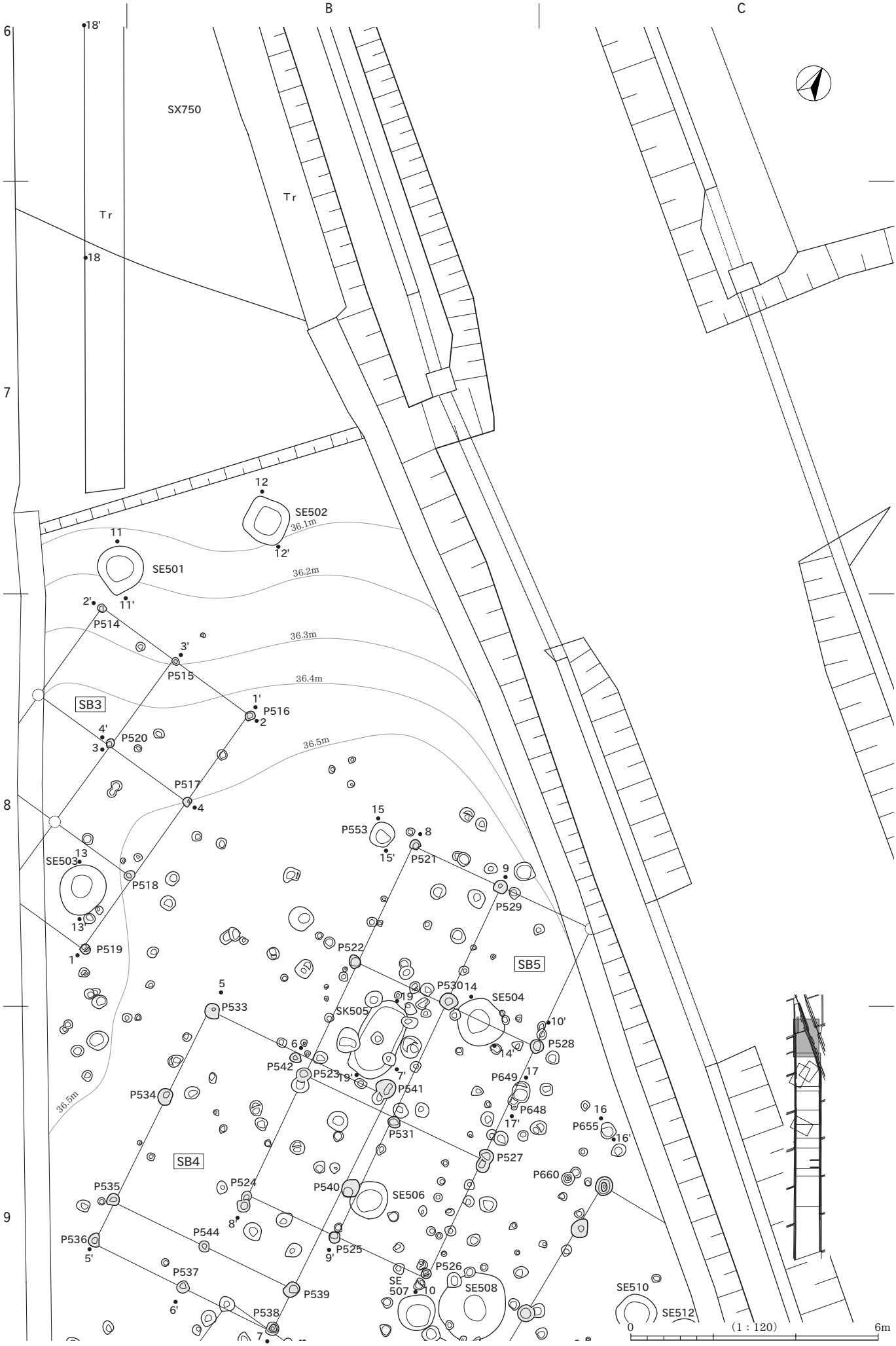
5　土器の口縁部実線を中心部両端で切っている場合、残存率が低いものから口径を復元したものである。

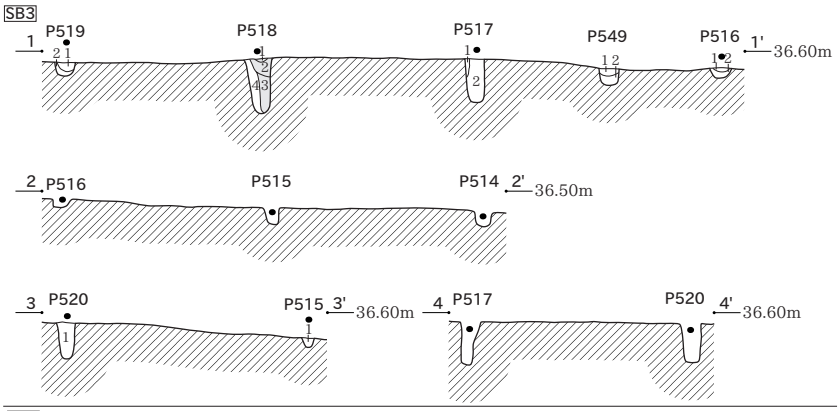
6　木製品の木目は、木取りを表示したものであり実際の年輪幅とは異なる。

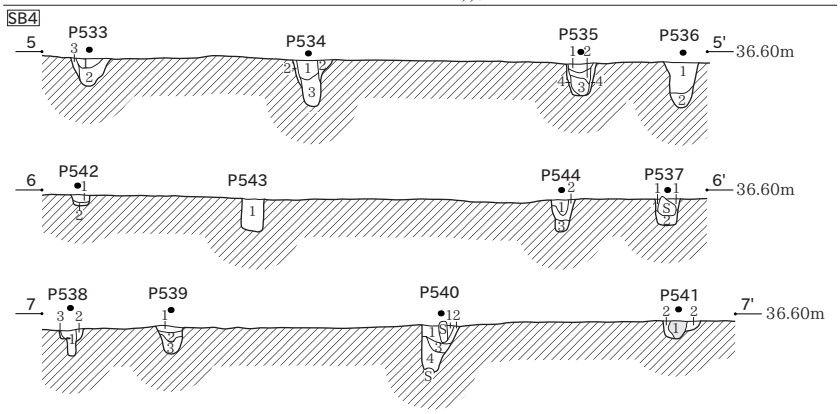
7　遺物写真図版の縮尺は、図面図版と同じである。

仲田遺跡全体配置図

図 版 1


B
C
6
7
8
9
SX750
Tr
Tr
18'
18
SE502
SE501
36.1m
36.2m
36.3m
36.4m
36.5m
SB3
SB4
SB5
P514
P515
P516
P520
P517
P518
P519
SE503
P553
P521
P529
P522
P530
SE504
SK505
P528
P533
P542
P523
P541
P649
P648
P655
P534
P531
P527
P660
P535
P524
P540
SE506
P536
P544
P525
P537
P539
P538
SE 507
P526
SE508
SE510
SE512
0
(1 : 120)
6m



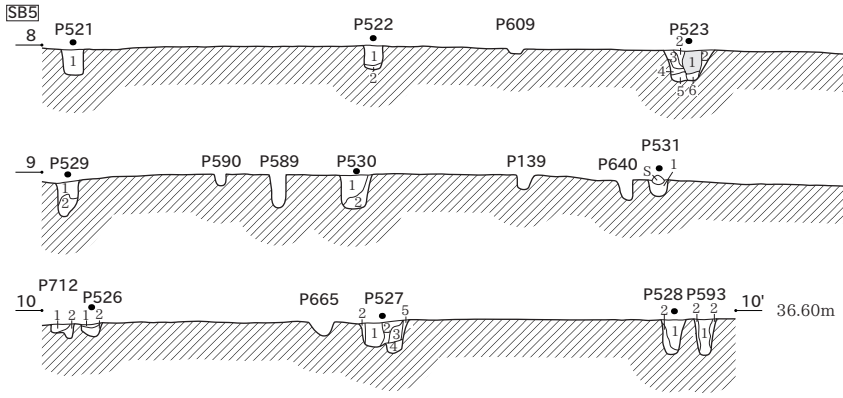


SB3
P519
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロック多
P518
1　暗褐色土　地山粒・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多
3　暗褐色シルト　地山小ブロックまばら、炭化物粒少
4　暗褐色シルト　3層より色調明るい、地山小ブロック・炭化物粒まばら
P517
1　褐色シルト　地山小ブロック多、炭化物粒少
2　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少
P549
1　暗褐色シルト　地山粒まばら、炭化物粒少
2　褐色シルト　地山粒やや多、炭化物粒まばら
P516
1　暗褐色シルト　地山粒まばら、炭化物粒少
2　褐色シルト　地山小ブロックまばら、炭化物粒少

SB3
P520
1　褐色シルト　地山小ブロックやや多、灰色小ブロック・炭化物粒まばら
P515
1　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら

SB4
P542
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロック主体
P543
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
P544
1　暗褐色シルト　地山粒やや多、炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調暗い、地山粒・炭化物粒まばら
3　褐色シルト　地山小ブロック・地山粒まばら
P537
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・地山粒やや多、炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
SB4
P538
1　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調暗い、地山粒・炭化物粒まばら
3　褐色シルト　地山ブロック主体
P539
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調暗い、地山粒・炭化物粒まばら
3　褐色シルト　炭化物粒やや多、地山小ブロックまばら
P540
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少
3　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
4　暗褐色シルト　地山小ブロックまばら、炭化物粒少
P541
1　暗褐色シルト　地山褐色粒・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら

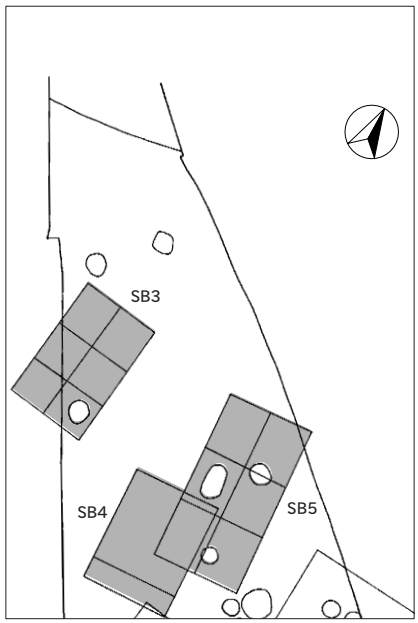
SB4　SPA（P533・P534・P535・P536）
P533
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロック・地山粒やや多、炭化物粒まばら
3　褐色シルト　2層より色調明るい、地山小ブロック多
P534
1　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロック多、炭化物粒少
3　暗褐色シルト　炭化物粒まばら
P535
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・地山粒やや多、炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調暗い、地山小ブロック・地山粒まばら、炭化物粒少
3　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
4　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
P536
1　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら

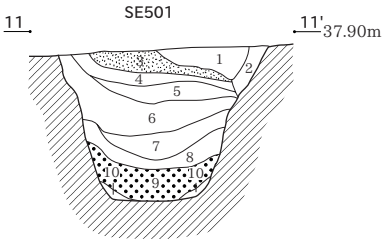


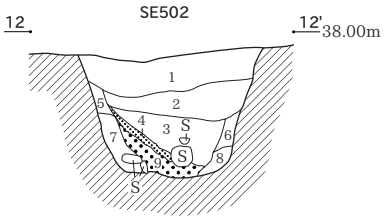
SB5
P521
1　暗褐色シルト　炭化物粒まばら、地山粒少
P522
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多
P523
1　暗褐色シルト　地山粒やや多、炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少
3　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
4　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
5　褐色シルト　4層より色調明るい、地山小ブロック多
6　暗青灰色シルト　地山青灰色小ブロック多、炭化物粒まばら
P524
1　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロック多
P684
1　暗褐色シルト　地山粒やや多、炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
SB5
P529
1　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
P530
1　暗褐色シルト　地山粒やや多、炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山褐色小ブロックやや多、炭化物粒少
P531
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
P525
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら

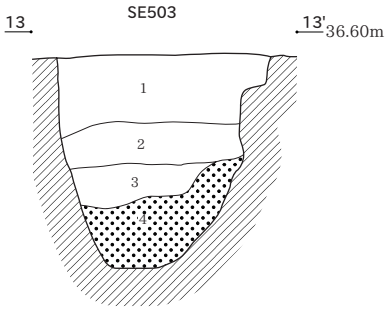
SB5
P526
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多
P712
1　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
2　褐色シルト　1層より色調明るい、地山ブロック主体
P527
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
3　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
4　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
5　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
P528
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山粒やや多、炭化物粒まばら
P593
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調明るい、地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら

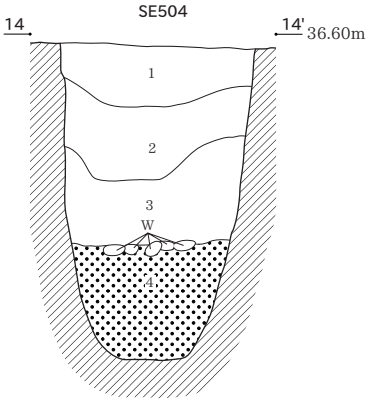
0　（1：80）　4m

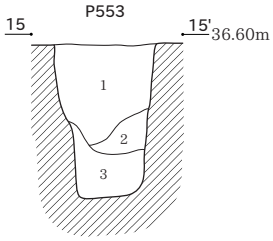










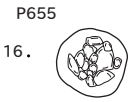


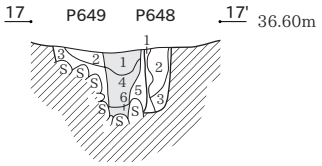
SE501
1　黒褐色シルト　地山褐色小ブロックやや多、炭化物粒まばら、鉄分沈着やや多
2　にぶい褐色シルト　地山ブロック主体
3　にぶい褐色シルト　2層より色調暗い、地山褐色小ブロックまばら、炭化物粒少
4　黒褐色シルト　地山褐色小ブロックまばら、炭化物粒少
5　にぶい褐色シルト　地山小ブロック多、炭化物粒まばら
6　暗褐色シルト　地山小～中ブロック多、黒色小ブロック・炭化物粒まばら
7　青黒色粘質シルト　地山青灰色小ブロックまばら、炭化物粒やや多
8　暗青灰色粘質シルト　炭化物粒やや多、地山青灰色小ブロックまばら
9　青黒色粘質シルト　炭化物粒多
10　暗青灰色粘質シルト　地山青灰色ブロック主体

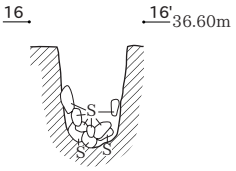
SE502
1　暗灰色砂質シルト　炭化物粒やや多、鉄分沈着やや多
2　暗灰色砂質シルト　1層より色調暗い、炭化物粒やや多、鉄分沈着やや多
3　青黒色粘質シルト　炭化物粒まばら、小円礫少
4　黒色シルト　炭化物粒主体
5　にぶい褐色シルト　地山ブロック主体、鉄分沈着少
6　暗褐色粘質シルト　地山ブロック主体
7　黒褐色粘質シルト　炭化物粒まばら、小円礫少
8　青灰色粘質シルト　地山ブロック主体
9　黒色粘質シルト　炭化物粒やや多、地山小ブロックまばら

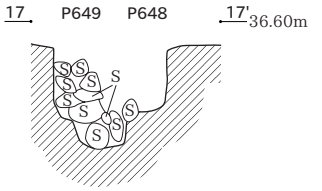
SE503
1　暗灰色シルト　炭化物粒やや多、灰色小ブロック・地山褐色小ブロックまばら
2　暗青灰色シルト　炭化物粒まばら、地山青灰色小ブロックやや多
3　青灰色粘質シルト　地山青灰色小ブロック多、炭化物粒やや多
4　青黒色粘質シルト　地山青灰色小ブロックまばら、炭化物粒・腐植物やや多

SE504
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調明るい、地山粒・地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
3　青黒色粘質シルト　炭化物粒多、地山青灰色小ブロックまばら、木片多
4　青黒色粘質シルト　腐植物・炭化物粒多、地山青灰色小ブロックまばら







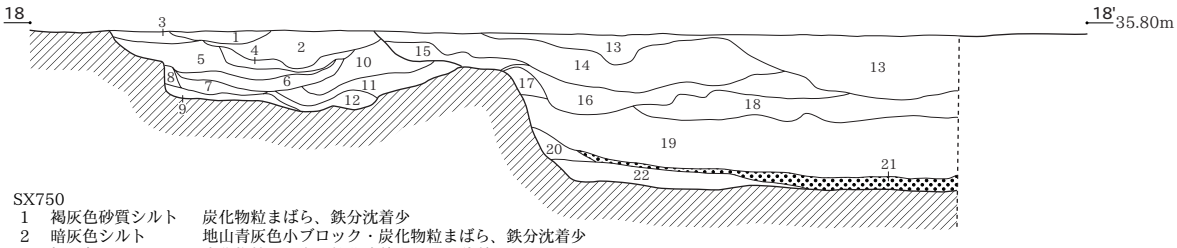


P553
1　暗褐色シルト　地山小ブロックまばら、灰色小ブロック・炭化物粒少
2　暗褐色シルト　1層より色調明るい、地山小ブロックやや多、炭化物粒少
3　黒褐色砂質シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら

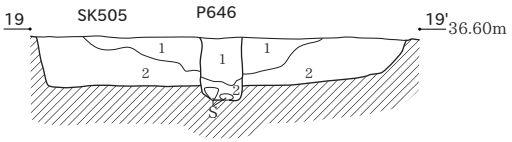
P648
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・地山粒やや多
2　にぶい黄褐色シルト　地山ブロック主体
3　にぶい黄褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら

P649
1　暗褐色シルト　炭化物粒やや多、地山小ブロックまばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少
3　暗灰色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
4　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
5　暗青灰色シルト　地山青灰色小ブロックやや多、炭化物粒まばら
6　暗青灰色シルト　地山青灰色小ブロックやや多

SX750

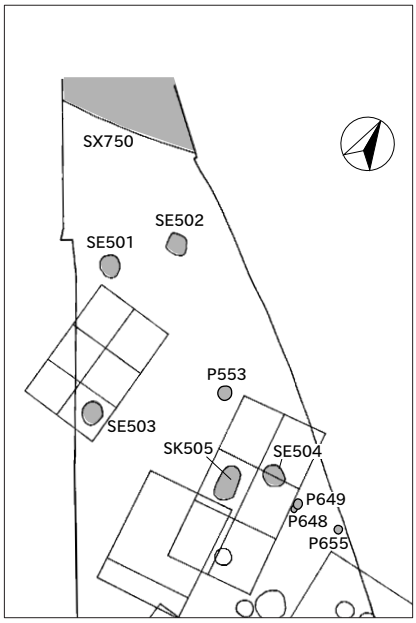


SX750
1　褐灰色砂質シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着少
2　暗灰色シルト　地山青灰色小ブロック・炭化物粒まばら、鉄分沈着少
3　褐灰色シルト　炭化物粒やや多、鉄分沈着少、やや砂質
4　灰色粘質シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着少
5　褐灰色砂質シルト　炭化物粒やや多、鉄分沈着少
6　暗青灰色シルト　地山青灰色小ブロック・炭化物粒まばら
7　暗青灰色シルト　6層より色調明るい、地山青灰色小ブロック・炭化物粒まばら
8　灰白色シルト　地山灰白色小ブロック主体
9　暗青灰色砂質シルト　地山青灰色小ブロック・炭化物粒まばら、鉄分沈着やや多
10　青灰色シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着少
11　褐灰色シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着少、やや砂質
12　暗青灰色砂質シルト　炭化物粒少、鉄分沈着やや多
13　灰色シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着少
14　暗灰色シルト　炭化物粒やや多、地山青灰色小ブロックまばら
15　暗灰色シルト　14層より色調明るい、炭化物粒やや多、地山青灰色小ブロック少、鉄分沈着少
16　灰色シルト　地山青灰色小ブロック・炭化物粒やや多、鉄分沈着少
17　灰色シルト　16層より色調明るい、炭化物粒まばら、鉄分沈着少
18　灰色シルト　16層より色調暗い、地山青灰色小ブロック・炭化物粒まばら、鉄分沈着少
19　灰色粘質シルト　18層より色調明るい、炭化物粒まばら
20　暗青灰色粘質シルト　地山青灰色小ブロックやや多、炭化物粒まばら
21　黒褐色シルト　腐植物多、炭化物粒まばら
22　暗青灰色砂質土　砂粒主体、ラミナ堆積



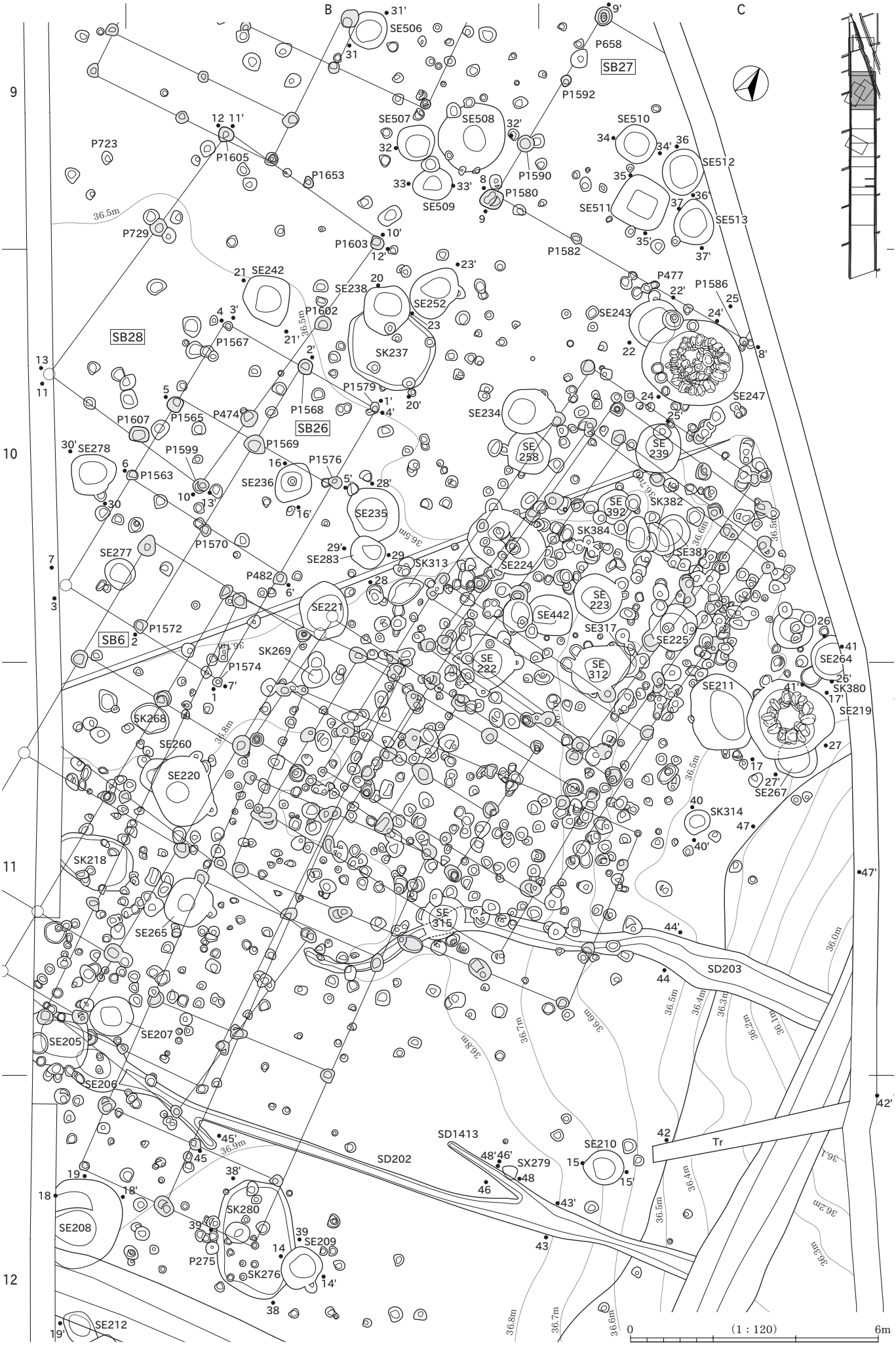
SK505
1　暗褐色シルト　地山褐色土粒・炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調明るい、地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら

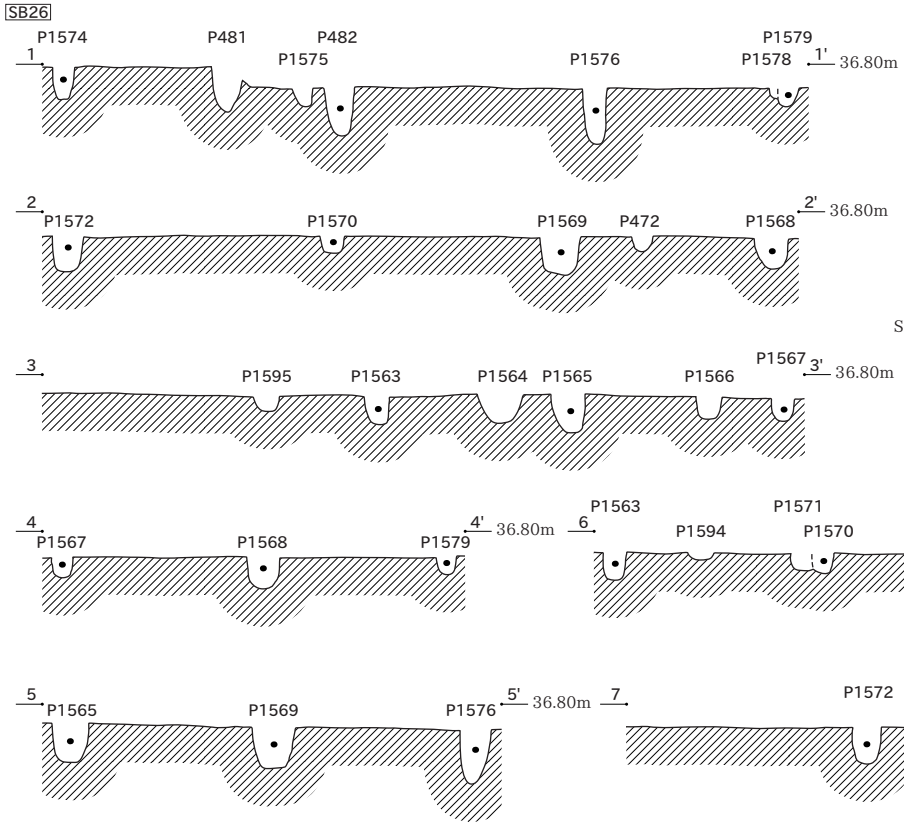
P646
1　暗褐色シルト　炭化物粒・地山粒まばら
2　暗褐色シルト　地山青灰色小ブロックまばら、炭化物粒少、小礫有

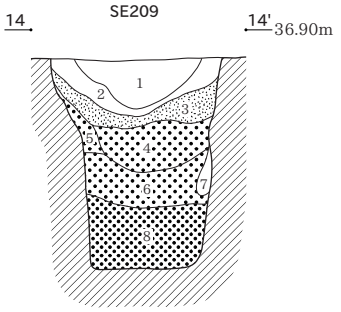


SE501～504・SK505・P553,648,649,655
0　（1：40）　2m

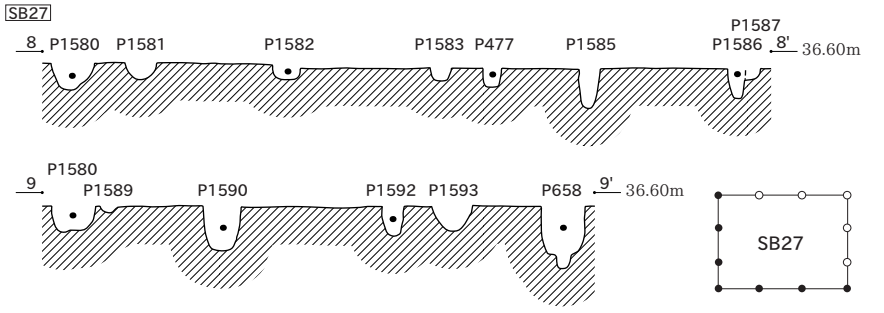
SX750
0　（1：80）　4m

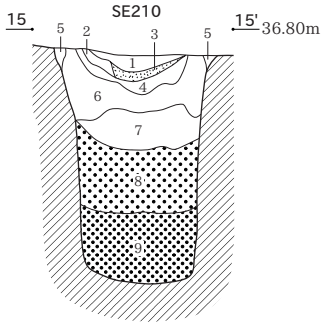

B
C
9
10
11
12
SB27
SB28
SB26
SB6
SE506
P658
P1592
SE507
SE508
SE510
SE512
SE511
SE513
P723
P1605
P1653
P1590
P1580
SE509
P729
P1603
P1582
P477
P1586
SE242
SE238
SE252
P1602
SE243
P1567
SK237
SE247
P1579
P1568
SE234
P1607
P1565
P474
P1569
SE278
P1599
P1563
P1576
SE236
SE235
SE258
SE239
SE392
SK382
SK384
SE381
P1570
SE283
SK313
SE224
SE277
P482
SE221
SE223
SE442
SE317
SE225
P1572
SK269
P1574
SE222
SE312
SE264
SK380
SE211
SE219
SK268
SE260
SE220
SE267
SK314
SK218
SE315
SE265
SD203
SE207
SE205
SE206
SD1413
SE210
Tr
SD202
SX279
SK280
SE208
SE209
P275
SK276
SE212
36.5m
36.6m
36.7m
36.8m
36.9m
36.0m
36.4m
36.3m
36.2m
36.1m
0
(1 : 120)
6m



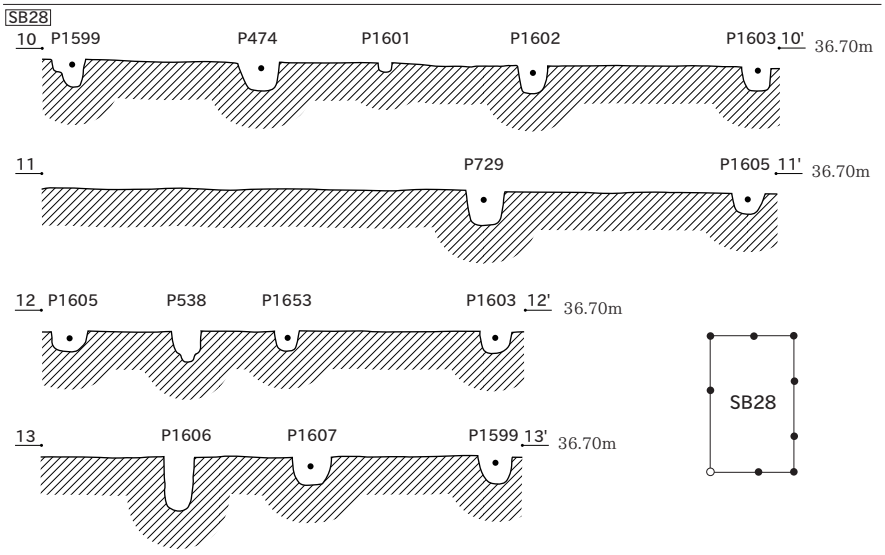


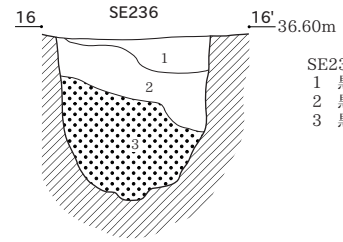
SE209
1　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化粒ごくまばら
2　黒褐色土　黄褐色ブロック多い、炭化物ごくまばら
3　黄褐色土　黄褐色ブロック多量、鉄分ごくまばら
4　黒色土シルト　青灰色ブロック多量
5　黒色土シルト　青灰色小ブロックまばら
6　黒色土シルト　青灰色小ブロックごくまばら、腐植物まばら
7　灰白色シルト　黒色シルトブロックごくわずか
8　黒色土　腐植物層





SE210
1　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化粒ごくまばら
2　暗褐色土　1層に類似する、黄褐色小ブロックまばら
3　黄褐色土　黄褐色ブロック多量
4　黒褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら
5　暗褐色土　黄褐色土多量
6　暗褐色土　黄褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら
7　暗褐色土　黄褐色ブロック多い、炭化物ごくまばら
8　黒色シルト　青灰色ブロックまばら
9　黒色シルト　腐植物層

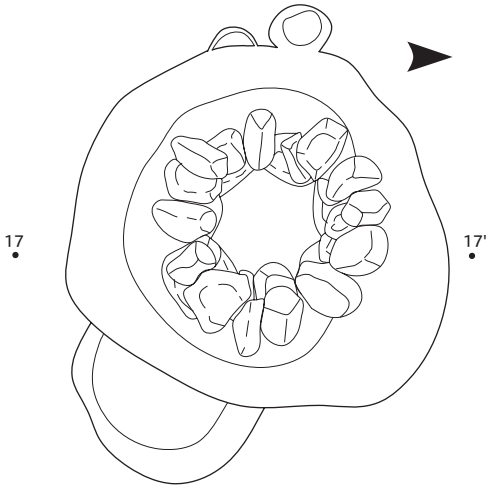


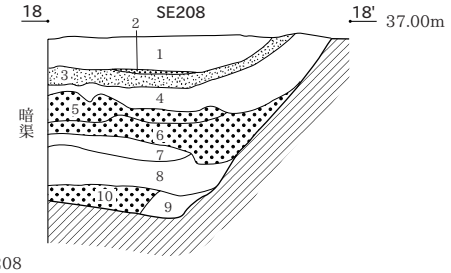


SE236
1　黒褐色土　黄褐色小ブロック、炭化物まばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロック多量、炭化物ごくまばら
3　黒色シルト　黄褐色ブロック多い

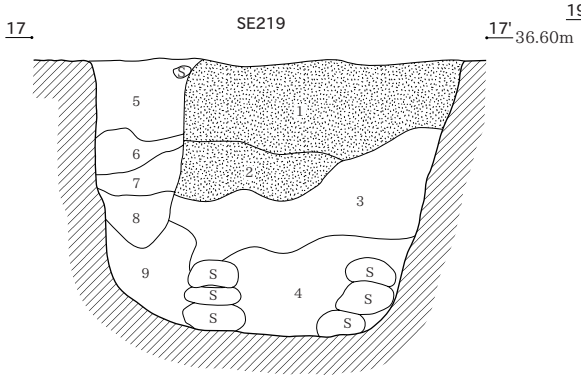
SB26～28
（1：80）
0　4m

SE209,210,236
（1：40）
0　2m

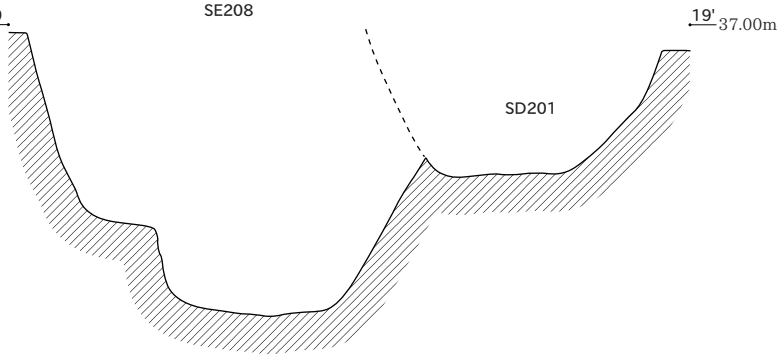


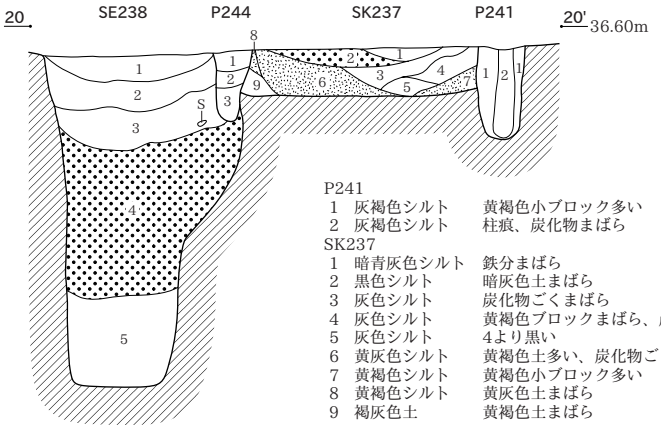


SE208
1　黒褐色土　黄褐色ブロック・炭化物まばら
2　黒色土　炭化物層
3　黄褐色土　黄褐色土主体、黒褐色土をブロックでまばら、炭化物ごくまばら
4　黒褐色土　黄褐色土が帯状に堆積
5　黄褐色土　黒褐色土が帯状に堆積
6　黒色シルト　青灰色土が帯状又はブロックで堆積
7　青灰色シルト　黒色小ブロックをまばら
8　暗灰色シルト　暗青灰色土をまばら
9　青灰色シルト　黒色シルトをまばら
10　黒色シルト　暗青灰色土をごくまばら



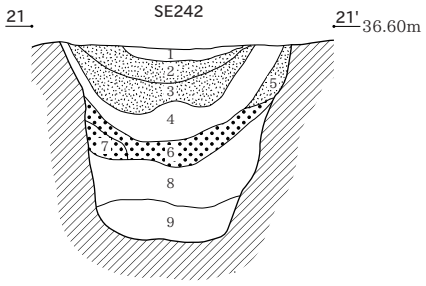
SE219
1　黄褐色砂シルト　黒色シルトをブロックでまばら
2　黄褐色砂シルト　黒色シルトをブロックでまばら
3　青灰色シルト　黒色シルトブロックまばら
4　青灰色シルト　黒色小ブロック、灰色土まばら
5　黄褐色土　（掘方）
6　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら（掘方）
7　黄褐色土　（掘方）
8　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら（掘方）
9　暗青灰色シルト　黒色シルトブロックまばら（掘方）





P241
1　灰褐色シルト　黄褐色小ブロック多い
2　灰褐色シルト　柱痕、炭化物まばら

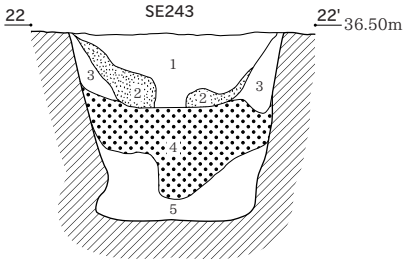
SK237
1　暗青灰色シルト　鉄分まばら
2　黒色シルト　暗灰色土まばら
3　灰色シルト　炭化物ごくまばら
4　灰色シルト　黄褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら
5　灰色シルト　4より黒い
6　黄灰色シルト　黄褐色土多い、炭化物ごくまばら
7　黄褐色シルト　黄褐色小ブロック多い
8　黄褐色シルト　黄灰色土まばら
9　褐灰色土　黄褐色土まばら



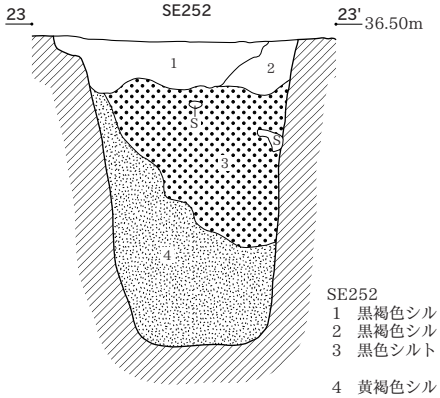
SE238
1　黒褐色土　黄褐色小ブロック、炭化物まばら
2　暗褐色シルト　黄褐色小ブロック、炭化物ごくまばら
3　黒褐色シルト　黄褐色小ブロックごくまばら
4　黒色シルト　灰白色ブロック、黄褐色ブロック、炭化物まばら
5　暗灰色シルト　黒色シルトブロックまばら

P244
1　灰褐色シルト　炭化物まばら
2　暗褐色シルト　炭化物まばら
3　黒褐色シルト　黄褐色小ブロック、炭化物まばら

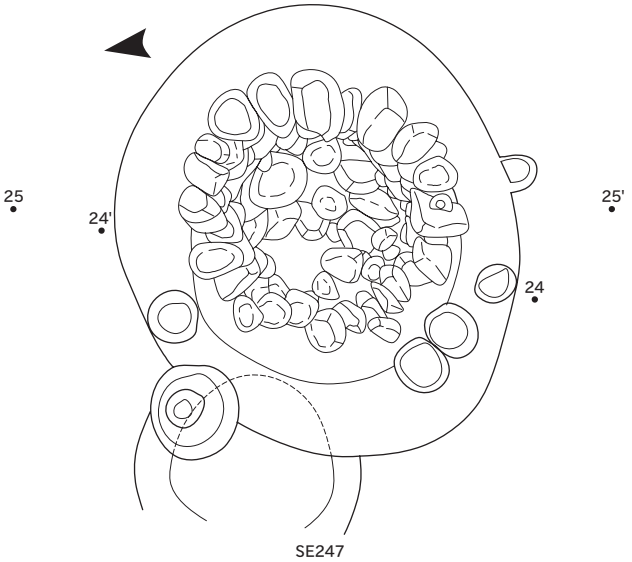
SE242
1　暗褐色土　炭化物、黄褐色土まばら
2　黄褐色土　炭化物ごくわずか
3　黄褐色土　黒褐色土、炭化物まばら
4　黒褐色土　炭化物多い、黄褐色小ブロックまばら
5　黄褐色土　黒褐色土まばら
6　黒色シルト　灰白色小ブロックまばら
7　黒色シルト　黄褐色ブロック多い
8　暗青灰色シルト　黒色シルト大ブロック多い
9　暗青灰色シルト　黒色シルトブロックまばら

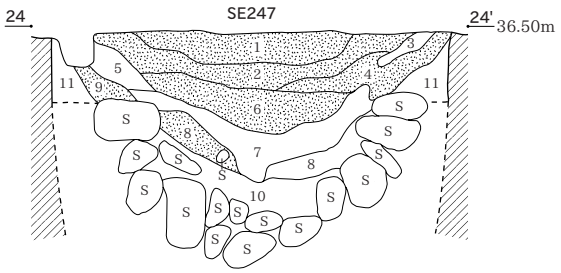


SE243
1　黒褐色土　黄褐色ブロック、炭化物まばら
2　黄褐色土　黄褐色ブロック多量
3　黒褐色土　炭化物、黄褐色土まばら
4　黒色シルト　黄褐色小ブロックごくまばら
5　暗青灰色シルト　黒色シルトブロックまばら

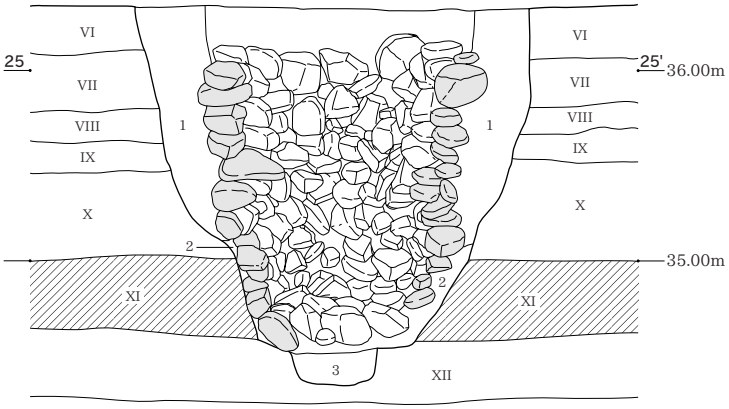


SE252
1　黒褐色シルト　黄褐色ブロック、炭化物まばら
2　黒褐色シルト　黄褐色ブロック多量
3　黒色シルト　黄褐色ブロックまばら、灰白色大ブロック多い、炭化物まばら
4　黄褐色シルト　黒色、灰白色シルト小ブロックごくまばら



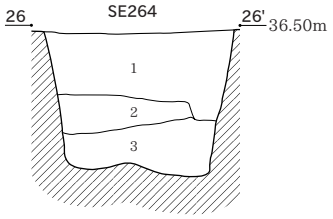


SE247
1　黄褐色土　　暗灰色ブロックまばら、鉄分まばら
2　黄褐色土　　暗灰色ブロックごくまばら、鉄分多い
3　暗灰色土　　黄褐色ブロックごくまばら
4　黄褐色土　　暗灰色ブロック、鉄分まばら
5　暗灰色土　　黄褐色小ブロックまばら、鉄分まばら
6　黄褐色土　　暗灰色ブロック多い、鉄分まばら
7　暗灰色シルト　灰白色土まばら
8　黄褐色土　　暗灰色土ごくまばら
9　黄褐色土　　暗灰色土多い
10　暗灰色シルト　灰白色シルトまばら
11　黄褐色シルト　堀方、暗灰色ブロック、鉄分多い

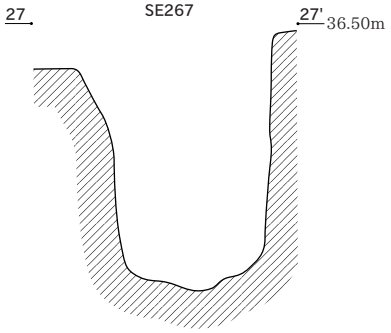


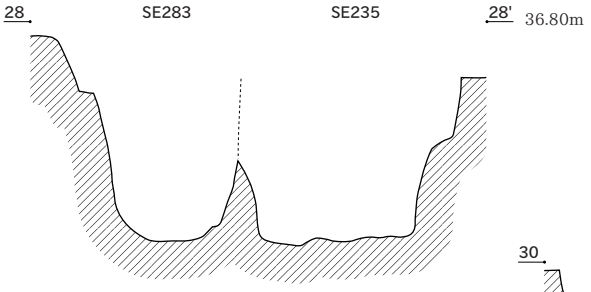
VI　黄褐色シルト
VII　暗灰黄色砂質シルト
VIII　明黄褐色砂質シルト
IX　灰白色シルト
X　灰白色粘質シルト
XI　灰色細砂
XII　青灰色シルト

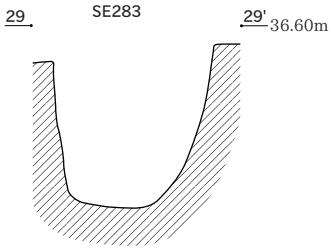
SE247
1　黄褐色シルト　　堀方。暗灰色ブロック・鉄分多い
2　オリーブ黒色シルト　φ20～40mの礫多量。腐植物ごくまばら
3　オリーブ黒色シルト　φ1～3cmの礫多量

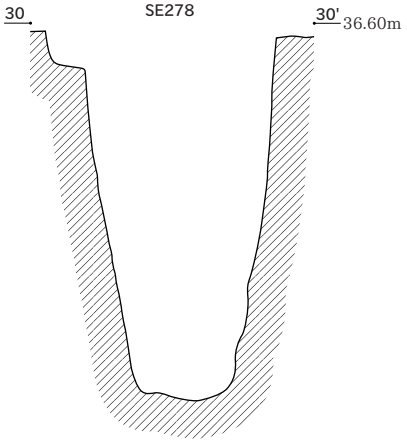


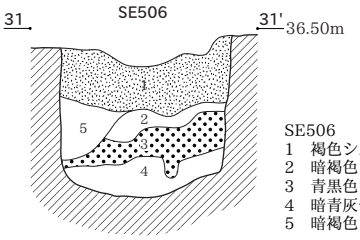
SE264
1　暗褐色土　黄褐色ブロック多い
2　暗褐色土　黄褐色ブロック多量
3　暗褐色土　黄褐色ブロックまばら



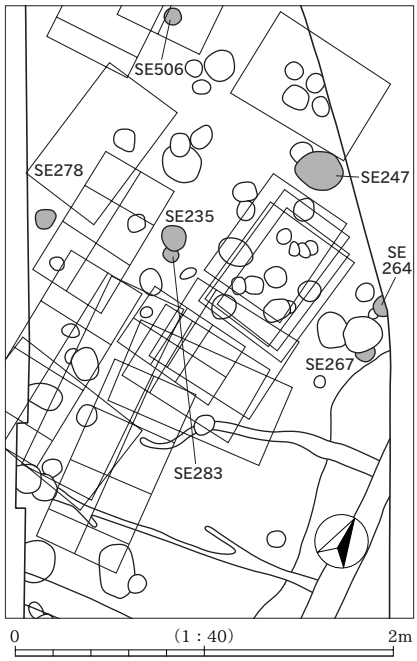


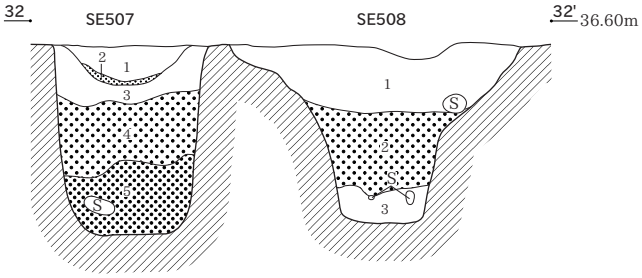






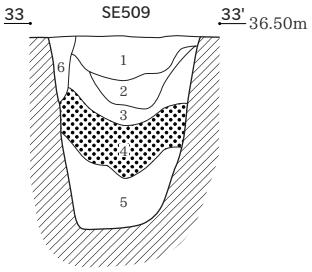
SE506
1　褐色シルト　　地山小ブロック多、炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
3　青黒色シルト　地山粒少、炭化物粒まばら
4　暗青灰色粘質シルト　地山褐色小ブロック・灰色小ブロックやや多、炭化物粒まばら
5　暗褐色シルト　地山褐色小ブロック・灰色小ブロックやや多、炭化物粒まばら





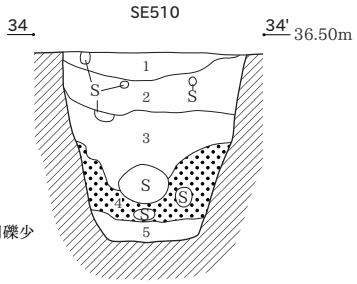
SE507
1　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒やや多
2　黒褐色シルト　炭化物粒主体
3　暗褐色シルト　炭化物粒まばら、地山褐色小ブロックやや多
4　青黒色粘質シルト　炭化物粒まばら
5　黒色粘質シルト　腐植物・炭化物粒多

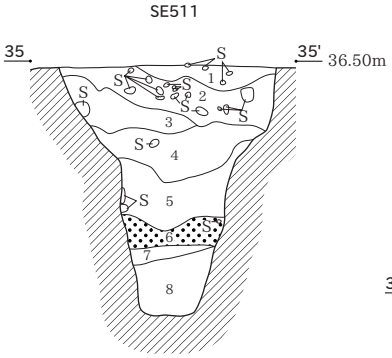
SE508
1　暗褐色シルト　地山褐色小ブロックやや多、炭化物粒まばら、小円礫少
2　青黒色粘質シルト　地山青灰色小ブロック・炭化物粒まばら
3　暗青灰色粘質シルト　地山青灰色小ブロック・炭化物粒まばら



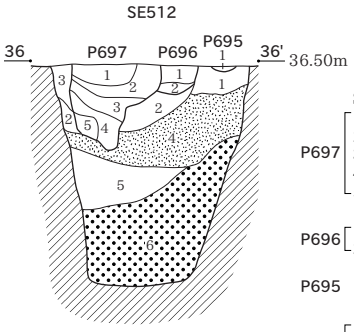
SE509
1　暗褐色シルト　炭化物粒やや多、地山褐色小ブロックまばら
2　青黒色シルト　炭化物粒多
3　暗褐色シルト　地山褐色小ブロックやや多、炭化物粒まばら
4　黒褐色シルト　腐植物多、炭化物粒やや多
5　暗青灰色粘質シルト　炭化物粒まばら
6　暗褐色シルト　地山褐色粒やや多、炭化物粒まばら

SE510
1　暗褐色シルト　炭化物粒・灰色土小ブロックまばら、地山小ブロック少
2　暗褐色シルト　1層より色調暗い、炭化物粒やや多、地山褐色小ブロックまばら
3　暗褐色シルト　2層より色調暗い、地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら、中円礫少
4　青黒色粘質シルト　地山青灰色小ブロックやや多、炭化物粒まばら、中円礫少
5　暗青灰色粘質シルト　炭化物粒まばら





SE511
1　暗褐色シルト　炭化物粒やや多、2～5cmの小円礫まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調明るい、炭化物粒多、2～5cmの小円礫やや多
3　褐色シルト　地山褐色小ブロック多、2～5cmの小円礫少
4　暗褐色シルト　炭化物粒まばら、2～5cmの小円礫少
5　暗青灰色シルト　炭化物粒少、地山青灰色小ブロックまばら
6　青黒色粘質シルト　炭化物粒・腐植物やや多
7　青灰色粘質シルト　地山ブロック主体
8　暗青灰色粘質シルト　炭化物粒まばら

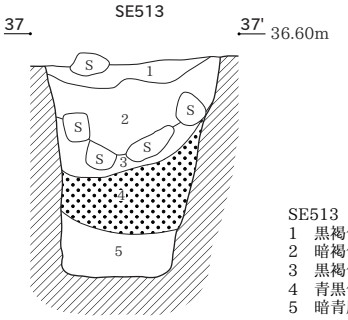


SE512
P697
1　暗褐色シルト　地山粒やや多、炭化物粒まばら
2　暗褐色シルト　1層より色調暗い、地山粒・地山小ブロック・炭化物粒まばら
3　暗褐色シルト　2層より色調暗い、地山小ブロック・炭化物粒まばら
4　暗褐色シルト　3層より色調暗い、地山小ブロック・炭化物粒まばら
5　褐色シルト　地山粒・地山小ブロックやや多

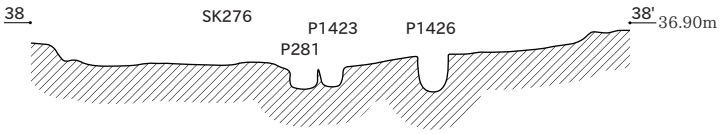
P696
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
2　褐色シルト　地山小ブロックやや多

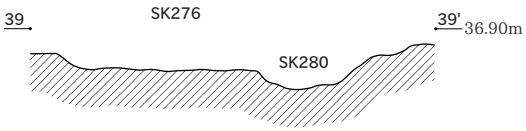
P695
1　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら

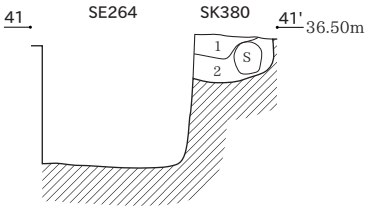
SE512
1　褐色シルト　地山小ブロック多、炭化物粒まばら
2　褐色シルト　7層より色調明るい、地山小ブロック主体
3　暗褐色シルト　地山粒・炭化物粒まばら
4　暗褐色シルト　地山粒・地山小ブロック・灰色小ブロック多、炭化物粒まばら
5　暗褐色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら、灰色小ブロックやや多
6　青黒色粘質シルト　地山青灰色小ブロック・炭化物粒まばら



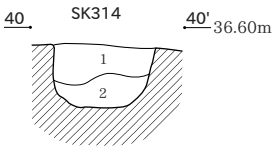
SE513
1　黒褐色シルト　炭化物粒・中円礫やや多、地山粒まばら
2　暗褐色シルト　地山粒・地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
3　黒褐色シルト　炭化物粒・地山粒まばら、中円礫多
4　青黒色粘質シルト　炭化物粒やや多、腐植物多、地山青灰色小ブロックまばら
5　暗青灰色粘質シルト　炭化物粒少



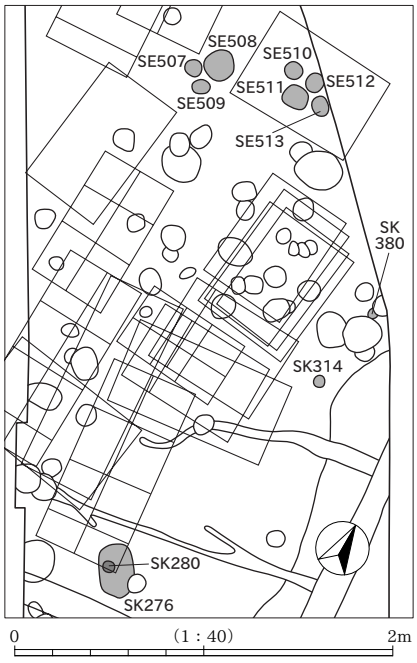


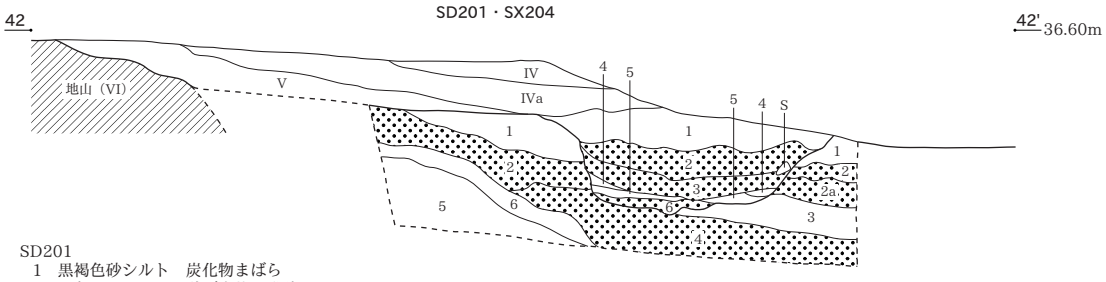


SK380
1　暗褐色土　黄褐色ブロック、炭化物まばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら

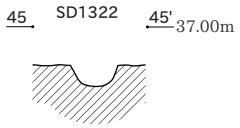


SK314
1　暗褐色土　鉄分まばら、黄褐色小ブロックごくまばら
2　黄褐色シルト　黒褐色シルト、灰白色シルトまばら

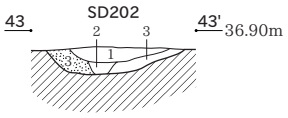


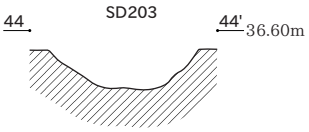


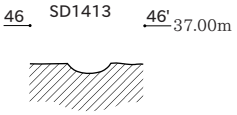
SD201
1　黒褐色砂シルト　炭化物まばら
2　黒色シルト　砂が帯状に堆積
3　黒色シルト　暗灰色シルトブロック・灰白色小ブロックまばら
4　暗灰色シルト　黒色シルトブロックまばら
5　灰白色シルト　黒色小ブロックごくまばら
6　黒色シルト　暗灰色土まばら



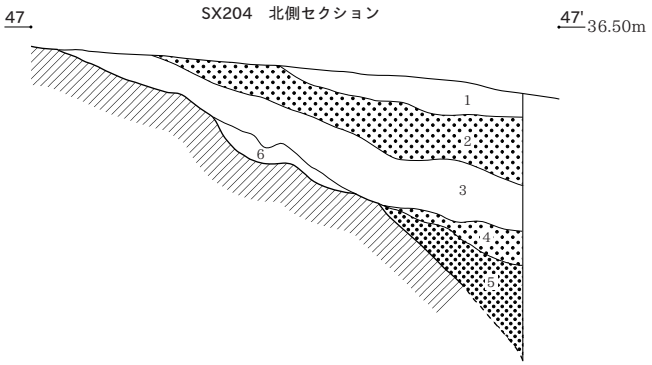
SX204
1　オリーブ黒色砂シルト　鉄分まばら、灰白色シルトブロックまばら、遺物の出土が多い
2　黒色砂シルト　鉄分ごくまばら、灰白色シルトブロックごくまばら、遺物の出土が多い
2a　黒色砂シルト　鉄分ごくまばら、灰白色シルトブロックごくまばら、遺物の出土が多い
3　オリーブ黒色砂シルト　鉄分ごくまばら、灰白色シルトブロック多い、黒色シルトブロック帯状に堆積、遺物の出土が多い
4　黒色シルト　灰白色シルトブロックごくまばら、最も粘質が強い、遺物の出土が少ない
5　オリーブ黄色シルト　腐植物多い、黒色シルトブロックごくまばら、遺物の出土が少ない
6　灰色シルト　暗灰色シルトブロック多い

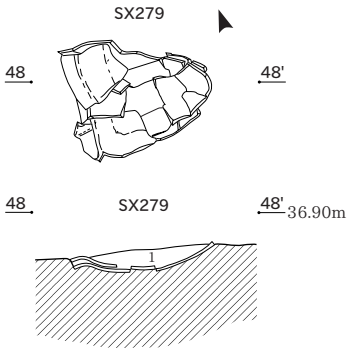






SD202
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロック多い
3　黄褐色土　地山に近い。黒褐色土まだら。鉄分わずか



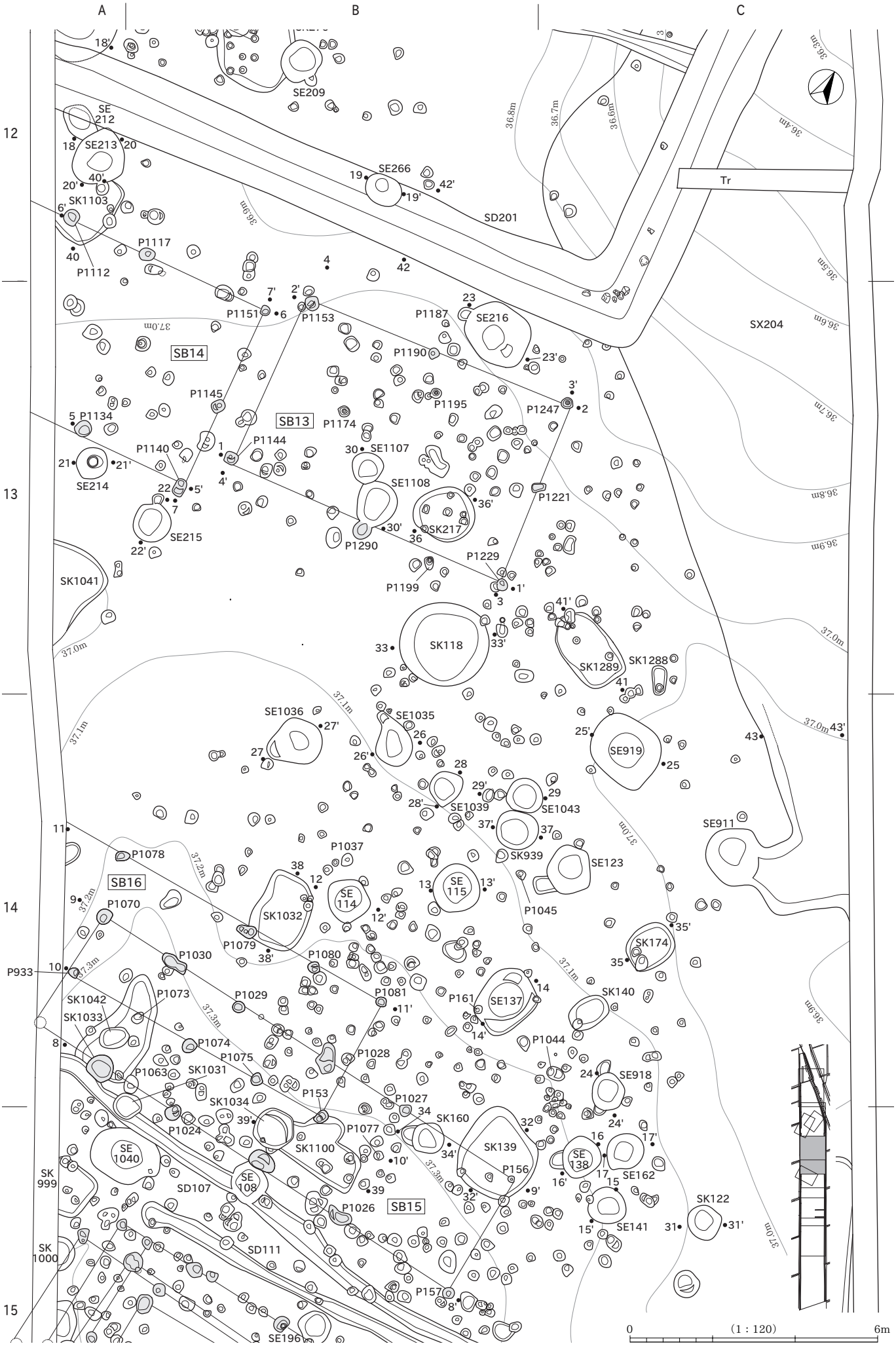


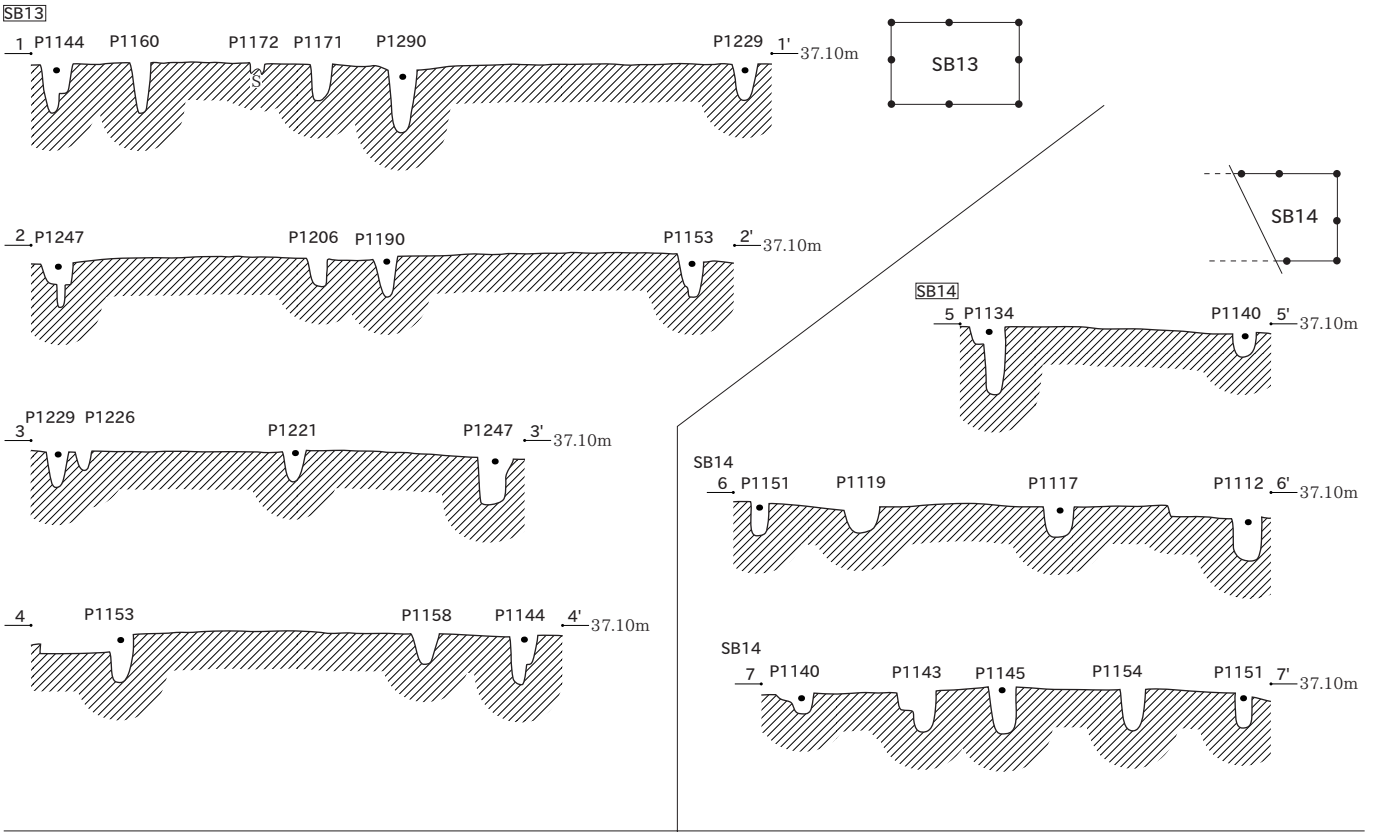
SX279
1　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら

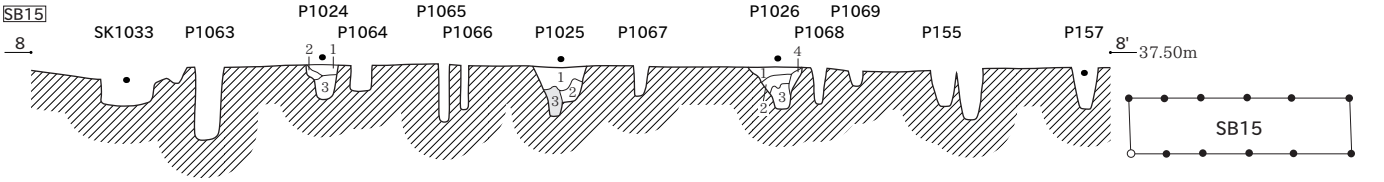
SX204
1　オリーブ黒色砂シルト　鉄分まばら、灰白色シルトブロックまばら、遺物の出土が多い
2　黒色砂シルト　鉄分ごくまばら、灰白色シルトブロックごくまばら、遺物の出土が多い
3　オリーブ黒色砂シルト　鉄分ごくまばら、灰白色シルト小ブロック多い、黒色シルトブロック帯状に堆積、遺物の出土が多い
4　黒色シルト　灰白色シルト小ブロックごくまばら、最も粘質が強い、遺物の出土が少ない
5　オリーブ黄色シルト　腐植物多い、黒色シルト小ブロックごくまばら、遺物の出土が少ない
6　灰色シルト　暗灰色シルトブロック多い

SD201～203,1322,1413,SX204
0　（1：40）　2m

SX279
0　（1：20）　1m


A
B
C
12
13
14
15
SE209
SE 212
SE213
SE266
SK1103
P1117
P1112
SD201
Tr
SX204
P1151
P1153
P1187
SE216
P1190
SB14
P1145
P1195
P1247
P1134
SB13
P1174
P1144
P1140
SE1107
SE214
SE1108
P1221
SK217
SE215
P1290
P1229
SK1041
P1199
SK118
SK1289
SK1288
SE1036
SE1035
SE919
SE1039
SE1043
SE911
P1037
SK939
SE123
P1078
SB16
SE 114
SE 115
P1070
SK1032
P1045
SK174
P1079
P1030
P1080
P933
P1081
P161
SE137
SK140
SK1042
P1073
P1029
SK1033
P1044
P1074
P1075
P1028
P1063
SK1031
SE918
P153
P1027
SK1034
SK160
P1024
P1077
SK139
SE 1040
SK1100
SE 138
SE162
SK 999
SE 108
SD107
P156
P1026
SB15
SK122
SE141
SK 1000
SD111
P157
SE196
0
(1 : 120)
6m

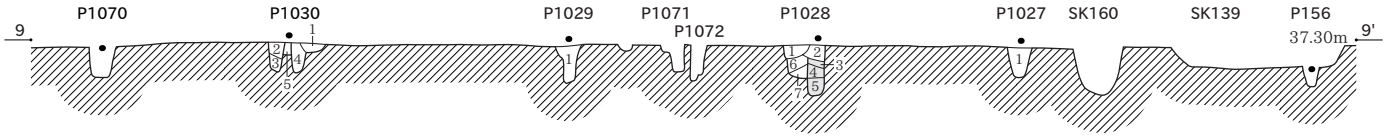




P1024
1 黒褐色シルト　地山ブロック粒多
2 灰色シルト　φ2mmの炭化物極まばら
3 黒褐色シルト　φ5mmの炭化物まばら

P1025
1 黒褐色シルト　地山ブロック粒多量
2 暗褐色シルト　地山ブロック粒多量
3 黒褐色シルト　地山ブロック粒まばら

P1026
1 黒褐色シルト　地山ブロック粒多量
2 灰黄色シルト　φ2mmの炭化物極まばら
3 黒色シルト　地山ブロック粒まばら
4 灰黄色シルト　φ2mmの炭化物まばら

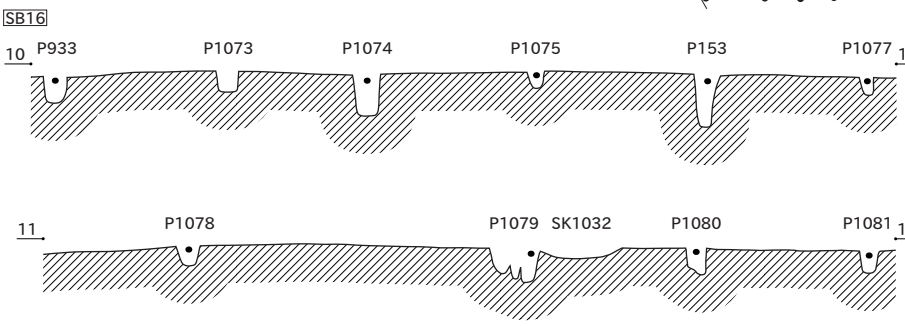


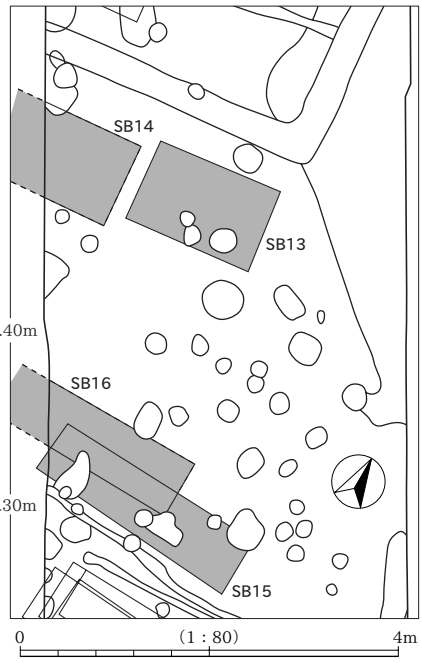
P1030
1 黒褐色シルト　φ3mmの炭化物多量
2 黒褐色シルト　φ3mmの炭化物まばら
3 灰黄色シルト　φ3mmの炭化物極まばら
4 黒褐色シルト　地山ブロック粒多量
5 灰黄色シルト　地山ブロック粒を基調

P1029
1 黒褐色シルト　φ5mmの炭化物まばら、地山ブロック粒多量

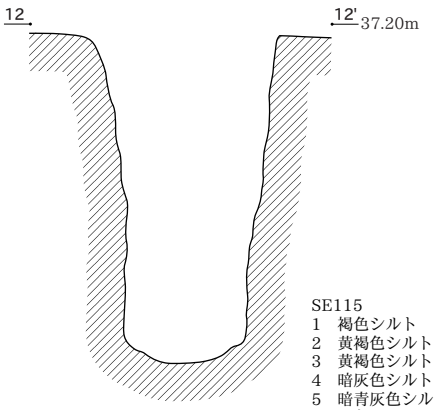
P1028
1 黒褐色シルト　炭化物極まばら
2 灰黄色シルト　暗褐色シルトブロックまばら
3 黒褐色シルト　地山ブロック粒極まばら
4 暗褐色シルト　地山ブロック粒多量
5 黒色シルト　地山ブロック粒まばら
6 灰黄色シルト　黒褐色シルトブロック多量、根固めで充填された土か
7 灰黄色シルト　φ2mmの炭化物極まばら、根固めで充填された土か

P1027
1 黒褐色シルト　地山ブロック粒多量

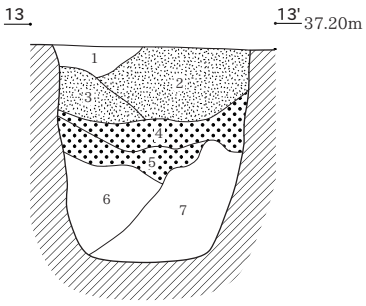




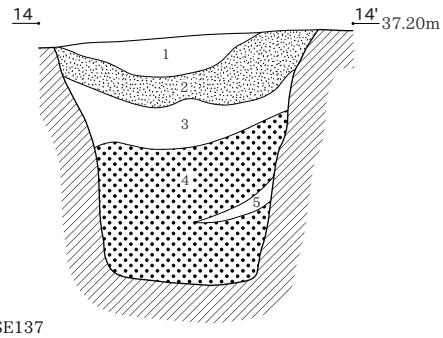
SE114



SE115



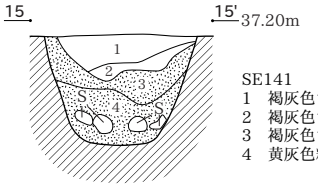
SE137



SE115
1　褐色シルト　黄褐色シルトブロック多量、鉄分まばら、炭化物極まばら
2　黄褐色シルト　黄褐色シルトブロック極多量、鉄分多い、炭化物極まばら
3　黄褐色シルト　2と共通するが、帯状に堆積
4　暗灰色シルト　暗青灰色シルトブロック多量、黒色シルト極まばら
5　暗青灰色シルト　黒色シルト多量
6　黒色シルト　暗青灰色シルトブロック多量
7　青灰色シルト　黒色シルトまばら

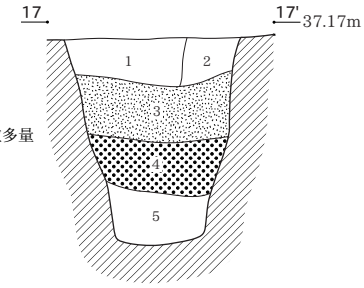
SE137
1　黒褐色シルト　φ5mmの炭化物、地山ブロックまばら
2　黒色シルト　φ5～10mmの炭化物、地山ブロック多量
3　黒色シルト　φ5～10mmの炭化物、地山ブロック極まばら
4　黒色粘質シルト　粘性強く、地山ブロック極まばら
5　灰白色粘質シルト　部分的に陥入

SE141



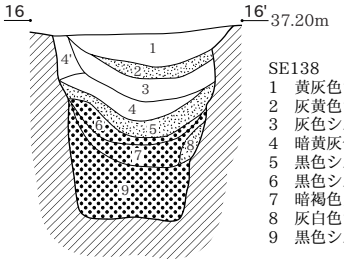
SE141
1　褐灰色シルト　φ2～5mmの炭化物、地山ブロック粒多量
2　褐灰色シルト　φ2～5mmの炭化物、地山ブロック粒まばら、炭化物が部分的に集中
3　褐灰色シルト　灰白色の地山ブロック多量、φ2～5mmの炭化物まばら
4　黄灰色粘質シルト　地山ブロック多量、礫がまとまって出土

SE162

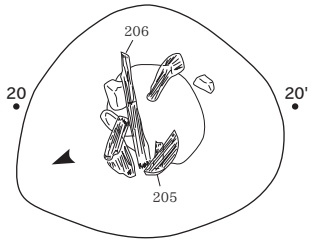


SE162
1　黒褐色シルト　φ5～10mmの炭化物まばら、地山ブロック粒多量
2　黒色シルト　地山ブロック多量
3　黒色粘質シルト　地山ブロック極多量
4　黒色ガツボ　腐植物層
5　黒色粘質シルト　地山ブロック多

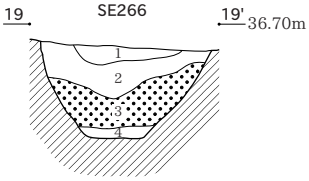
SE138



SE138
1　黄灰色シルト　φ2～10mmの炭、地山ブロック多量
2　灰黄色シルト　地山ブロックを主体
3　灰色シルト　φ2～10mmの炭、地山ブロック多量
4　暗黄灰色シルト　φ2～10mmの炭まばら、地山ブロック多量、4'は4より暗い
5　黒色シルト　灰白色シルトを極めて多量に含む
6　黒色シルト　黒色化した腐植物主体
7　暗褐色ガツボ　腐植物層
8　灰白色シルト　地山ブロック
9　黒色シルト　ガツボ質、腐植物多

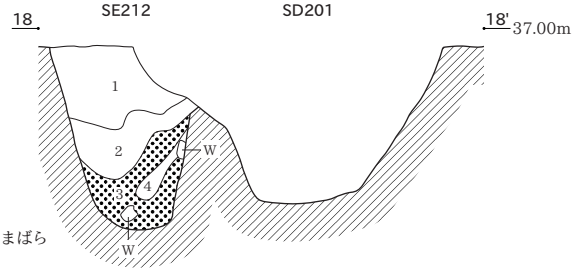


SE266



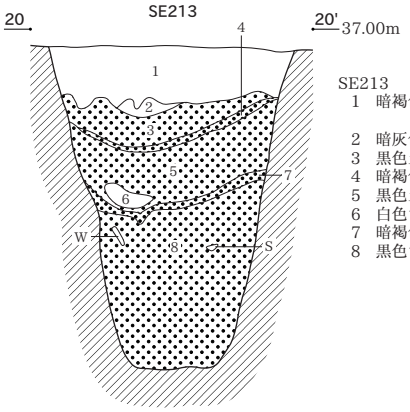
SE266
1　黒褐色土　灰白色シルト小ブロックまばら、鉄分まばら
2　暗青灰色シルト　黒色シルトまばら
3　黒色シルト　暗青灰色シルト小ブロックまばら
4　青灰色シルト　黒色シルト小ブロックごくまばら

SE212　SD201



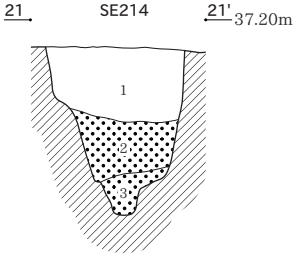
SE212
1　暗灰色土　炭化粒・黄褐色ブロックごくまばら、鉄分まばら
2　青灰色シルト　暗灰色ブロック多い
3　暗褐色土　腐植物層
4　青灰色砂シルト

SE213



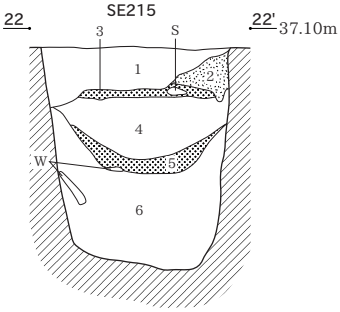
SE213
1　暗褐色土　黄褐色ブロック・炭化粒まばら、暗青灰色シルト小ブロックごくまばら
2　暗灰色シルト　暗青灰色シルトブロックごくまばら
3　黒色土シルト　暗青灰色シルトブロック多い
4　暗褐色土　腐植物層
5　黒色土シルト　暗青灰色ブロックごくまばら
6　白色シルト　黒色シルトごくまばら
7　暗褐色土　腐植物層
8　黒色シルト　礫・木製品が出土する、腐植物多い

SE214

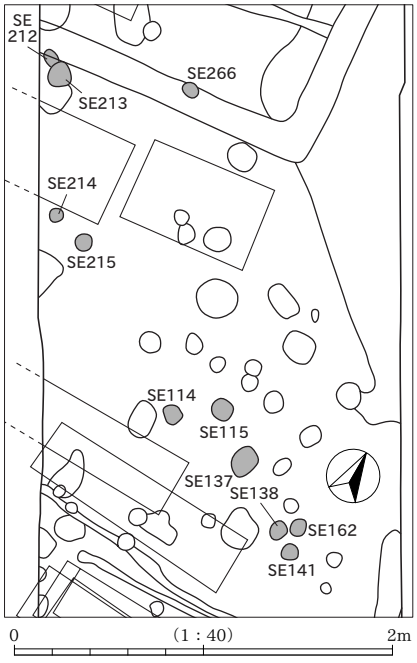


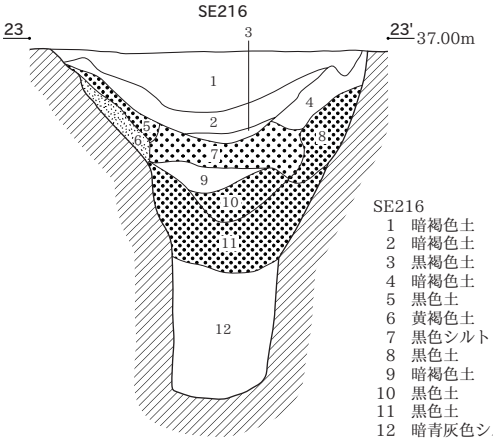
SE214
1　暗褐色土　黄褐色ブロック多量、炭化物ごくまばら
2　黒色土シルト　暗青灰色シルトブロック多量
3　黒色土シルト　暗青灰色ブロックごくまばら

SE215



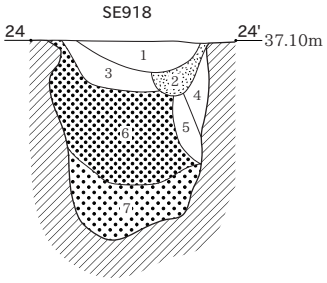
SE215
1　暗褐色土　青灰色ブロックまばら、炭化物ごくまばら、鉄分多い
2　黄褐色土　黄褐色ブロック多量
3　黒色土　炭化物層
4　暗灰色シルト
5　黒色土　炭化物層
6　青灰色シルト　暗灰色シルト多い

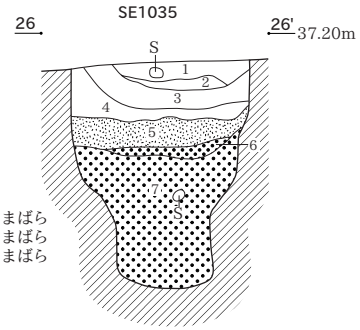




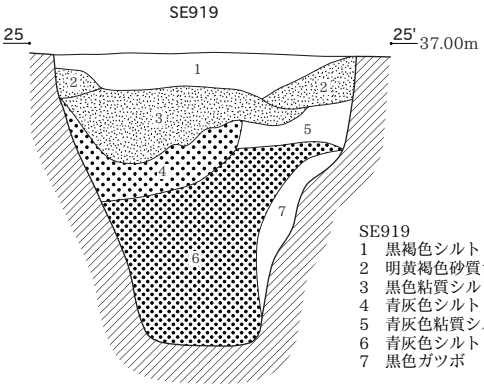
SE216
1　暗褐色土　炭化物・黄褐色土まばら
2　暗褐色土　1層より多い
3　黒褐色土　灰白色シルト・炭化物・黄褐色土まだら
4　暗褐色土　炭化物まばら、黄褐色土多い
5　黒色土　灰白色シルトわずか、腐植物層
6　黄褐色土　黄褐色土と灰白色シルト多量
7　黒色シルト　灰白色シルトブロックやや多い
8　黒色土　黄褐色土小ブロック・腐植物多い
9　暗褐色土　腐植物・灰白色シルトごくまばら
10　黒色土　腐植物層
11　黒色土　10層と同じだが、灰白色シルトブロック5cmφをまばら
12　暗青灰色シルト　黒色、灰白色シルト小ブロックごくまばら

SE918
1　黒褐色シルト　地山ブロック粒、φ2～10mmの炭化物多量
2　黒褐色シルト　地山ブロック粒極多量、φ2～10mm炭化物まばら
3　黒褐色シルト　地山ブロック粒、φ2～5mm炭化物まばら
4　黒色シルト　地山ブロック粒まばら
5　黒褐色シルト　地山ブロック粒多量
6　黒色砂質シルト　ガツボ質で灰を基調とする
7　青灰色シルト　黒色シルトブロック多量

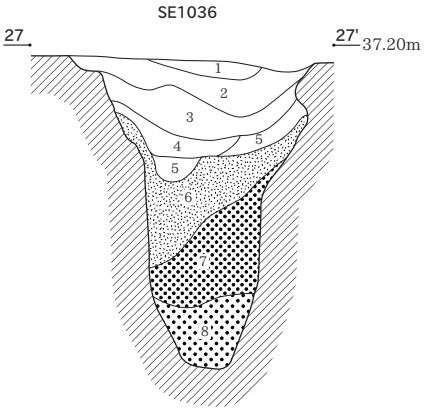




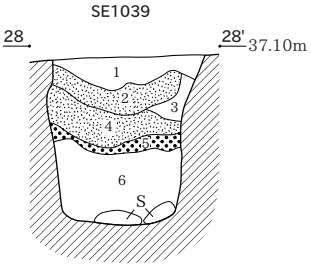
SE1035
1　黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物、地山ブロック粒まばら
2　黒色シルト　φ2～5mmの炭化物、地山ブロック粒まばら
3　黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物、地山ブロック粒まばら
4　暗褐色シルト　地山ブロック多量
5　褐灰色粘質シルト　灰白色粘土多量
6　暗褐色ガツボ　腐植物を主体
7　黒色シルト　腐植物多量



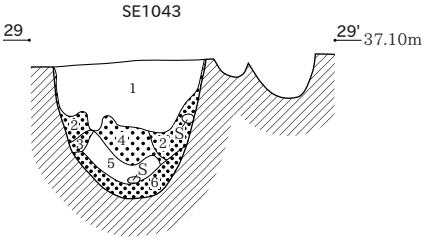
SE919
1　黒褐色シルト　地山ブロック粒、φ10mmの炭化物多量
2　明黄褐色砂質シルト　地山の崩落土
3　黒色粘質シルト　地山ブロック極多量
4　青灰色シルト　黒色シルトブロック極多量
5　青灰色粘質シルト　φ10mmの炭化物まばら
6　青灰色シルト　φ10mmの炭化物極まばら
7　黒色ガツボ　腐植物層



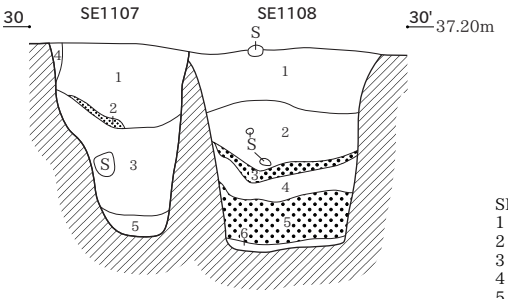
SE1036
1　灰色シルト　φ10mmの炭化物ごくまばら
2　黒色シルト　地山ブロック粒まばら
3　黒褐色シルト　地山ブロック粒まばら
4　黒褐色シルト　灰白色粘土まばら
5　黒色砂質シルト　灰を基調とする、白色粒子まばら
6　黒褐色粘質シルト　灰白色粘土ブロック多量
7　黒色シルト　ガツボ質、腐植物極多量
8　黒色粘質シルト　7を基調とするが粘性強い

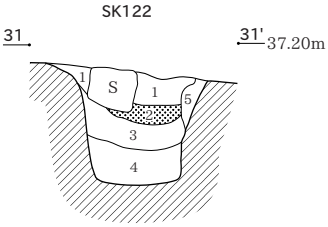


SE1039
1　暗褐色シルト　地山ブロック粒、φ2～5mm炭化物多量
2　黄灰色シルト　暗褐色シルトブロックまばら、地山土基調
3　暗褐色シルト　地山ブロック粒まばら
4　黒褐色シルト　地山ブロックを多量に含む
5　暗褐色シルト　腐植物層
6　黒色粘質シルト　地山ブロックをまばらに含む、底面に礫集中



SE1043
1黄灰色シルト　暗灰色シルトブロックまばら
2黒色砂質シルト　腐植物を主体
3黒褐色砂質シルト　腐植物を主体
4灰色砂質シルト　混入物を含まず地山に酷似
5灰色シルト　黒色シルトブロックまばら
6黒色砂質シルト　腐植物を主体

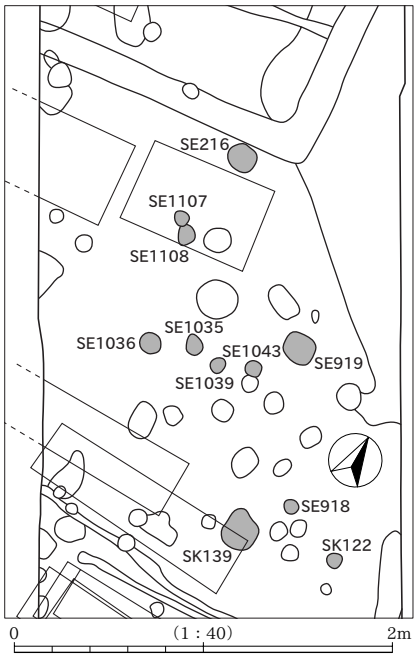


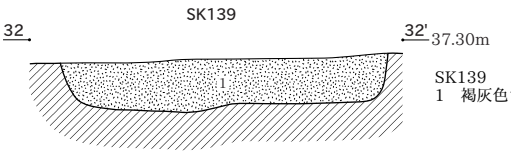


SK122
1　褐灰色シルト　地山ブロック、φ5mmの炭化物まばら
2　黒色シルト　粘性弱く、炭化物粒子多量
3　黒褐色粘質シルト　地山ブロックまばら
4　灰色粘質シルト　φ5mmの炭化物まばら
5　黒色シルト　地山ブロック、φ5mmの炭化物まばら

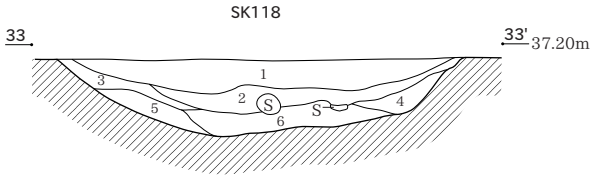
SE1107
1　暗褐色シルト　炭化物粒まばら、小円礫少、地山褐色粒少、灰色小ブロック少
2　黒色シルト　炭化物粒多
3　暗灰色シルト　小円礫少、地山青灰色小ブロックまばら
4　暗青灰色シルト　炭化物粒まばら
5　暗青灰色粘質シルト　炭化物粒少

SE1108
1　黒褐色シルト　地山褐色小ブロック、灰色小ブロックまばら、炭化物粒少
2　暗青灰色シルト　暗青灰色小ブロック多、小円礫・炭化物粒まばら
3　黒褐色シルト　腐食物・炭化物粒多
4　暗青灰色粘質シルト　地山青灰色小ブロック多
5　青黒色粘質シルト　炭化物粒まばら、小～中円礫少
6　暗青灰色粘質シルト　地山青灰色小ブロック多

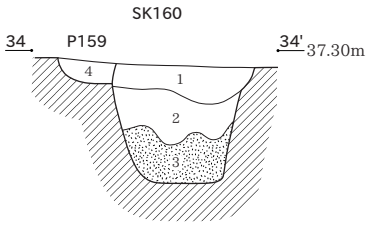




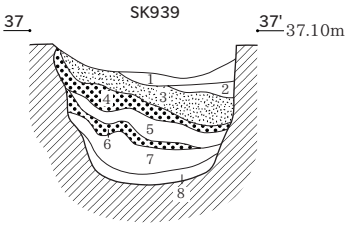
SK139
1　褐灰色シルト　地山ブロック極多量、φ2mmの炭化物まばら



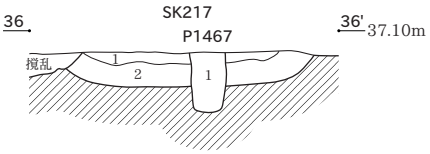
SK118
1　褐灰色シルト　地山ブロック多量、φ10mm以下の炭化物まばら
2　灰色シルト　φ5mmの炭化物まばら
3　灰色シルト　炭化物多量
4　灰色シルト　地山ブロック多量
5　灰色シルト　地山ブロック多量
6　暗灰色粘質シルト　地山ブロックまばら



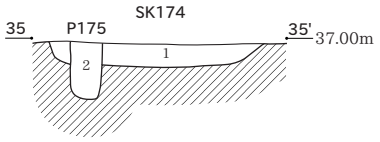
SK160
1　黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物まばら、地山ブロック粒多量
2　黒褐色粘質シルト　〃　〃
3　黒色粘質シルト　灰白色地山ブロック極多量
4　黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物多、地山ブロック粒まばら



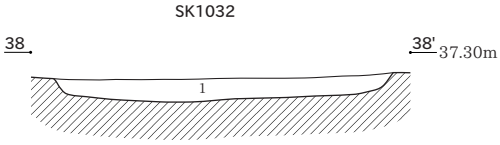
SK939
1　青灰色シルト　地山土を基調とする、φ5mmの炭化物極まばら
2　灰色シルト　φ5mmの炭化物多量
3　青灰色シルト　地山土を基調とする、φ5mmの炭化物極まばら
4　黒褐色シルト　腐植物多量
5　青灰色シルト　地山ブロック、黒褐色シルトブロックまばら
6　黒褐色シルト　腐植物多量
7　青灰色シルト　地山ブロック、黒褐色シルトブロックまばら
8　青灰色粘質シルト　7より粘性強、黒褐色シルトブロック極まばら



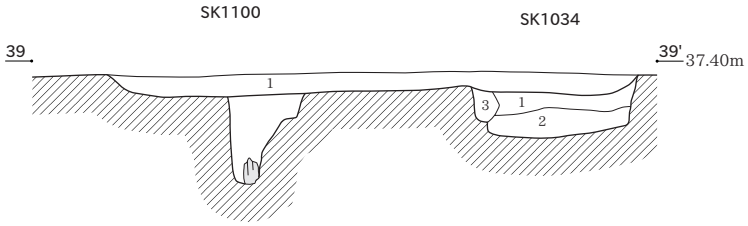
SK217
1　黒褐色土　黄褐色土まばら
2　黒褐色土　黄褐色土多い
P1467
1　黒褐色土　黄褐色土・炭化物まばら



SK174、P175
1　灰黄色粘質シルト　地山と酷似する覆土、φ5mmの炭化物極まばら　ＳＫ174
2　黒褐色シルト　地山ブロック、φ2～5mmの炭化物多量

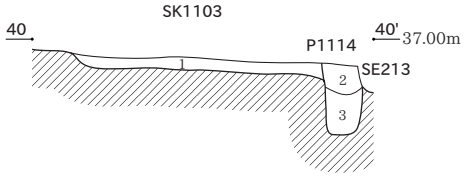


SK1032
1　暗褐色シルト　φ2～5ｍｍの炭化物まばら

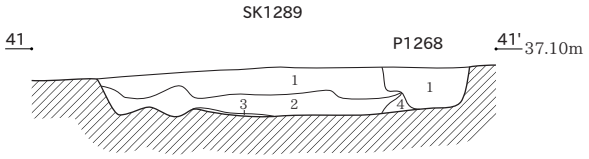


SK1100
1　暗褐色シルト　φ5mmの炭化物まばら

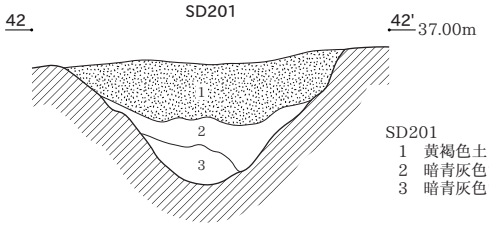
SK1034
1　黄褐色シルト　しまり良好、地山ブロック粒主体
2　暗黄灰色シルト　しまり良好、地山ブロック粒主体
3　にぶい黄色シルト　しまり良好、地山ブロック粒主体



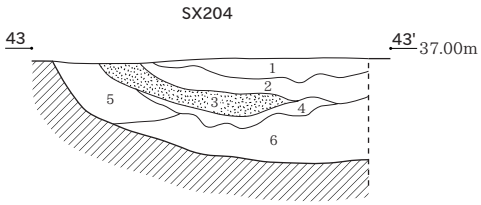
SK1103
1　暗褐色シルト　地山灰白色小ブロックまばら、炭化物粒少
2　暗褐色シルト　地山褐色土粒まばら、炭化物粒少
3　褐色シルト　地山褐色土粒やや多、炭化物まばら



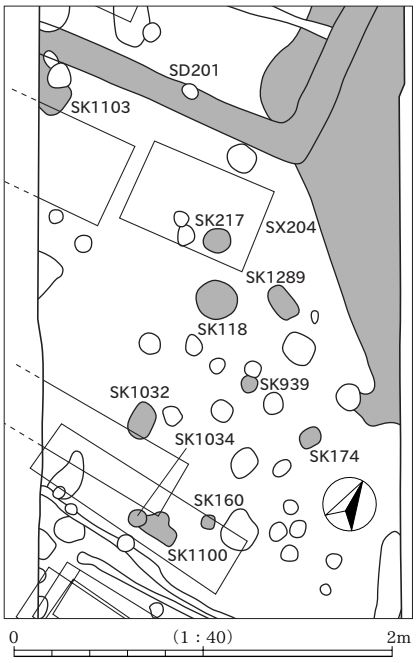
SK1289
1　にぶい黄橙色シルト　鉄分沈着やや多、炭化物粒まばら
2　暗青灰色シルト　炭化物粒やや多
3　暗灰色シルト　炭化物粒多、灰やや多、焼土粒まばら
4　にぶい黄褐色シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着少
P1268
1　褐灰色シルト　炭化物粒やや多、焼土粒まばら



SD201
1　黄褐色土　暗青灰色シルトブロック・鉄分多量、人為的埋土
2　暗青灰色シルト　暗灰色シルト多い
3　暗青灰色シルト　黒色シルトブロック多い、暗灰色シルト多い

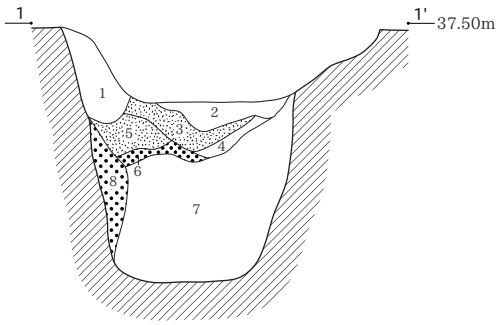


SX204
1　灰色シルト　φ5～10mmの炭化物極まばら
2　黄灰色シルト　φ2～5mmの炭化物まばら
3　灰色シルト　地山ブロック粒極多量
4　黒色灰　細粒の灰を基調とする
5　灰色シルト　地山ブロック粒極多量
6　灰色粘質シルト　地山ブロックまばら、5より暗い色調



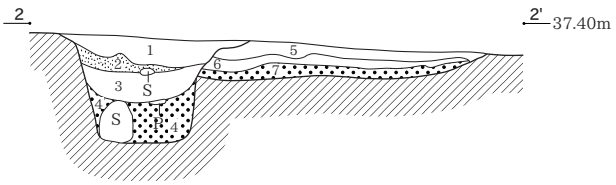
A
B
C
14
15
16
17
SB16
SB15
SB23
SK939
SE911
SE114
SE115
SE123
SK1032
SK174
SK140
SE137
SK1042
SK1033
SK1031
SE918
SK1034
SK160
SE138
SK139
SE1040
SK1100
SE162
SK999
SE108
SK122
SE141
SD107
SK1000
P960
SD111
SK149
SK158
SE196
SK168
SK961
SK192
SK152
SK112
SE194
SK136
SK113
SK193
SD106
SK133
P1018
SD101
SD1022
SE1023
P1019
SE144
SD1021
SK169
SD117
SD102
SD116
SK996
SK1017
37.2m
37.3m
37.1m
37.0m
36.9m
37.4m
37.5m
37.6m
0
(1：120)
6m

SE144



SE144
1　暗灰黄色砂質シルト　φ5ｍｍほどの炭化物まばら、2層より明るい
2　灰黄褐色砂質シルト　φ5ｍｍほどの炭化物まばら
3　緑黒色シルト　青灰色粘土ブロック多量
4　青灰色シルト　3層のブロック
5　灰色砂質シルト　均質
6　黒色粘質シルト　腐植物多量
7　暗灰色粘質シルト　青灰色シルトブロックと同比
8　黒色粘質シルト

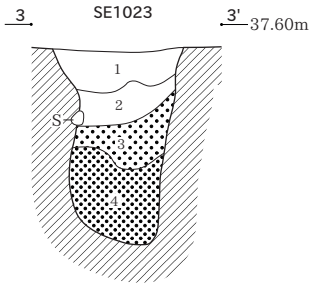
SE194　SK193



SE194
1　黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物まばら、地山ブロック粒多量
2　灰白色粘質シルト　φ2mmの炭化物まばら、地山ブロック主体
3　黒色シルト　φ2～5mmの炭化物、地山ブロックまばら
4　黒褐色粘質シルト　地山ブロック多量、3、4層境に土師器皿が出土

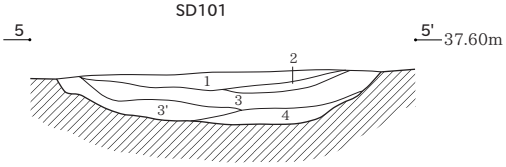
SK193
5　黒色シルト　地山ブロック多量、下部ほど灰が多く混入
6　灰色灰　細粒の灰がラミナ状に堆積
7　黒色粘質シルト　地山ブロックまばら

SE1023



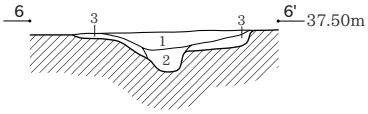
SE1023
1　灰色シルト　φ2～10mmの炭化物をまばらに含む
2　黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物をまばらに、地山ブロック粒を多量に含む
3　黒褐色粘質シルト　地山ブロックをまばらに含む
4　黒色ガツボ　腐植物を主体とする

SD101



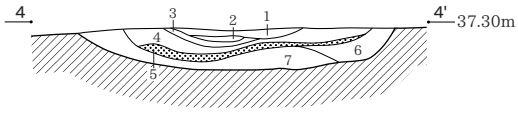
SD101
1　黒褐色シルト　炭化物粒まばら
2　黒褐色シルト　白色の灰を含む
3　黒褐色シルト　炭化物粒、灰黄色粘土ブロックまばら
3　黒褐色シルト　3層に鉄分沈着
4　黒褐色粘質シルト　灰黄色粘土ブロック多量

SD101



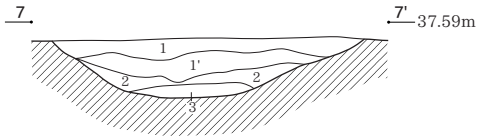
SD101
1　黒褐色シルト　炭化物多量
2　褐灰色シルト　炭化物まばら
3　灰黄色シルト　1層のブロック

SD101



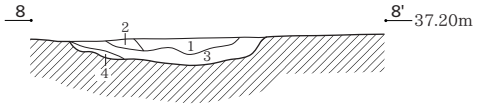
SD101
1　褐灰色シルト　炭化物粒子まばら
2　褐灰色シルト　灰黄色粒子多量
3　褐灰色シルト　炭化物、灰黄色粘土ブロックまばら
4　褐灰色シルト　混入物ほとんど認められず
5　黒褐色シルト　炭化物多量
6　褐灰色シルト　灰黄色粘土ブロック多量
7　褐灰色粘質シルト

SD102



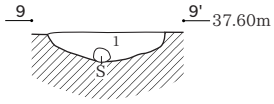
SD102
1　褐灰色シルト　炭化物粒まばら
1'　褐灰色シルト　炭化物粒、灰白色粘土ブロックまばら
2　褐灰色シルト　灰白色粘土ブロック多い
3　灰黄色シルト　炭化物粒まばら

SD106



SD106
1　黒褐色シルト　炭化物粒まばら
2　黄灰色シルト　炭化物粒まばら
3　褐灰色シルト　炭化物粒、灰黄色シルトブロック多量
4　黒色シルト　灰黄色シルトブロック少量

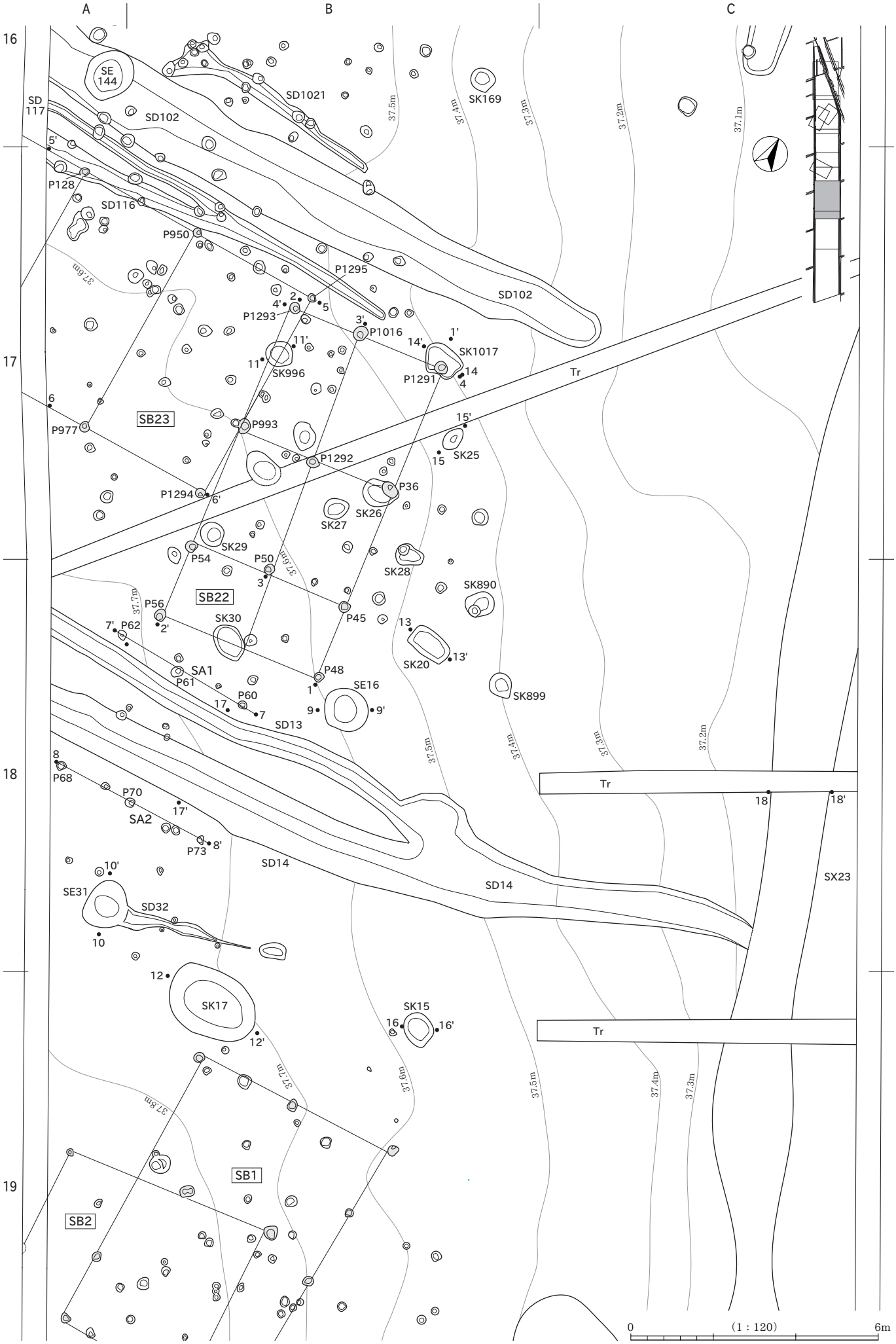
SD116・117



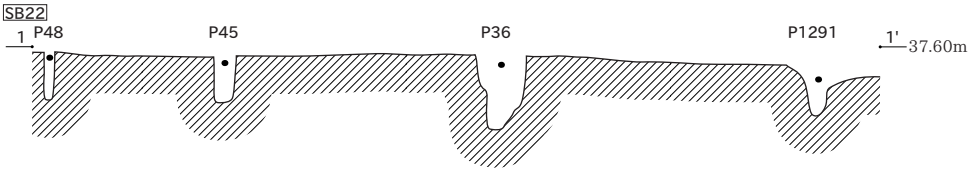
SD116・SD117
1 黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物多量

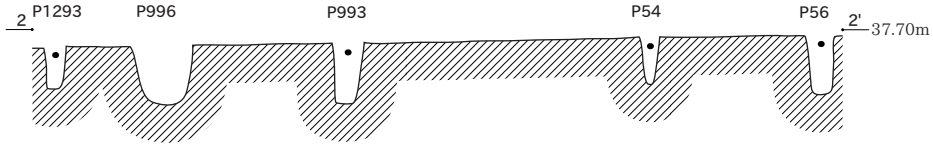
0　(1：40)　2m

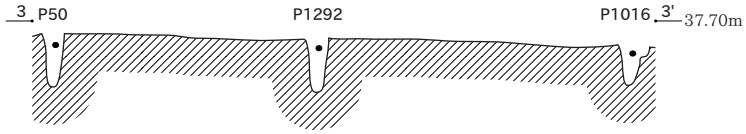
遺構分割図（5）

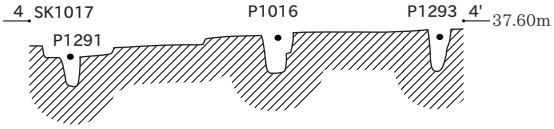

A
B
C
16
17
18
19
SE 144
SD 117
SD102
SD1021
SK169
5'
P128
SD116
P950
P1295
SD102
4'
2
5
P1293
3'
P1016
1'
14'
SK1017
11'
11
SK996
P1291
14
4
Tr
6
SB23
P977
P993
15'
P1292
15
SK25
P1294
6'
P36
SK26
SK27
SK29
P54
P50
3
SK28
SK890
P56
SB22
P45
7'
P62
2'
SK30
13
13'
SK20
SA1
P61
P48
1
SE16
SK899
P60
17
7
9
9'
SD13
8
P68
P70
17'
SA2
P73
8'
Tr
18
18'
SD14
SD14
SX23
10'
SE31
SD32
10
12
SK17
12'
SK15
16
16'
Tr
SB1
SB2
37.5m
37.4m
37.3m
37.2m
37.1m
37.6m
37.7m
37.8m
0
(1 : 120)
6m

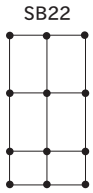
SB22

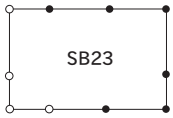




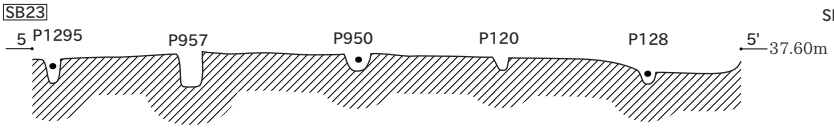


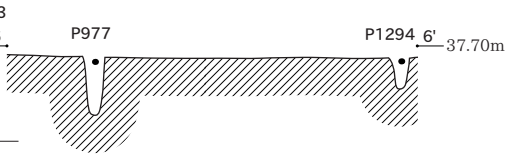




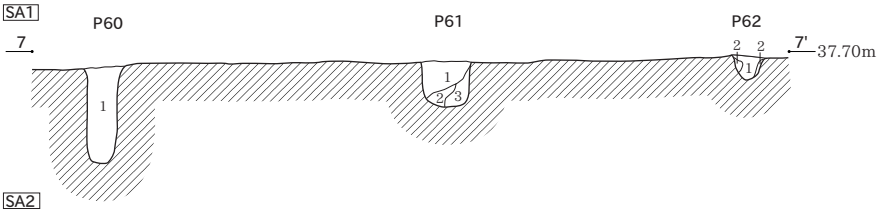


SB23

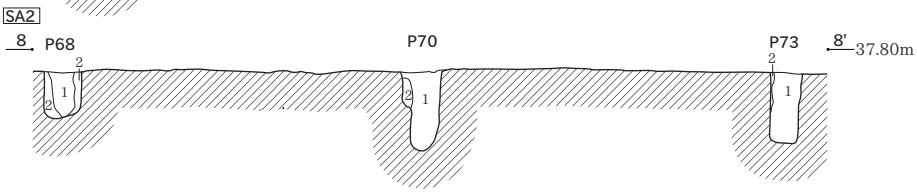




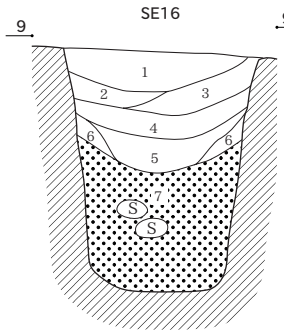
SA1

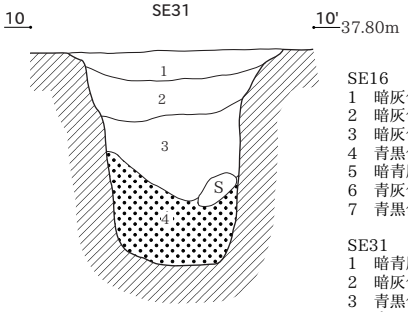


SA2



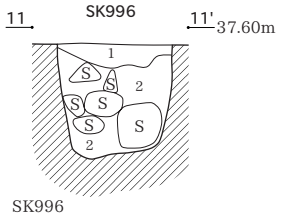
SA1
P60
1　暗青灰色シルト　地山青灰色小ブロックまばら、炭化物粒少、鉄分沈着やや多
P61
1　暗灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
2　灰白色シルト　炭化物粒まばら
3　灰白色シルト　2層より色調明るい、地山粒まばら、炭化物粒少
P62
1　青黒色シルト　地山小ブロックやや多
2　灰白色シルト　炭化物粒まばら
SA2
P68
1　黒褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少
2　灰白色シルト　地山小ブロック多、炭化物粒少
P70
1　黒褐色シルト　炭化物粒やや多、鉄分沈着やや多
2　暗灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少
P73
1　青黒色シルト　地山小ブロック少、炭化物粒まばら
2　灰白色シルト　地山小ブロックやや多、鉄分沈着多

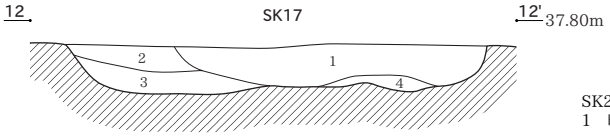


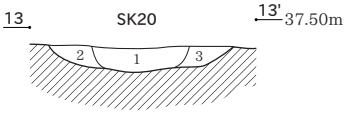


SE16
1　暗灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少、鉄分沈着やや多
2　暗灰色シルト　1層より色調暗い、炭化物粒まばら、鉄分沈着少
3　暗灰色シルト　2層より色調暗い、炭化物粒まばら、鉄分沈着少
4　青黒色粘質シルト　炭化物粒少、地山青灰色小ブロック少
5　暗青灰色粘質シルト　地山青灰色小ブロックやや多、炭化物粒まばら
6　青灰色粘質シルト　地山青灰色ブロック主体
7　青黒色粘質シルト　炭化物粒やや多、地山小ブロックまばら　被熱した20～30cmの円礫出土、木片出土

SE31
1　暗青灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら、鉄分沈着やや多
2　暗灰色シルト　炭化物粒やや多、鉄分沈着やや多
3　青黒色シルト　地山青灰色小ブロックまばら、炭化物粒少
4　青黒色粘質シルト　3層より色調暗い、炭化物粒・腐植物やや多、被熱した円礫出土



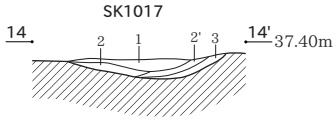




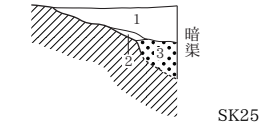
SK996
1　黒褐色シルト　φ5mmの炭化物をまばらに含む
2　黒色粘質シルト　φ10mm以上の礫を多量に含む

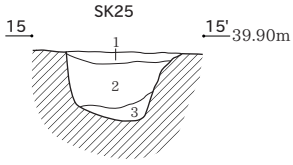
SK17
1　暗褐色シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着やや多
2　褐灰色シルト　炭化物粒まばら
3　褐灰色シルト　2層より色調暗い、炭化物粒少、鉄分沈着やや多
4　暗褐色シルト　炭化物粒少

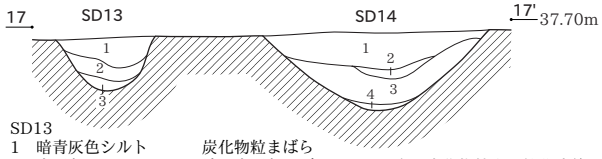
SK20
1　暗褐色シルト　炭化物粒まばら、地山小ブロック少、鉄分沈着少
2　褐灰色シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着少
3　暗青灰色シルト　地山小ブロック少



SK1017
1　灰黄色シルト　地山ブロック主体
2　黒褐色シルト　φ5mmの炭化物多量、遺物多数、2'はより明るい色調
3　黄灰色シルト　φ2～5mmの炭化物ごくまばら





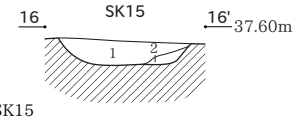


SX23
1　青黒色粘質シルト　炭化物粒まばら
2　暗青灰色粘質シルト　地山青灰色小ブロックやや多
3　黒色粘質シルト　炭化物粒やや多

SK25
1　暗褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少、鉄分沈着やや多
2　暗灰色シルト　地山小ブロックまばら、炭化物粒少、鉄分沈着やや多
3　褐色粘質シルト　炭化物粒少、鉄分沈着やや多

SD13
1　暗青灰色シルト　炭化物粒まばら
2　青灰色シルト　地山青灰色小ブロックやや多、炭化物粒少、鉄分沈着やや多
3　明青灰色粘質シルト　炭化物粒少、鉄分沈着やや多

SD14
1　暗青灰色シルト　炭化物粒少、地山青灰色小ブロックやや多
2　青黒色シルト　炭化物粒やや多、地山灰白色小ブロックやや多
3　暗青灰色シルト　炭化物粒少、地山青灰色小ブロック・鉄分沈着やや多
4　青灰色粘質シルト　炭化物粒少

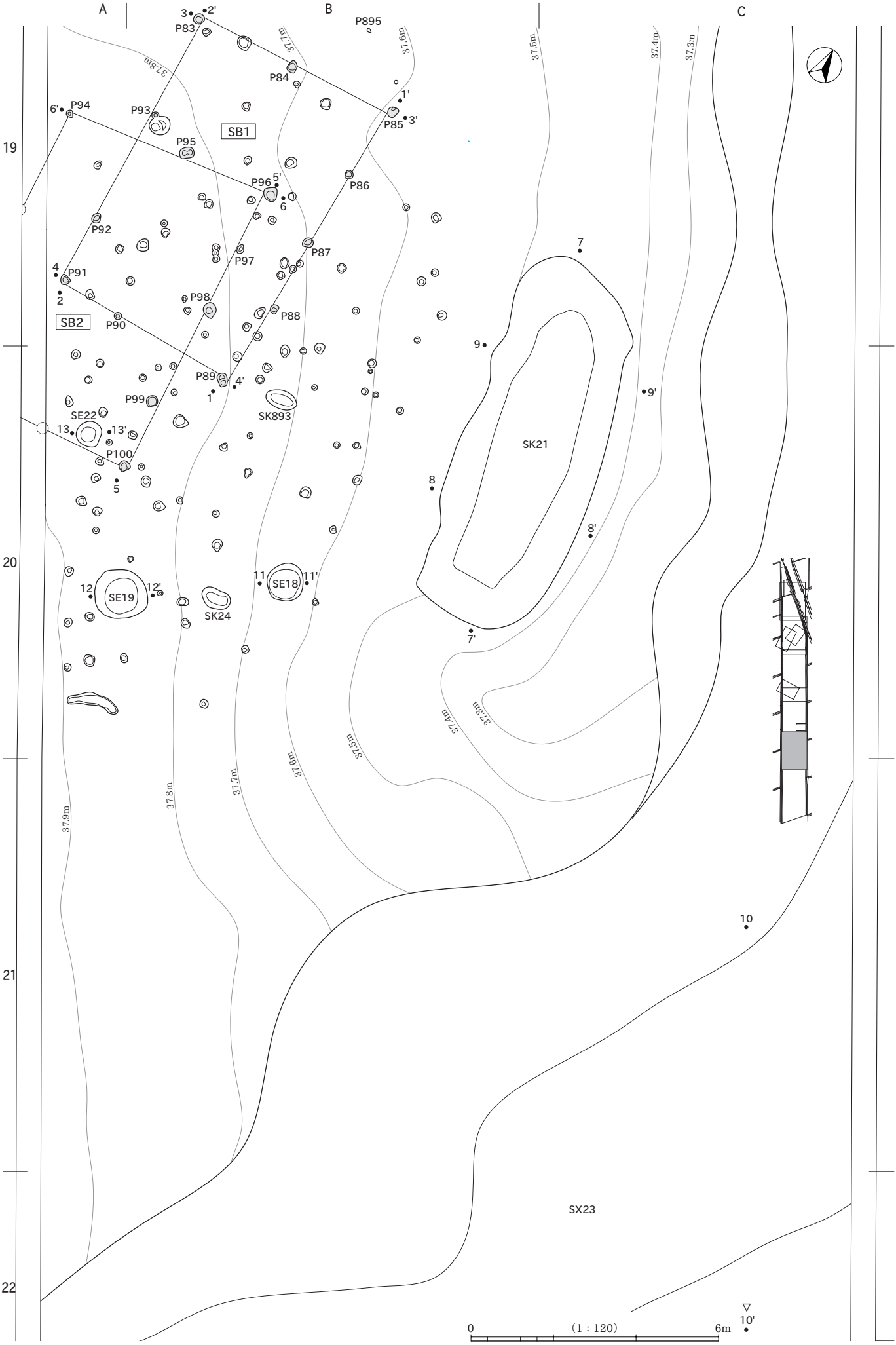


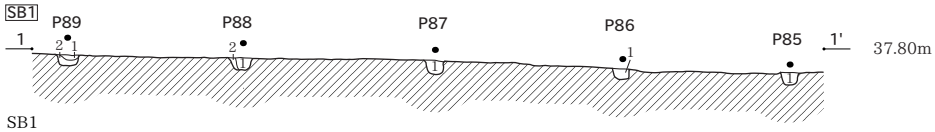
SK15
1　暗青灰色シルト　炭化物粒やや多
2　青灰色シルト　炭化物粒まばら

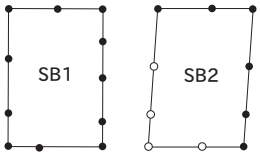
SB22,23・SA1,2・SX23
0　（1：80）　4m

SE16,31・SK15,17,20,25,996,1017・SD13,14
0　（1：40）　2m

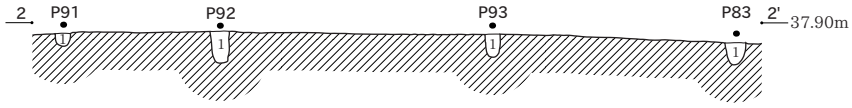
遺構分割図（6）


A
B
C
19
20
21
22
SB1
SB2
SK21
SX23
SE18
SE19
SE22
SK24
SK893
P83
P84
P85
P86
P87
P88
P89
P90
P91
P92
P93
P94
P95
P96
P97
P98
P99
P100
P895
37.8m
37.7m
37.6m
37.5m
37.4m
37.3m
37.9m
0
(1 : 120)
6m

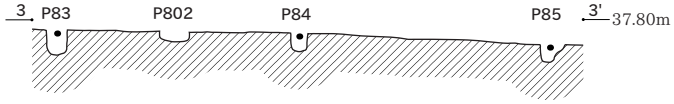


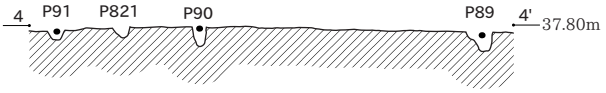


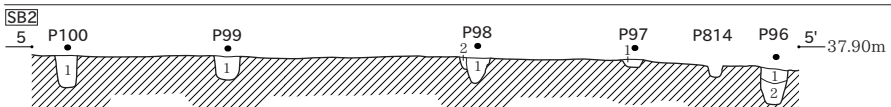
SB1
P89
1　暗青灰色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
2　灰白色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
P88
1　暗青灰色シルト　地山小ブロックまばら、炭化物粒少
2　灰白色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒少
P87
1　暗青灰色シルト　地山小ブロックまばら、炭化物粒少
P86
1　暗褐色シルト　地山小ブロックまばら、炭化物粒少
P85
1　黒褐色シルト　炭化物粒やや多、地山小ブロック少



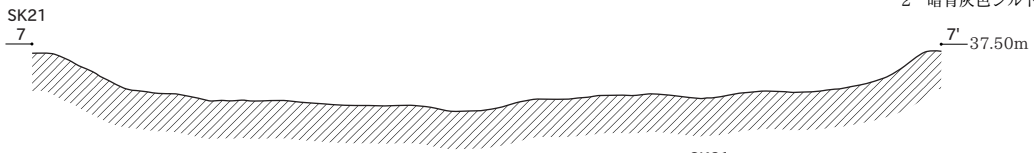
SB1
P91
1　暗青灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
P92
1　暗青灰色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
P93
1　暗青灰色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
P83
1　暗青灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら

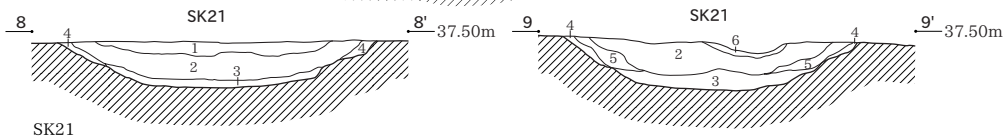




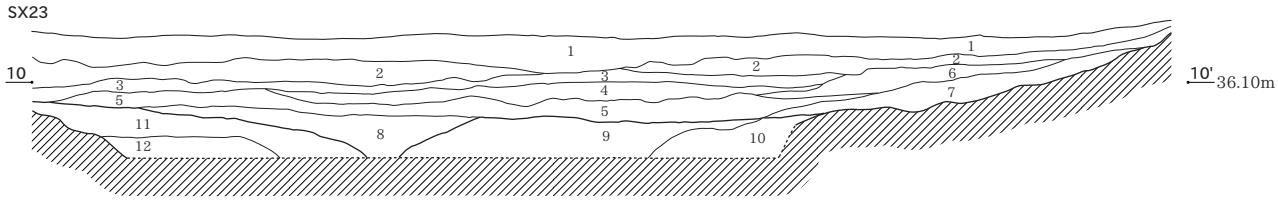


SB2
P100
1　暗青灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒やや多
P99
1　暗青灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
P98
1　暗青灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら、鉄分沈着少
2　灰白色シルト　地山ブロック多、炭化物粒まばら
P97
1　暗青灰色シルト　地山小ブロック・炭化物粒まばら
P96
1　にぶい褐色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら
2　暗青灰色シルト　地山小ブロックやや多、炭化物粒まばら

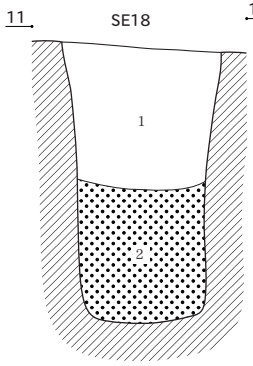


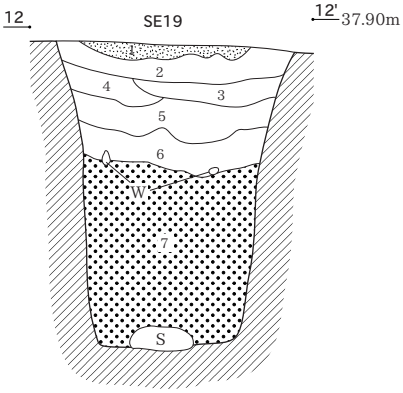


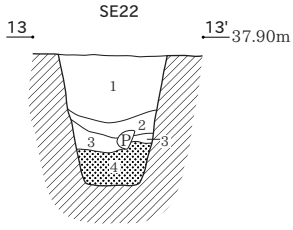
SK21
1　暗青灰色シルト　炭化物粒まばら、青灰色小ブロックやや多
2　暗青灰色シルト　1層より色調明るい、地山青灰色小・中ブロックやや多、炭化物粒まばら
3　青灰色粘質シルト　炭化物粒まばら
4　青灰色シルト　3層より色調明るい、地山主体
5　暗青灰色シルト　地山青灰色小ブロックまばら
6　暗青灰色シルト　炭化物粒・炭化物やや多



SX23
1　黒色シルト　炭化物粒やや多、腐植物多
2　暗褐色シルト　炭化物粒まばら、腐植物多
3　緑灰色砂質シルト　炭化物粒・腐植物まばら
4　暗褐色砂質シルト　炭化物粒少、腐植物まばら
5　オリーブ灰色シルト　炭化物粒少、腐植物まばら
6　オリーブ灰色粘質シルト　5層より色調暗い、腐植物多、炭化物粒まばら
7　暗褐色粘質シルト　腐植物多、炭化物粒やや多
8　暗褐色砂　腐植物やや多、1～5cmの小礫やや多　遺物出土層
9　暗褐色砂礫　腐植物・炭化物粒まばら、1～5cmの小礫多、5～10cmの小礫少
10　黒褐色砂礫　腐植物やや多
11　暗褐色砂質シルト　腐植物やや多、炭化物粒まばら
12　褐色砂質シルト　腐植物多







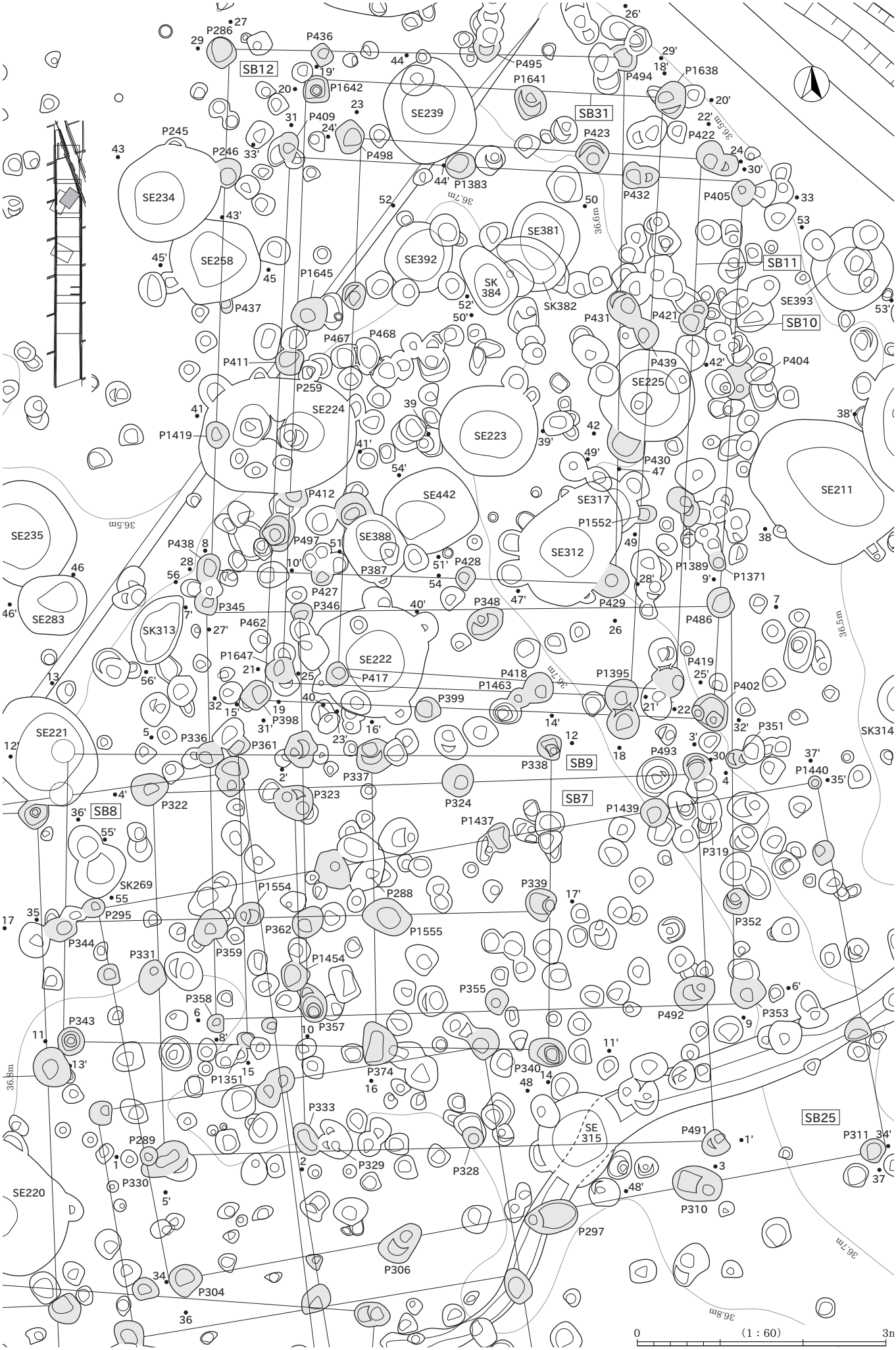
SE18
1　青黒色シルト　炭化物粒少、地山暗青灰色小ブロックまばら
2　青黒色粘質シルト　炭化物粒まばら、地山青灰色小ブロック少

SE19
1　暗褐色シルト　地山ブロック多、炭化物粒少、鉄分沈着やや多
2　暗灰色シルト　炭化物粒やや多、地山暗褐色小ブロック少、鉄分沈着少
3　暗灰色シルト　2層より色調暗い、炭化物粒少、地山小ブロック少、鉄分沈着やや多
4　暗灰色シルト　3層より色調暗い、炭化物粒やや多、鉄分沈着やや多
5　青黒色粘質シルト　炭化物粒・地山青灰色小ブロックやや多
6　青黒色粘質シルト　5層より色調暗い、炭化物粒やや多、地山青灰色小ブロックまばら、木片出土層
7　青黒色粘質シルト　6層より色調暗い、炭化物粒やや多、地山青灰色小ブロック少

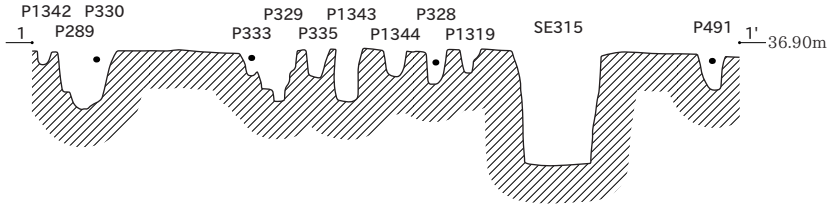
SE22
1　暗褐色シルト　地山灰白色小ブロックやや多、炭化物粒少、鉄分沈着やや多
2　暗青灰色粘質シルト　炭化物粒まばら、鉄分沈着少
3　暗青灰色粘質シルト　2層より色調明るい、炭化物粒まばら、
4　青黒色粘質シルト　炭化物粒・炭化物多、地山青灰色小ブロックまばら

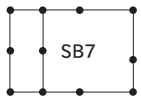
SB1,SB2・SK21,SX23
0　(1：80)　4m

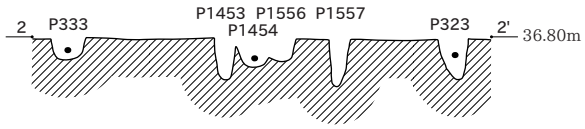
SE18,19,22
0　(1：40)　2m

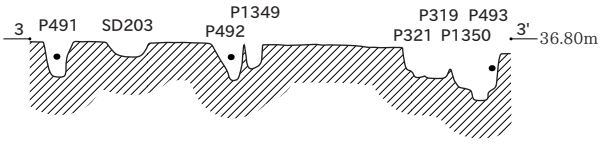

SB12
SB31
SB11
SB10
SB9
SB7
SB8
SB25
SE239
SE234
SE258
SE392
SE381
SK384
SK382
SE393
SE225
SE223
SE224
SE211
SE235
SE442
SE317
SE388
SE312
SE283
SK313
SE222
SE221
SK314
SK269
SE220
SE315
36.7m
36.6m
36.5m
36.8m
0
(1：60)
3m

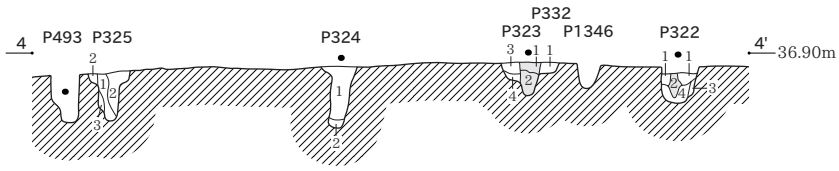
SB7









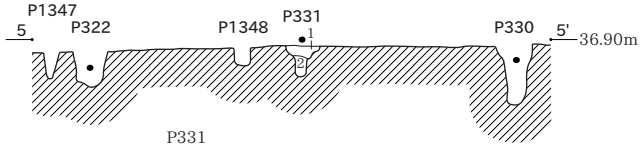


P323
1　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
2　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロックごくまばら
3　黄褐色土　暗灰色ブロックまばら
4　黄褐色土　暗灰色ブロック多い

P332
1　暗褐色土　黄褐色小ブロック多い

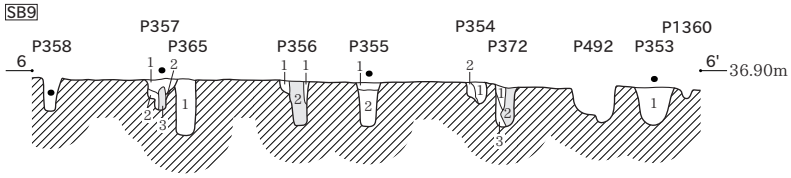
P324
1　暗褐色土　黄褐色土・炭化物まばら
2　黄褐色土　暗褐色土ごくまばら

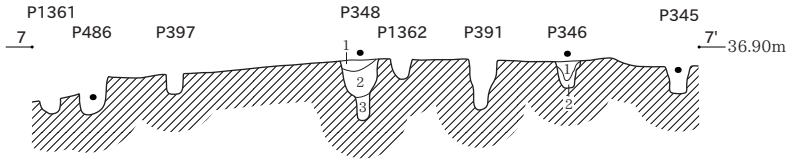
P322
1　黒褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロックまばら
2　黄褐色シルト　黒褐色土多い
3　黒褐色シルト　黄褐色小ブロック多い
4　黒色シルト　黄褐色小ブロックまばら



P331
1　暗褐色土　黄褐色ブロックまばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら

SB9





P348
1　暗褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロック多い、炭化物まばら
3　黒褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物まばら

P346
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
2　黄褐色土　暗褐色土まばら

P354
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
2　黄褐色土　暗褐色土まばら

P372
1　黄褐色土　暗褐色土まばら
2　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロック・炭化物まばら
3　黄褐色土　暗褐色土ごくまばら

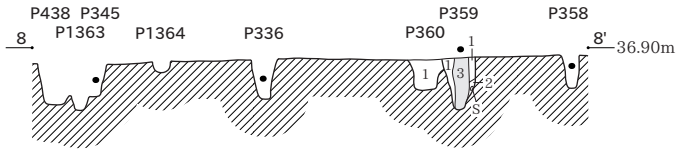
P353
1　暗褐色土　黄褐色小ブロック多い、炭化物まばら

P356
1　暗褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら
2　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロック多い、炭化物ごくまばら

P355
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロック多い

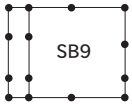
P357
1　暗褐色土　黄褐色大ブロックまばら
2　黄褐色土　暗褐色土まばら
3　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロックまばら

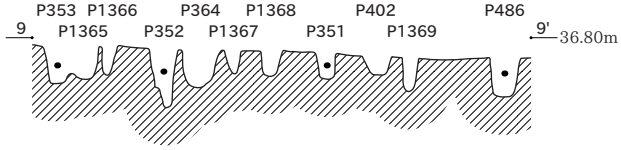
P365
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら

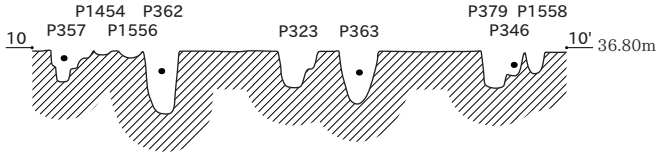


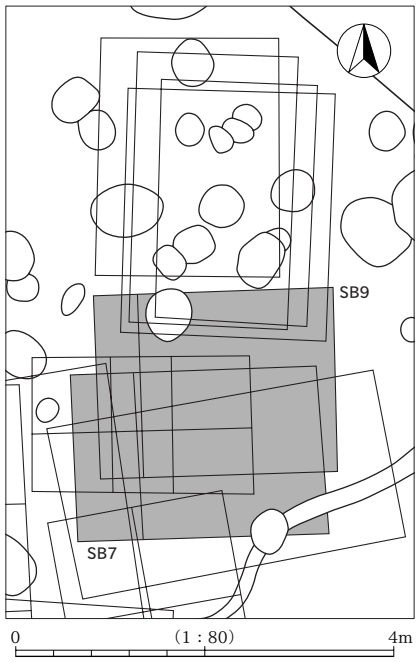
P360
1　黄褐色土　暗褐色土まばら

P359
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら
3　黄褐色土　柱痕。暗褐色土まばら

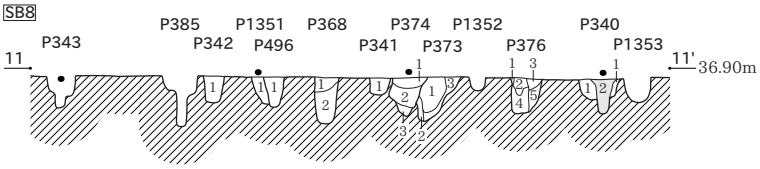


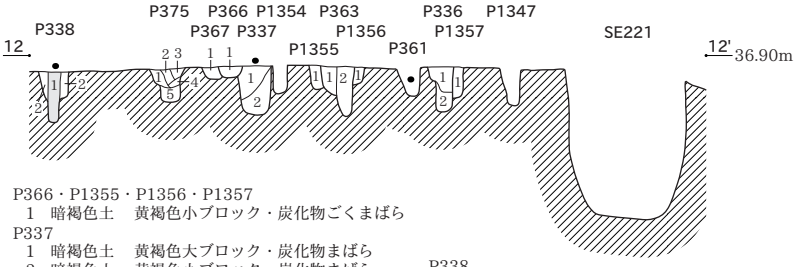






SB8

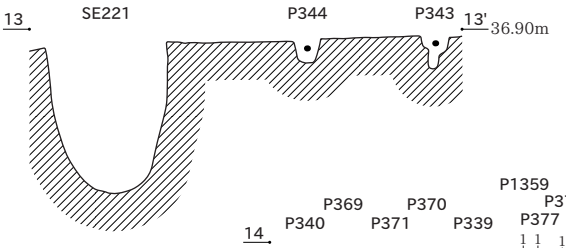


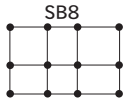


P366・P1355・P1356・P1357
1　暗褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら
P337
1　暗褐色土　黄褐色大ブロック・炭化物まばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
P363
1　暗褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
P336
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら

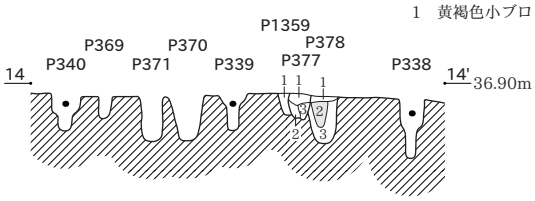
P338
1　黒色シルト　柱痕。黄褐色小ブロックごくまばら
2　暗褐色土　　黄褐色小ブロックまばら
P375
1　黄褐色土　暗褐色土・炭化物まばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら、炭化物まばら
3　黄褐色土　暗褐色土・炭化物まばら
4　暗褐色土　2層より黒い
5　黄褐色土　暗褐色土ごくまばら
P367
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら

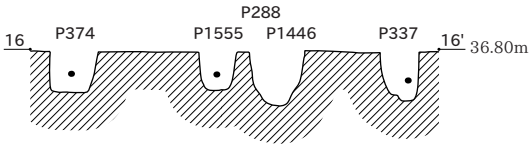
P368
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
2　黄褐色土　暗褐色小ブロックまばら
P342・P496
1　暗褐色土　暗褐色小ブロックまばら
P341・P1351
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
P374
1　暗褐色土　　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
2　黄褐色土　　暗褐色小ブロックまばら
3　黒褐色シルト　黄褐色小ブロックまばら
P373
1　黄褐色土　暗褐色土まばら
2　黒色シルト　黄褐色土ごくまばら
3　黒褐色土　黄褐色土まばら
P376
1　黄褐色土　暗褐色小ブロックまばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら
3　暗褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら
4　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
5　黄褐色土　暗褐色小ブロックごくまばら
P340
1　黄褐色土　暗褐色ブロックまばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら

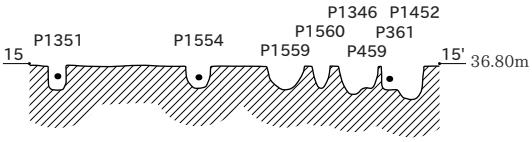


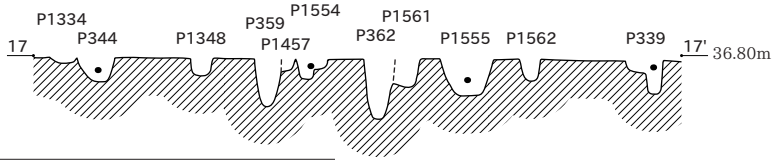


P377
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
2　暗褐色土　炭化物ごくまばら
3　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら
P378
1　暗褐色土　　黄褐色小ブロックまばら
2　暗褐色シルト　柱痕。1層より黒い
3　黄褐色土　　暗褐色小ブロックまばら
P1359
1　黄褐色小ブロックごくまばら

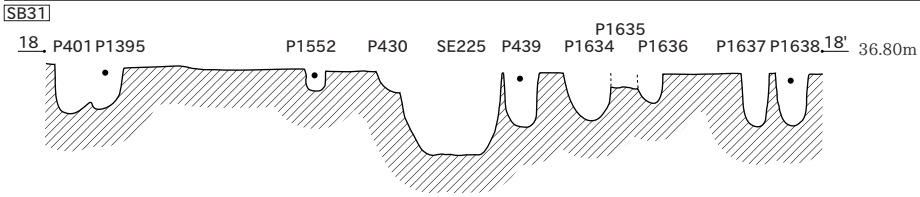


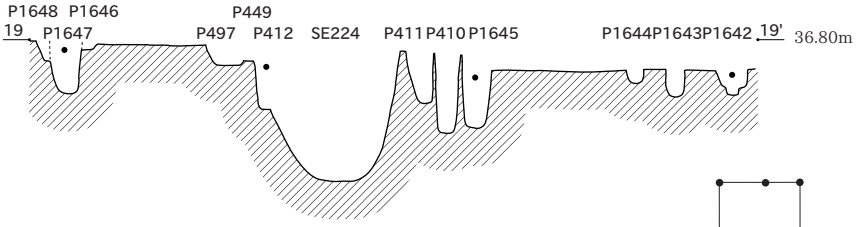


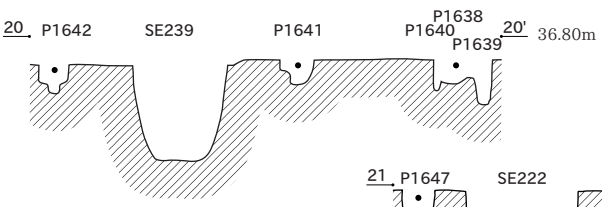


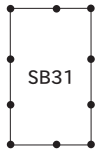


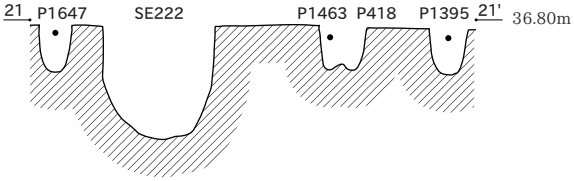
SB31



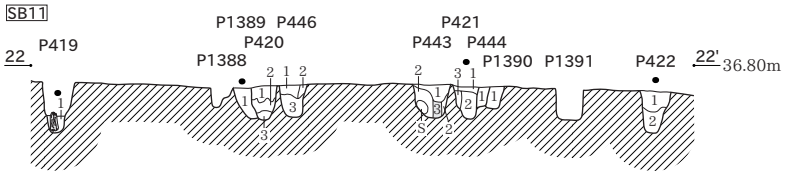


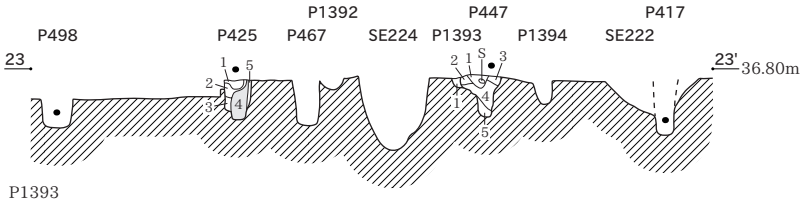






SB11

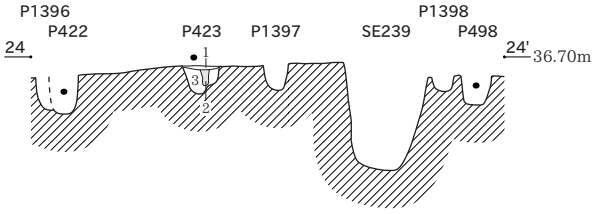




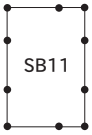
P1393
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
P447
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロック多い
3　黄褐色土　暗褐色土まばら
4　暗褐色土　黄褐色大ブロック多い
5　暗褐色シルト　黄褐色小ブロックごくまばら

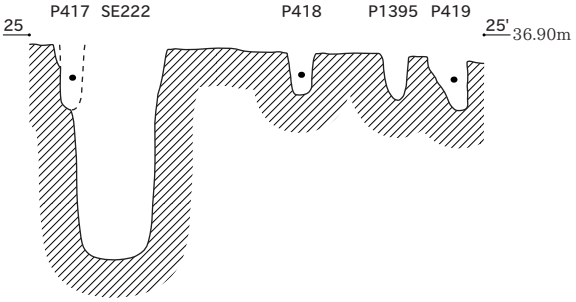
P425
1　暗褐色土　黄褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら
2　暗褐色土　黄褐色ブロック多い
3　暗褐色土　黄褐色ブロックまばら
4　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色ブロックまばら、3層より黒い
5　暗褐色土　黄褐色ブロック多い

P443
1　暗褐色土　黄褐色ブロック・炭化物まばら
2　黄褐色土　暗褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら
3　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色ブロックごくまばら
P421
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
2　暗褐色シルト　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
3　黄褐色土　暗褐色ブロックまばら
P444
1　暗褐色土　黄褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら
P1390
1　暗褐色土　黄褐色ブロックごくまばら
P422
1　暗褐色土　黄褐色ブロック多い、炭化物ごくまばら
2　灰褐色シルト　黄褐色シルトブロックまばら、炭化物ごくまばら
P419
1　暗灰色シルト　黒色シルト小ブロックごくまばら
P420
1　暗褐色土　柱痕が遺存。黄褐色ブロック多い
2　黄褐色土　暗褐色ブロックまばら
3　黄白色土　暗褐色小ブロック・黄褐色小ブロックまばら
P446
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら
2　褐灰色シルト　黄褐色小ブロックまばら
3　褐灰色シルト　黄褐色小ブロックまばら、灰白色シルトブロックまばら
P1389
1　暗褐色土　黄褐色ブロックまばら

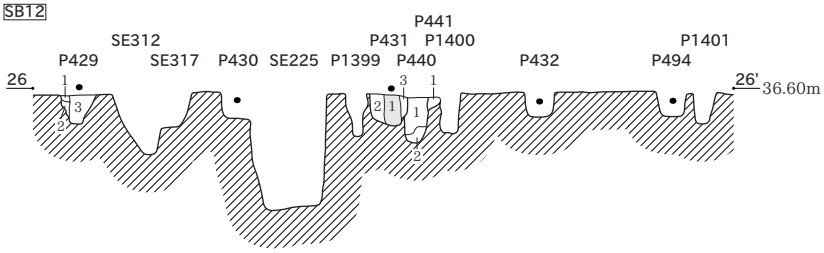


P423
1　暗褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
2　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロック・炭化物まばら
3　黄褐色シルト　暗褐色小ブロックごくまばら

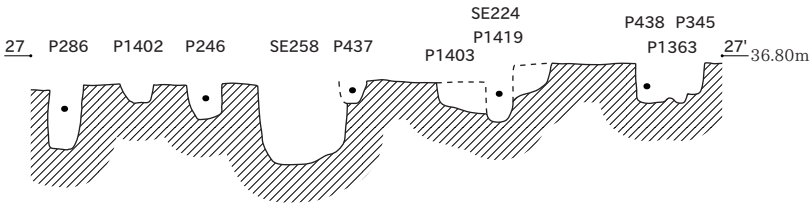


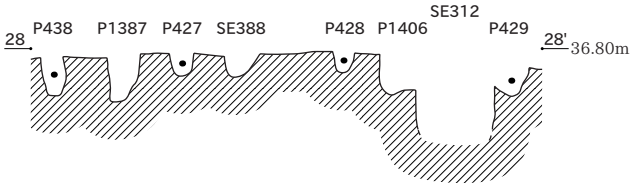


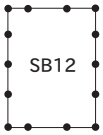
SB12

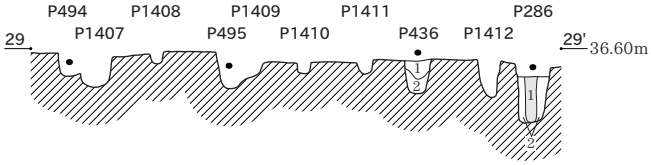


P431
1　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら
2　暗褐色土　黄褐色ブロック多い
3　暗褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物まばら、1層より黒い
P440
1　暗褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら
2　黒褐色土
P441
1　黄褐色土　暗褐色ブロック・炭化物まばら
P429
1　黄褐色土　暗褐色ブロックまばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら
3　暗褐色土　黄褐色ブロック多い



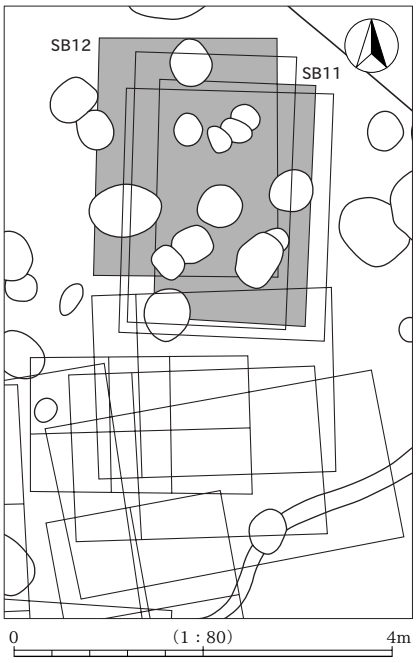




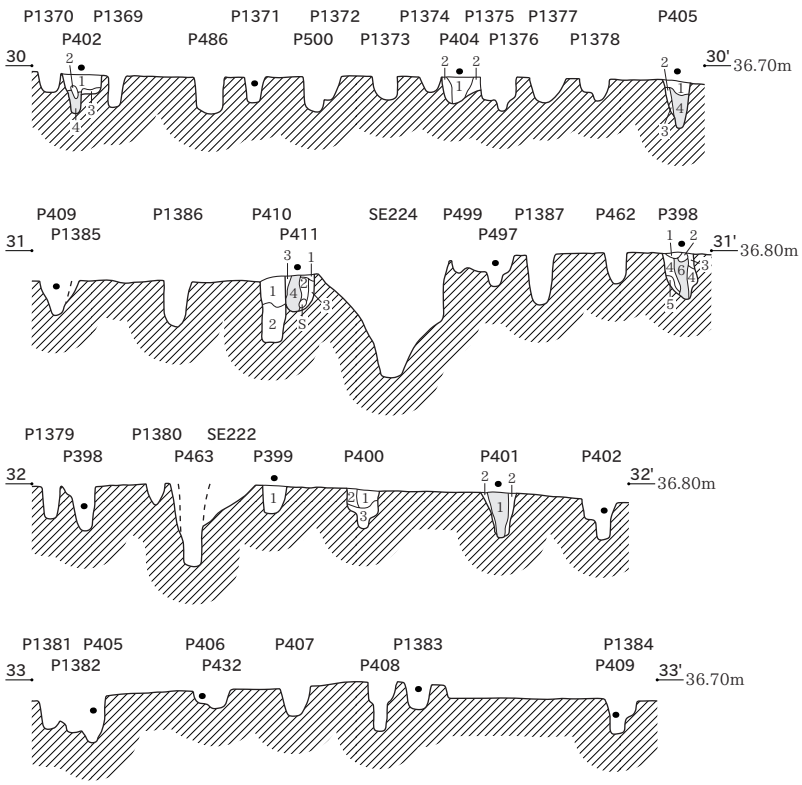


P436
1　暗褐色土　黄褐色ブロックまばら
2　褐灰シルト　黄褐色小ブロックまばら

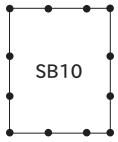
P286
1　黄褐色シルト　柱痕。黒褐色小ブロックごくまばら
2　黒褐色シルト　黄褐色シルト小ブロックごくまばら



SB10



P402
1　暗褐色土　　黄褐色ブロック多い
2　黒色シルト　黄褐色ブロックまばら
3　黄褐色土　　暗褐色小ブロックごくまばら
4　黄灰色シルト　柱痕



P404
1　暗褐色土　黄褐色シルトブロック多い
2　黄褐色土　暗褐色ブロックまばら

P405
1　暗褐色土　　黄褐色土多い、炭化物ごくまばら
2　暗褐色土　　黒褐色ブロック・黄褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら
3　黄褐色土　　炭化物ごくまばら
4　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色ブロック・炭化物ごくまばら

P410
1　暗褐色シルト　黄褐色ブロック多い
2　黒色シルト　　黄褐色ブロックまばら

P411
1　暗褐色土　　黄褐色ブロックごくまばら
2　暗褐色土　　黄褐色ブロックまばら
3　黄褐色土　　暗褐色ブロックごくまばら
4　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロックごくまばら

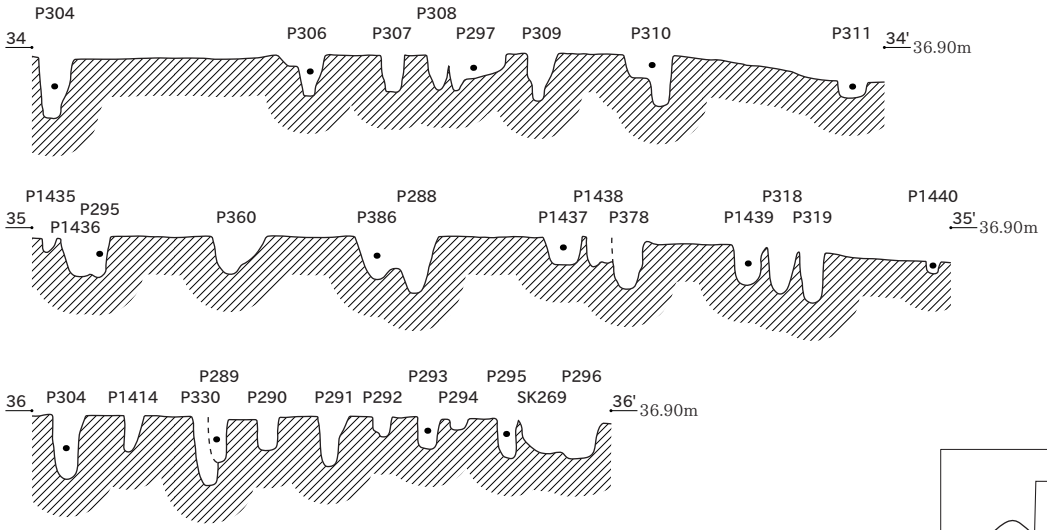
P398
1　暗褐色土　　炭化物まばら、黄褐色小ブロックごくまばら
2　暗褐色土　　炭化物・黄褐色小ブロックまばら
3　黄褐色土　　炭化物・暗褐色土ごくまばら
4　暗褐色土　　炭化物ごくまばら
5　黄褐色シルト　炭化物ごくまばら
6　暗褐色シルト　柱痕。炭化物まばら、黄褐色小ブロックごくまばら
　　1層と4層より黒い

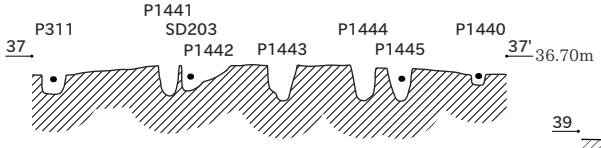
P399
1　暗褐色土　黄褐色ブロック多い、炭化物ごくまばら

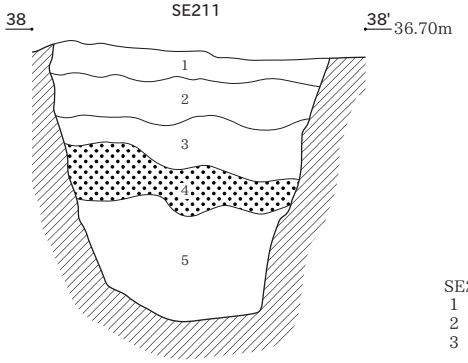
P400
1　暗褐色土　　黄褐色ブロック多い、炭化物ごくまばら
2　黄褐色土　　暗褐色ブロックごくまばら
3　暗褐色シルト　黄褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら

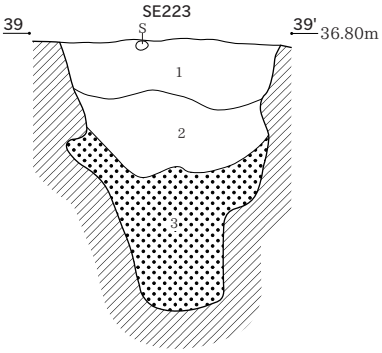
P401
1　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色ブロック・炭化物まばら
2　黄褐色シルト　暗褐色土まばら、炭化物ごくまばら

SB25







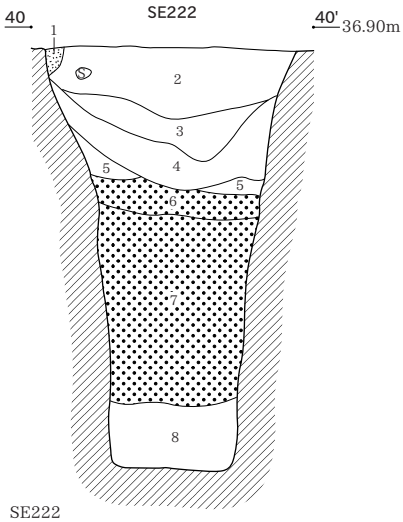


SE223
1　黒褐色土　　炭化物、黄褐色小ブロックまばら
2　黒褐色土　　炭化物、黄褐色小ブロックまばら、1よりシルト質
3　黒色シルト　灰白色小ブロックまばら

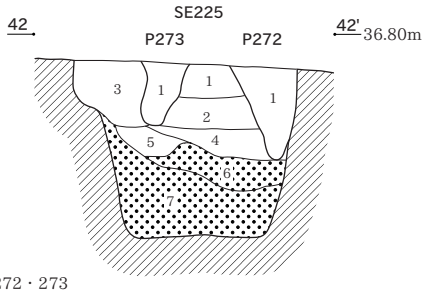
SE211
1　褐色土　　黄褐色ブロックで多い、鉄分多い、炭化物ごくまばら
2　黒褐色土　　黄褐色ブロックで多い、炭化物わずか
3　黒褐色土　　黄褐色土をブロックで多量、炭化物ごくわずか
4　黒色土シルト　暗青灰色ブロックで多い
5　青灰色シルト　黒色土シルトブロックまばら

SB10,SB25
（1：80）
0　4m

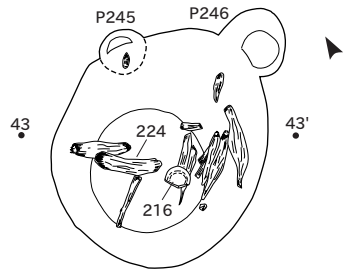
SE211,223
（1：40）
0　2m

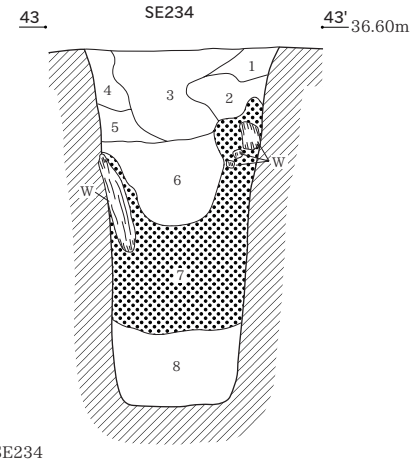


SE222
1　黄褐色土　地山崩落
2　黒褐色土　黄褐色ブロックをまばら、炭化物まばら
3　黒褐色砂シルト　2と同様
4　黒褐色砂シルト　黄褐色、灰白色シルトブロックまばら
5　黒褐色砂シルト　4より粘質あり
6　黒色シルト　灰白色シルトブロックまばら
7　黒色シルト　灰白色シルト小ブロックまばら
8　暗灰色土　黒色シルトブロックまばら

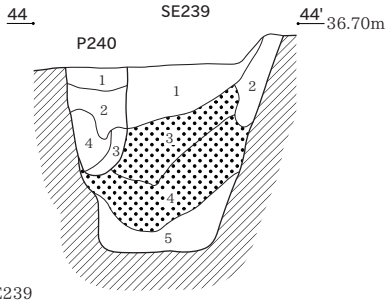


P272・273
1　黒褐色土　黄褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら
SE225
1　暗褐色土　黄褐色ブロック・炭化物ごくまばら
2　黒褐色土　黄褐色ブロック・炭化物ごくまばら
3　暗褐色土　黄褐色ブロック・炭化物ごくまばら
4　黒褐色土　炭化物ごくまばら
5　黒色シルト　黄褐色ブロックまばら
6　黒色シルト　黄褐色ブロック・暗青灰色ブロックまばら
7　黒色シルト　暗青灰色ブロックごくまばら

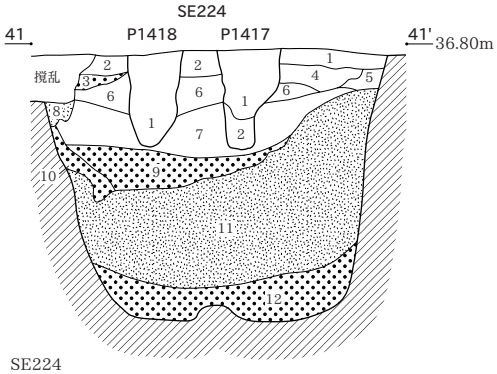




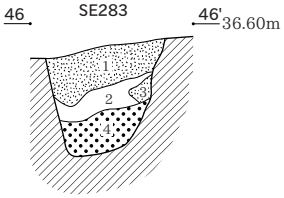
SE234
1　褐灰色土　黄褐色ブロック、炭化物多い
2　暗褐色土　黄褐色小ブロック多い、炭化物まばら
3　褐灰色土　黄褐色ブロック多い、炭化物まばら
4　褐色シルト　黄褐色土まばら、炭化物ごくまばら
5　暗灰色シルト　黄褐色土、炭化物ごくまばら
6　暗灰色シルト　腐植物多い、黄褐色ブロックまばら
7　黒色土　腐植物層
8　暗灰色シルト　黒色シルトブロックまばら



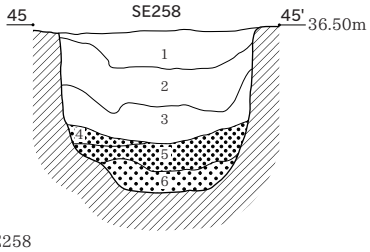
SE239
1　暗褐色土　黒褐色土多い、炭化物まばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら
3　黒色砂シルト
4　黒色シルト　暗青灰色大ブロックまばら
5　暗青灰色土　黒色シルトブロックまばら
P240
1　暗褐色土　黄褐色土ブロック、炭化物まばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロック多い
3　黒褐色土　2より黒い、黄褐色小ブロックまばら
4　黒褐色シルト　黄褐色小ブロックごくまばら



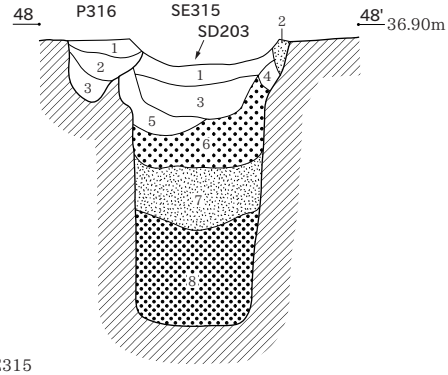
SE224
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら、炭化物をブロックでまばら
2　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
3　青黒色砂シルト　黄褐色小ブロックごくまばら
4　青黒色砂シルト　3と同じ
5　黒褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら
6　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら、2より黒い
7　暗褐色土　黄褐色小ブロック、炭化物ごくまばら
8　黄褐色土　褐灰色土まばら
9　黒色砂シルト　黄褐色小ブロックまばら
10　黒色シルト　黄褐色土帯状に堆積
11　黄褐色土　黒褐色小ブロックごくまばら、地山に近い
12　黒色シルト
P1418
1　黒褐色土　灰褐色土・黄褐色土・炭化物まばら
P1417
1　黒褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
2　黒褐色土　黄褐色土・炭化物ごくまばら



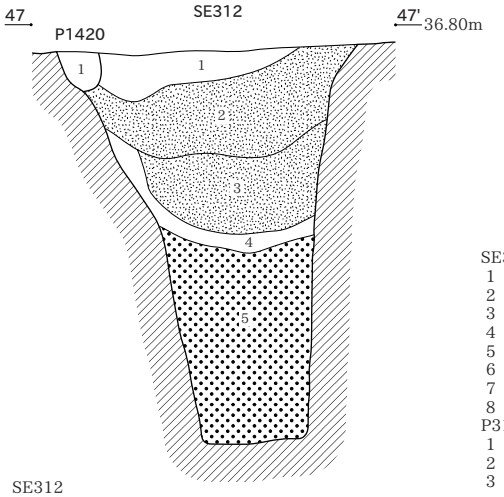
SE283
1　黄褐色土　暗灰色シルトブロック多い
2　黒褐色土　黄褐色シルトまばら
3　黄褐色シルト　黒褐色土ごくまばら
4　青黒色シルト　暗青灰色シルト小ブロックまばら



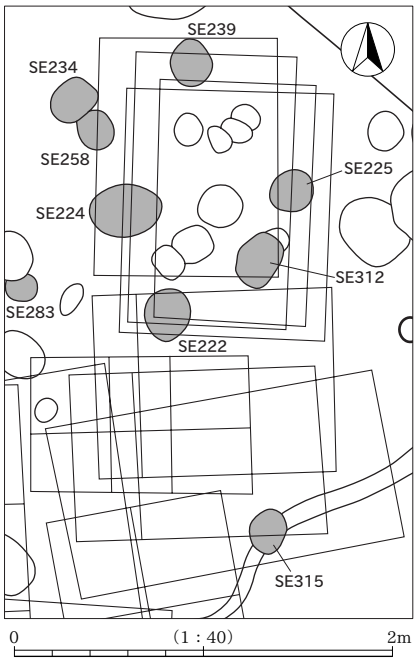
SE258
1　青黒色シルト　黄褐色小ブロックまばら、炭化物まばら
2　黒褐色シルト　黄褐色土帯状に堆積、炭化物ごくわずか
3　黒褐色シルト　灰白色シルト小ブロックまばら
4　暗褐色土　腐植物層
5　黒褐色土　腐植物多い、灰白色シルトブロックまばら
6　黒色シルト　灰白色シルト小ブロックごくまばら

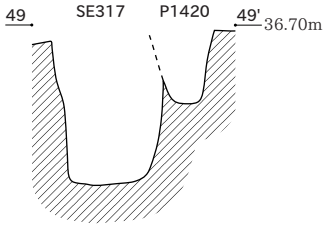


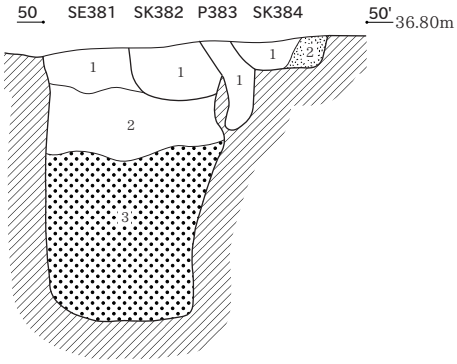
SE315
1　黒褐色土　黄褐色ブロック、炭化物ごくまばら
2　黄褐色土　黒色褐色土まばら
3　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
4　黒褐色土　黄褐色小ブロックごくまばら
5　黒褐色土　4と同じ
6　黒色シルト　黄褐色小ブロックまばら
7　黄褐色土　黒褐色小ブロックごくまばら、地山近い
8　黒色シルト　腐植物層、灰白色シルト小ブロックごくまばら
P316
1　黒褐色土　炭化物、黄褐色土ごくまばら
2　黒褐色土　炭化物が多い
3　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら

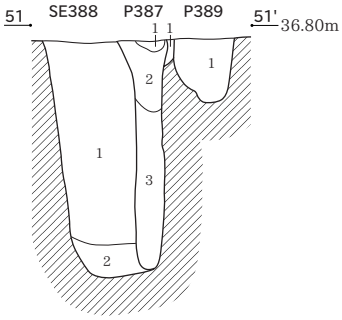


SE312
1　黄褐色土　暗褐色土が帯状に堆積。灰白色シルトブロックまばら
2　黄褐色シルト　灰白色シルトブロック多い、地山ブロックまばら
3　黄褐色シルト　灰白色シルトブロック多い
4　黒褐色シルト　黄褐色小ブロックごくまばら
5　黒色シルト　暗青灰色シルトブロックまばら
P1420
1　暗褐色土　黄褐色小ブロックまばら

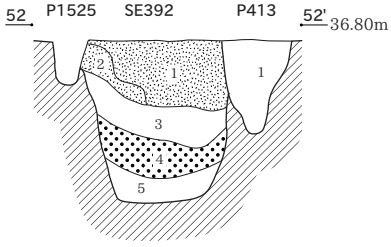






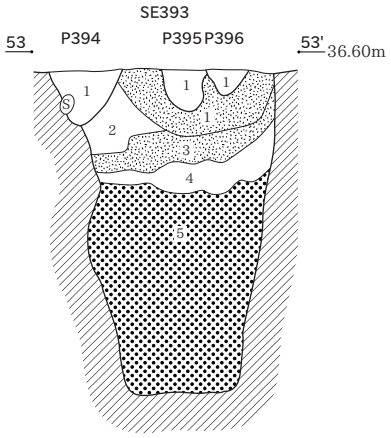


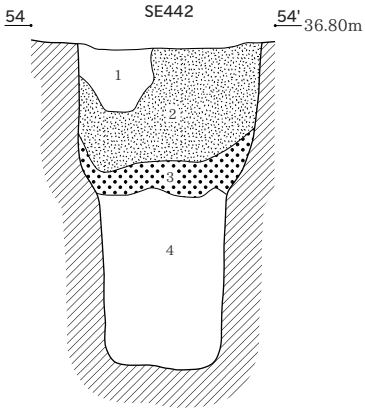
SE388
1　暗褐色土　　黄褐色ブロック多い、炭化物まばら
2　暗青灰色シルト　黒褐色シルトブロックまばら
P387
1　黒褐色土　　黄褐色土多い、炭化物まばら
2　黒褐色土　　黄褐色土、炭化物まばら
3　黒褐色土　　黄褐色土まばら
P389
1　暗褐色土　　黄褐色ブロックまばら、炭化物ごくまばら

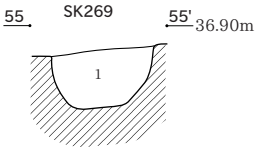


SK382
1　暗褐色土　　黄褐色小ブロック多い、炭化物ごくまばら
P383
1　暗褐色土　　黄褐色小ブロック多い
SK384
1　暗褐色土　　黄褐色小ブロック多い
2　黄褐色シルト　暗褐色小ブロック土まばら
SE381
1　暗褐色土　　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
2　黒褐色土　　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
3　黒色シルト　　黄褐色小ブロック・炭化物まばら

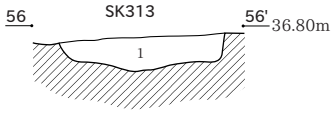
SE392
1　黄褐色シルト　黒褐色小ブロックごくまばら、地山近い
2　黄褐色シルト　暗灰褐色土まばら
3　暗褐色シルト　黄褐色ブロック多い
4　黒色シルト　　黄褐色ブロックまばら
5　暗灰色シルト　青灰色シルトまばら
P413
1　黄褐色土　　暗褐色土多い、炭化物ごくまばら







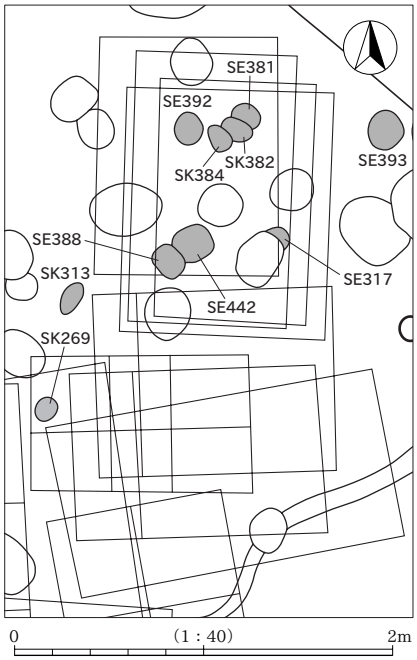
SK269
1　黒褐色土　　黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら

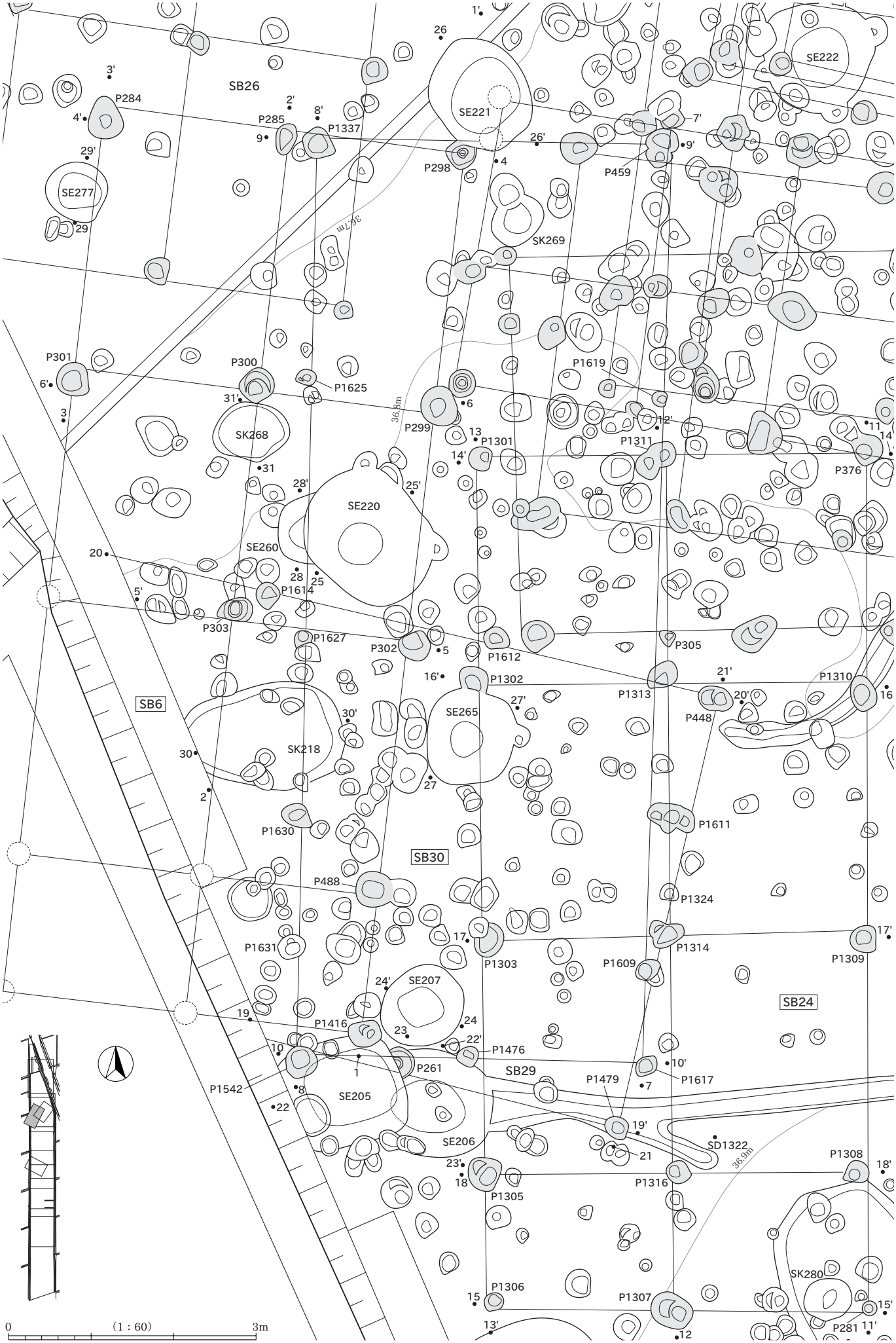


SK313
1　暗褐色砂　　黄褐色小ブロック土、炭化物ごくまばら

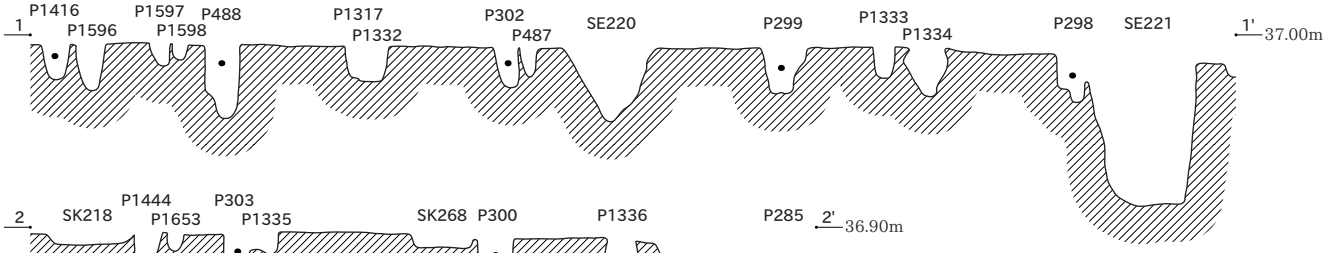
SE393
1　黄褐色土　　暗褐色土まばら
2　暗褐色土　　黄褐色土まばら
3　黄褐色シルト　暗褐色土ごくまばら
4　青灰色シルト　黒褐色土まばら
5　黒色シルト　　青灰色小ブロックごくまばら、腐植物層
P394・395・396
1　暗褐色土　　黄褐色土をまばら、炭化物ごくまばら

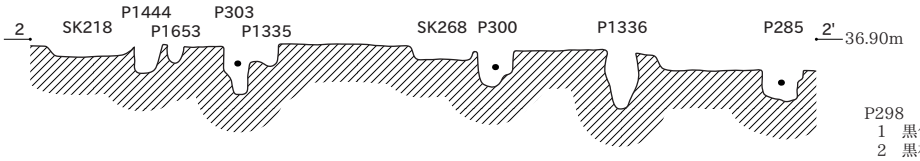
SE442
1　暗褐色土　　黄褐色土ブロック多い
2　黄褐色シルト　　暗褐色ブロックまばら
3　黒色シルト土　　暗青灰色ブロックまばら
4　暗青灰色シルト　黒色シルトブロックまばら

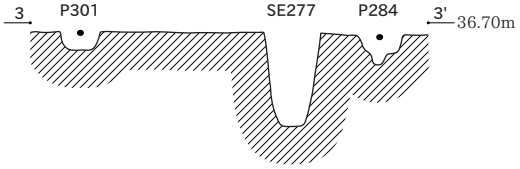



SB26
SE222
SE221
SE277
SK269
SK268
SE220
SE260
SB6
SK218
SE265
SB30
SE207
SB24
SB29
SE205
SE206
SK280
P284
P285
P1337
P298
P459
P301
P300
P1625
P1619
P299
P1301
P1311
P376
P1614
P303
P1627
P302
P1612
P305
P1302
P1313
P1310
P448
P1630
P1611
P488
P1324
P1631
P1303
P1314
P1309
P1609
P1416
P1476
P261
P1617
P1542
P1479
SD1322
P1316
P1308
P1305
P1306
P1307
P281
36.7m
36.8m
36.9m
0
(1：60)
3m

SB6



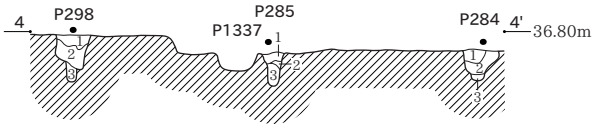


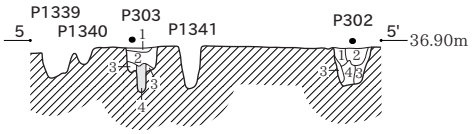


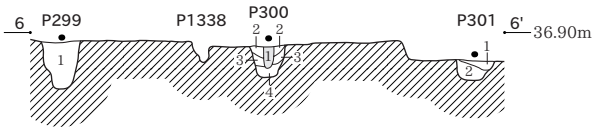
P298
1　黒色土　　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
2　黒褐色土　黄褐色ブロックが多い、炭化物ごくまばら
3　暗灰色土　炭化物ごくまばら

P285
1　青黒色シルト　黄褐色シルトブロックをまばら
2　暗褐色シルト　黄褐色シルトブロックをまばら
3　黒色シルト　　黄褐色シルトブロックをまばら

P284
1　青黒色シルト　黄褐色小ブロック・暗青灰色ブロックまばら
2　黒色シルト　　灰白色シルトブロック・炭化物まばら
3　黄褐色土　　地山に近い黒褐色小ブロックごくまばら







P302
1　黒褐色土　　黄褐色小ブロック・炭化物まばら
2　黄褐色土　　黄褐色小ブロックまばら
3　黄褐色シルト　黒褐色小ブロックごくまばら
4　暗灰色シルト　炭化物まばら

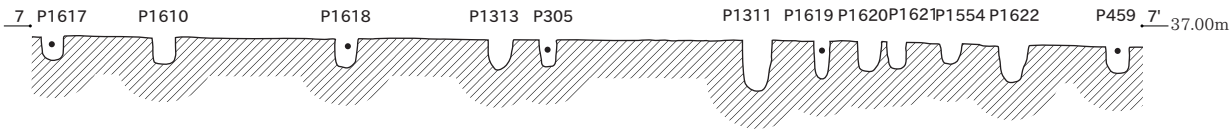
P303
1　黒褐色土　　黄褐色小ブロックまばら
2　暗褐色土　　黄褐色小ブロック多い、炭化物ごくまばら
3　黒褐色土　　黄褐色小ブロック多い、炭化物ごくまばら
4　暗灰色シルト　柱痕。黄褐色小ブロックまばら

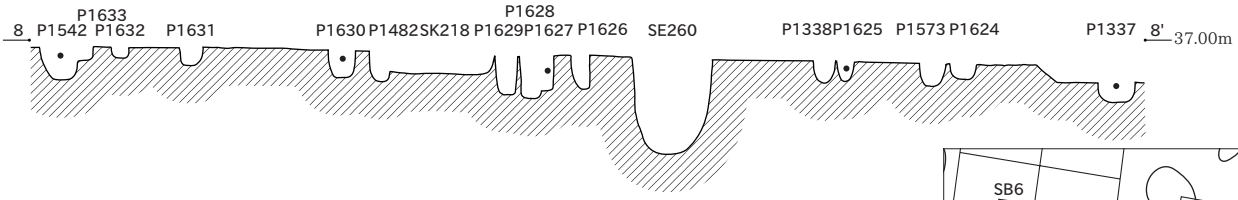
P299
1　黒褐色シルト　黄褐色小ブロック・炭化物まばら

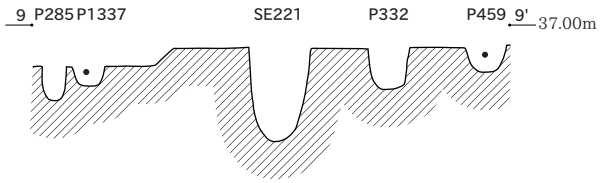
P300
1　暗褐色シルト　柱痕。黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら
2　黒褐色土　　黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら
3　黒褐色土　　黄褐色小ブロック多い、炭化物まばら
4　黒褐色土　　黄褐色小ブロックまばら

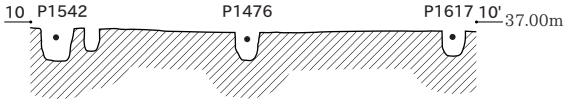
P301
1　青黒色シルト　灰白色シルト小ブロックまばら
2　黒褐色土　　黄褐色小ブロックまばら、・炭化物ごくまばら

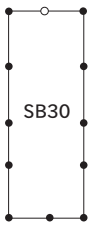
SB30



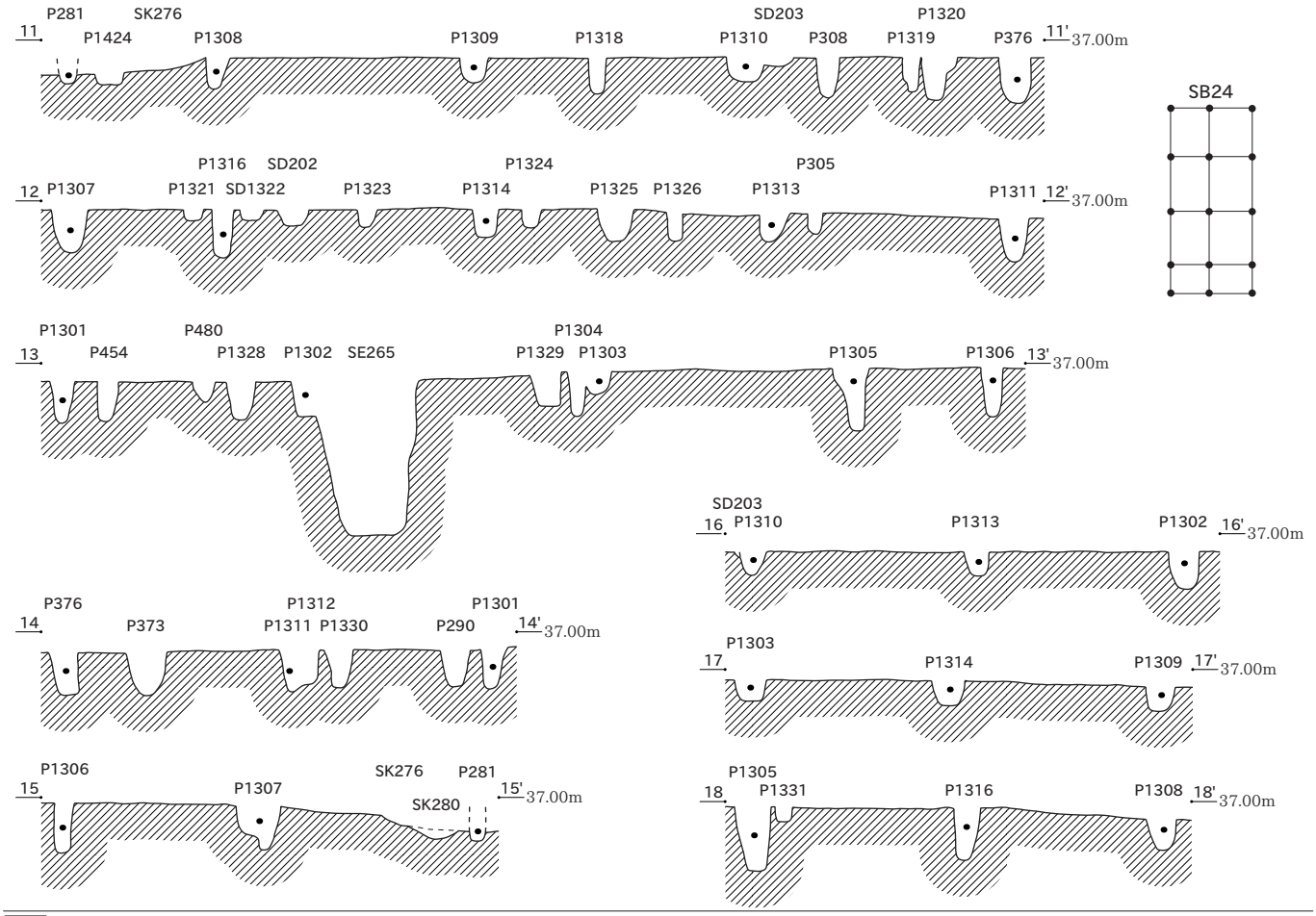




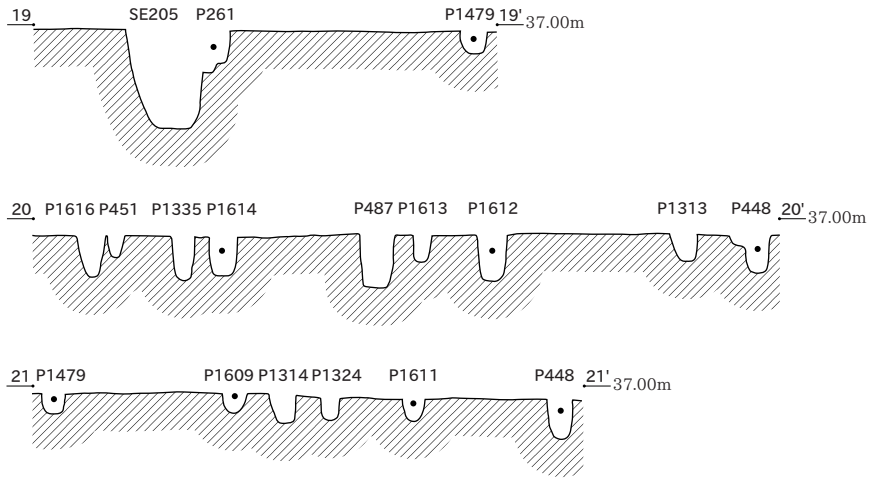


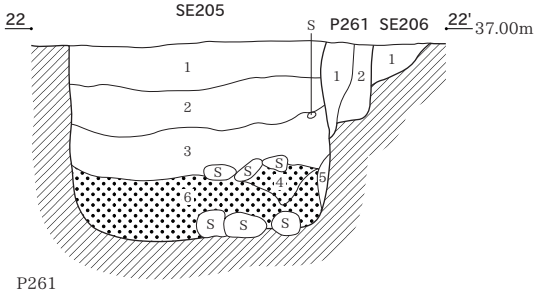


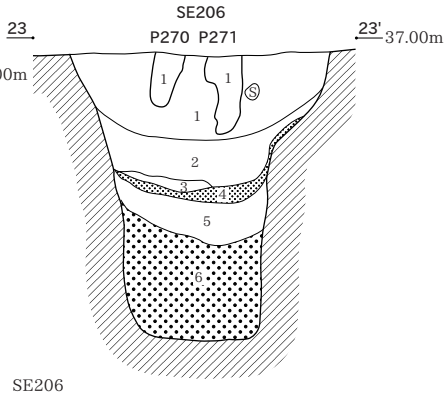
SB24



SB29







P261
1　黄褐色土　黄褐色土をブロックで多量
2　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら

SE205
1　黒褐色土　黄褐色土まばら、炭化物ごくまばら
2　暗褐色土　1より多い
3　暗褐色土　2より多い
4　黒色シルト　暗青灰色土をまばら
5　暗青灰色シルト　黒色シルトブロックごくまばら
6　黒色シルト　礫・木片を含む。暗青灰色シルトまばら

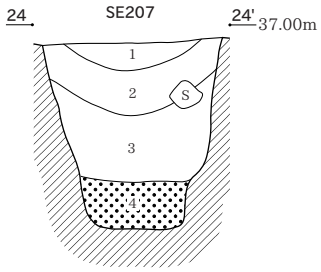
SE206
1　暗褐色土　炭化物・黄褐色小ブロックまばら

SE206
1　暗褐色土　炭化物、黄褐色小ブロックまばら
2　暗褐色土　黄褐色ブロック多量、炭化物ごくまばら
3　暗灰色シルト　黒色シルトブロック
4　黒色土　炭化物層
5　暗青灰色土　黒色シルトブロック多い
6　黒色シルト　腐植土多い、木製品が出土

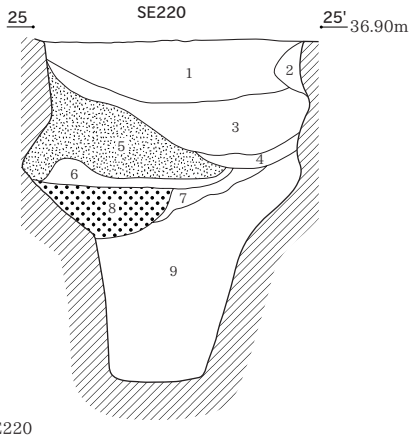
P270・271
1　暗褐色土　黄褐色土・炭化物をごくまばら

SB24,SB29
（1：80）
0　4m

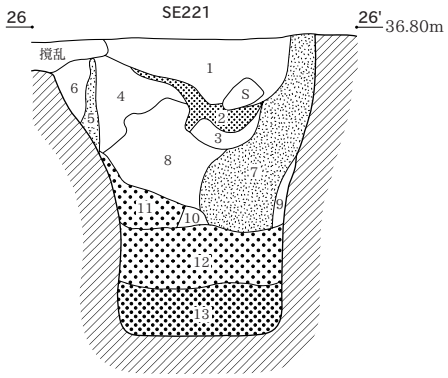
SE205,206
（1：40）
0　2m



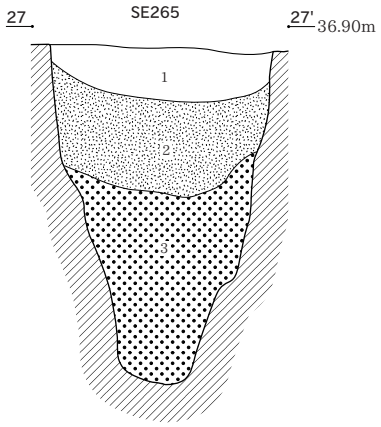
SE207
1　暗褐色土　　黒黄褐色小ブロックごくまばら
2　黒褐色土　　黄褐色ブロックを帯状
3　黒褐色シルト　黄褐色ブロックを帯状
4　黒色シルト　　腐植土まばら



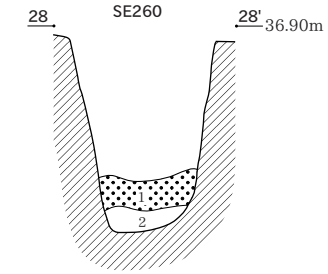
SE220
1　黒褐色土　　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
2　黄褐色土　　黒褐色小ブロックごくまばら
3　黒褐色土　　黄褐色土が帯状に堆積、炭化物ごくまばら
4　暗灰色シルト　灰白色シルト多い
5　黄褐色シルト　黒色シルト帯状、炭化物ブロック多い
6　灰白色シルト　黒色シルトブロック多い
7　灰白色シルト　腐植物が帯状に堆積
8　黒色シルト　　灰白色シルト小ブロックごくまばら
9　暗青灰色土　　黒色シルト多量



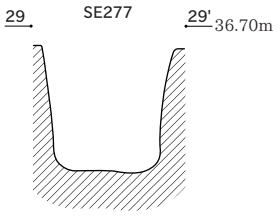
SE221
1　黒褐色土　　炭化物まばら、黄褐色土ごくまばら
2　黒色土　　炭化物層、黒褐色土ごくまばら
3　暗褐色土　　黄褐色小ブロックまばら
4　黒褐色土　　黄褐色小ブロック、炭化物多い
5　黄褐色土　　崩落土（地山）、黒褐色土まばら
6　黒褐色土　　炭化物ごくまばら、黄褐色小ブロック多い
7　黄褐色シルト　黒褐色小ブロックまばら
8　黄褐色シルト　黒褐色土多い
9　黒色シルト　　灰白色シルト多い
10　灰白色シルト　黒色シルト多い
11　黒色シルト　　灰白色小ブロックごくまばら
12　黒色シルト　　腐植物ごくまばら
13　黒色土　　腐植物多量

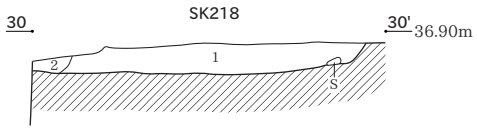


SE265
1　暗褐色土　　黄褐色小ブロックまばら
2　黄褐色シルト　黒色シルトブロックまばら
3　黒色シルト　　灰白色シルトブロックごくまばら

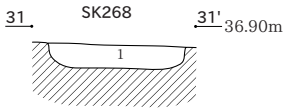


SE260
1　黒色シルト　　腐植物ごくまばら
2　暗灰色シルト　黒色シルトブロックごくまばら

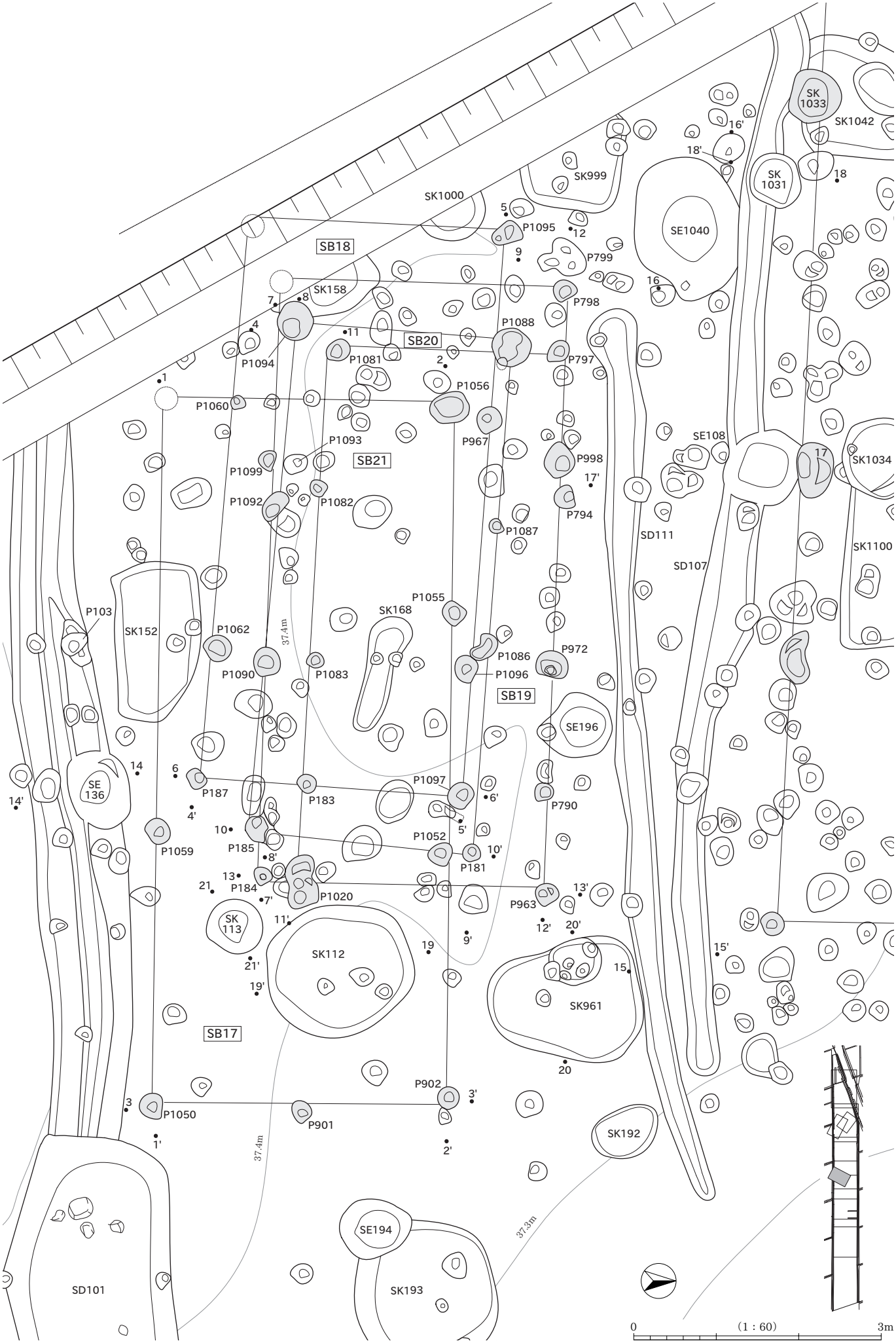




SK218
1　黒褐色土　黄褐色小ブロックまばら、炭化物ごくまばら
2　暗褐色土　黄褐色小ブロック多い



SK268
1　黒褐色土　黄褐色小ブロック・炭化物ごくまばら


SB18
SB20
SB21
SB19
SB17
SK158
SK1000
SK999
SK1033
SK1042
SK1031
SE1040
SE108
SK1034
SK1100
SD111
SD107
SK168
SK152
SE 136
SK 113
SK112
SK961
SE196
SK192
SE194
SK193
SD101
P1095
P799
P798
P1088
P797
P1094
P1081
P1056
P1060
P1093
P967
P998
P1099
P1092
P1082
P794
P1087
P1055
P103
P1062
P1086
P972
P1090
P1083
P1096
P1097
P790
P187
P183
P1059
P185
P1052
P181
P184
P1020
P963
P902
P1050
P901
37.4m
37.3m
0
(1 : 60)
3m

SB17

1 P1058 SK152 P186 P1059 P1050 1' 37.50m

SK152
1 暗褐色シルト　φ2～5mmの炭化物まばら

2 P1057 P1056 P1055 P1053 P1052 P1051 P904 P902 P903 2' 37.40m

P1051
1 暗褐色シルト　φ2～5mmの炭化物まばら
2 灰黄色シルト　φ2～5mmの炭化物極まばら

3 P1050 P901 P902 3' 37.50m

SB17

SB18

4 P1059 P1060 P1061 P1062 P188 P187 4' 37.40m

6 P187 P197 P183 P182 P1097 6' 37.60m

SB18

5 P1095 P1088 P967 P1011 P1096 P1097 5' 37.40m

SE136

14 14' 37.50m

SE136
1 黒褐色シルト　φ5mmの炭化物まばら
2 にぶい黄色シルト　地山ブロック
3 にぶい黄色シルト　地山ブロック極多量
4 灰色粘質シルト　しまり弱く、粘性極強
5 黒色ガツボ　腐植物を主体

SB19

7 P1098 P1099 P1092 P1090 P200 P199 P197 P185 P184 7' 37.40m

SB19

SB19・SB20

8 P1094 P1093 P1092 P1091 P1090 P199 P185 8' 37.50m

SB19：●
SB20：■

SB20

SB20

10 P185 P195 P1052 P181 10' 37.50m

SB20

9 P1089 P1088 P1011 P1087 P1086 P181 P1084 9' 37.40m

SB21

11 P1081 P1082 P1083 P183 P1020 11' 37.40m

SB21

SB19・21

12 P799 P798 P797 P796 P795 P998 P794 P970 P969 P793 P972 P792 P791 P790 P963 12' 37.40m

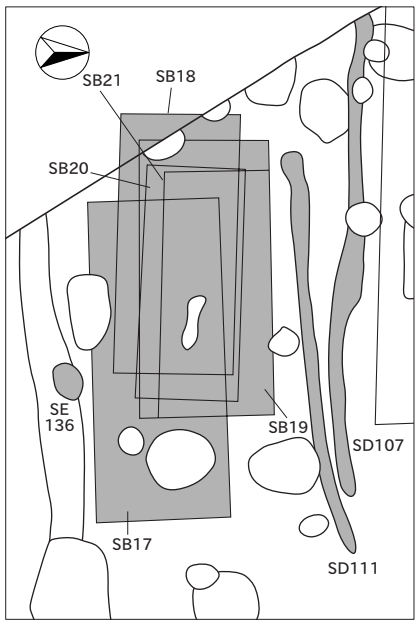
SB19：●
SB21：▲

SB19・SB20

13 P184 P1020 P1051 P1085 P1084 P963 13' 37.40m

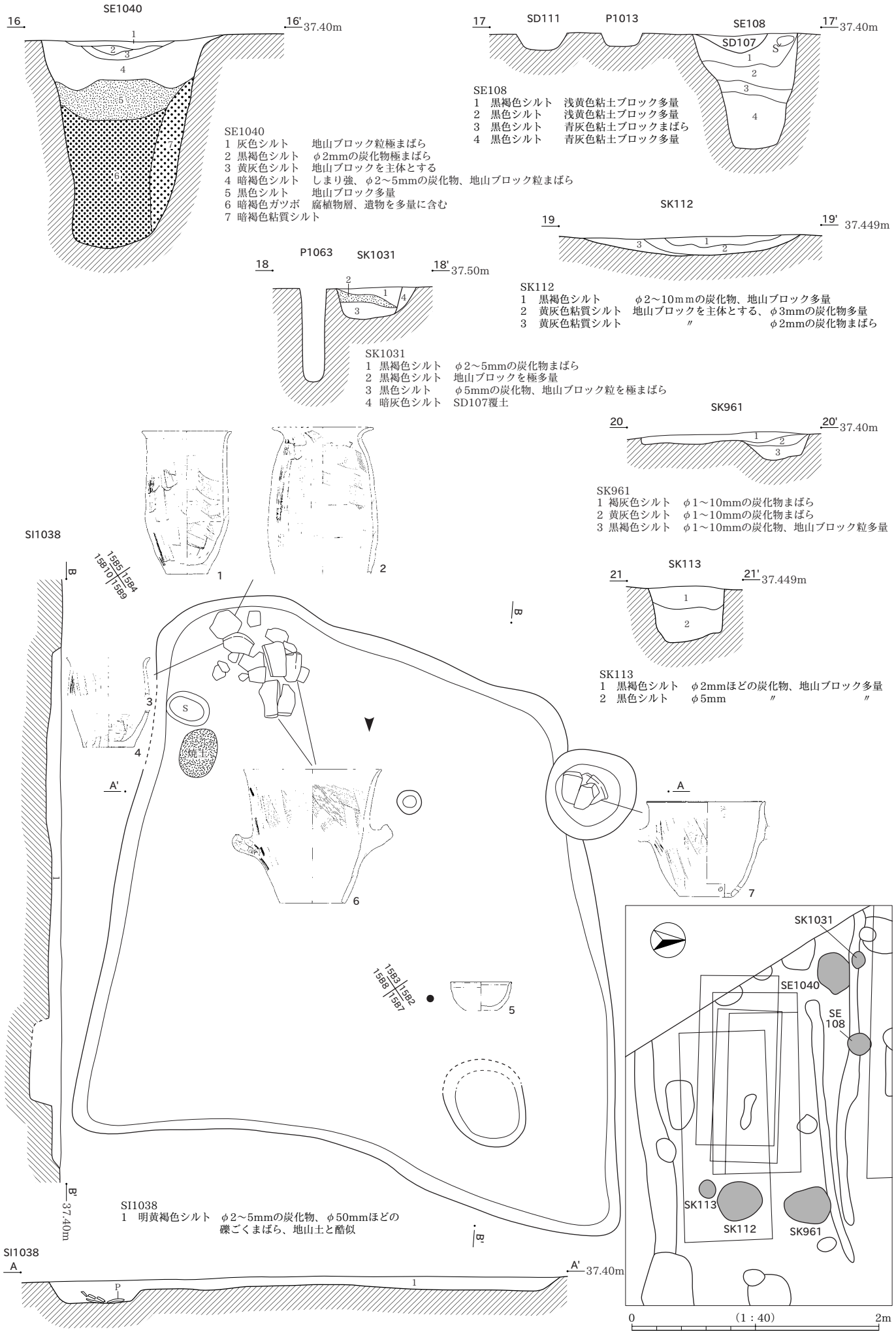
15 SD111 SD107 15' 37.40m

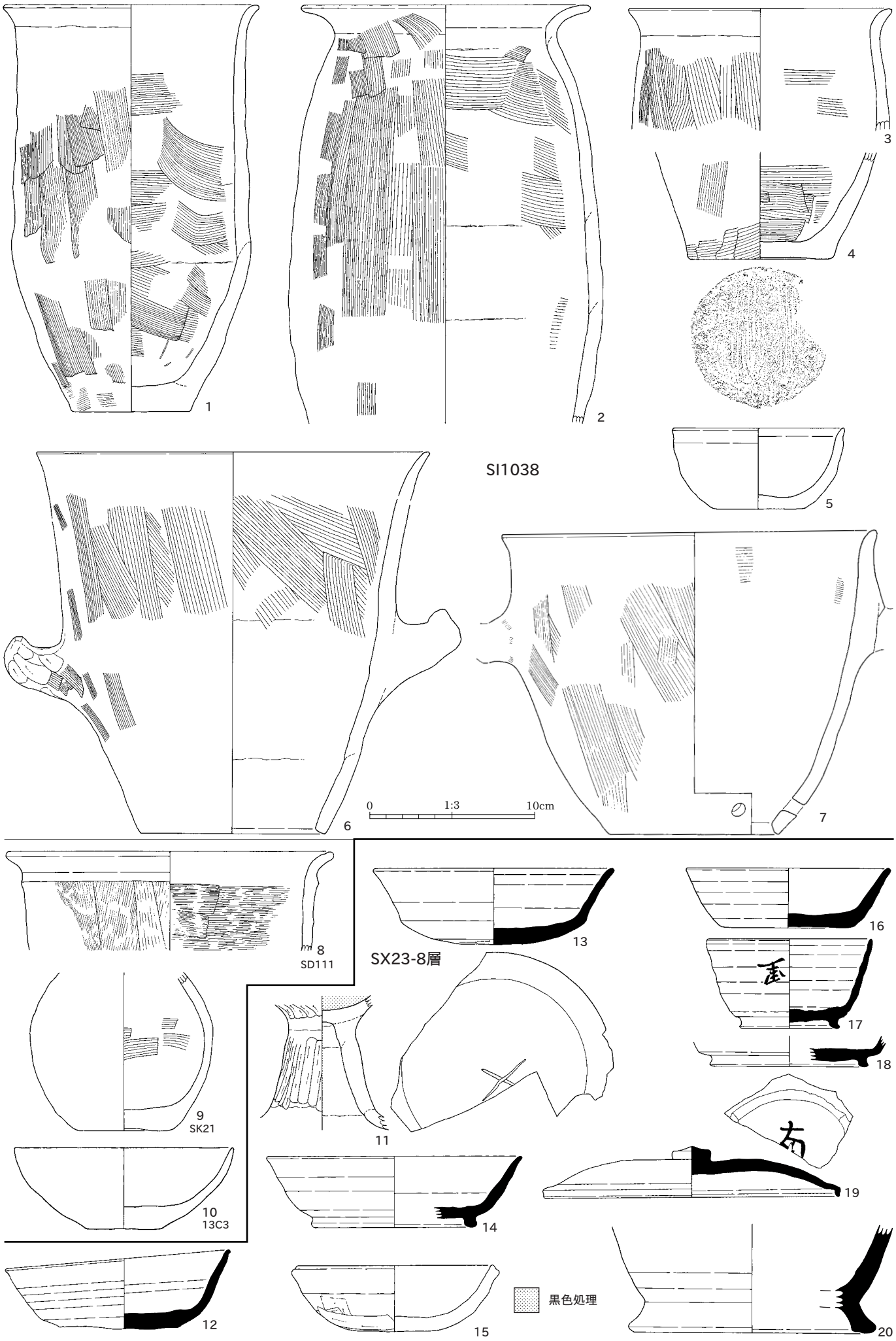
SD111・SD107覆土共通
1 黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物多量
2 褐灰色シルト　φ2～5mmの炭化物まばら

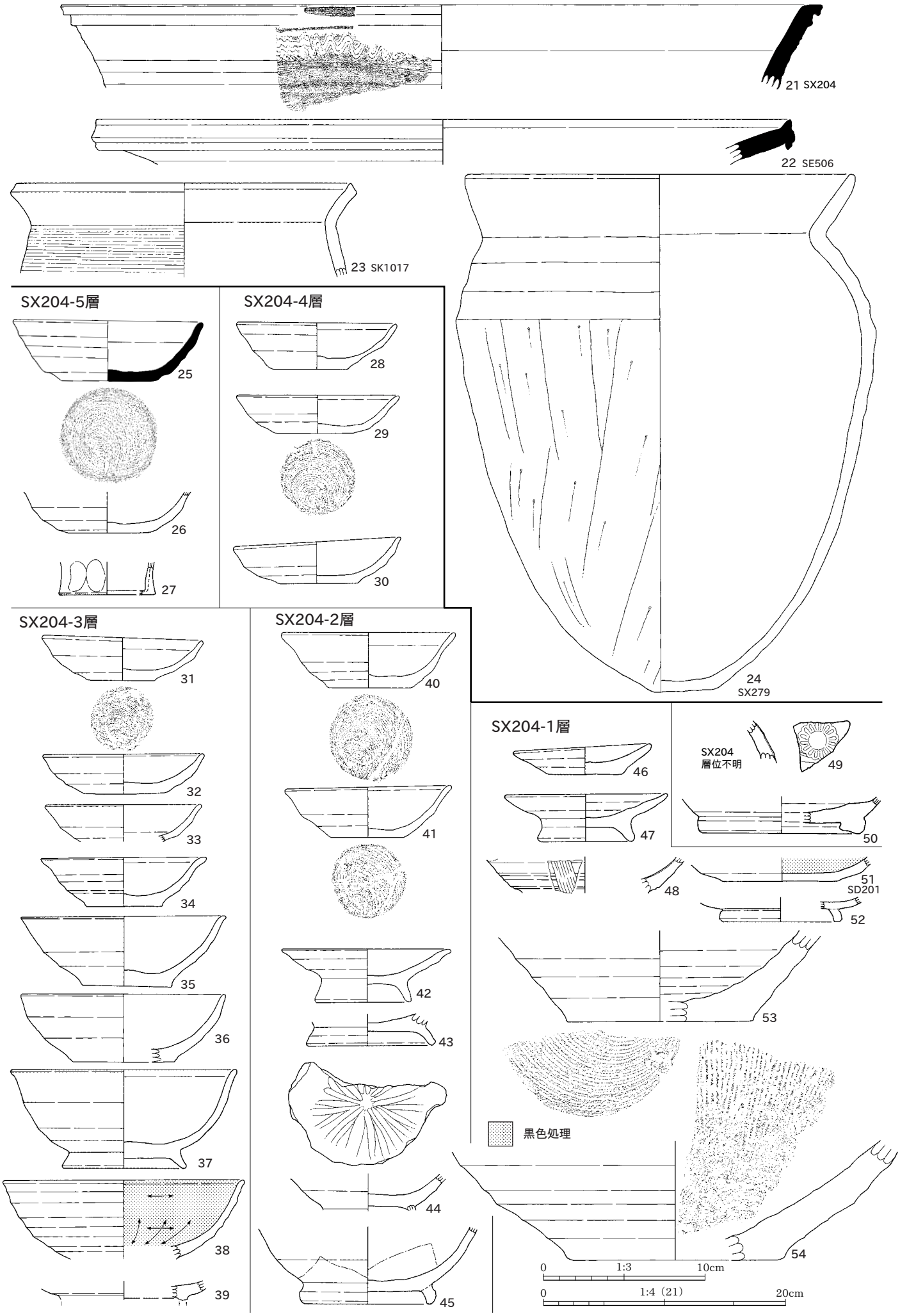


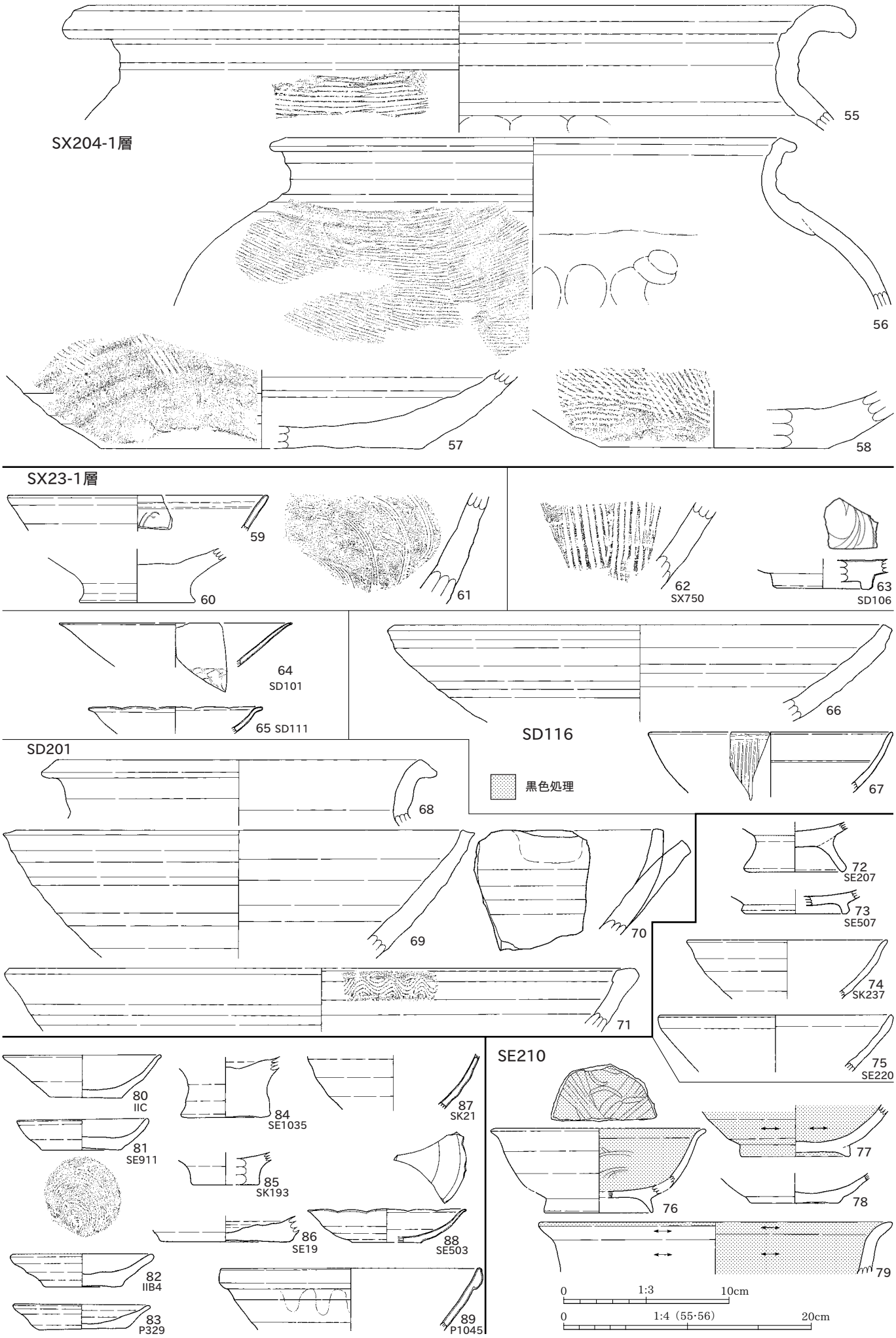
SB17～21
（1：80）
0　4m

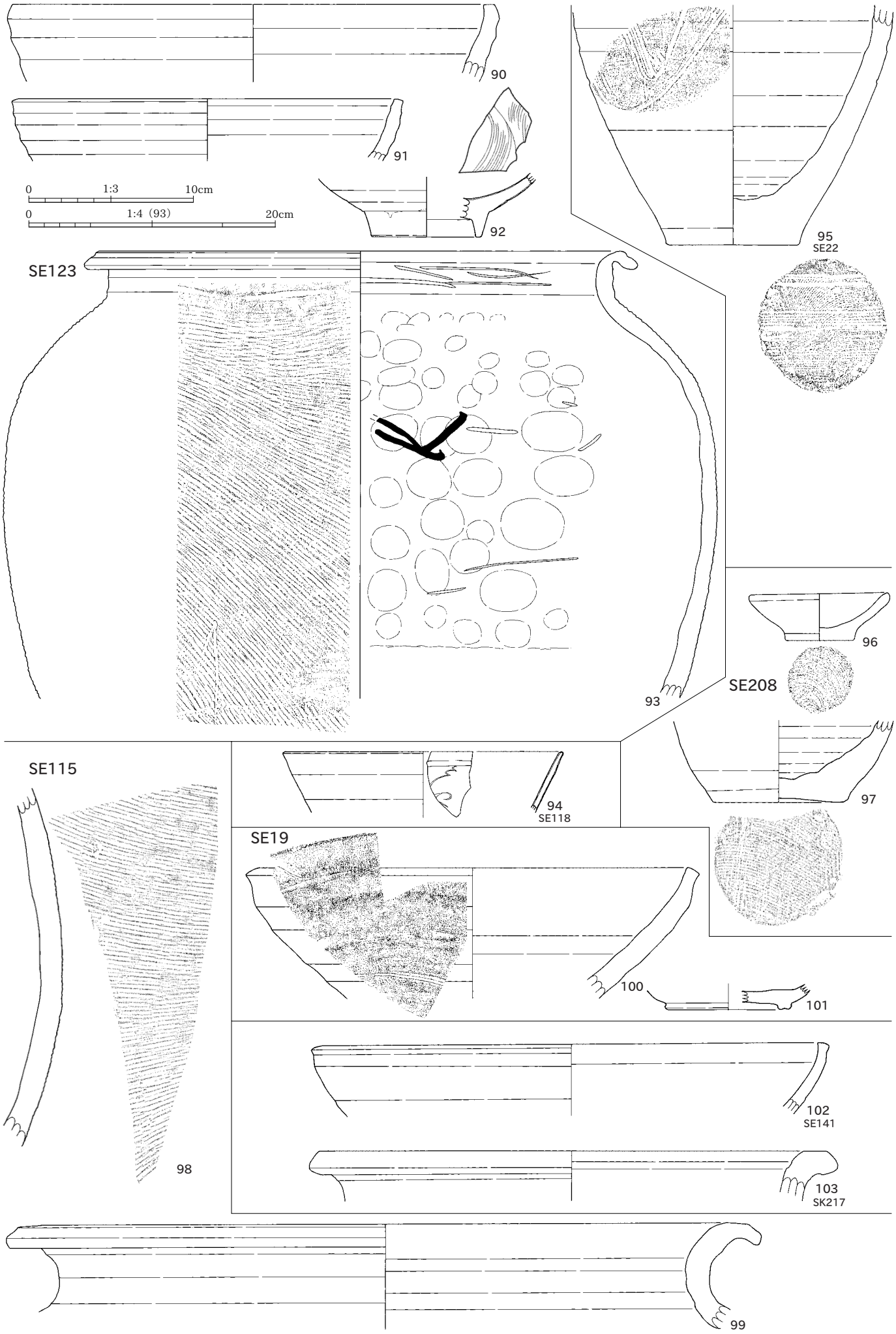
SE136・SD107,111
（1：40）
0　2m

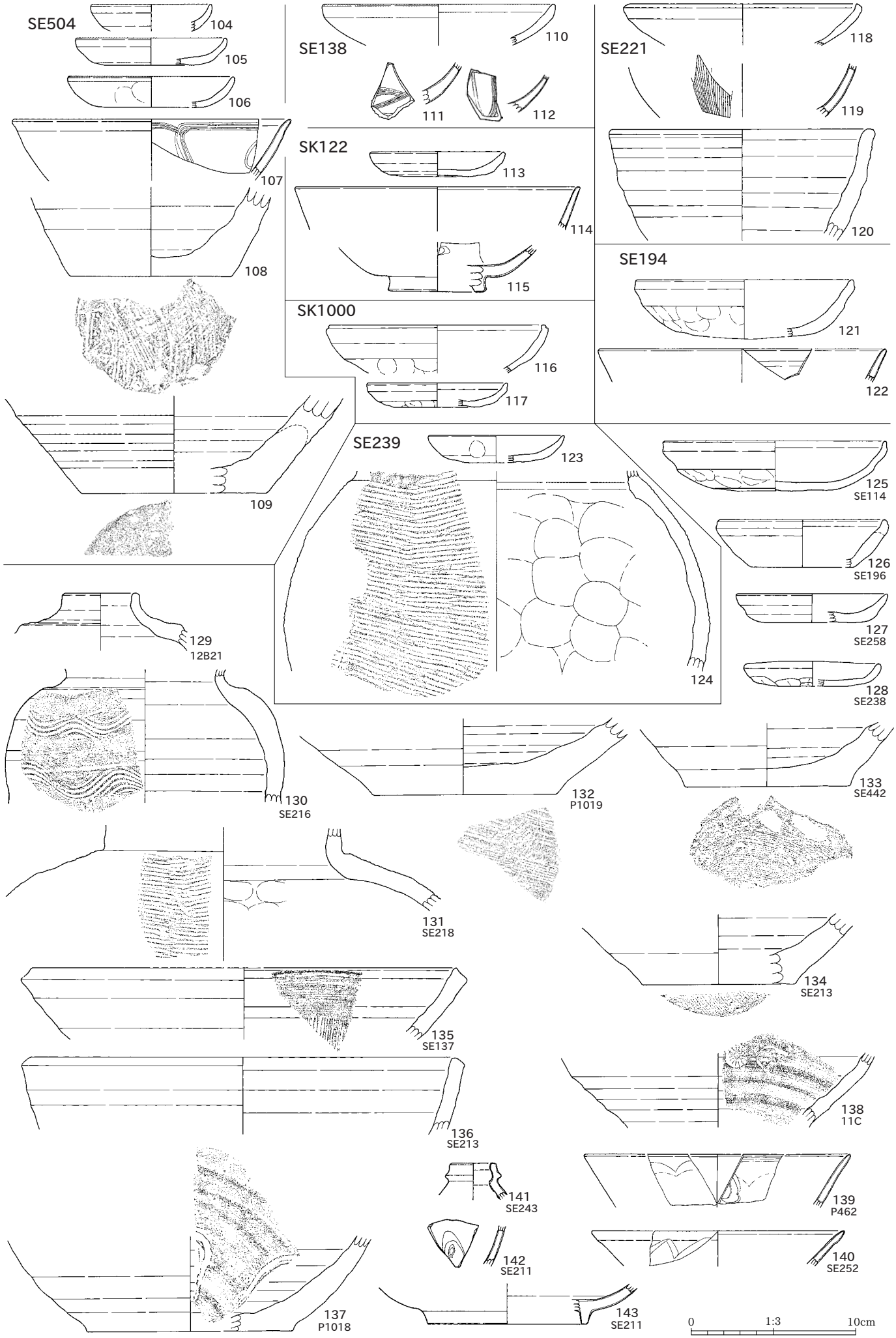

SE1040
16
16'
37.40m
SE1040
1 灰色シルト　地山ブロック粒極まばら
2 黒褐色シルト　φ2mmの炭化物極まばら
3 黄灰色シルト　地山ブロックを主体とする
4 暗褐色シルト　しまり強、φ2～5mmの炭化物、地山ブロック粒まばら
5 黒色シルト　地山ブロック多量
6 暗褐色ガツボ　腐植物層、遺物を多量に含む
7 暗褐色粘質シルト
17
SD111
P1013
SE108
SD107
17'
37.40m
SE108
1 黒褐色シルト　浅黄色粘土ブロック多量
2 黒色シルト　浅黄色粘土ブロック多量
3 黒色シルト　青灰色粘土ブロックまばら
4 黒色シルト　青灰色粘土ブロック多量
SK112
19
19'
37.449m
SK112
1 黒褐色シルト　φ2～10mmの炭化物、地山ブロック多量
2 黄灰色粘質シルト　地山ブロックを主体とする、φ3mmの炭化物多量
3 黄灰色粘質シルト　〃　φ2mmの炭化物まばら
P1063
SK1031
18
18'
37.50m
SK1031
1 黒褐色シルト　φ2～5mmの炭化物まばら
2 黒褐色シルト　地山ブロックを極多量
3 黒色シルト　φ5mmの炭化物、地山ブロック粒を極まばら
4 暗灰色シルト　SD107覆土
SK961
20
20'
37.40m
SK961
1 褐灰色シルト　φ1～10mmの炭化物まばら
2 黄灰色シルト　φ1～10mmの炭化物まばら
3 黒褐色シルト　φ1～10mmの炭化物、地山ブロック粒多量
SK113
21
21'
37.449m
SK113
1 黒褐色シルト　φ2mmほどの炭化物、地山ブロック多量
2 黒色シルト　φ5mm　〃　〃
SI1038
1585|1584
1581O|1589
焼土
1583|1582
1588|1587
SI1038
1 明黄褐色シルト　φ2～5mmの炭化物、φ50mmほどの
礫ごくまばら、地山土と酷似
37.40m
SI1038
A
A'
37.40m
SK1031
SE1040
SE
108
SK113
SK112
SK961
0
(1：40)
2m

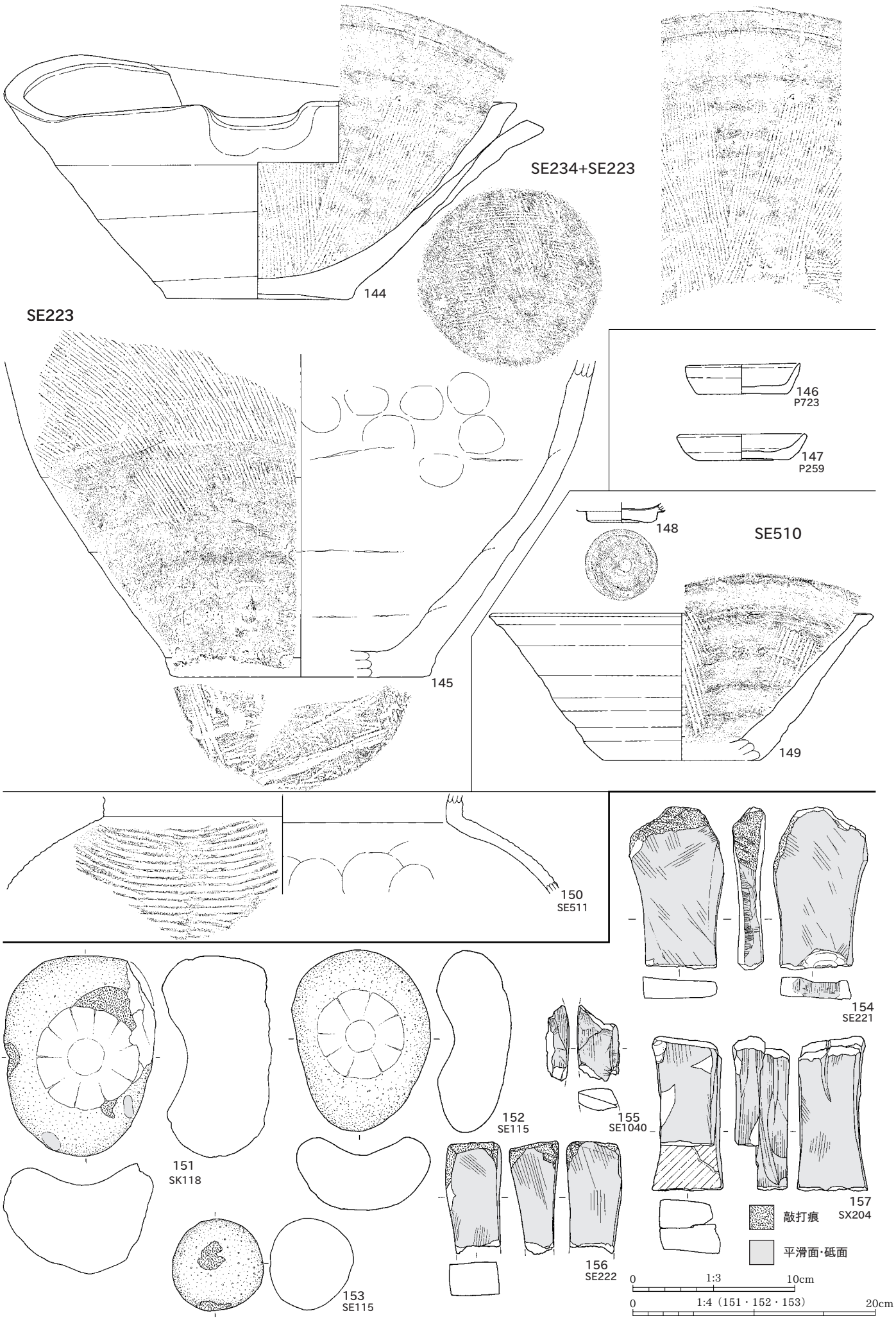

1
2
3
4
5
SI1038
6
7
0
1:3
10cm
8
SD111
SX23-8層
13
16
17
18
9
SK21
11
19
10
13C3
14
12
15
黒色処理
20

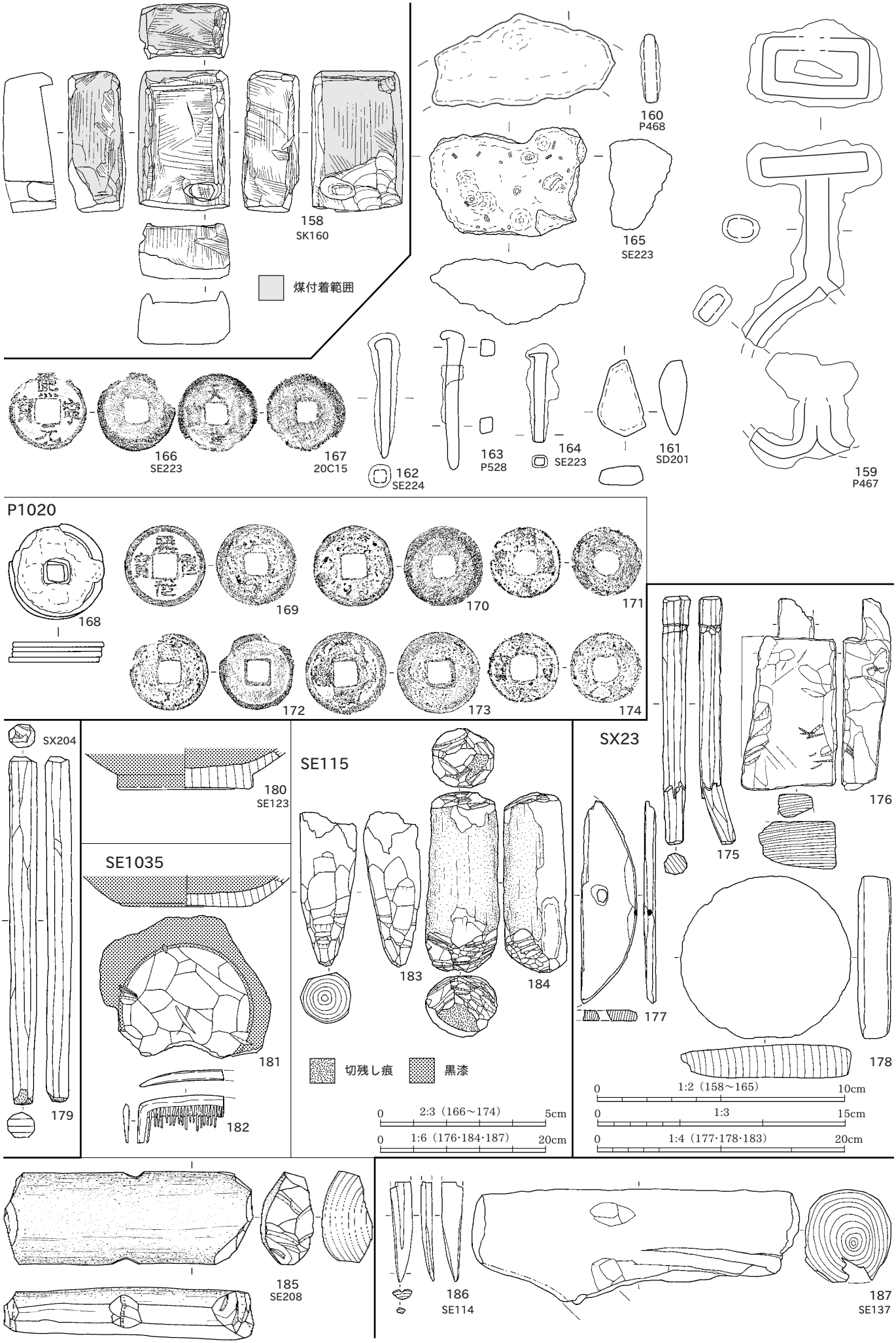

21 SX204
22 SE506
23 SK1017
24
SX279
SX204-5層
25
26
27
SX204-4層
28
29
30
SX204-3層
31
32
33
34
35
36
37
38
39
SX204-2層
40
41
42
43
44
45
SX204-1層
46
47
48
49
50
51
SD201
52
53
54
SX204
層位不明
黒色処理
0
1:3
10cm
0
1:4（21）
20cm

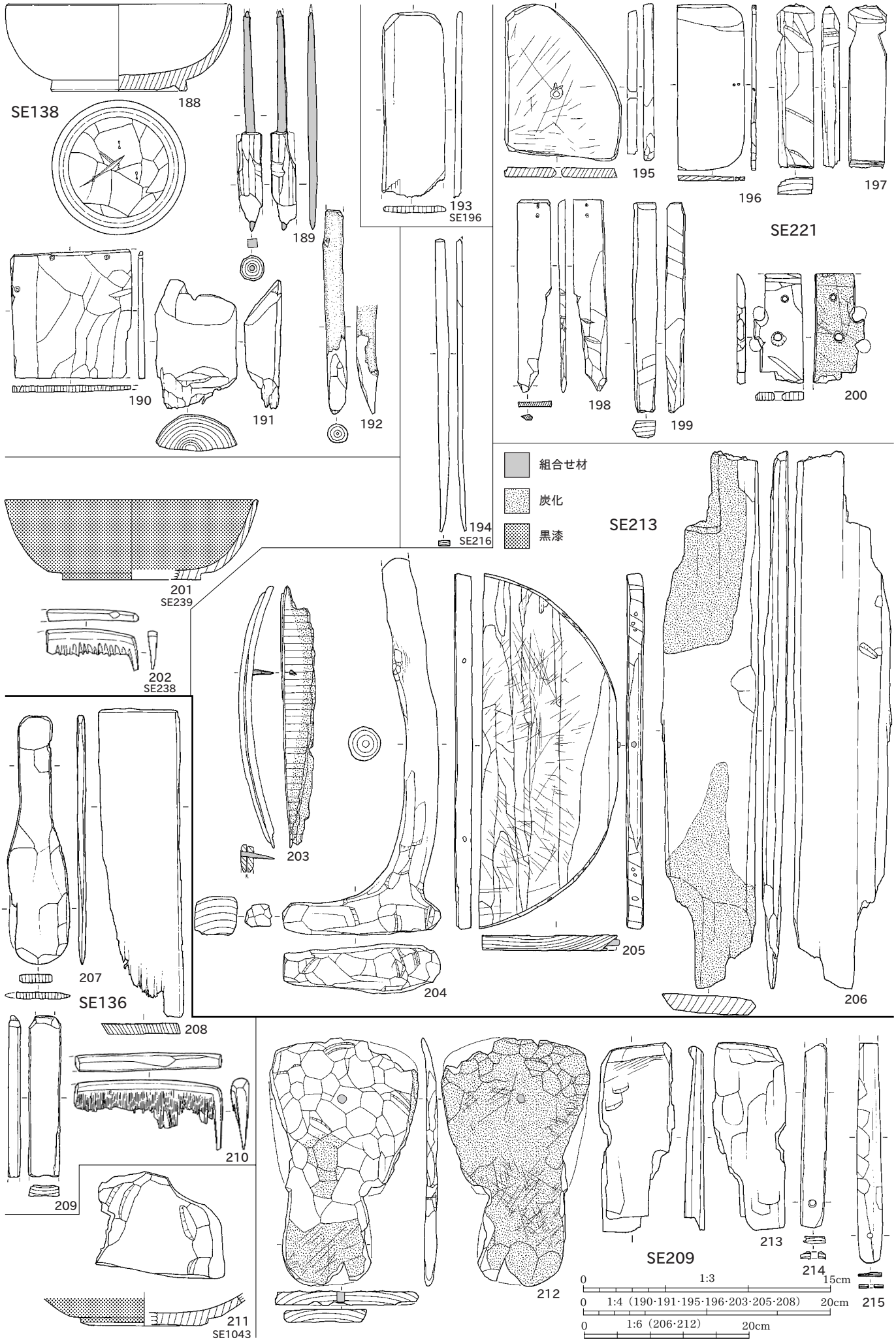

SX204-1層
55
56
57
58
SX23-1層
59
60
61
62
SX750
63
SD106
64
SD101
65 SD111
66
SD116
67
黒色処理
SD201
68
69
70
71
72
SE207
73
SE507
74
SK237
75
SE220
SE210
76
77
78
79
80
IIC
81
SE911
82
IIB4
83
P329
84
SE1035
85
SK193
86
SE19
87
SK21
88
SE503
89
P1045
0 1:3 10cm
0 1:4（55·56） 20cm

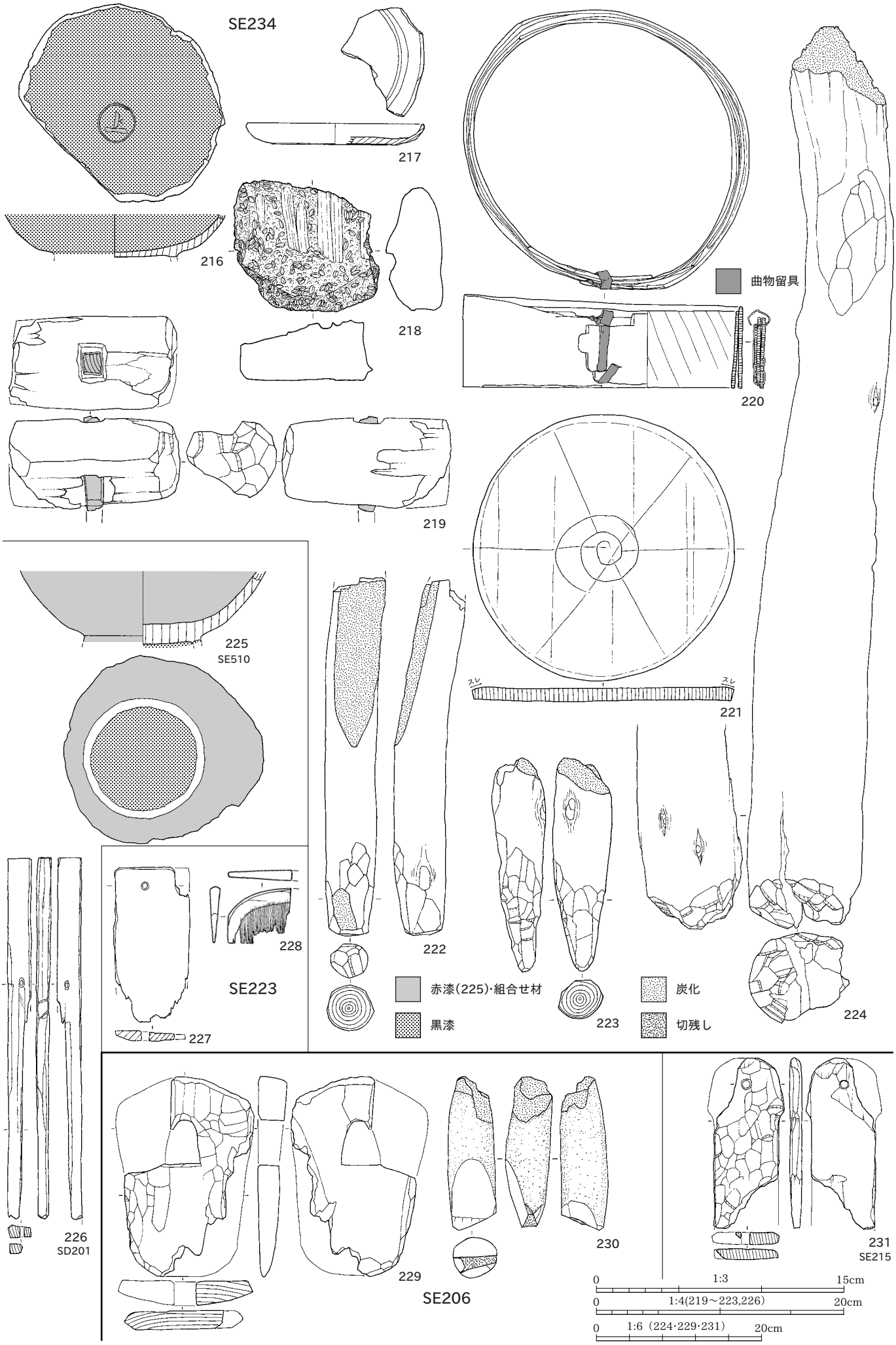

90
91
92
0 1:3 10cm
0 1:4（93） 20cm
SE123
93
95
SE22
96
SE208
97
SE115
98
94
SE118
SE19
100
101
102
SE141
103
SK217
99

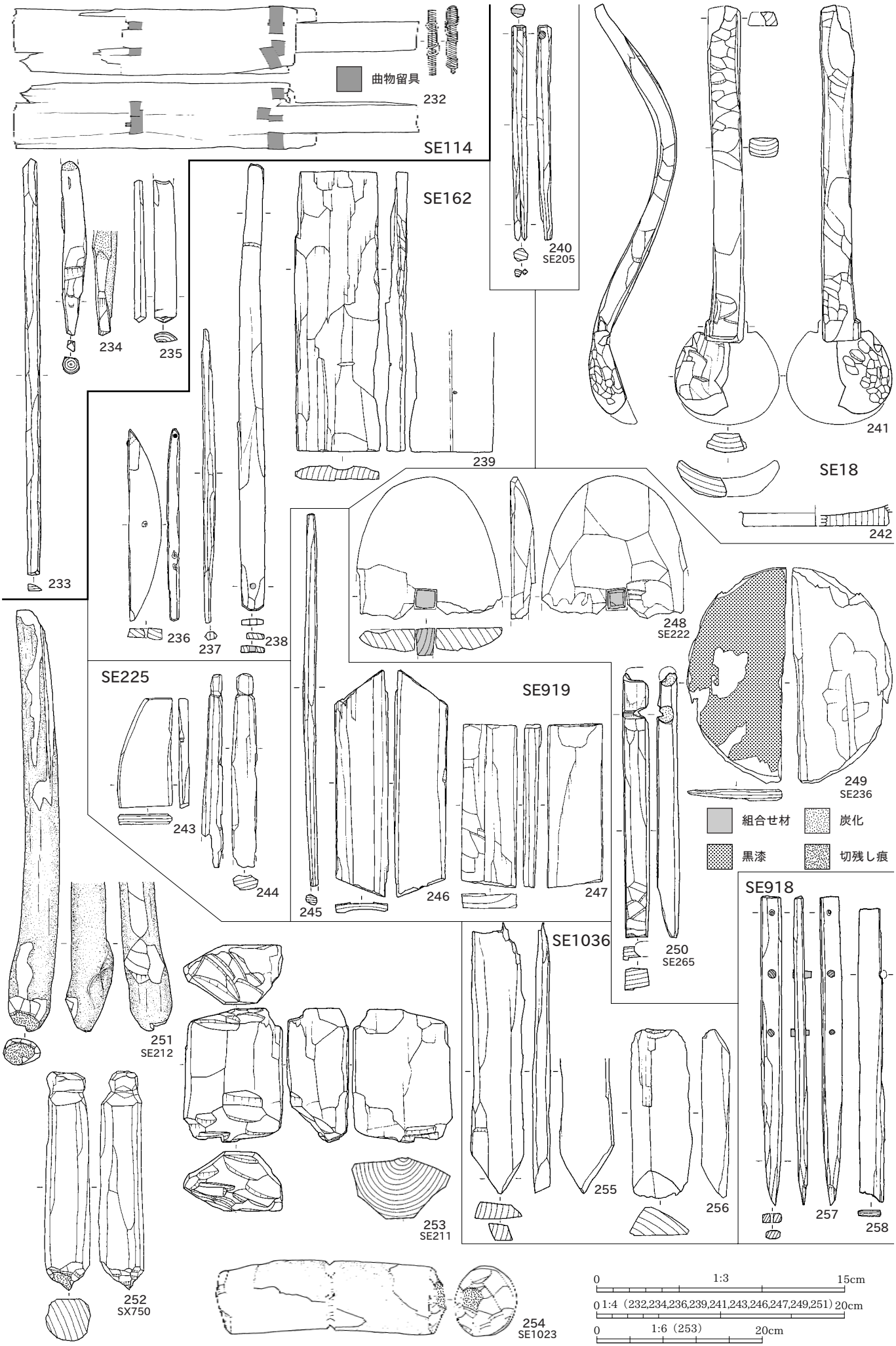

SE504
104
105
106
107
108
109
SE138
110
111
112
SK122
113
114
115
SK1000
116
117
SE221
118
119
120
SE194
121
122
SE239
123
124
125
SE114
126
SE196
127
SE258
128
SE238
129
12B21
130
SE216
131
SE218
132
P1019
133
SE442
134
SE213
135
SE137
136
SE213
137
P1018
138
11C
139
P462
140
SE252
141
SE243
142
SE211
143
SE211
0
1:3
10cm

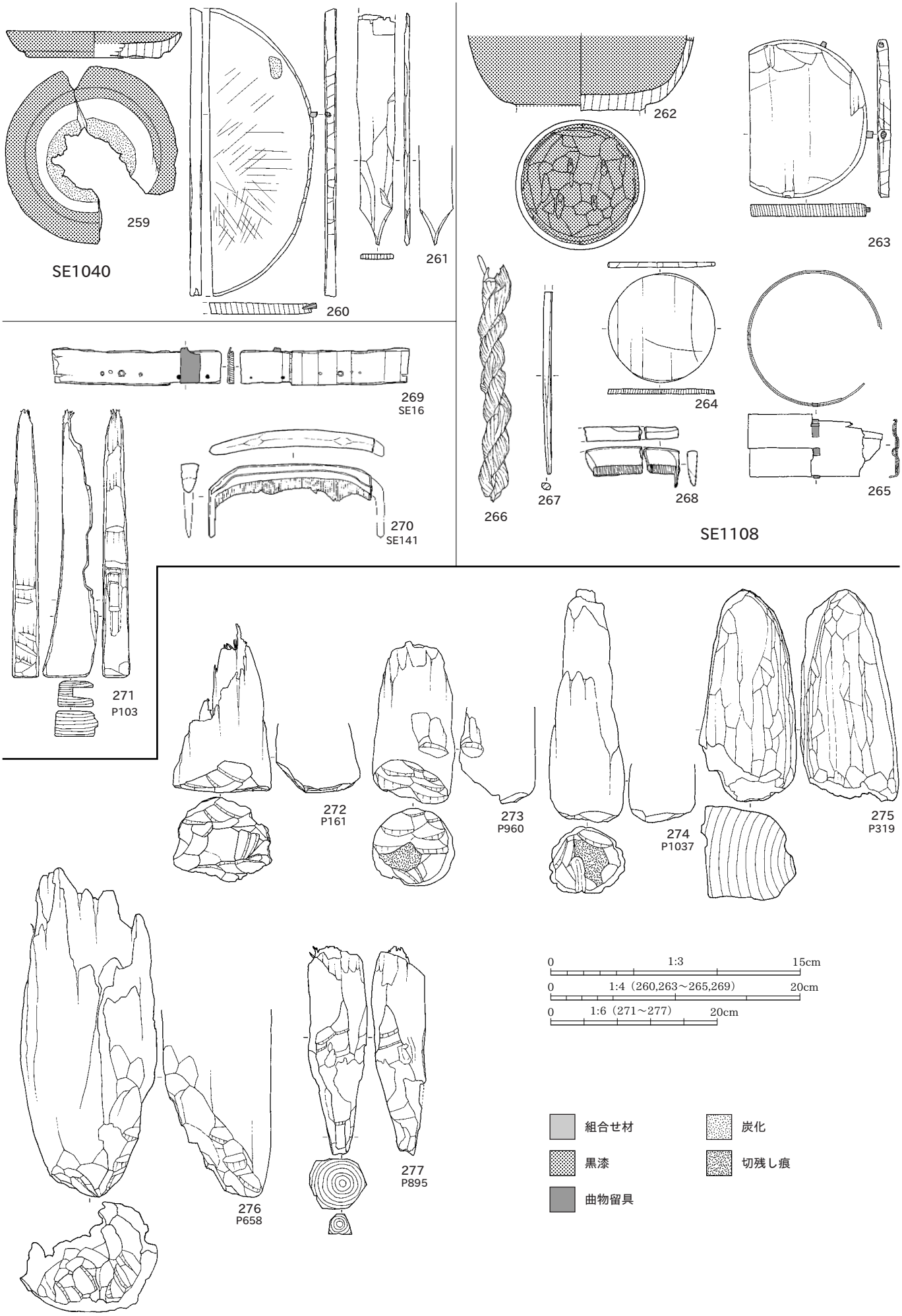

SE234+SE223
144
SE223
145
146
P723
147
P259
148
SE510
149
150
SE511
151
SK118
152
SE115
153
SE115
154
SE221
155
SE1040
156
SE222
157
SX204
敲打痕
平滑面・砥面
0
1:3
10cm
0
1:4（151・152・153）
20cm


158
SK160
煤付着範囲
160
P468
165
SE223
166
SE223
167
20C15
162
SE224
163
P528
164
SE223
161
SD201
159
P467
P1020
168
169
170
171
172
173
174
SX204
179
180
SE123
SE1035
181
182
SE115
183
184
切残し痕
黒漆
SX23
175
176
177
178
0 2:3（166～174） 5cm
0 1:6（176·184·187） 20cm
0 1:2（158～165） 10cm
0 1:3 15cm
0 1:4（177·178·183） 20cm
185
SE208
186
SE114
187
SE137


SE138
188
189
190
191
192
193
SE196
194
SE216
195
196
197
SE221
198
199
200
組合せ材
炭化
黒漆
SE213
201
SE239
202
SE238
203
204
205
206
207
SE136
208
209
210
211
SE1043
212
SE209
213
214
215
0 1:3 15cm
0 1:4（190·191·195·196·203·205·208） 20cm
0 1:6（206·212） 20cm


SE234
217
216
218
219
220
曲物留具
221
スレ
スレ
225
SE510
222
223
224
228
SE223
227
赤漆(225)･組合せ材
黒漆
炭化
切残し
226
SD201
229
SE206
230
231
SE215
0 1:3 15cm
0 1:4(219～223,226) 20cm
0 1:6（224･229･231） 20cm

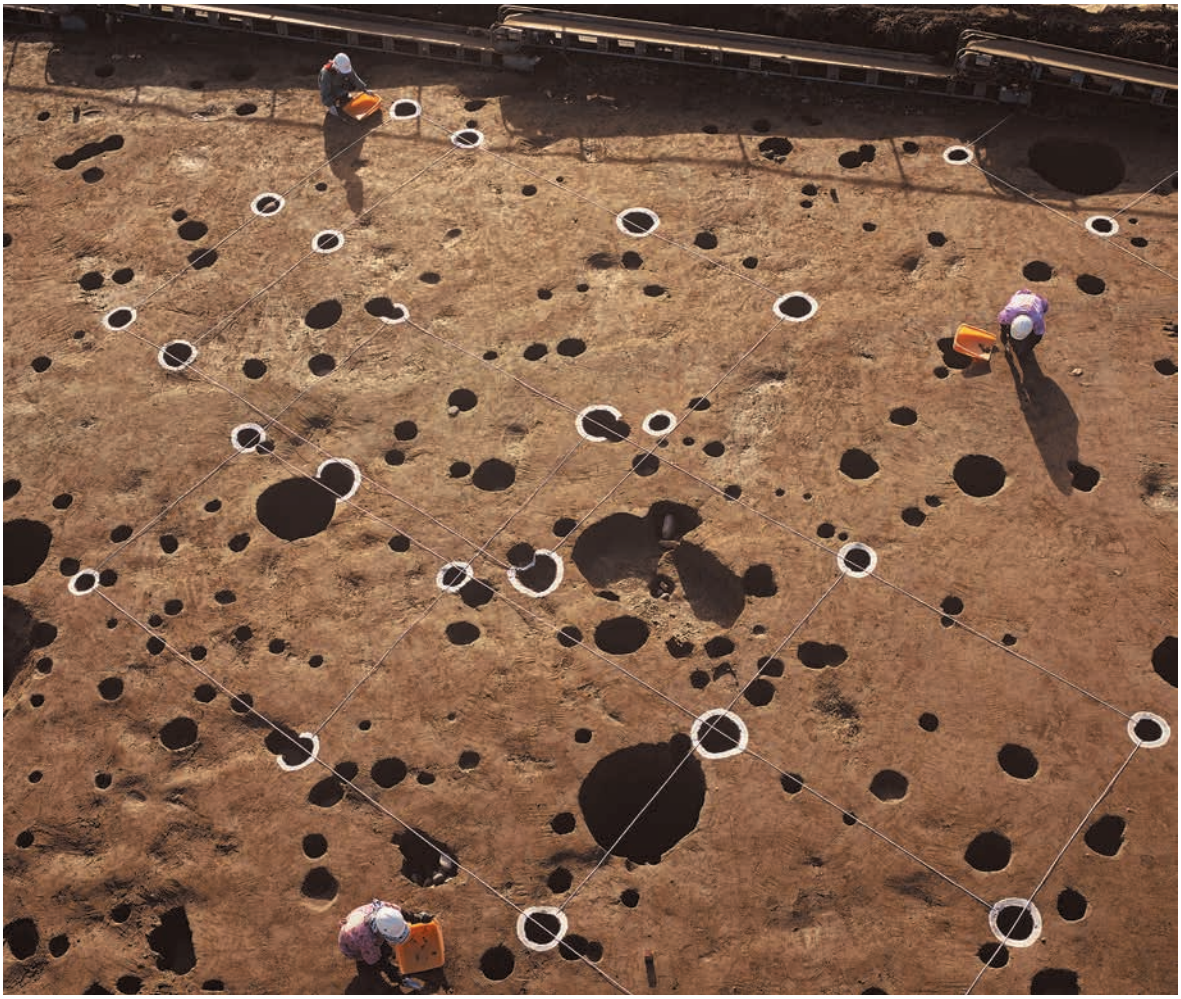

曲物留具
232
SE114
SE162
240
SE205
234
235
233
239
241
SE18
242
236
237
238
248
SE222
SE225
SE919
243
244
245
246
247
249
SE236
組合せ材
炭化
黒漆
切残し痕
250
SE265
SE918
SE1036
251
SE212
255
256
257
258
253
SE211
252
SX750
254
SE1023
0
1:3
15cm
0
1:4（232,234,236,239,241,243,246,247,249,251）
20cm
0
1:6（253）
20cm


259
SE1040
260
261
262
263
264
265
266
267
268
SE1108
269
SE16
270
SE141
271
P103
272
P161
273
P960
274
P1037
275
P319
276
P658
277
P895
0 1:3 15cm
0 1:4（260,263～265,269） 20cm
0 1:6（271～277） 20cm
組合せ材
炭化
黒漆
切残し痕
曲物留具

SD201　区画内　完掘（北西から）

石組井戸 SE247　検出状況（西から）

SB15～SB21　完掘（東から）



SB4・SB5　完掘（北東から）

遺跡遠景（箕冠城跡から）

遺跡近景（北西から箕冠城跡を望む）

遺跡近景（北東から）

遺跡近景（南東から高田方面を望む）

SD201　区画内　完掘（上空から）

10列～21列　完掘（上空から）

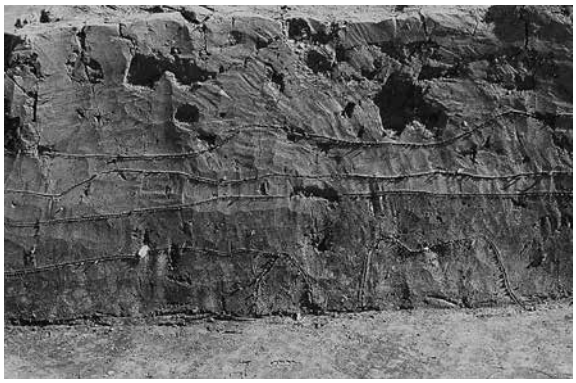
SD201　完掘（西から）

SB22・SB23　完掘（北から）

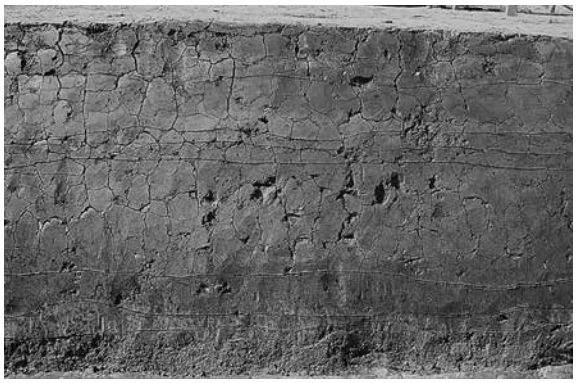
遺跡近景（北から）

遺跡近景（東から）

基本層序⑥（10C グリッド）（南西から）

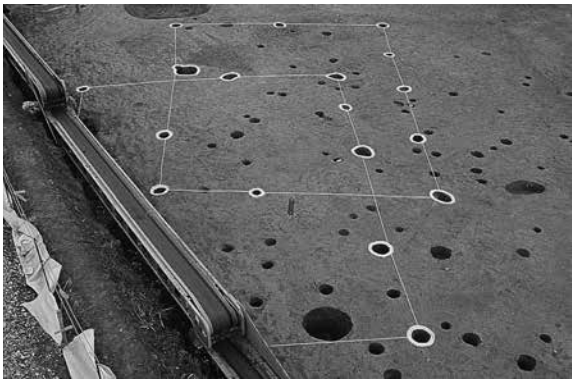

基本層序⑥（10C グリッド）（北から）

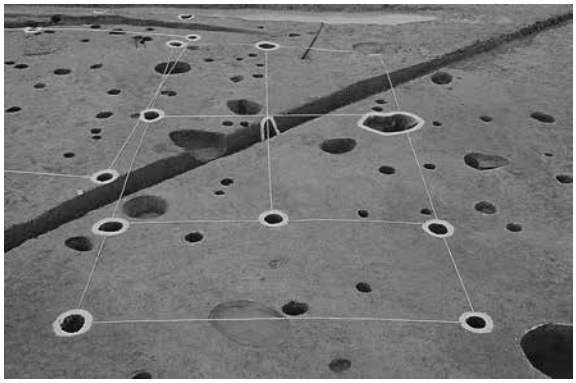
基本層序③（17B グリッド）（南東から）

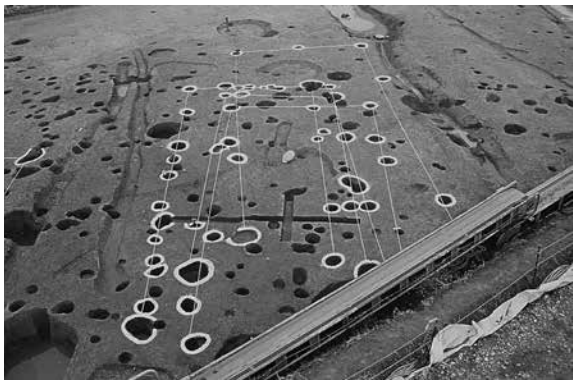

基本層序⑧（C グリッド）（南東から）

SB1・SB2・SK21　完掘遠景（東から）

18～20 列付近　完掘（北から）


SB1・SB2　完掘（南から）


SB22・SB23　完掘（東から）


SB17～SB21　完掘（西から）

SB17～SB21　完掘（南から）

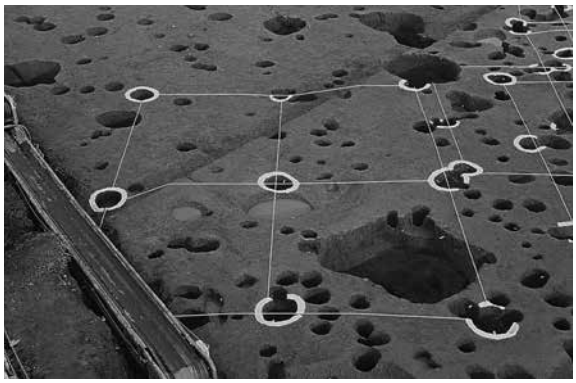
SB13・SB14　完掘（西から）

SD201 区画内　完掘（北西から）

SB7～SB9　完掘（東から）

SB10～SB12　完掘（南から）

SB10～SB12　完掘　（西から）


SB6　完掘（南から）

SB4・SB5　完掘（南西から）

SX204　セクション（南から）

SX204　完掘（東から）

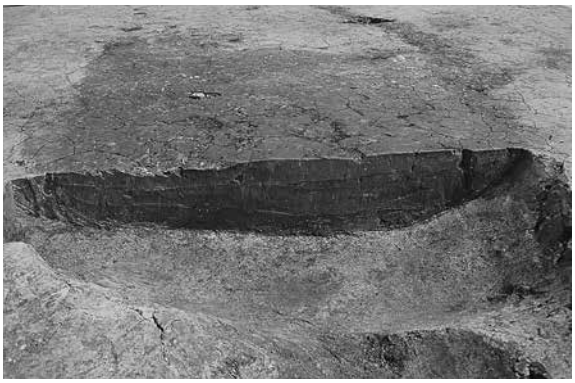
SX204　完掘（北から）

SX23　セクション（西から）

SX750　セクション（東から）

SD13・SD14　セクション（西から）

SD13・SD14　完掘（東から）


SD101　セクション（南から）

SD106　セクション（南東から）

SD102　セクション（南から）

SD117・SD111　セクション（西から）

SD201　検出状況（北東から）

SD201　セクション（西から）

SD201　セクション（南から）

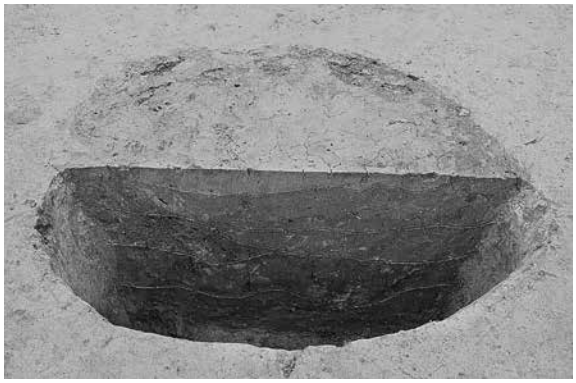
SD201　セクション（南東から）

SD202　セクション（東から）

SD203　セクション（西から）

SE16　セクション（南から）

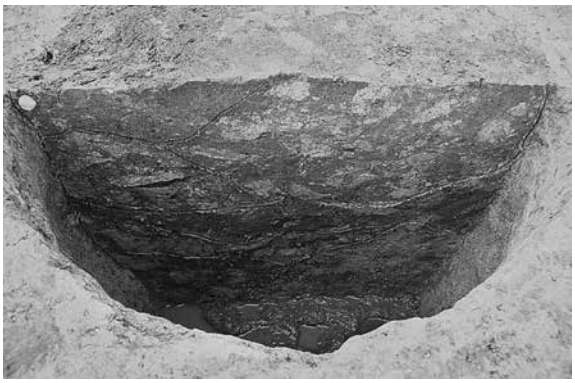
SE16　完掘（東から）


SE19　セクション（南から）

SE22　遺物（95）出土状況（南西から）

SE108　セクション（北から）

SE114　セクション（南から）


SE115　セクション（南から）

SE115　遺物（152・153）出土状況（北から）

SE138　セクション（東から）

SK193・SE194　セクション（南から）

SE194　セクション（南から）

SE205　礫出土状況（東から）

SE206　セクション（南西から）

SE207　セクション（北東から）

SE206・SE207　完掘（西から）

SE208　セクション（南から）

SE208　遺物（96）出土状況（北から）

SE208　完掘（南西から）

SE209　セクション（南から）

SE210　完掘（南から）

SE211　セクション（南から）

SE212　セクション（東から）

SE213　セクション（西から）

SE213　遺物出土状況（西から）

SE213　腐植物検出状況（東から）

SE213　遺物（205・206）出土状況（南から）

SE213　完掘（東から）

SE214　セクション（南東から）

SE215　遺物（231）出土状況（東から）

SE216　セクション（南から）

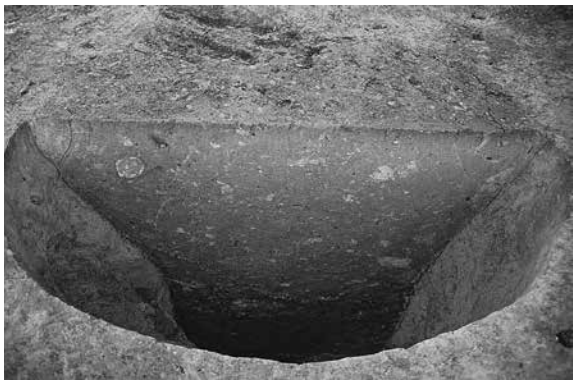
SK217　セクション（南から）

SE219　セクション（南東から）

SE219　完掘（東から）

SE219　完掘（東から）

SE220　セクション（南東から）


SE222　セクション（南から）

SE221　セクション（西から）

SE221　完掘（南から）

SE223　セクション（南西から）

SE223　遺物（166）出土状況（西から）

SE224　完掘（南から）

SE225　セクション（南東から）

SE234　セクション（南西から）

SE234　遺物（216）出土状況（西から）

SE234　遺物出土状況（南西から）

SE234　遺物（220）出土状況（北東から）

SE234　完掘（南東から）

SE220　セクション（南東から）

SE235　セクション（南西から）

SE236　セクション（南西から）

SE239　セクション（西から）

SE239　完掘（西から）

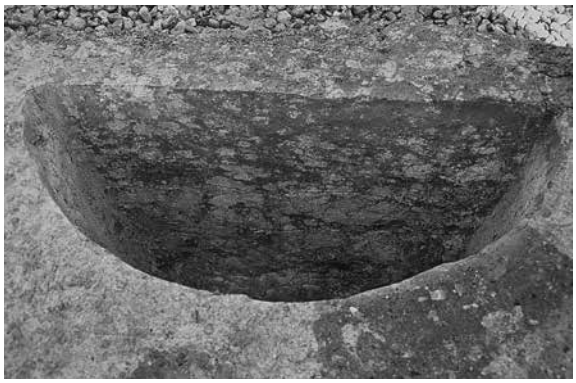
SE242　セクション（南西から）

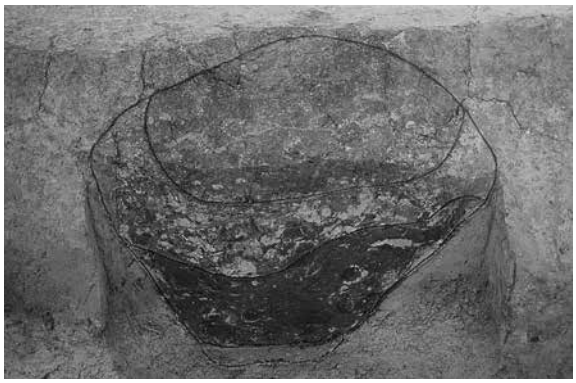
SE243　完掘（北東から）

SE247　セクション（南東から）

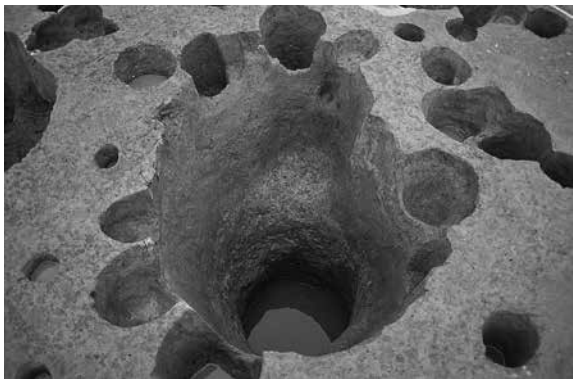
SE247　セクション（北西から）

SE258　セクション（北東から）


SE264　セクション（北西から）


SE266　セクション（南から）

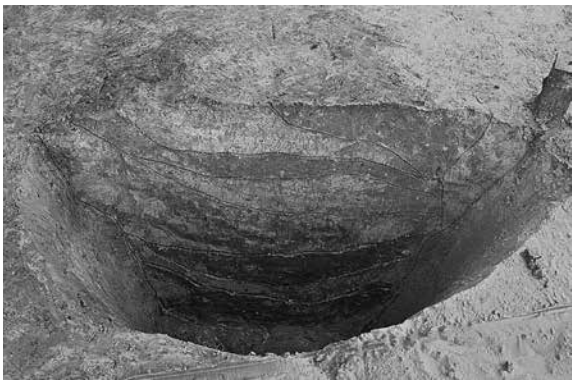
SE243　セクション（南東から）


SE312・SE317　完掘（南西から）

SE315　完掘（西から）

SE393　完掘（南西から）

SE442　セクション（東から）

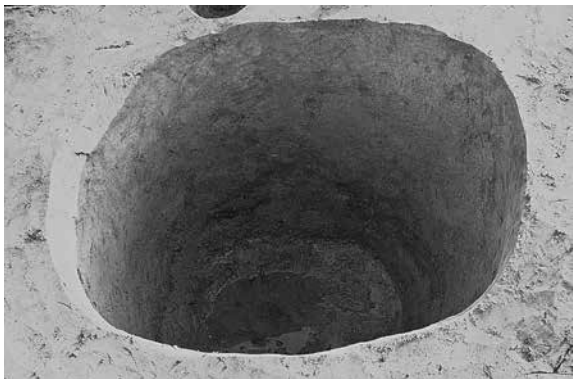

SE501　セクション（西から）

SE502　完掘（南から）

SE507　セクション（南から）

SE508　セクション（西から）

SE510　遺物（149・225）出土状況（北から）


SE510　完掘（東から）

SE511　完掘（北西から）

SE513　セクション（南西から）

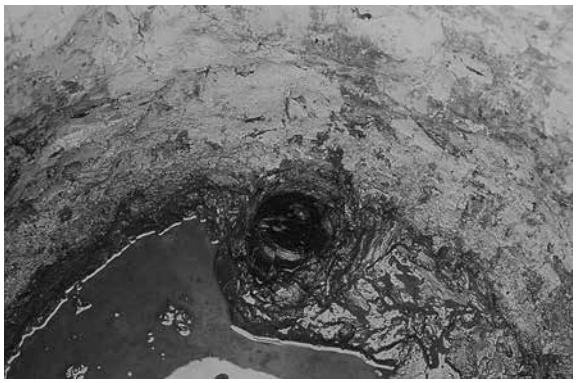
SE919　セクション（東から）

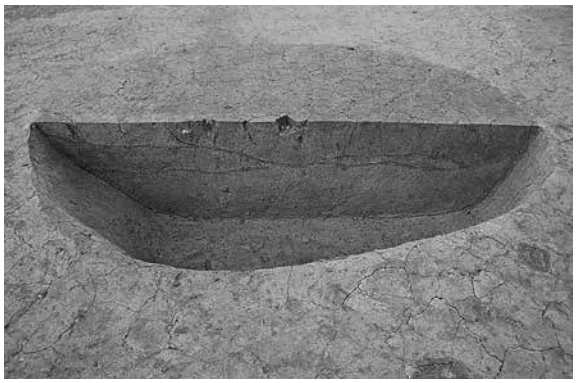
SK939　セクション（北から）

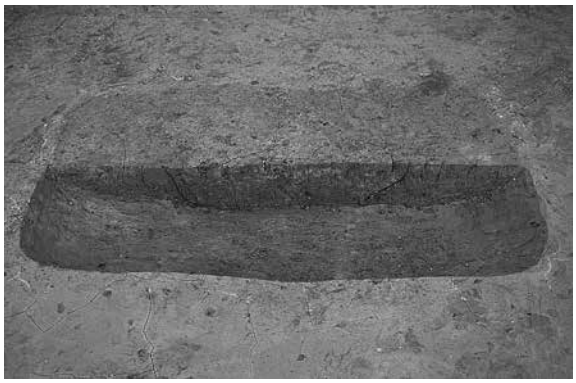
SE1039　セクション（西から）

SK939・SE1043　完掘（西から）

SE1107　セクション（南西から）


SE1108　遺物（262）出土状況（南から）

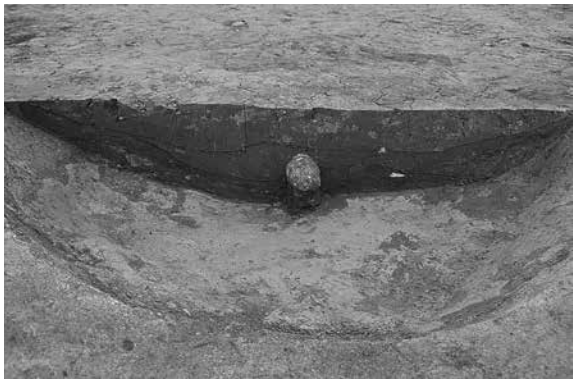

SK17　セクション（南から）


SK20　セクション（南から）

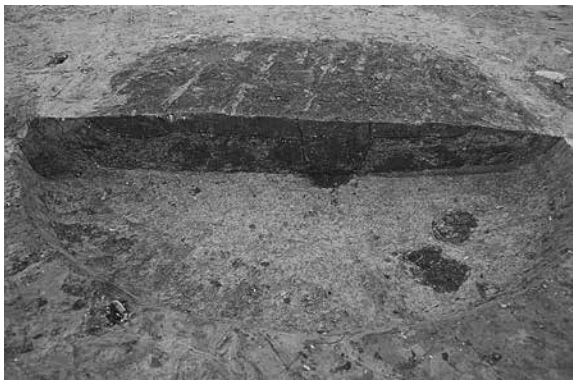
SK21　セクション（南から）

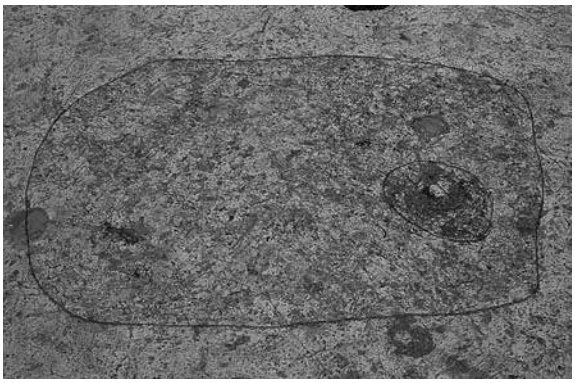
SK112　セクション（南から）

SK113　セクション（東から）


SK118　セクション（南から）

SK160・P159　セクション（南東から）


SK217　セクション（南東から）


SK174・P175　検出状況（北から）

SK174・P175　セクション（南から）

SK218　セクション（南東から）

SK218　完掘（北西から）

SK237・SE238　完掘（東から）

SK276　完掘（北から）

SE283　セクション（北から）

SK380　完掘（北西から）

SK996　セクション（東から）

SK1034　セクション（北から）

SK1289　セクション（東から）

P103　遺物（271）出土状況（南西から）

P259　遺物（147）出土状況（西から）

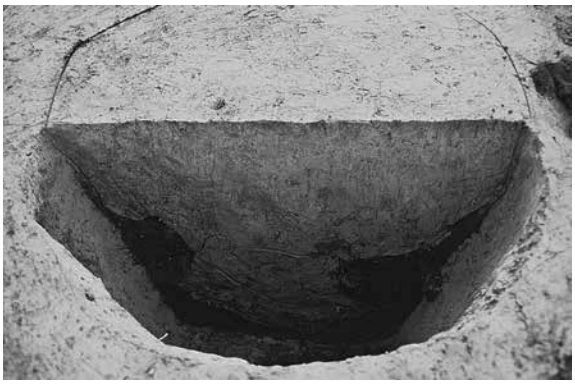
P275　セクション（南東から）

P288・P386　セクション（北から）

P289・P330　セクション（南から）

P299（SB6）　完掘（北西から）

P363　セクション（北から）


P425　セクション（西から）

P431・P440・P441　セクション（東から）

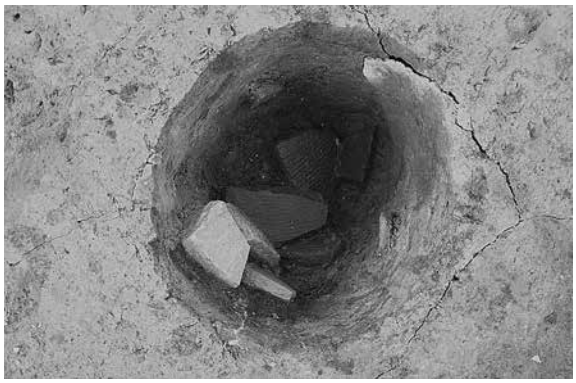
P539（SB4）　セクション（東から）

P649　根固め石検出状況（東から）

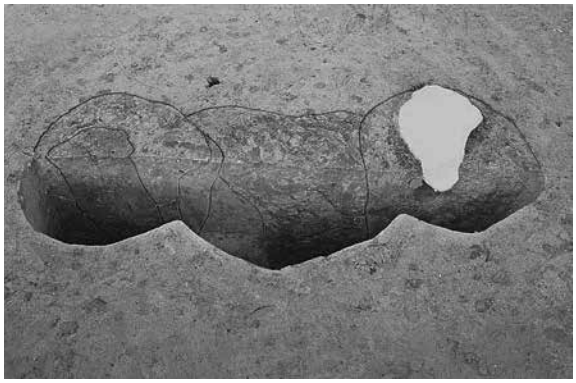
P655　根固め石検出状況（東から）

P658　セクション（北西から）

P660　セクション（北西から）


P667　珠洲焼出土状況（北から）

P681　セクション（西から）


P727・P728・P729　セクション（南西から）

P1199　セクション（東から）

SX279　遺物（24）出土状況（南西から）

SI1038　遺物（2・3・6）出土状況（南西から）

SI1038　遺物（7）出土状況

作業風景

作業風景

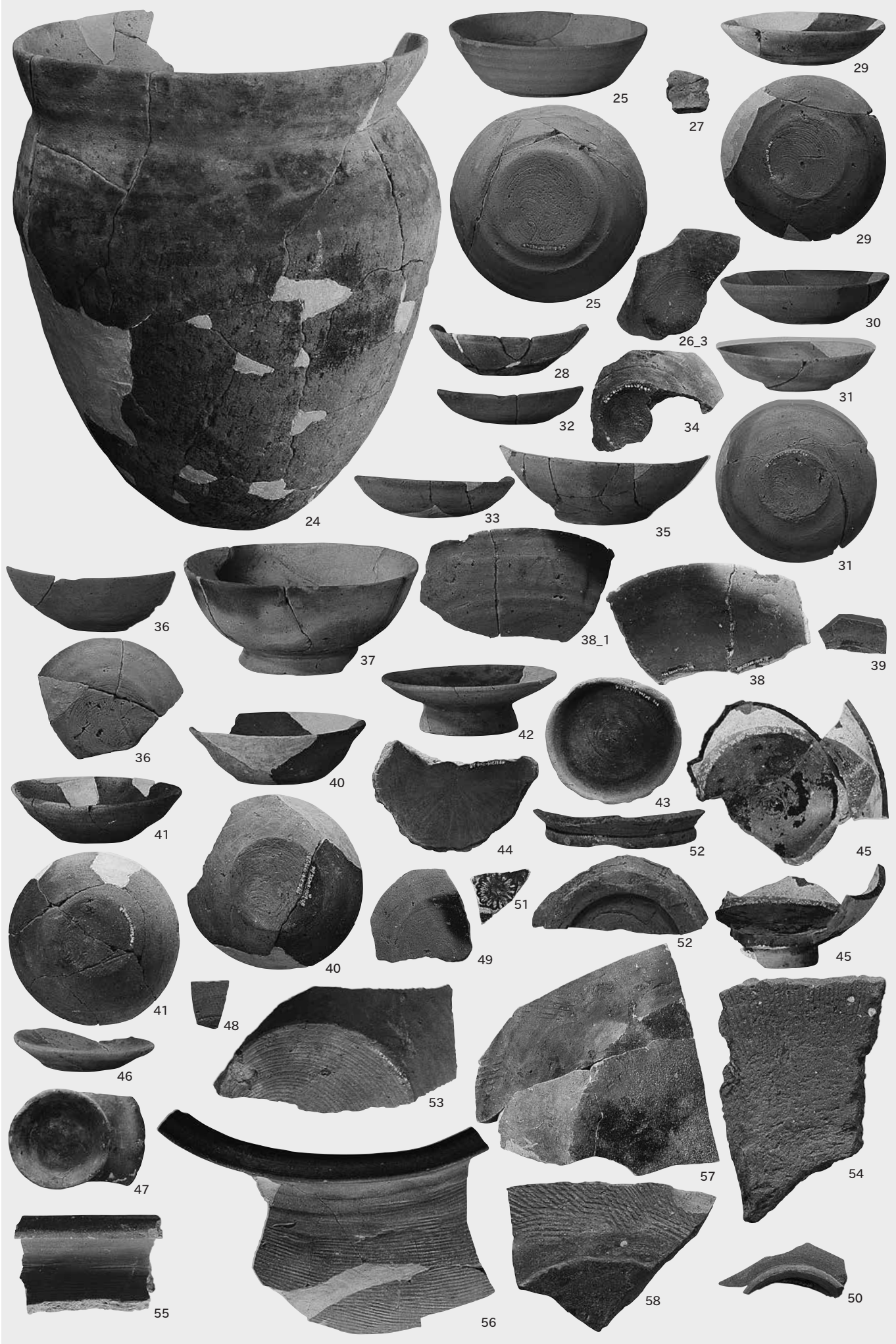
作業風景

作業風景（SE247）

作業風景

遺跡近景

1
2
3
4
4
5
6
7
8
8
9
10
11
12
13
13
14
15
16
17
17
18
19
20
21
22
23


24
25
25
27
29
29
26_3
30
28
31
32
34
33
35
31
36
37
38_1
38
39
36
42
40
43
41
44
52
45
41
40
51
52
49
45
48
46
53
57
54
47
55
56
58
50

59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
76
77
78
79
80
81
81
82
83
84
85
86
87
88
88
89
90
91
92
93
94
95
95
96
96
97
97
98
99
100
101
102
103

104
105
106
107
107
110
111
112
118
120
109
108
113
114
115
119
116
117
122
121
123
125
126
127
128
129
124
130
131
132
133
135
134
138
137
137
139
139
140
141
142
146
143
147
148
148
149
144
136
150
144
144

145
151
154
155
156
153
157
152
161
158
166
167
168
169
170
171
172
173
174
162
163
164
165
175
176
177
178
180
182
181
183
184
191
185
187
200
190
189
179
192
193
194
186
195
196
197
198
199
201
202
211

188
203
205
204
206
210
209
213
207
208
212
216
228
214
215
227
217
218
226
220
223
219
220
248
221
224
222

225
229
230
231
232
233
234
235
236
237
237
238
239
240
241
241
242
243
244
245
246
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277

報告書抄録

ふりがな	なかだいせき
書名	仲田遺跡
副書名	北陸新幹線関係発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第128集
編著者名	加藤　学　　高階　敏昭　　沢田　福宏
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新津市大字金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	西暦2003（平成15）年6月16日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
仲田遺跡（なかだいせき）	新潟県板倉町（にいがたけんいたくらまち） 大字熊川字（おおあざくまかわあざ） 仲田（なかだ）87ほか	15548	108	37度 02分 29秒	138度 17分 29秒	20020909 ～20021220	5,100m²	北陸新幹線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲田遺跡	集落跡	古墳時代後期	竪穴住居1軒	土師器	7世紀後半の良好な一括資料が出土
		古代	土坑	須恵器、土師器	
		中世（11世紀後半～13世紀・15世紀）	溝17条、掘立柱建物31棟、井戸85基、土坑59基、方形竪穴状遺構1基	珠洲焼、土師器、青磁、白磁、青白磁、木製品、石製品、鉄製品	川辺に営まれた中世集落の変遷が把握された。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第128集

北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅱ

仲　田　遺　跡

平成15年6月10日印刷
平成15年6月16日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新津市大字金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　長谷川印刷
〒950-2022　新潟市小針1丁目11番8号
電話　025（233）0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第128集　　仲田遺跡　　正誤表

ページ	行	誤	正
25	1行目	有する。期の典型例	有するⅠ期の典型例
28	下から８行目	5　木製品（175～277）	5　木製品（175～271）